

新しい風俗文化雑誌

風俗草紙

8



風俗草紙

8

定價 百円





狂宴

風俗草紙

第二卷 第八号
毎月一回一日発行
定価 百円

昭和二十九年七月二十五日 印刷
昭和二十九年八月一日 発行

編集人 氏家富良

発行人 野村佳秀

印刷所 株式会社国文社

東京都千代田区西神田二ノ三

発行所 株式会社日本特集出版社

東京都千代田区神田猿樂町一ノ三

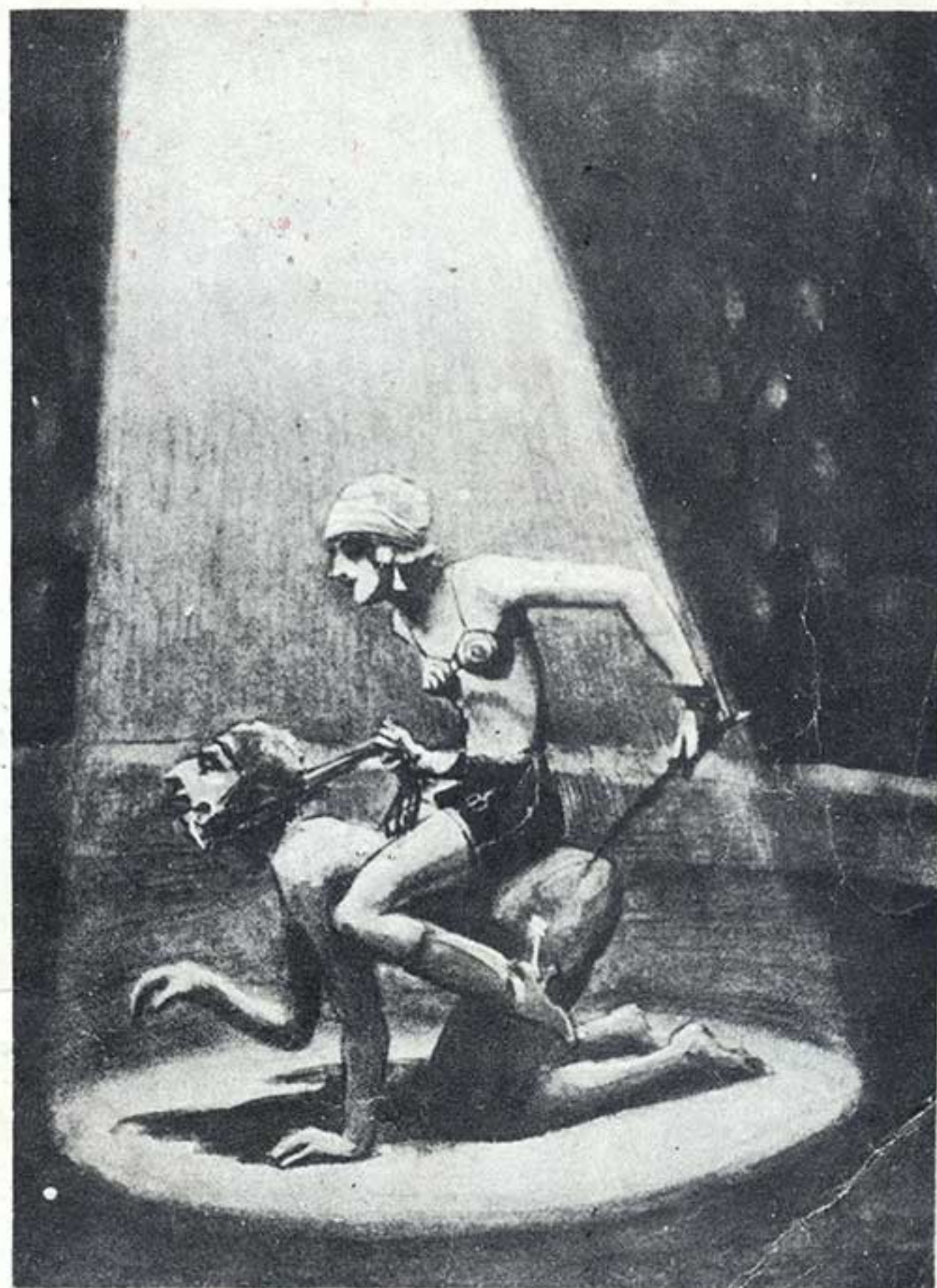
電話神田(29)五九八二

振替東京一〇一、五一七番

◇ 後記 ◇

永らくお待たせしました。不測の事故続出で、誠に御迷惑をお掛けしたことをお詫び申し上げます。本号は銷夏読物号として特別編集を致しましたが、今後は読者にも充分御満足のゆけるような新しい行き方を、唯今考慮中であります。

社会的な風潮と、雑誌をつくる側のギャップが残念でありませんが、今後も愈々努力して御愛顧に報ゆる心算であります。



奇妙なシヨウ

この二人の芸人が舞台に出て来ると、異常に病的な雰囲気は彼等の体から発散して、観客席をおし包んでしまう。野性の牝鹿のように敏捷な女は、容赦なく男の頬を鞭打ち、鋭い拍車のついた乗馬靴で蹴りつける。最後には馬乗りになって、男が困憊して舞台上にぶっ倒れる迄乗り廻す。凄まじい遊戯に観客は気を飲まれてたゞ呆然と見つめるばかりだ。

踏
み
絵

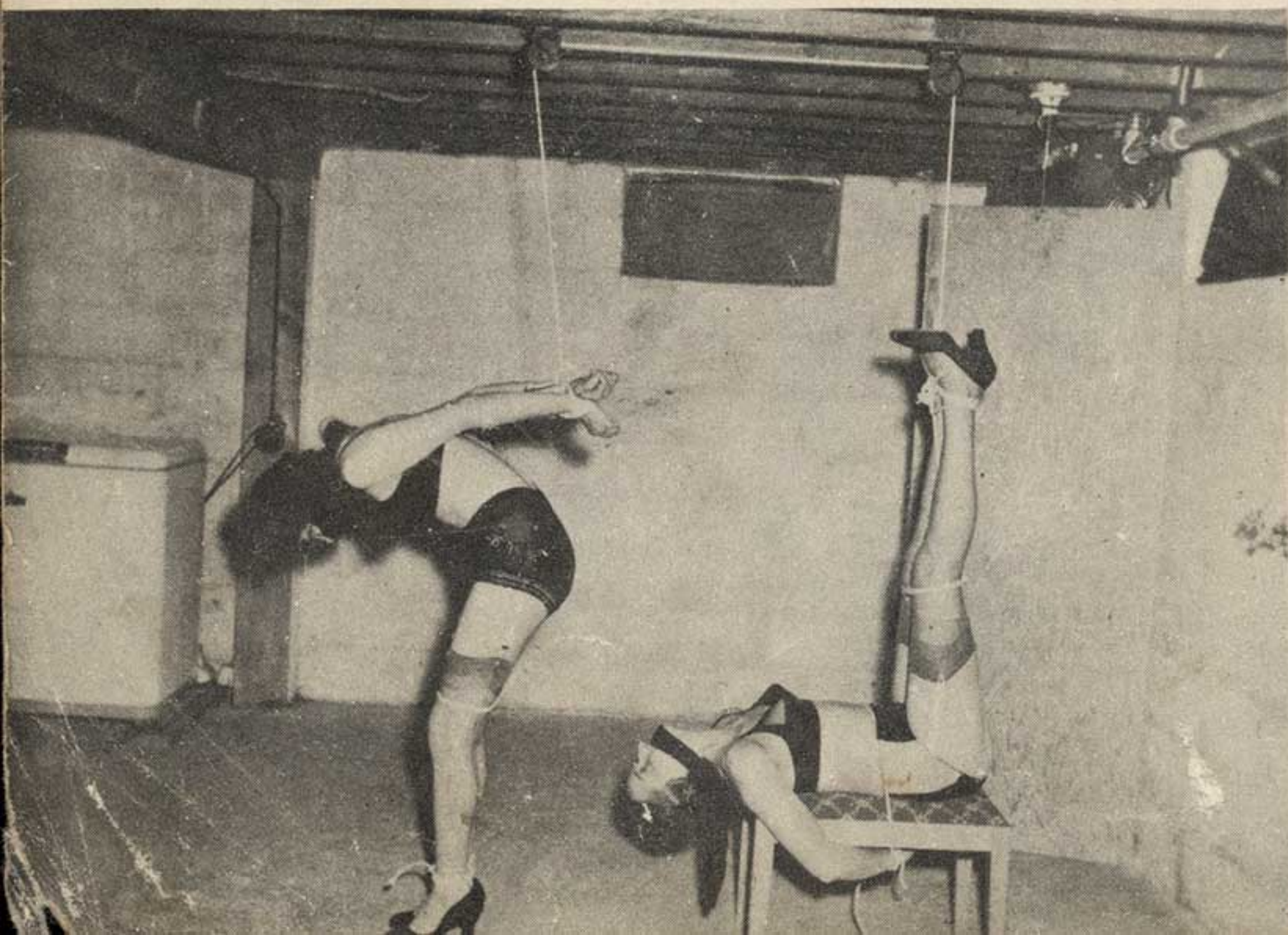


環
画

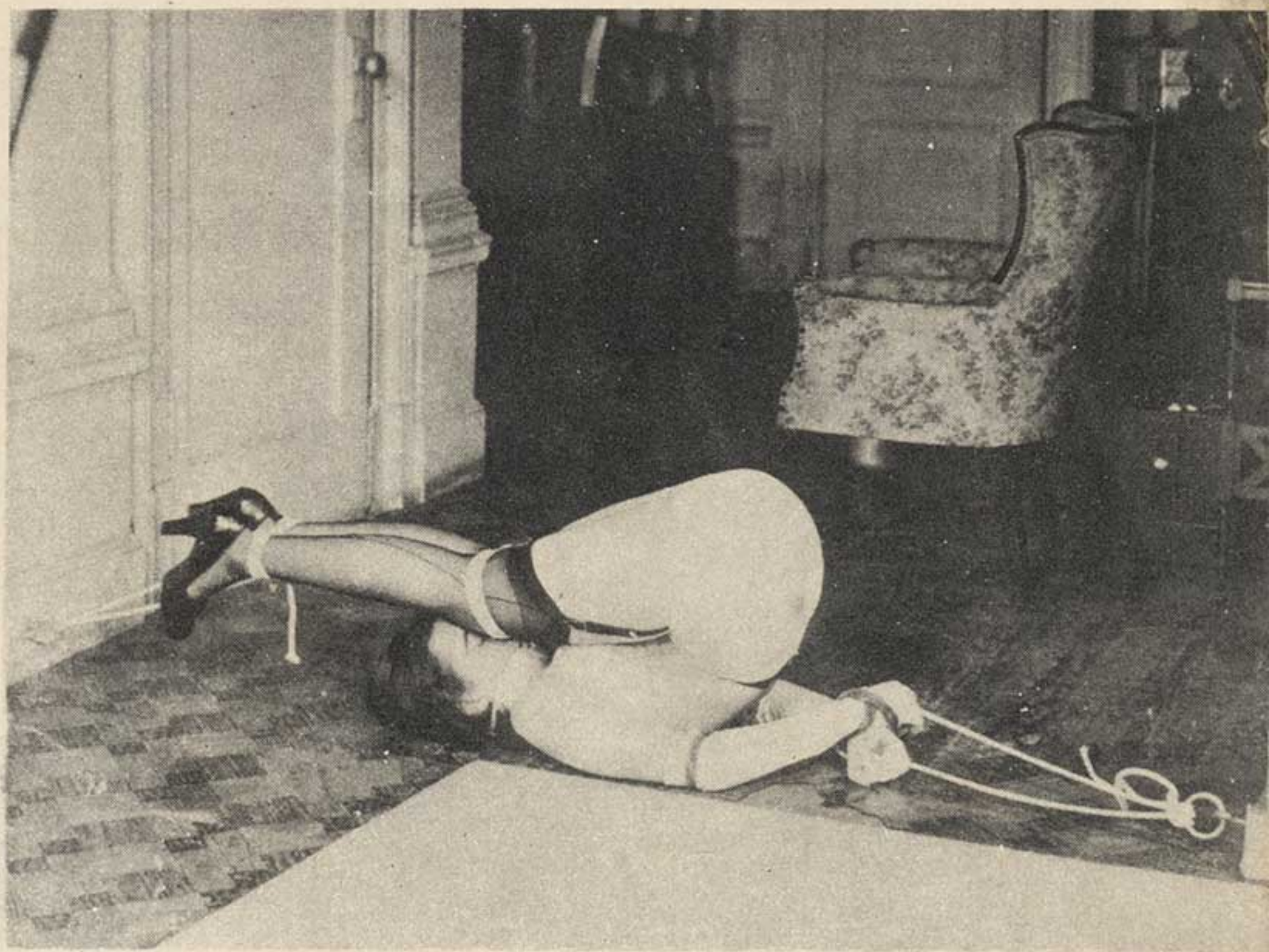
最新着アメリカ・アブフト特集



またまた最新着のアブ・フトをお贈りする。上は大型カーを使った珍らしくも素晴らしい写真。さすがに垢抜けしたものである



下はマニヤの空想を見事に現実化したもので、滑車にはられたーブと女体の曲線の対比が美しい。



こうした写真を見ても、人間の考えることは東西似たようなものだといふことがよく判る。しかしモデルがきれいなこと、小道具が凝っていて多種多様のことなどが、洗練されたアブシーンをつくり出しているわけである。

上は西洋式のフロアが効果的。下は一種の木馬だが角材を用いている。体のポーズも変つてゐる。

上は御覧の通り応接間用の椅子を使つたもの。写真としても面白くよくとれている。こんな写真になると純白のブラジャーやコルセットが実になまめかしい効果を發揮することがわかる。下は二人に一人の組合せ。さてこれから何がはじまるか、と思はせるシーンで、被縛の女性のポーズがいかにキレイである。





男を虐める女たち



Der
Eunuch.



風俗草紙 八月号 目次

口 絵 (五色) 踏み絵……………北原 環画
最新着・アメリカ・アプフォート特集……………オフセット頁
★風俗画廊★ 可憐な懲罰……………目次裏

連載長篇 官能小説 蠱妖の虹……………龍膽寺 雄

連載・アブ ノーマル小説 淫雨熄まず……………松井頼子 08
浴室内に縛られた全裸の男女！異常な人間群像の模写！
妻を色情狂に委ねて皮肉に笑う男！ 愈々佳境の雄辯！

異常・奇聞 時代小説 磔付船……………島本春雄

次々に妻を潰す乳房娘！ 江戸の夜に繰り出さる妖奇！

こんと歪んだ情事……………武野藤介 002
あぶていく 犯罪科学 強姦屍体の検屍……………三谷祥介 050

特選犯罪実話・名刑事捕物帖

月島の運転手殺し……………浜田四郎 60
東京港外の殺人事件を追究する名刑事の血の惨む苦心！

大正の兇漢・金鵒の亀……………三谷祥介 29
大正末期の世情を騒然とさせた池田亀五郎の数奇な一生！

悪魔の暴風……………村松呂久良 008
孤独な老人が美女に抱いた不思議な愛着！ 江戸水書秘話

体液のある犯罪現場……………青山夏樹 06
豊満美貌の人妻をめぐる怪奇な殺人！ 名刑事の見事な推理！

東京の青髯……………萩原秀夫 032
東京渋谷の境路から発掘された美人屍体！ 検事された男は？

志賀高原殺人事件……………星 秀雄 018
高原の山小屋に見えられた死体！ あばかれた意外な犠牲殺人！

ダンサーの怪死……………関根 純 025
ビルのエレベーターの屋根にダンサーが死んでいた！ 都会の悲話

挟まれた人妻……………恩田一郎 056
千葉県の山林で見えられた美貌の人妻屍体、情痴犯罪秘話

眞晝の惨劇……………梁川龍之 040
妻の妹に逆毒牙をのばす男！ 愛と嫉妬に起った惨劇

レスポス通信 (女性だけの愛のサロン)……………園村恵子 36
そごみあ通信 (ホモの愛の交歓室)……………藤井 晃 68

異常な脱走……………三木 武 98
(懸賞入選作) 収容所を脱走した男が経験する奇怪な夜々

稽古……………砂川 栄 162

(懸賞入選作) 旅役者の男性マゾヒストを描く新人力作！

表紙・秋吉 樹 目次絵・浜田 稔

可憐な罰 可懲

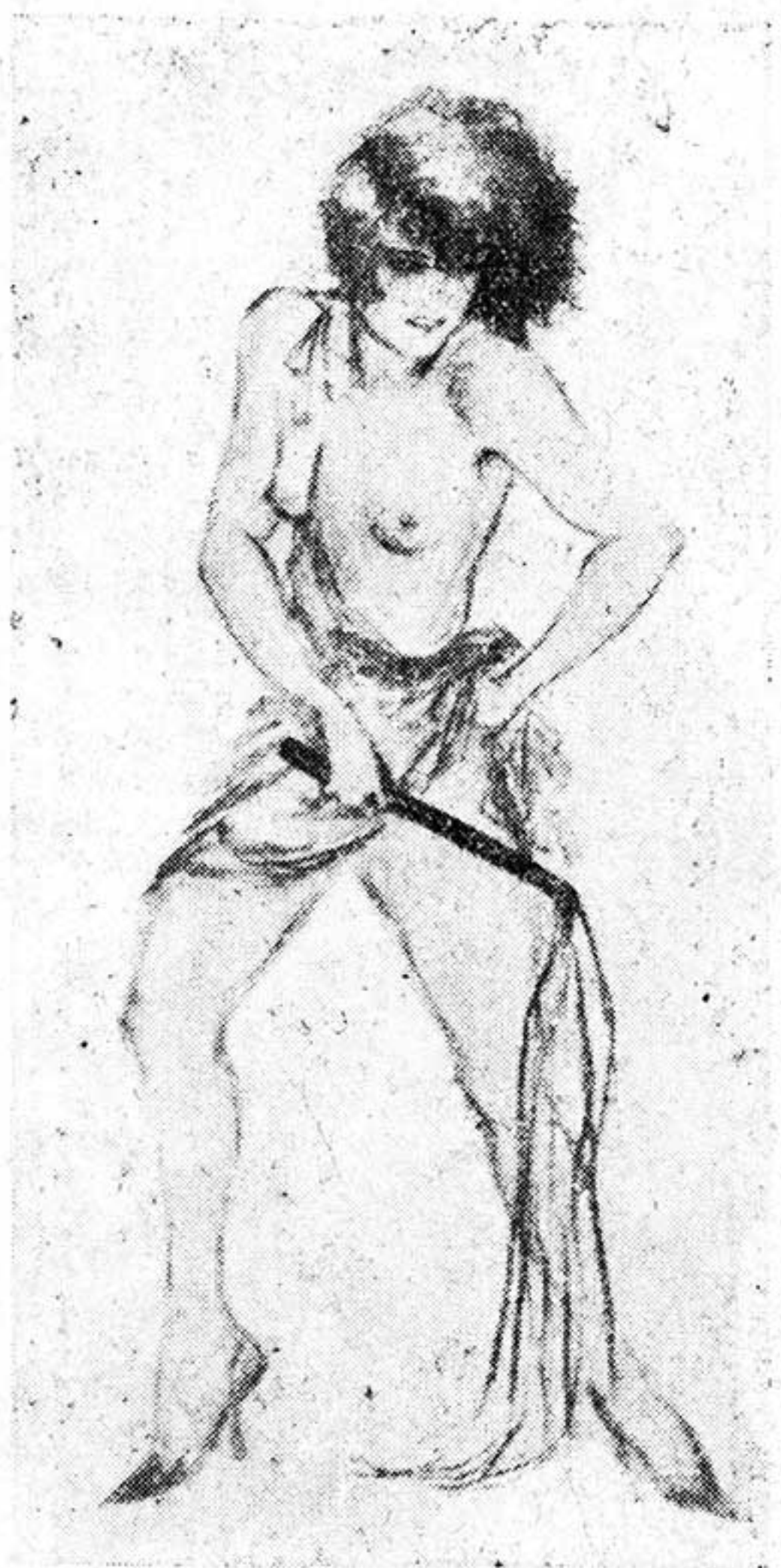


サア、カタリーナ、お尻をお出し！と
母親は、怖がる娘をとらえて、容赦なく鞭
を与える……

西欧では家庭でも学校
でも、懲罰の一つとし
て尻打ちが行われてい
る。尻打ちは大い可
愛いお尻を、ピシリピ
シリと打つ。
そのたびに娘は堪えか
ねて悲鳴をのげる……

風 俗 草 紙

現代人の新しい趣味雑誌



八月號

連載・アブノーマル官能小説

(第四回)

淫雨熄やまず

男の手から、竹の棒が振り下ろされ、小崎の裸の背にピシツと鳴った。「アツ」と顔を伏せるとその反動で、シヤワーにかけた縄が引かれ、女の腕が折れそうに吊り上げられた。「ウウツ」女はのけぞるように苦悶の叫びを上げた。

松井 籟子

喜多 玲子 画

—

「もし、もし」

菊地は小夜子を磨んでいた興奮をやつと静めて電話に出た。

「もし、もしマダムいてはらしまへんか？」

「どなたです」

「香月いうもんです。一寸マダムに電話口へ出てもらうてくれまへんか」

「小夜子はるすです」

「おるすでつか？ 今しがたお目にかかつて来たばかりですねん。」





お風呂と違いまつか？」

「一寸待つて下さい」

菊地は言った。小夜子を電話口へ出してやるつもりなのだろうか。

それにしても、香月が電話をかけて来たのは、小夜子の身を気つかつてのことだった。小夜子がどんな風に小崎を恋人の様に見せたかは知らないが、小夜子のいう程にたやすく、菊地が小夜子から別れられるとは思っていない。「メーゾン・ド・サヨ」の内部を

暗く陰惨な感じに装置したのは菊地の指図だった。香月は菊地の血の中に、人と違ったもののあることを、自分にてらし合わせて知っていた。

小夜子の浮気を知ったら、菊地がどんな風に出るか、香月には想像出来たのだ。一寸、間で様子を知って見たい気持と、香月にとって、芝居は長い方が楽しみが長い。電話をかけてみたのは、そんな二つの意味があつたのだ。

受話器をはずしたまま、菊地は二階へ上つて行った。小夜子が弓のように体をまげて縛られている。菊地はその縄をといた。

小夜子はほつとしたが、後手に縛った紐はそのままだった。

「お前に電話だ」

菊地は言葉つきまで変えて、高飛車に言った。

「さあ、出なさい」

小夜子の後手の紐を引いて、肩をこづいた。

「といってちょうだい」

「そのまま出るんだ。よけいなことをしやべつたら、お前の大切な顔に傷をつけるよ」

菊地は片手に縄尻をとつて、片手に剃刃を握つた。

「さあ早くしなさい」

小夜子は裸のまま、罪人のように後手に縄尻をとられて、よろよろと歩いた。いくら罪人でも全裸という姿はないだろう。小夜子はうなだれるといやでも目に入る自分の姿に、たまらない恥しさを感じた。

一段一段階段をおりる。はだしの足にスリッパもはかないで、冷たい板をふむ気持はみじめだつた。

やつと電話口に出たが、縛られているから受話器をとることも出来ない。

菊地は受話器と送話器と一つになつて、電話を廊下へじかに聞いた。

★前号までのあらすじ★

未 来の大女優を夢み、演劇部に籍をおく美貌の苦学生齊田ユキは、学資稼ぎの為アルバイトの口を求めているが、軽音楽部の学生香月春夫から紹介され新進女流画家真木千佳子のモデルになることになった。

同性の気易さから、ユキ子は千佳子の前で全裸になつたが、彼女に与えられたポーズは、予想もしなかつた千錠足枷で祈る奴隷の姿だつた。苦痛と恥にのたうつて、その責めから逃れようとするユキに、千佳子は香月を呼んで猿轡をはめさせ、処女の体は無惨にさいなみつけけるのだつた。

と ころが、この千佳子も、やがて香月の甘言に乗り、郊外の温泉旅館につれこまれ、麻酔薬を注射されて彼の部屋に全裸で縛られてしまつたのだ。しかも、その時、隣宅から聞えた男女の嬌声は、まど

うことなく千佳子の恋人の譲次の声なのでつた。

相 手の女——それは千佳子には知る由もなかつたが、ユキ子の演劇部を指導していた元女優長浜小夜子だつたのである。彼女は、以前から譲次を自分のものにしたがつていたが、彼女には菊地というパトロンがいて簡単にはいかなかつた。そこで小夜子は菊地を別れさせる為、やがて一計を案じた。まず、小夜子は香月に頼んで、英語教授という名目で、アルバイト学生を連れてこさせた。

選 ばれた学生は、ユキの恋人小崎であった。何も知らぬ小崎は、小夜子の家に呼ばれ、風呂に小夜子は豊満な肉体を運び、小崎を挑発しはじめた。が、その時帰宅したパトロンの菊地によつて、小夜子は全裸のまま二階にひきずり上げられた。そして菊地の責めがはじまつたが、その時階下で電話のベルが響いた。

「さあ」

と、無言で肩をこづかれて、小夜子は無言で「いやいや」と首を振つた。廊下においた電話器で通話しようと思えば、自分の体を犬のように廊下へ這わせなければ出来ないのだ。

菊地はいやがる小夜子を無理に廊下へ押しつけた。

「もし、もし」

仕方なく小夜子は言つた。

「もし、もし、マダム、無事ですか？」

相手を香月の声と知つて、

「助けて！」

小夜子は言った。

瞬間、菊地は電話器をとりあげて送話口に手でふたをしながら、小夜子を蹴った。

小夜子は頬を廊下へこすりつけるようにしてのめつた。菊地は小夜子のやわらかい胸へ足をのせて、ぎゅう、ぎゅうとふみつけながら、

「普通に話しをなささい。今、助けてと言ったのは、そばで菊地がいたづらしたからだと言つて笑いなさい。よくお前が笑う時のようになまめかしく笑えば、相手は何かお前がくすぐられでもしたと思うだろう。さあ」

と、又受話器をおしつけられ、

「もし、もし」

小夜子は言った。

「何かあつたんでつか？」

香月の声がする。

「いいえ」

小夜子は仕方なく言った。

「菊地さんに何かひどいめに合わされているのと違いまつか？」

香月の声はドンビンと受話器から外へひびく。傍にいる菊地に聞えてしまうのだ。

もう少し声を小さくしてともいえない。

背中に菊地の足が痛かった。本当のことを言つたら、どんなめに合わされるか。

小夜子は仕方なく笑つた。泣き笑いのように笑つた。

「フフ、、何でもなしの。男の人からの電話なので、菊地がやきもちやいて傍で変なことをするの。何？ 用事は？」

「小崎はどないしてます？」

「あの人ね……」

菊地が縄尻をぐつと引つぱつた。そして、剃刀を目の前にちらつかせる。

「あの人、もう帰えつたわ」

「もう？」

菊地の剃刀が頬に近づいている。

「ええ、用があるつて、早くに……」

「僕、そちらへうかがつてもいいですか」

「ええ」

思わず小夜子は答えた。香月が来てくれれば、何とか救われる道もある。

しかし、菊地が縄尻をぐつと引いて、二の腕をつねつた。

「ああっ！」

と、悲鳴をあげたが、床にころがされていゝ電話器に声がとどいたかどうか。

菊地が縄尻をゆるめたので、小夜子は又電

話器近く、廊下に這つた。菊地の縄のゆるめかげんで、小夜子の体はあやつり人形のように床から上つたり、床にくつついたりするのだつた。

「もし、もし、今夜は菊地が来ているので又この次に……」

「じゃあ、そうします。おやすみなさい」
電話を切ろうとする香月に、

「もし、もし」

思わず小夜子は言つたが、この状態をどうつたえようもない。

「じゃあ、又、さようなら」

菊地が電話を切つた。

「随分だわ、随分だわ」

小夜子はそのまま泣き出したかつた。けれど、自分の姿を思うと泣くのも精だつた。小夜子は唇をかんだ。

菊地は面白そうに笑い出した。

小夜子は彼にべつと唾をはきかけた。

「あつ！」

と、菊地は顔までは届かなかつた唾をハンケチでふくとギラギラするような目で小夜子を眺めながらその汚れたハンケチを小夜子の口の中へ押しこんだ。

二

今日も齋田ユキは仕事を探して歩いてい
た。今まで父親が病身とはいえ、月々の生
活費は稼いでくれたから、ユキがたま
にアルバイトをするとしても、小づかい稼
ぎのようなものだつた。

それが全然状態が違つて来た現在、わづ
かの稼ぎではどうにもならないのだ。それ
なのに、デパートの暮の売出しもすぎて、
臨時雇いの口もない。サンドイツチマンで
も何でもするつもりでいても、すでにアル
バイト慣れした人達が太抵の仕事は特約し
ていた。モデルは一度でこりている。

齋田ユキの足はメーゾン・ド・サヨに向
つていた。小夜子に頼んで女給さんにでも
使つてもらうより道がない。

おそろおそろドアを開いた。

まだ客もないらしく、シーンとしてい
る。スタンドの中でバーテンらしい男がコ
ップをふつていた。

「あのう……」

ユキはのぞくようにして聞いた。小夜子
のことを何と呼んでいいのか、それさえう
まく口に出なかつた。

「あのう、先生いらつしやいますか？」
「先生つて？」

案の定、男はすぐには合点がいかないらし
い。尤もそれも無理はない。こうした酒場に
は「先生」と呼ばれる人が多勢くる。政治家
も先生だし、映画俳優も先生だし、小説家も
画家も、気のきいた店なら床屋さんも先生と
呼ばれる。酒場のお客さんのほとんどが先生
なのだ。

「あの……、私、K学院の演劇部の者ですけ
ど……」

「マダムですか？」

それでも感の早い男なのか、すぐそう言つ
てくれた。ユキはほつとする思いで、

「ええ」

と答えると、

「今日は休むいうてはりました。
何ぞ学校の方の御用でつ
か。家にいてはるかどうかわか
らしまへんけど、行つてごらん
になるなら地図書きまひよか」

「いいえ、でも、又来ます」

ユキが帰えりかけると、

「あのう、一寸……」

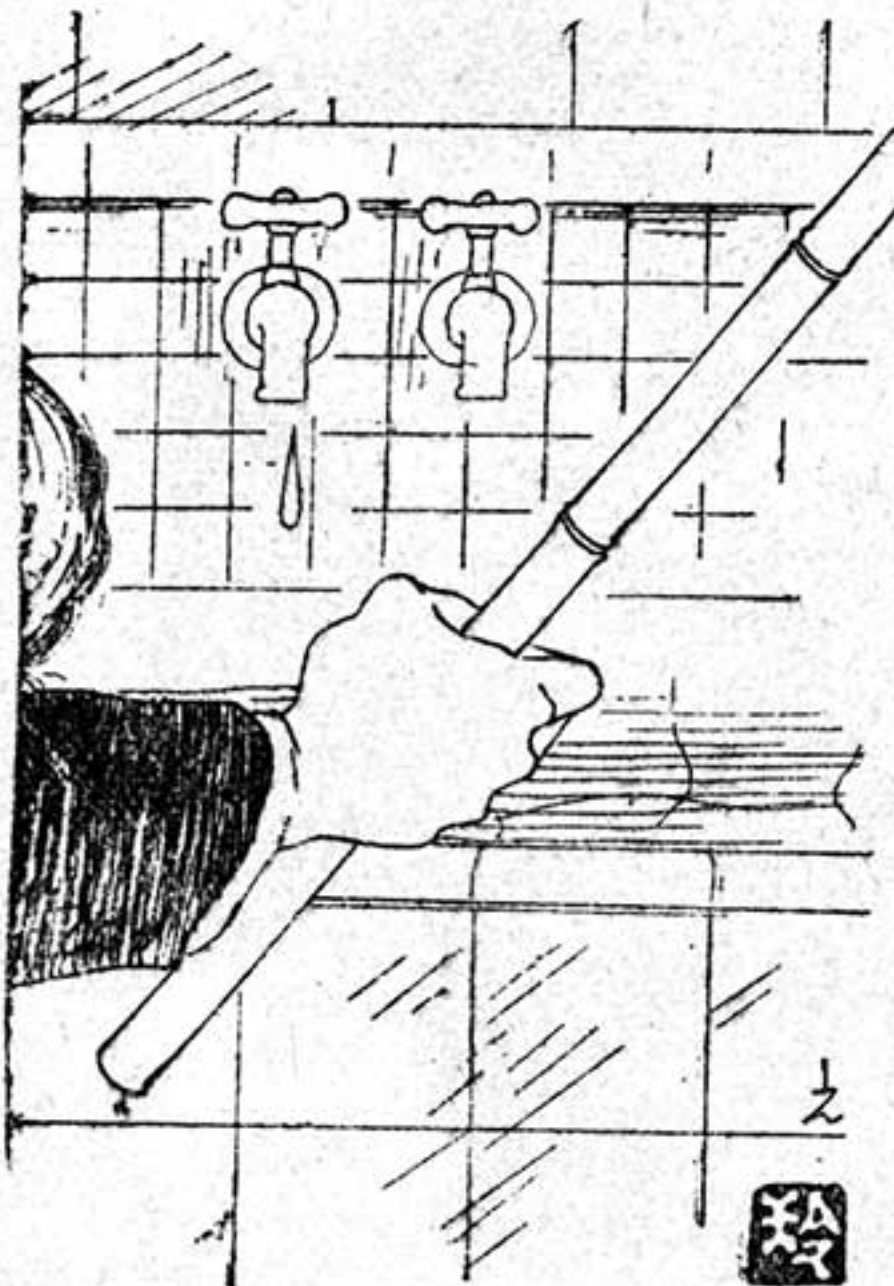
と、男はユキをとめて、スタ

ンドの小さい穴から這うように出てくると、
「あんた、ここで手伝うてみる気あらしまへ
んか。何や前にマダムからそんなこと聞いた
ことあるように思うのやけど、あんたと違
まつか？ 演劇部の人にええ娘いるよつて、
そのうち此処へ来てもらうのやつて、言うて
はりましたぜ。あんたでつしやろ？」

「いいえ」

ユキはそれを望んで来たのに、相手からそ
う言われると、自分で自分がもどかしい程、
「ええ、そうです、お願いします」という言
葉が出て来なくなつてしまった。

「私、先生がそのうち何かラジオに出して下
さるつて……それで……」

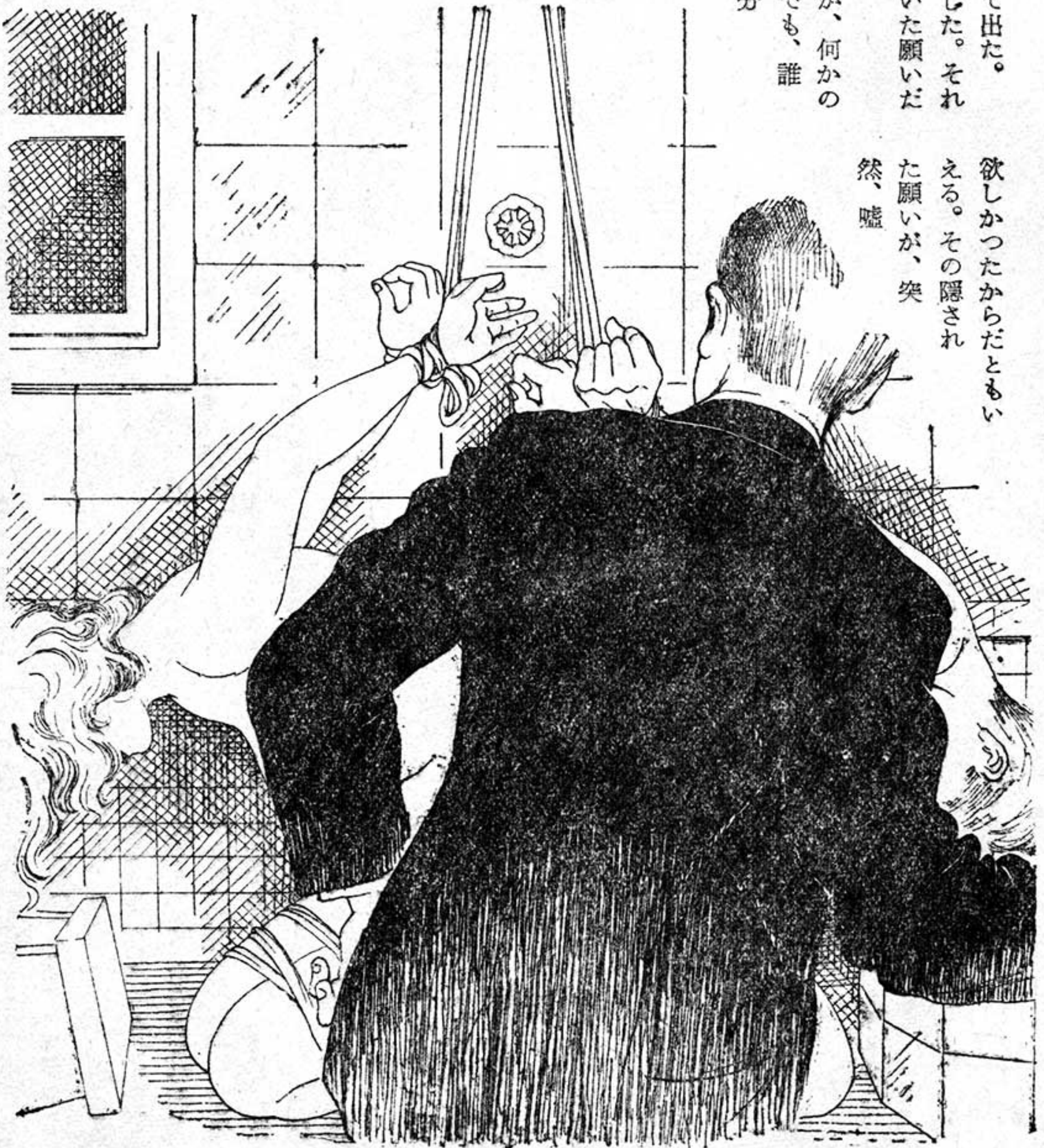


思いもかけない嘘が口をついて出た。
ユキは言つてしまつてはつとした。それはユキの心の奥の奥にひそんでいた願ひだつたのだ。

よくラヂオに出ている小夜子が、何かの折に、たとえ一と言でも二と言でも、誰か娘役はないかと頼まれて、自分をすいせんしてくれないか。

演劇部で他の人よりも自分に目をかけてくれているように思う小夜子がもし自分の為にラヂオに出る機会を作つてくれたらどんなに嬉しいだろうとユキは思つていたのだ。男の学生で、学校以外のアマチュア劇団に属している人が、一回ラヂオに出て、千五百円もらつたと話したことがあつた。千五百円にならなくてもいい五百円でもいい。一回出て五百円なら、他のアルバイトよりはるかにいいのだ。メーゾン・ド・サヨで働く氣になつたのも、出来れば小夜子にそのことを言い出す機会が

欲しかつたからだともいえる。その隠された願ひが、突然、嘘



をつく拍子に出てしまったのだ。嘘をつくつもりで本根をはいたといえよう。するとバーテンは親切に小夜子の家の地図を貰いしてくれ、電話番号も教えてくれた。

ユキが感謝すると、バーテンは笑つて「実はね、こつちにも頼みがあるんですわさつき急ぎの用だと言つて、お客さんがマダムに手紙をおいて行きはつたんやけど、あいにく今日マダム休みやし、どうしようかと思つていた所なんや。あんた、ついに持つて行つてくれませんか」

「はい」

と、ユキはうなずいた。

もう一度出直して、小夜子のいる時に此の店へ来て此のバーテンの前で店で働かせてくれとは頼みにくいと思つた。直接小夜子に会つて頼めば、たとえ、此の店へやつてもらうことになつても、それはそれでラジオの仕事がなかつたので、当分店を手伝うということにすればいい。とに角、小夜子の家まで行つて来よう。

ユキはバーテンからことづけられた、手紙をさらに包み紙で包んで輪ゴムをはめたものを、ハンドバックと一緒にしつかり持つと、教つた地図通りに、小夜子の家まで

来たのだつた。

三

門のわきのベルを押したが答へがない。手紙の入った包みを、だまつて郵便受けへ入れて帰えろうと思つたが、生垣越しに灯が洩れている。中に誰かいるな、小夜子が留守でも頼んで帰つた方がいいと思つた。もう一度ベルを鳴らしたが、中でベルが鳴っているのかどうかかわからない。ラジオをかけているのかジャズの音が聞えていた。

ユキは垣根にそつて横手の方へ廻つてみた。勝手口らしい木戸があつた。そつと開けると、鈴の音をひびかせて木戸があいた。ユキは何か悪いことをしているようにはつとしたが、鈴の音を聞いて出てくる人もなかつた。

「ごめん下さい」

ユキは声をかけた。しかし門の外まで響いていたジャズの音は度はづれに大きく聞えて人声を消してしまふのか無人の家のようにシーンとしているのが何となく無気味だつた。ユキは灯の洩れている窓へ近付いていつた。湯殿らしかった。

中をのぞいて、ユキは思わず、

「あつ！」

と声を立てる所だつた。

湯殿のタイル張の流しの上に、男と女が裸のまま縛られているのだ。二人とも手を高くあげて後手にくぐられ、そのさきがシャワールの管に引つけて、結び合わされている。男と女は振りわけ荷物の様にシャワールの両側に振らせられ、手をギユウギユウと上へ持ちあげられているので、顔は胸をなめそうに下へ押しまげられていた。

二人ともが立ち上れば、吊り上げられている縄がゆるむから、幾分でも楽になるだろうが、立ち上れないように、膝と脛を一つにくるぐると縄がかけられていた。

「こんなにされても、まだ知らないというのか」

ものさしの様な鞭を手にした男が、二人のわきに立つて言つた。

「どんなにされようと、僕は潔白です」

縛られている男が、こころもち顔をあげて言つた。小崎義一だつた。

ユキははつとして自分の目を疑つた。

「強情な……」

男の手から鞭の棒が振りおろされ、小崎の裸の背にピシッと鳴つた。

「あつ！」

と小崎はあげかけた顔を再びうつむかせた。その反動で、シャワーにかけた縄が小崎の方へ引かれ女の腕が折れそうに吊り上げられ、

「あああつ！」

と女がのびあがるように苦悶の叫びをあげた。

ユキは又ドキツと大きく胸を鳴らした。

女は小夜子だった。

小夜子と義一が一つに縛られているのだ。いつたい何をしたというのだろう。

ユキは窓硝子にしがみつこうようにして、中を見た。

折檻をしている男が菊地なのは、ユキより読者の方が知っていることと思う。

風呂場へとじこめられてしまった小崎義一は、気持の上ですでに菊地に立ちおくれていた。

菊地は小夜子を電話器の前で動けないようにしばつて、猿ぐつはをかませておいてから、風呂場へ入つて来たのだ。素裸の小崎を菊地が縛りあげるのに、そう手間はかからなかった。

「違う、僕は何にもしやしない」

小崎は叫んだ。

しかし、菊地にとつては、おとなしく縛られるよりは鳴物入りの方が効果があるといった顔付で、小崎の言うことに耳をかそうともしなかった。

後手に縛つた縄は首にも、二の腕にも廻され、足までそろえて縛らなて、小崎は荷物のようにタイルの上へ転がされた。

「何かの誤解です、僕はこんなことされる覚えはありません」

小崎は訴えたが、菊地は容赦しなかった。

「僕の目をごまかそうたつて、そうはいかないぞ。それより、素直にあやまつたらどうか」
「あなたこそ、理不尽なまねをしているのです。あやまるのはあなたの方です」

「なにを！」

菊地は小崎の背をタイルへ押しつけるように踏みにじつた。そして、湯殿の中を見廻していたが、タオルをかけてある細い竿竹があるのに目をやると、それで小崎を打ちすえた。

ピシツ、ピシツ！

と、音がする度に、動くまいとしても、小崎の体は渚に打ちあげられた魚のようにピクピクと踊つた。

「僕が訴えたらあなたは罪になるんです。僕

の方に落度はありません」

小崎は打たれる下から言つた。

「ひかれ者の小唄か。いくら姦通罪がなくなつたといつても他の罪名はいくらでもあるんだぞ。人の女をとつておいて図々しいにも程がある。少しのぼせをさましてやろう」

菊地は引きずるように小崎をシャワーの下へつれてくると、ザアッと冷たい水を出した。

「今、ついでお前の恋人も洗つてやるからまつてろ」

菊地はそう言つて奥へ引きかえすと、猿ぐつわのまま、小夜子をつれてきたのだ。

小崎は自分をこんなめに落した小夜子を今の今まで憎らしく思つていたが、ぎりぎりとの今まで憎らしく思つていたが、ぎりぎりとの高小手に縛られた小夜子の白い裸身に、肩といわず、背といわず、ほとんど体中に紫色や赤黒い痣が、痛々しくつけられているのを見ると、小夜子に向つて、恨みの言葉も急には出なかった。

「ほら、恋人の恰好を見てやれ」

小夜子はタイルの上へつきとばされて、すぐには起き上る力もないらしく、濁つたような目で小崎を見たが、小崎の縛られている姿にはつとして、何か言いかけようとした。しかし小夜子の口の猿ぐつわは、言葉をもらさ

せはしなかつた。

「どうだ二人ともいい恰好で、恨みつこなしだろう、ハハハハ」

菊地は皮肉に笑うと、シャワーをいつたんとめて、その下へ、ユキが窓から見たような形に二人を縛り合わせたのだ。

そして、水をかけては打ち、打つては水をかけた。二人の体は水をかけられても冷たいのか熱いのかわからないようになって、水をふくんだ縄は身を締めつけて鞭で打たれる痛みより苦しい程だ。

「あやまれ、あやまれ」

と、菊地は責めることに酔つたように言う。

しかし小崎も小夜子も言葉も出ない。

「ああ、ああ」

と、小崎は声とも息ともつかず呻めく。小夜子の猿ぐつわからも同じような呻めき声ももれてくる。

誰も窓からユキが見ていようとは知らなかった。

二人が本当に気を失つてしまふまで、菊地の折檻はつづくのだろうか。

四

ユキは暗い道を駅の方へ歩いて来た。

涙が流れて仕様がな。道の暗さが幸だった。ユキは流れる涙をふこうともせず、歩いている。

意外だった。ただ意外だった。

信じ切つていた小崎義一が、小夜子と関係

していたとは……。

ユキは他に思いようがなかった。

もしか泥棒か何かの嫌疑なら、小崎ひとりが責められる筈だ。あの家は小夜子の家なのだ。その家の女主人と一緒に縛られているのは、二人が同じように罪を犯したとしか思えない。では、どんな罪を……。

ユキは考えただけで胸がしめつけられる。

憤りよりも悲しかった。今更、自分の小崎義一に対する愛情を、自分自身はつきり認められた。そして、小崎も同じように自分を愛してくれているとのみ思っていたのが、自分のうぬぼれたつたとは……。

しかしいくらそう思つても、ユキの小崎に対する愛情は急には消えてくれないのだ。だから悲しい。小崎の浅ましい姿に、本当にあそがついたのならそんなにも悲しくない筈だ。そんな男と知らずに愛した自分の不明を泣く程、彼女は自分をうぬぼれてはいなかった。

駅近く商店の灯が見えてきたので、彼女は涙をふいた。とに角家まで帰えろ、家へ帰えればひとりつきりだ。声をあげて泣くことだつて出来たのだ。

小走りに駅の切符売場へ行こうとすると





「斎田君」

と呼ばれた。

香月春夫が立つていた。

「マダムの所行つてきたんか？」

聞かれて、香月の顔を見た瞬間、木寛にも
ポロツと涙が落ちた。

「どないしたん？」

香月は聞いた、

「何でもないので、私、急ぎますから……」

逃げるように切符を買おうとすると、

「一寸待ちいな」

香月はとどめた。

「僕、マダムの店へ行ったら、君が来たつて
聞いたんや。パーテンは君の名を知らんらし
つたが、こういう人やときいたら、すぐわか
つた。僕心配になつて後追つて来たんでつ
せ。なんぞ厭なことあつたのと違うか？」
そういう香月は小夜子と小崎のこと知つて
いるのだからと、ユキは思った。知つてい
るような言葉つきだ。

ユキはそのままもう一度「急ぎますから……
」とは帰えれなくなつてしまった。

自分の知らないことで香月の知つてい
ることがあるのなら、聞いてみたいと思つた。

「何かあつたんやろ？ 話してみいな。僕か

て役に立たんこともないで」

ユキの顔色をみいみい香月は言った。

「それに、店で何ぞ頼まれたんやろ？ それどないした？」

「郵便受へ入れて来たわ」

ユキはやつと答えた。

「誰もいなかった？ おかしいな、僕、電話したの、もう一寸前やつたけど、マダムもマダムのパトロンもいてはつたが」

「そう？」

ユキは何げなく言った。しかし香月はつづけて、

「けどな、その時の電話、何やらしらんけつたいな電話でな、ひよつとしたら、マダムが彼氏と仲ようしている所をパトロンに見つかつたんやないかと思うているねん。何ぞ変つたことあらへんかつたか？」

ユキの目からもう一度ハラハラと涙がこぼれた。涙腺がどうかしてしまつたように泣けて泣けてしょうがないのだ。

「どないしたんや、あはやな。まあ、一寸僕について来いな、その顔で電車に乗つたらわられるで。な、僕の懇意な家があるよつて、顔を洗うて、お茶でものんでいきましよう」

ユキはこつくりと無言でうなづいた。

ひとりでかみしめるにはあまりにつらかつたのだ。

香月にやさしく言われると、前に香月の為に恥しいめにあわされたのが奇妙に腹が立たなかつた。折が折だつたのかもしれないし、香月の柔軟性は、腹を立てるすきを与えず、むしろ逆に、それを親近感にしてしまう不思議な魔力を持つてゐるのかもしれない。

ユキは香月のあとから、門灯もついていない戸口をくぐつた。

どんな性質の家なのか、玄関へ出て来た中年の女に、

「あいている？」

と、香月が慣れた調子できくと、

「はい」

と答えて、そのまま引つこんでしまつた。そして再び出て来ようともしなかつた。

「さあ」

と、香月はユキをうながすと、自分の家のような顔で、薄暗い廊下を奥の方へ歩いて行く。

ユキはだまつて、放心したように、香月のあとからついて行つた。

(以下次号)

愛

読

者

通

信

拝啓、尊社愈々御多忙中の御事と存じます。小生は、尊社発行の風俗草紙の愛読者ですが、誌上読者交歓室を拝見致しますと、余りにも多数の同好の志がいることに驚嘆し、と同時に、自分の心の安まる思いです。

小生、先頃迄、サジ的な外国婦人と同居を致し、異常なる生活を楽しんで居りましたが、惜しくも、その婦人が病魔に侵かされ、故国へ帰郷致した為に一時は失望、落胆し、懊悩のうちにその日その日を暮して居りました処、幸いにも知人の紹介にて、那須高原の温泉郷に、サジ女性を見得出し、被虐趣味を満喫して参りました。

付きましては同好の人々にその女性を御紹介致したく存じますが、本誌の御内意は如何で御座居ましかば、過日、本誌二月号附読者交歓室誌上にて、男奴隷を募る、マダムKなる御婦人を知得致しましたが、是非、小生も拝顔の榮に浴したく、マダムに御紹介を願えれば此の上も無き喜びと存じます。

突然の便りを差上げ、失礼申し上げました敬具
H・K 生



大正の兇漢 金鷄の亀

三谷 祥介

(一)

そのころ、土佐人は、乃木將軍
に対して、好感をもつものはほと
んどなかった。

乃木には『一將功なり万卒枯るる』と
いう言葉がぴったり当てはまるからだ
息子を戦死させた親たちや、その妻子
は、乃木の無謀な海戦を怨んで、八裂き
にしてもあきたらぬと思つたほどである。

土佐の四十四聯隊は、善通寺の第十一師団に
属し、明治三十七八年の日露の戦役には、難攻
不落と言われた旅順の要塞を攻撃して全滅したの
であつた。乃木將軍はそのときの指揮官である。

★ 特選犯罪実話・名刑事捕物帳 ★

血染めの聯隊旗が四国の山脈を越えて、大杉から山田を通過し、土佐の高知市へ凱旋したときは、沿道をうずめて聯隊旗を迎えた市民は、寂として声なく、潸泣きが群衆の中から湧き起った。

やがてそれは世にも悲壮な慟哭となつたので、喇叭を吹く兵士も心で泣き、軍靴は哀れな音を立てて進んだ。

「乃木のバカモノ、伴をもどせ」

怨みの血相ものすく、髪を乱して血染めの聯隊旗を追つてゆく心の狂つた老母もいた。

しかし、池田亀五郎は幸運にも生き残つた兵士であつた。彼は旅順の攻撃に参加したが、炸裂する砲弾で氣を失い、戦友の屍体の下に埋れてしまった。亀五郎は看護卒に救われて野戦病院へ運ばれたが、背中にうけた貫通銃傷は、幸いにも肺を除けていたので、生命には別条がなく、数カ月の療養で帰還を許され、除隊になつたものである。

「要領のいいヤツには叶いませんよ。うちの息子は根が正直だから、進めと言われたら雨のように弾が降りかかつて、敵の陣地へ進みました。亀五郎は逃げて隠れてい

とた言うじやありませんか」

聯隊旗を持つた嘉村少尉が戦死したので佐山伍長に渡されたが、彼もまた戦死した。ついに血染めの聯隊旗は西村二等兵の手に渡つて、彼の腹部に巻きつけられたと言うことである。

「だからさ、卑怯な真似をしなければ助かるワケがない。うまく立廻つて、戦争でひと儲けたのは亀五郎ひとりだ」と遺家族たちは妬みに思つて、とりどりの噂をした。

亀五郎は、日露の講和談判が終ると間もなく、金鶏勳章と年金を拝領に及んで、在郷の軍人でありながら一等兵から伍長に累進するものであると言うご沙汰があつた。人の噂はともかく、彼は『時の人』であり『時の英雄』でもあつた。

乃木將軍が、戦死した部下の墓を各所にたずね、香華をたむけると言う話が伝わり、亀五郎は戦争未亡人をたずねて歩いた。

彼は口髯をピンと生やかし、小倉の袴に紋付のある羽織を着けて、

「こんにちわ。池田亀五郎でございます」と挨拶して推参した。

その頃は和服につける略章がなかったの

で、亀五郎は胸のあたりに燦然と金鶏勳章をかがやかし、旅順の要塞を連日にわたつて攻撃した有様や、戦友の死をまのあたりに見る修羅場の光景など話してきかせた。そして未亡人になつてからの家庭の事情を親切にたずねたり、空閑に甘んじて生活することが、どんなに淋しいものであるかを慰めて同情した。

「池田亀五郎が金鶏勳章を見せびらかして、未亡人を喰いモノにする」と言う評判が立つた。

彼は和紙の原料にする楮や三桠の仲買人で、顔のひろい男だが、金鶏勳章をもらつてからは仕事を手につかない。いたるところで戦争未亡人と交渉が出来ていた。そして金に詰ると、金のある未亡人から巻きあげて、金のない未亡人に貢いだりした。

こんな醜聞はいつまでも社会の表面に出ないわけがないので、地方新聞の三面を賑わすような記事になる始末。長岡郡大篠村の村長は、名誉ある軍人の不身持を村全体の恥辱だといつて歎いた。彼は村八分の掟によつて、池田亀五郎の排斥運動をはじめたのであつた。

「不埒なヤツ等だ。二年間の辛酸を舐め、弾丸をくぐつて日本大帝国を今日あらしめたオ

レに對し、村八分の掟とは何ごとだ。今に見ておれ！」と亀五郎は、ひそかにその機会を狙っていた。

大篠村の秋の祭りの晩——振舞い酒に酔つてぐつすり寝込んでゐる徳弘村長の自宅を襲つて、亀五郎は軍刀で村長を刺し殺した。あとで調べると、その疵跡は十六カ所もあつた。彼はどんぶんに怨みを晴らしたわけである。

亀五郎はとりあえず伊予の方面へ逃げのびるつもりだったが、途中で急に方針を変え、いったん徳島県の小松島に出て、船に乗つて淡路島に渡つた。そして市村で二、三日滞在していたが、身に危険がせまるのを知つて洲本から神戸に渡つた。しかしそれから後の消息は、杳として知るものがない。

郷里の大篠村では満洲浪人になつてゐるというもつぱらの噂であつた。

(二)

その頃の警察は、現在のように、写真を使用して犯人を指名手配することはなかつた。昔ながらの人相書きを配布して、重大犯人の捜査上の参考にした。池田亀五郎の

人相書きには、

一、色が白く、眉が濃い。鼻は高き方、目は二重瞼、口は普通人より大きい。齒ならび悪く、犬齒にヤエバあり。

二、身の丈——五尺六寸位。体重十五、六貫。そして着衣の件については、小倉の袴に三ツ紋のある羽織。常に金鵒勳章を胸間に佩用——と書添えてある。しかし實際問題としては、こんなバカバカしい人相書きはない。

怨み重なる村長を殺した亀五郎が、金鵒勳章を佩用して諸所を徘徊するわけがなかつた。彼は日蔭の身を、兵庫県の奥平野にかくれて、岩田組の人夫に雇われ、有馬に通ずるトンネルを掘つていたのであつた。

飯場の通称を「金鵒の亀」と言う。刑事の探索を恐れて母方の姓を名乗り、和田亀吉と改めていた。

亀五郎は男ぶりがよくて度胸があり、腕力はめッぽう強い。奥平野に毎日雨が降りつづいて、飯場のわきを流れる溪谷が物凄い出水になつたことがある。

おりしも酒に酔つて吊橋を渡つていた人夫が、どうしたハズミであつたか、足を滑らして足下二十メートルの溪谷へ墜落した。これをそばで見っていた亀五郎は、いきなり洋傘を

ひろげて、吊橋から飛び降り、危く溺死しようとする寸前に、溪谷から救いあげたのであつた。

亀五郎はこれにヒントを得て、コイモリの骨を特別に強靱な金属で造り、その柄には七首を仕込んでいつもステッキの代用にしてゐた。彼はどんな高所もモノの数ではなく、コイモリを落下傘のように使いこなした。

「金鵒の亀」が奥平野の岩田組の飯場で顔を利かし、組頭になつて哥兄と敬われるようになったのはそれから間もないことだ。

こうしてゐるうちに明治大帝は崩御あそばされ世は諒闇にとざされて、年号は大正とあらたまつた。日の御子は天皇の御位につかれたのであるが、御大葬の当日、乃木將軍夫妻はみあと慕い牽つて自刃した。ところが乃木の死は池田亀五郎に大きな影響を与えずにはおかない。彼は土佐人らしい情熱で、乃木の死を悼み悲しんだ。

その翌日になると、工事場を早目に切りあげた亀五郎は、岩田組の親分をたずねて、郷里へ帰りたいので暇をもらいたいと申出た。

「いつたい君の国は四国の何処だつたけ」兇状持ちの亀五郎は、さすがに土佐の大篠村だとはいいかねて、

「尋平でござんす」と言つた。

「そんなじや瀬戸の渡りも近いことだし、目のとどくところだ。ひさびさで郷里へ帰るのはいいが、またこの奥平野へ戻つてきてくれ」という。

指折り数えてみると足掛け七年の歳月が過ぎていた。亀五郎は三十二歳——大篠村には久美子という妻をのこして、夫婦の仲には政吉という男の子がある。かたときも女房や子供のことは忘れたことがないのだ。たつたひと目でいい、政吉の大きなつた姿が見たいし、苦勞をかけた妻に詫びの一言もいつてやりたい。

亀五郎は飯場を出て神戸へやつてきた。奥平野に隠れていた七年の空間は、村長殺しの悪夢を拭い去つていたのである。その当座はなんということもなく刑事に追われる身をおびえたが、今となつては常人と変るところがない。彼は海岸通りをぶらぶら歩いた。

神戸から土佐の浦戸港へ直航する滋賀丸という汽船はあつたが、さすがに乗り込む勇氣はない。亀五郎は高松ゆきの汽船に乗つて、四国へ上陸すると、その足で吉野川の溪流に沿ひ、山越えで豊永や大杉を経

て、生れ故郷の長岡郡大篠村へたどりついた。大正元年の九月も終りに近い頃だつた。

(三)

亀五郎は鎮守の杜の楠の太木にかくれて、日の暮れるのを待った。

稼ぎ貯めた金は二千元(当時の金としては大金だつた)彼は耳をそろえて腹巻に入れていた。險に焼きついてゐるのは妻子の俵だつた。

やがて夜になつた。

亀五郎は村をひとまわりしておこうと思つた。巡査の駐在所を覗くと、昔ながらの山本老巡査が机に向つて書きものをしていた。駐在所の前はひろびろとした田圃で、実りのいい稲の穂が赤い電燈の余光をうけていた。虫の音がびたり止むと、山本巡査はメガネをはずして往来を見た。亀五郎は足を早めて小径をつたい、柿の木を目あてに自分の家の裏手へ廻り、

「久美子……久美子……」と低い声で呼んだ。

「誰だ?」

蚊帳をはねあげて闇を見つめたのは叔父の鹿蔵であつた。

「叔父さん俺だ。亀五郎でござんす」

「あッ!」と鹿蔵は仰天した。

「亀!あぶない。逃げろ。村中のものがお前の帰りを待つてゐるんだ」

「七年のあいだ働きつづけ、金を貯めて女房と子供に逢ひに來ました」

「バカ者め。村長を殺したことはよもや忘れまい。それがために、オレも久美子もえらい苦勞をさせられた。お前が帰つたことをオレが知つたら、このオレの手で警察へ突き出さねばならん。逃げろ、逃げてくれ」

「叔父さん政吉はどうしてゐる?」

「聞いてくれるな。オレはお前に逢うことも出来ないし、口を利くこともできない」

「よくわかつた」と亀五郎は大きくうなずいてもと來た小径へ戻ろうとした。

「待てッ」

いきなり後ろから組みついたものがある。

亀五郎は襟を掴んで肩にかけると、田圃の中へ投げつけた。投げつけておいて彼は、

「しまった!」と思つた。すでに手が廻つてゐることを知つた亀五郎は、いつも手から放したことのないコーモリを、突撃するときの銃の持ち方で、前方に向けて駈け出した。

わッ!という喊声があがつた。闇夜のことだ定かではないが、容易ならぬ人の数であ



る。彼は無我夢中で走りつづけた。小字西ノ窪までやつてくると追つてくる人影がない。いちじ身をひそめるつもりで大西とめおの裏口から飛びこんだ。

とめおは戦争未亡人で、亀五郎と情

を通じた仲だった。

「あらッ！」と女は叫んだ。

土間に突ッ立つた亀五郎の顔色は蒼い。

「追われている。隠してくれ」

とめおはガタガタ顫えた。

「いけません」

「なぜいけない？」

「誰か来てッ！」と女は大声で人を呼び、取り乱した姿で逃げようとする。

亀五郎は束ねた髪を掴んで引き戻し、右手に力をこめて口を塞いだ。

「たつた一目、女房や子供に逢つて、金を渡せば、大篠には用のないオレだ。しばらくのあいだ匿つてくれ、たのむ」と亀五郎はとめおの耳に口を寄せてささやいたが、女はもがいて応じる気配がなかった。

も早や望みのないことを知った亀五郎は、隠し持った七首を取り出すと、女の乳房を力任せに刺しとおした。彼は二度目の殺人を犯したのだ。しかし、これからさき、たとえ死人の山を築いても、女房の久美子と悴の政吉に逢うまでは、この大篠村は立ち退かぬ

——「ザマあ見ろ」と亀五郎は女の血を見て小気味よく笑った。

奥の座敷で寝ていたとめおの義弟は、腰

をぬかさんばかりに驚いて、巡査の駐在所へ駆けつけたが、その頃の土佐の田舎では、医者のほかは自転車を持つてゐるものがない——村の人達が、巡査を先頭に西ノ窪へ駆けつけたときは、すでに亀五郎の姿は其処になかった。

能間、城陸、明見、八木、田井等の部落では、火ノ見の櫓に登つて半鐘を打ち鳴らす騒ぎになつた。ことの次第は時をうつさず高知の警察本署へ急報されたが、五里の道のりがあるので、巡査や刑事が自転車をつらねて、大篠村の現場へ到着したのは、二時間も経過してからだつた。鬼刑事と言われて評判の高い岸田は、地団太ふんで悔しがつた。彼は中村署長の手を固く握つて「池田亀五郎はたとい草の根をわけても、生命にかけて必ず逮捕してみせます」と誓つた。

「このさい捜査の費用がどれほどかかつて、それは問題じゃない。一刻も早く犯人を逮捕することだ」と署長は部下の刑事に決意をもらした。

土佐を脱出するには、船に乗つて太平洋を渡るか、険阻な四国山脈を越えるほかに手段がない。亀五郎はもとより山越えを決

心したが、四国から本州へ渡るには、瀬戸内海を船の便によらなければならなかつた。しかし警察の指名手配は嚴重をきわめたもので、四国の港は申すに及ばず、漁船にいたるまで見のがすことはなかつた。ことに全国の新聞が筆をそろえて、この殺人事件を詳細に報道したばかりか、亀五郎が出征した当時の写真に掲載したので、兇悪犯人に対する部落民の同情はすこしもない。

その夜亀五郎は大篠村を立ち除いたが、すぐその足で山の中に分け入り、大木を見つけると麻で造つた綱をかけ猿のように攀じ登つた。彼はコーモリの柄を枝に掛けて幹をつたい、木蔭に隠れて追手を除けた。彼は風雨と闘い飢を木の実や谷川にもとめて、四日間の昼夜を死ぬような苦心をした。遍路の姿に装して一同行の中にまぎれこみ、高松港から岡山県の宇野へ渡つたのは大篠村を逃げ出しから六日目の夕刻であつた。

(四)

第一の殺人を犯したとき、亀五郎が身をひそめたのは奥平野のトンネル工事場だつたが、二度目の殺人を犯した今となつては、も早や身を隠す場所ではなかつた。しかし亀五

郎にとつて恐るべき敵は、良心の苛責でもなく刑事でもない。連日にわたつて洗い浚え彼の行状を素っぱぬく新聞記事の恐ろしさだつた。

叔父の鹿蔵の談話も新聞にのつていたし、妻の久美子や幼い政吉まで夫を語り父を語る記事になつた。それによると亀五郎が村長を殺して失踪したとき、行方不明になつたという理由で親族会議を開き、久美子を離籍させたことである。すべての手続きは叔父の鹿蔵が代行したと談話の形式で新聞の記事になつていた。また亀五郎が所有する一段歩の畑と住宅は、後見という名目で鹿蔵が自由に処分していることは明らかだつた。

「叔父の鹿蔵は生かしておけない。どんな危険を冒しても、もういちど大篠村へ出かけて、手荒に療治をしなくてはならない」と亀五郎は、川崎造船所の煙突を見あげて、葺合町の貧民街を歩いていた。

「金鶏の兄貴、こんなところで……」

軽く肩を叩かれて振り向くと、奥平野の溪谷へ墜落したとき救いあげた成本だつた。「でけえことをやつたそうだが、兄貴ならやりかねないこつた。こんなところじゃ話が出

来ねえ。そこいらでいつばえひッかけようや」「バカにおめえは景気がいいなあ。つきあつてやるが、福原でもシケ込むかい」「いいともいいとも、がってんだ」

成本は葺合町の馴染みの賭場でバクチに負け、すっからかんで飯場へ帰るところだった。二人の者は福原の遊廓へやつてきて、初月樓を見立てると客になつた。亀五郎はひさびさで気の置ける合棒を得たように思つた。

「兄貴オレ達の仲間じや兇状持ちも一人や二人じやあるめえ。兄貴のことは新聞で見たが、オレに取つちや生命の恩人だし、親方も兄貴が戻ってくれば匿う気でいるんだ。晩今は此処で騒いで、明日は奥平野へ早立ちしようじやないか」と、成本は耳に口を密せてひそひそとささやいた。

亀五郎は言葉もなくうなずいて見せたが心の中では両掌を合せて拝みたいほどだった。やがて本部屋へ二人の仇敵が顔を見せると仲どんが酒を運んできて、にぎやかな酒席になつた。亀五郎はこんなときでもコイモリだけは部屋へ持ちこんでそつと片隅に置いてあつた。さすがに彼は、油断もスキもない男だ。



に酔い、女を連れて部屋へ戻つて往

いた。
「金鶏の親分さんおやすみになりません」
女はサイダーの栓をぬいてコップへ注いで

も更けて一時を過ぎていた。
つたのは、夜

亀五郎は浴るように酒を飲んだが、酔がまわらない。殺したヤツは心にかからないが、殺そうと思う叔父の鹿蔵が気にかつたためだ。

ともかくゴロリと横になつて、早立ちで奥平野へ出かけ、苛立つ気持を休めたいと思つた。

「もう二時かい？」

女は合点して笑顔を見せた。亀五郎は夜着になつて床についたが、すぐ蕩けるような睡気に襲われてまどろんだ。ふと——廊下に数人が忍んでいるような気配がする——追われるもののおびえている夢であろうか？……亀五郎は現ともなく寢床をさぐつた。枕をならべて寝ているはずの女はいなかつた。

「夢ではない」

とたんに亀五郎は夜具を蹴つて跳ね起きた。何よりもさき手に持ったのはコーモリ。彼は二階の座敷から往來を見ようとしたが、いつの間にか雨戸が閉つてゐる。

亀五郎は雨戸を細目に開けて見下した。

其処には成本が数人の警官に立ち混つて、二階の部屋を指さしているところだつた。

亀五郎は咄嗟に押入れへ飛びこむと、天

井板を破つて匍い上つた。

「裏切り者め、成本はオレを警察へ指した」と、悔し涙に泣き濡れて、屋根裏を切り破つた。

瓦を踏むと天は暗い。亀五郎は屋根の上から福原を眼下に見て、これでやつとぬけ出すことができたと思つた。

(五)

池田亀五郎が神戸に現われたというウチ電を、高知の警察本署が受取つたのは十月四日の午後一時だつた。刑事たちはよりより前後策について協議を重ねたが、電文では意味がよく通じない。なお念のために兵庫県の警察と打合せする必要があつた。そこでさつそく岸田刑事が出向くことになつたが、高知の浦戸港を午前十時に解纜して神戸へ直航する汽船は一日にただ一回あるだけだ。もとより四国を横断する汽車は其の頃まだなかつたので、明日の船出を待つか、自転車を踏んで、峻険な四国山脈を乗り越えてゆくほかに方法がなかつた。

「署長。私はこれからすぐまいります」

こう言つて岸田刑事は身支度をはじめた。

「行つてくれるかい」と中村署長は言つたも

の、何となく夜の山路が心にかかつた。しかし考えてみると、岸田刑事はたびたび自転車を飛ばして徳島の警察へ出かけたことがある。彼は地理をくわしく呑みこんでいる筈だと思つた。

岸田刑事は午後の二時に高知を出発したので、山田の町を通過するころには秋の日はすでに暮れてあたりは暗かつた。新改から天坪に出ると、径はいよいよ険悪な山坂になる。

板木野で時計を見ると十時を過ぎていた。午後のうち大峠まで漕ぎつけて、ただひと息に丸亀へ出るつもりだつたが、思うようにはかどらない。安戸までくると自転車から降りて坂路を押して歩いた。

岸田刑事は足を止めてひと休みしたが、顔に霧がふりかかるのは峰に近くなつたからである。空には幾つか星が残つているが、山を縫う径はどこまでも暗い。

この暗闇の坂路を、たしかな足どりで下つてくる者があつた。

岸田刑事は呼びかけた。

「もしもしどちらへおいでになるんです？」

男は歩みを止めた。

「あなたは……」

相手は答めるような声だつた。

「いそぎの用で丸亀へ行くところだが、この先きに人家はありませんか、自転車を預けて置きたい」

「……」

男は返事をしなかった。

岸田刑事は自転車の警燈を取りはずした。男はそんなことに頓着がなく、狭い道をよけて行き過ぎようとした。

「待つてください。折り入つてたのみがある」

「なに？」とけわしく言葉を切りかえして男は身構えをした。

このとき警燈の光芒が相手の男をとらえた。岸田刑事は愕然とした。男はすでにコイモリの柄を握んで、吊鐘マントを脱いでいた。

「池田亀五郎！」と岸田刑事は思わず叫んだ。

自転車が仆れた。その瞬間に投げつけた捕縄は、亀五郎の首ッ玉へ巻きついていった。



古味の戸倉卯平は荷車へ木炭を積みあげ、牛の尻を叩きながら安戸の坂を下つてきた。それは東の空が白々と明かるくなつ

たところで、山の峰には煙りのように霧がかかり、吉野川の溪谷も白きものに被われていた。

卯平の牛車は、自転車が横ざまに仆れていく小径で停まつた。

「はてな？」と不審に思つたが、卯平はかかり合いになるのは面倒だつた。彼は自転車を道端へ寄せて手綱を取つた。足許に気がつく

と、点々と血の流れた跡がある。卯平はゾツとした。しかし知らぬことにして通り過ぎた方がいいと思つた。

「縁起でもねえぞ。この野郎」

牛の尻に鞭を入れて荷車をすすめた。ひと曲りすると肌の赤い岩がある。そこで卯平は「あッ！」と叫んで膽を潰した。

二人の男が血に染まつて死んでいる。

卯平はガタガタ顫えた。

「おい、みんな出てこい。えらいことが出来たぞや」

彼は声のかぎりをつくして呼びつづけた。声を出して人を呼んでいなければ、居ても立つてもいられなかつた。だが、人里を遠く離れた安戸の坂路は、冥土のように寂寥して、

卯平に答えるものは向山の本霊であつた。

この二人の男が、どんな怨みや憎しみがあ

つたか、卯平には、そのワケを知るよしもない。

無残という言葉をもそのままに、二人ながら全身をとろきらず斬りさいなみ、それでもまだ飽きたらぬかのように、一人の男の片手には、血に染まつた七首が握られていた。

高知の警察本部から係官が駆けつけて、現場の検視をはじめたのはその日の昼すぎであつた。戸倉卯平は証人として検死に立会うよう申渡されたが、そのとき彼は、死体となつた二人の中で、色の黒い人相の悪い男が、殉職した殊勲者で、名譽ある刑事だといいきかされた。

片方の男は色が白く、なんとなく人好きがして、その死がいかにもいたましく思われた。それが兇悪犯人の池田亀五郎だと係官は説明した。

「へえ。そうでござんすかい。人間なんて、なんのこったか得体のわからんものでござんすのう」

と卯平は首をかしげた。

(完)

異 常 耽 奇
時 代 小 説

磔 付 船

島 本 春 雄
古 正 英 生 画

……女が立ったので、腹から上が丸見えになった、巨大な、然し、形の良い乳房だった。しかも双方の乳肌に刺青！それも細緻な——何と、男女閨房の秘図だった。ぶるん——と乳房がゆれると……





首無男と乳無女

朧月夜の隅田川を、弦歌さんざめく、大形の屋形船が、ゆつたりと上つていく。

飲み、唄い、食い、巫山戯ながら、朧の月光に、ほの白く浮かぶ対岸の夜桜を眺めようという贅沢な趣向である。

正面脇息のぬしは無役だが、四千石の旗本大身、馬場頼母。その背後に並ぶ五人の美しい——かどうかは、紫の頭巾をしているので分らないが——女は、氣保養の隠れ遊びに供を許された、馬場の奥女中共だという。

芸妓が三人。幫間が一人。

末座に与力の瀬戸陣十郎と、目明しの紅吉の二人。

座はようやく乱れようとしている。

窮屈の衣は、お袋の胎内へ脱ぎ捨てて来たという紅吉だ。支配の瀬戸与力に、無理矢理誘われたので、従いては来たものの、始めつから仏頂面だ。独酌で盃ばかり重ねている。

——ふん糞面白くもねえ。騒いでいるのは、旗本野郎と幫間の馬助だけぢやねえか。

頭巾のお腰元は——ヘン、下々の者にやあ、顔も見せねえんだとよ。その上お上品に澄まし込んで、ぶすつとも云わねえ。啞の陳列

ぢやああるめえし……。

陽氣そうに見えて、案外そうでもない、妙な一座だ。

頭巾の腰元たちの眼が、先刻から、何か訴えるような視線を、紅吉の顔に膠着させて動かない。

と、氣附いて幫間の馬助、

「へへへへ、あやかりとう御座んすね。同なじ男と生れて来て、月とスッポン雪と墨、馬助奴も、うたた無情を感じやす」
「どうした、馬助。急に——」

と、馬場の殿様。四十二三の脂切つた嫌なやつだ。

「えへへへ、五人頭巾のお雛様、もうもうまるで憑かれた様に、胸は早鐘眼は弁天、えーい、先刻から弁天親分ばかりお眺めと御座あーい」

「はつはつは、飛んだ男桜が眼の前に居るわい。紅吉、堤の夜桜に、おぬし恨まれるぞ」

「御冗談を。多分あつしの顔に、何か妙なものでも付いているんで御座んしょう」

——ちえつ、岡つ引を座興にしやあがる。

人呼んで弁天紅吉、男がよすぎるのだ。

腰元ばかりではない。三人の芸者まで、みんな、このやつの傍へ寄添いたい胸のうちだ。

馬助のやつ、口が滑り過ぎたと思つたのか急に変な声でやり始めた。

「余り辛氣臭さに、棚の達磨をちよいと降ろし——
この時である。

「うわーっ！ あ、あれや何だつ！」

船頭の絶叫だった。

一隻の小舟が、ゆつたりと近付いて来る。

月光に照らされて――

女達は思わず悲鳴を上げた。

それは、無惨な地獄舟だった。

小舟の真ん中に滑車を立てて、逆さ身に吊り下げられた、一對の男女。全裸。

「ふむ、これや惨い」

片足吊りの、その裸女には、乳房が無かった。刳り取られている。

そして、男には首がない。

「ほほう、美形ぢやのう。齒を食い縛り、眼を吊り上げて断末魔の形相――しかし、美人は得ぢやな、こんな姿でも美しいわい」

野放図に放言する馬場頼母の顔を、紅吉は怒りを含んだ眼でデロリと睨んだ。

――氣違い奴つ！

「お前たち、間違つても、こんな姿になるなよ――」

頭巾腰元を振り返つて、頼母は矢張り揶揄い顔だった。

乳房小町

女の身許はすぐに知れた。これも美人の徳であらう。



神田小川町露月長屋の評判小町で、雪路。

傘張り浪人雑賀源十郎の娘である。

――二ヶ月余り前から行方不明になつていたという。

「へえ、それが、落ちぶれても、矢つぱりお武家の娘、とんと浮いた噂なんぞ――そりやあれだけの器量だから、ちよつかいを出す助、

平は随分ありましたけどさ。ふふふ、うちの宿六なんぞも、柄にも無く手を握つたりして小つぴどくぶん投げられてねえ親分。ふふふ四日余り寝込みましたよ。え？ お風呂？

そりア、よく一緒になりましたとも――まあ何をお訊ねかと思つたら、お乳だつて!? ふふふ、嫌ですよ、親分さん。――別に變つた

「ところは……ただね、ただね、ほつほほほ」
 紅吉の聞取りに応えて、今の今まで頗る能弁にしゃべりつづけていた、露月長屋の金棒曳き大工の女房お初が、急に色つぼく尻をくねらせて妙なしなを作った。

「どうしたんだえ。気を持たせるんぢやねえぜ」

「でもさ、親分、ほほほほ。アレなんですよ。あの娘は、それや、綺麗は綺麗だつたけど、お乳がまるで片輪のように大きくつてねえ、長屋の口悪女なンか、蔭ぢや、乳房娘だとか、乳娘、お乳小町——なんて、そりや色んな悪口を——」

「ふーん、成程ねえ。それぢや、とんと不恰好だつたらう」

「ところが親分、化け物見たいに大きくつても、引き締つてて、とんだ良い形でしたよ。あんなのは極く、極く珍しいんでしようねえ」「はつははは、それぢや男は堪らねえ筈さ」
 予期もしていなかった、妙に何やら色つばい事実が拳つて来た。

そして、雪路は乳房を剥り取られていた。

紅吉は、近くの居酒屋に飛び込んで、盃を舐めながら考える。

——どうも妙な具合だな。相手はなみの野

郎ぢやねえ。狂つていやあがる。狂つていると云えば、あの旗本やつこ奴、嫌なやつだつたなあ……

独り飲んでいると、周囲の話声が自然耳へ入つて来る。

「今日の瓦版見たか？」

「見た。露月長屋の乳娘も、えれえ事になつたなあ」

「俺や思うんだが、もう一人、出るぜ」

「えつ！」

「麻布のつくり、小町、おめえ知つてゐるだろ」

「ああ、あの看板娘か」

「そうだ。お妙というんだ。この娘がおめえ矢つ張り近所ぢや、乳小町つて云われていたんだとよ」

「——？ いた？」

「そうよ。二ヶ月ばかり前から行方知れずになつてゐるんだ」

「へえ！」

紅吉の眼が、鋭く光った。

投簪のお仙

ふと視線が合うと、その男は慌てて顔をそ向け、逃げるように行つてしまった。

はて——？

見たような男である。一度、何処かで、確かに……

想い出せない。

与力瀬戸陣十郎の屋敷の前である。紅吉が門を入ろうとする、その男は出ようとする。

——その出会いがしらだつた。

紅吉は首を振つて、舌打ちを一つ。そして影のように門内へ消えた。

瀬戸陣十郎は、奥の秘し部屋の中で仁王立ちになつてゐる。

鶴のように瘦せて、狐のように眼尻の吊り上つた男だ。蔭では狐与力と呼ばれてゐる。

しかし、事實は、蛇の様に冷たく惨忍な男であつた。今迄、これ——と目星を付けた下手人は、一度も逃がした事がない。

——鬼与力である。

天井から、女が一人、両の手縛りで下げられてゐる。そして猿轡。すんなりとした身に緋の長襦袢一枚きりだ。

雪肌というのか、抜けるような白い肌の女である。

「おい、いい加減に往生しちまえ。この陣十郎に睨まれた以上、所詮はどつちみち泣く泣く往生だぜ」

女は首を横にふつた。

「——！このアマツ！」
鞭が、激しく背肌の上で鳴った。
続いて、又鞭が鳴る。

女が、うううウ——呻いて、身をよじると
縄が緊張して、ゆつさギリリと揺れる。

「や！、紅吉？ 何時の間に來たんだ。無断
でへえる奴があるかつ！」

陣十郎は凄しい顔になつた。影のように音も
なく、弁天の紅吉が背後に立つていたのであ
る。

「——へえ、呻き声が聞こえたもんで、つい
……投簀のお仙でございますね」

「うむ、又の名を弁天のお仙という。おぬし
と同じ二つ名だの。ふふふ。こやつ、搦摸だ
けが商売かと思つたら、贋金の疑も出て來お
つた。が、いくら賣めても、仲間を白状せん

——強情なアマだ」

紅吉は、鋭い眼で、宙吊りお仙の軀の一部
を見詰めている。——胸、巨きな膨み……。

——實め吟味に猿轡は妙だ。へん、蛇与力



め、ひどい事をしやあがる。案外色好きだて
え評判だから、ふん、何の吟味だか知れたも
んぢやねえ。

追い出されるようにして、座敷え來ると、
「どうだ、磯付船の一件、目星あついたか」
と、押かぶせて來る。

「へえ、どうやら」

「なにっ！」

「まあ、ぼちぼちで。今日お伺い申しました
のはあの一件、お奉行様直々のお声掛けとい
うことになりましたので、あつしは、旦那の
御支配を離れやす。その、お断わりに……」

「ふん、いい度胸だのお声掛けか」

時の北町奉行は、れいの刺青判官遠山左衛
門尉景元であつた。

文 珠 小 僧

ひらり、黒い影が庭へ降りた。

ひと眼で判る。盗つ人だ。

顔に紫蘇染めの手拭を、それ、盗つ人彼り
にして、黒いのを着込んでゐる。これも裏
を返えすと、袴縞になろうという奴だ。

「ふふふ——しめて二百両か。半刻の仕事
としちや悪くねえ」

呟いて、影のように庭を廻つたが、ふと

灯りの洩れる窓を認めて、猫のように、その
下に立つた。

湯殿である。——

女が一人、こちらを向いて、首まで湯舟に
浸つてゐる。

——いい女だが、眼が不可ねえ。お部屋様
なら、さしずめ、お家乗つ取りの智慧を働か
そうてえ眼だ。

このやつは腹のうちで、そんな風に呟いた
うっ！

女が立つたので、腹から上が丸見えになつ
た。巨大な、然し、形の良い乳房だつた。

だが、この奴が驚いたのは、そんな事では
ない。

原因は、乳房の上にあるものだつた。

双方の乳房に刺青！

それも細緻な——何と、男女閨房の秘戯図
だつた。

ぶるん——と乳房がゆれると、それは微妙
な艶情を乳房の上に描いた。

へっ！

余りの強烈な刺戟に、このやつは思わず声
に出したらしい。女がキツとなつて、

「誰れっ！ 其処の！」

「ふつふふ、智慧を貸そうか——」



「えい！」

「——文珠の智慧を、と云う男
さ」

「あつ！ 文珠小僧！」

女は、頭の上まで垂れ
ている緋の房を引

いた。途端に
ガラングラン
と激しい音が
した。

「いけねえ、
あばよつ」

このやつは
隼のように樹
鬚に落けてい
った。——文
珠小僧。三年
この方、思い
出したように
大名屋敷、旗
本屋敷、豪商
を荒らして、
いまだに正体
の知れぬ怪盗
である。

——ふん、馬場頼母め、とんでもねえ女を
飼つてやがる。はあて、待てよ……

このやつは、急に、闇の大道の真中に立
止つて首をひねり始めた。

翌る日。四ツ半頃。

弁天の紅吉は、まだ寢床の中でひっくり返
つていた。親分なしの子分なし、十手一つを
相棒に八丁堀の裏長屋の一角で蛆をわかせて
いる。

表の戸が開いて、若い女の綺麗な声がし
た。

「まあ、まだ寝てるの。暢気な目明し」

入つて来たのは、眼の覚めるような娘だ。
八丁堀で顔を利かせている古顔の岡つ引、
人呼んで鬼伝の娘、お蘭である。鉄火なやつ
だ。

「仕様のない人。これだから、ちよいちよい
来て、掃除をしてやらなくちや」

持つて来たどんぶりに入っているのは、こ
のやつのお物の煮物だろう。

むつくり起き直つて、紅吉は、お蘭の胸か
ら眼を放さない。

「イヤだ。何見てんの」

応へない。

「ヘンねえ」

いきなり、ぐいと抱き寄せられた。

「ぶつてあげるから」

しかし、このやつの手は、袂のひらきから胸の中に入つて、お蘭の乳房に触れていた。

「ほほう!」

「何さ、噛みついてあげるから」

「大きい」

「まア」

「見たいな」

「え!?——イヤだあたし。いくらあんたが好きでも……そんな——フフフ。あの、一寸だけよっ」

お蘭は紅吉の鼻の先で、胸を払ってみせた。

「銭湯へ行くかい?」

「お父つあんに無理言つて、内風呂。だつてこんなン恥かしいもん」

お蘭はおとりになると思った。

とにかく、美しく且乳房豊満な女を狙っている奴があるのだ。

お蘭は銭湯へ行き始めた。

唐人服と乳房踊り

「——はて? 何処へやりやがつた?」



天井裏で、首をひねった奴がある。

文珠小僧だ。目当はお仙だつたらしい。

「仕方がねえ。お宝でも頂戴して行くか」

押入れへ降りて、影の様に動き、寝所の棚にある金箱に手を触れる。その途端、

「賊っ!」

瀬戸陣十郎は撥ね起きた。

「おつと危ねえ、文珠の智慧」

飛び退いて一気に庭まで出ている。その逃げ足を追つて、呼笛の響きが夜空を衝いた。

手くばりがしてあつた訳ではないから、応える呼笛の響きはない。

陣十郎は縁側に突つ立つて、眼を細くしている。考える顔である。

「——あの声。ふうーむ」

急に、この夜中に、着替えを始めた。

屋敷を

出る。朧月夜だ。

途中か

ら舟になつた。隅田を下るのだらう。

舟といえは、河口近く、大きなやつが舫っている。三日石くらいはある。

舟底の部屋。

唐人服の男が、椅子に腰をおろし、眼の前の女を見ている。

女は湯文字一枚の半裸で、爪先立ちに、舟具の端から吊られていた。

唐人服は、鯰髭を抜いて「これはいける」と呟いた。満足の表情である。

女は、がつくり首を垂れているが、豊満な乳房の上に、男女のあの姿態を刺青していた。

「虎つ、ちとあの乳をゆすらせて見い」

傍に立つていた弁髪の方が、鞭を持つて立つた。

「阿呆、傷がつくわい」

「は!」

「頭を使え、頭を——」

「は!」

やつと気が付いて、弁髪の方で、爪先立ちにされている女の足の裏や腋の下を擦つた。

うろうう、擦たさが、手首の痛さを越えて女は、のけ反り、よじり、腰

をひねり、やがては、ゆつさゆつさ——ヒイッという悲鳴と一緒に、千変万化の肉体の律動を示し始める。

すると、豊満な乳房がゆれ、乳肌の上の玄妙な刺青が、あたかも生あるものの如く躍動する。

妙に甘美な、しかし、怖ろしい地獄絵である。

苦痛にたえず、血のような呼吸をして女の全身は、発汗し、雪の肌が、薄桃色に濡れてくる。

唐人服の眼がギラギラ光り始めた。

「虎つ、女を次の間に入れろ」

次の間は、唐風の寝台のある部屋だった。

「おお、奥さん」

女の縄を解いていると、影のように誰か近付いて来た。

お高祖頭巾の女だった。

「陳さん、どうやらヤバくなつて来た模様。

それで、とりあえず、無傷のままのを二人連れて来ましたのさ。細工は長崎で——」

「しかし、墨入れる人要ります」



は、ちやつてあります」

刺青師重七

「そうかつ。想い出した。あいつ」

闇夜の道を、弁天の紅吉は、闇雲に急ぎ始めた。今日の夕方、銭湯へ行つた切り、お蘭の消息が消えている。一寸した油断だった。

鬼伝が調べた処では、この二ヶ月あまりのうちに、江戸から六人の美女が消えていた。

そして、噂に依ると、みんな乳娘の蔭口を持つていた女たちばかりだ。

「それ

やんと迎えが

しばらくして、このやつは、一軒の小粋な家の前に立つていた。「しめた、野郎いやあがる」が、表で駕籠の止る気配。紅吉はもう、いつの間にか、床下から押入れの中へ現れていたのである。

ドンドン表戸を叩いて、

「重七、起きろ、急用だぞ」

「……」

「重七、頼母ぢや、重七」

蒲団の中の男は撥ね起きた。あの男だった。

瀬戸屋敷の門前で、ばつたり視線が合つて逃げるように去つた男。

——こいつ、刺青師の重七、きわどい処で想い出したもんだ。伝馬町の牢で見た顔だった。確か、色好みの隠居に頼まれ、小間使の小娘の肌に、とんでもない刺青を彫つて、それがバレて、ゆすりの兇状もあり、五年のお仕置になつた奴、それが半歳の勤めで出やあがつた。瀬戸のやつが図つた細工だ。

べつべつ、汚ねえ人間共め！

深夜の大江戸を、二丁の駕籠が走っている。前の駕籠に馬場頼母。後の駕籠に刺青師

の重七。そして、駕籠脇に屈強の侍たちが附いていた。

駕籠から舟へ移る。

舟は大川を下って行つた。

舌揃え六人女

湯文字一枚切りの女が五人。一室に閉じ込められている。みんな、その胸の巨大な、しかし形の良い乳房を両手で隠そうとして、隠しきれないでいる。

この部屋は、天井が低く、その上、時々大きく揺れた。

突然板戸が開いて、裸の女が二人、蹴転がされて来た。

お蘭とお仙の二人であつた。

「重七が参つたら、我々は約束の物を頂戴して直ぐ引揚げる。おぬしは直ぐ船を出したらよからう。女共さえ消して仕舞えば、紅吉の文珠め、いくら幽嚙みをして追つかんわえ」

戸口で与力の陣十郎である。

「ほほ、泥棒と目明しの兼業なんて、洒落れた男ぢやないの。それに好い男だし」

お高祖頭巾である。湯殿の、あの女だ。

「おい、お仙。散々強情を張つて、入墨をさ

せな
かつたが、
もう勘念しな。
どうせ手前達あ、異人の物持共の玩具に売られて行くんだ。乳に入墨がねえと、安つぽくあつかわれるぜ」
「本当にさ、今に重七が来て、腕を揮つてくれるからねつ。そつちの、岡つ引の娘もだよ」

お蘭は信じていた。

紅さんは吃度来てくれる。神出鬼没の文珠小僧なんだもの。

「あつ！ 舌を嚙みやがつた」

お仙だつた。

「へ、へん、異人のお

もちやになんぞ、な、な

つて堪るか。死、死んでやらア……」



一寸混乱が起つた。

「やい、うぬら」

女たちは、無理矢理舌を引き出され、竹の挟みで挟まれてしまった。

それは、何とも奇異な眺めだつた。

ずらり、六人の舌が竝んでいる。

「後手に縛つてしまえ。足と足を珠数つなぎにしろ。腰の物も剥ぎとれ。この女は、見せしめに、乳を剥つて、上から吊り下げる」

唐人服は矢つぎばやに命令した。

この時、船へ馬場頼母の一行が到着した。

「おお——」

一同はぞろぞろ船室を出て行つた。

あとには、舌を噛み切れず、口から血を流して苦しみのたうつお仙と、今は、お互い、羞しい胸を隠すすべもなく、舌を出して、涙も涸れた、白い裸形の女たちばかり——しかし、暫くすると、この部屋に、ふつと影のようなものが現れた。

扉が音もなく開いたのである。

「——紅さん！」とはいえず、「ふがふがふが——」

「しいつ、静かに。奴等あ今取引の最中だ。

お前さん達一人が二千両だよ」

ちろりと眺め廻して、

「ふふふ、とんだ眼の保養だ。お蘭ちゃん、その恰好つたらねえぜ。ふふふ——女の舌つてもなあ、案外長げえもんだなあ」

「ふがふがふが」

——何云つてんの、早く救けてえ。

「さてさて、奴等あ、取引が済んだら一杯始めるだろう。酒の壺は、ちやんと見ておいた。気持よく眠れるやつを、ちよつと仕込んでおいてやろう。それが済むまで、一生分のあかんべいをやつていな」

「ふがふがふが」

——何云つてんの。食いついてあげるから。

星が流れた。

金波銀波をわけて進む舟。

裸の上に、長襦袢だけを纏つた女が七人乗っている。その一人は、もう虫の息だつたけれど……

「れいの五人頭巾は、お前さん方だつたんだね。そうか、頼母の手下を味方にして、逃げようとした雪路つて娘を、あんな惨い姿にして、変な考えを起すとこれだぞつ——と、お前さん方に見せつけたつて寸法か。何？ 頭巾の下では、舌を今のようににされていたというのか。俺も、お前さん方の眼が普通ぢやない妙だ、と始めつから氣附いてはいたよ。馬場頼母という旗本は、ひと頃長崎奉行代官を勤めたというが、何しろどうも、飛んでもねえ悪党だつたなあ。自分の妾にまで、あんな入墨をさせてやがる。陳という奴は、抜荷の親玉らしい。多分長崎で知り合つた仲だろう。瀬戸陣十郎も、そーいやあ、長崎同心から江戸へ移つた奴だ。刺青師まで手なづけてへつ、役者が揃い過ぎてやがる」

河口が明るかつた。三百石船が燃えているのである。紅吉は女達を見て云つた。

「文珠小僧の話あ、忘れなよ」 (おわり)

愛 読 者 通 信

私はふとした機会に貴誌を知り早や三カ月となります。その間随分悩みました。同性を求めて孤独な生活が続けて来ました。僕は美青年でもなく、性質もおとなしい方では有りません。粗野で未熟な考えや、乱雑な質です僕は唯、一人でも良い、私を愛し、抱擁して下さる方が欲しいのです。私は余り大きくなく五尺三寸程度です。同棲出来るならば、私は総べてを捨てて入ります。私はどんな方でも、選り好みは致しません。(大分F生)

連載アブノ—
マル官能小説

蟲妖の虹

(第三回)

全身で抵抗する彼女の両手を、腕力で理不尽に抑えつけ、彼女の体に加えられる暴逆な悪魔の蹂躪に力を貸しながら彼は恐らく快美な蕩酔の中へ、落ちこんでいた——

悪夢の一夜

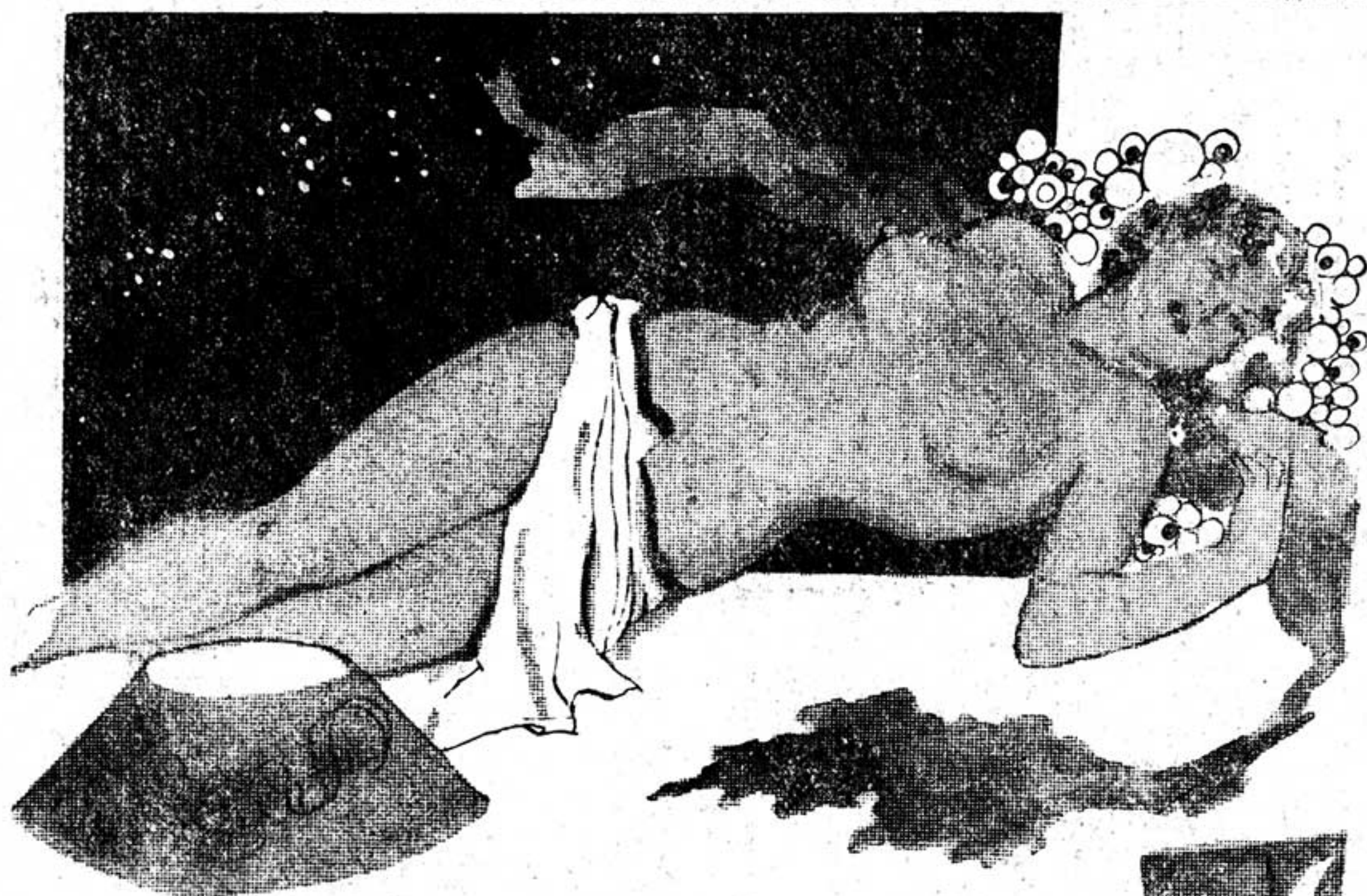
何か熱っぽい強靱な力で、首をしめられるような苦しさと、頤から口から頬の辺をかぶせたモヤモヤしたムズ痒い刺戟とで、多治見雅彦はふつと眼をさました。

汗ばつたい息苦しい悪夢からのがれようと両手を突つ張り、身をノケぞらせかけて、思わず臉を開けたら、最初に眼の中へ飛込んで来たのは、ひとつ寝床にからだをくつつけて並んで寝ていた美彌子夫人の寝顔だった。ソレが脚をからめ、お腹をくつつけ、今しがたまで、雅彦の西洋寝間着の襟のはだけた胸元へ、鼻を強くおしつけて、顔を埋めて、しなやかな、裸の腕を両がわから雅彦の首へ廻して抱きすがつて、まるで、ママのおっぱいに吸いついたまま無心に睡っている赤



龍膽寺雄

益田修二画



ちやんの
ように、雅
彦の胸元へ
熱っぽく息を
こもらせて熟

睡していたのが、その熟睡のまま理不尽にグイとつき離され、からだから引き剥がされて、——けれど、それも識らずに睡っている、という恰好だった。

鼻のあたりをムズムズと刺戟したのは彼女の髪で、今にも首でもしめ殺されそうに錯覚したのは両がわから首すじの後ろへ廻して抱きすがつていた彼女の、しなやかな裸の腕だった。——

「そうか、あのまま寝たのか。」

夢のような記憶が、雅彦の頭によみがえって来た。

千一夜物語の中のアラツジンのランプを読むと、不思議なランプの精の話が出て来る。どこかの穴倉から掘出した古ボケた錫のランプをこすると突然、奇怪なランプの精が現れて、その持ち主の運命を支配して、全く思いがけない新しい世界へ引きずり込んで行く。けれどそれは、決してただの幻想的な物語ではなく、現実の世界でも人間は、どこかからただの一箇所をこすられると、忽焉と現れた不思議な何かの精にその後の運命を支配されて、思いがけない新しい世界に眼をさますというようなことがある。

そのことをふつと多治見雅彦は考えた。

昨夜、この寝床の中で行われたことは、一場の悪夢と消えて、見

るからにさわやかな朝の光が今は入れかわつていたが、新しく運命を支配する奇怪な魔力は、あたかも、古ボケたランプの中にランプの精がひそんでいるように、この寢床の中か、あるいは眼の前に無心に睡っている妻の中から、さもなければ、自分自身の脳髓の中に身をひそめて、いつ何ときでも一とこすりされたら躍り出て、運命に暴逆をつくそうと待ちかまえている。——といった感じだつた。

(赤星は、……彼も寝ているかな。)

多治見雅彦は考えた。

(まさにアイツは、一個の悪魔にちがいないが、けれど、もともとアイツを昨夜この寢床へ呼んだのは、オレの脳髓の中に住んでいる悪魔なんだし、美彌子にしても、たとえば二人の暴力で抑えつけられたとはいえ、結局、悪魔の蹂躪に身をまかせて、あの地獄の底の蕩酔と忘我を経験した以上は、もはや、悪魔の精を胎内に宿したも同然で、いずれその悪魔の胎児が子宮で育つたら、妻の『貞淑』なんかは居場所を奪られて追い出されてしまふにちがいない。——)

けれど、その『貞淑』の面影を昨日のままにとどめて、美彌子夫人は今睡っていた。

長い睫毛の蔭が白い頬に落ちて、そこにいささか蒼ざめた憂愁を

★前号までのあらすじ★

変態好奇家の多治見雅彦は、美彌子という美貌の妻をもちながら、ガラス工芸家の千鳥左右吉と同性愛に打ち込んでいた。ことに、左右吉に設計させて、品川南平台に奇抜な工夫をこらした家を建ててからは、贅沢な浴室に左右吉と昼間から入つて、同性の快楽をたのしむようになり次第に妻に対する陰虐的な傾向を強め、閨房は冷却するばかりであつた。

ある日、雅彦は左右吉とともに人形師五太衛門の製作場を見にいった。左右吉は、五太衛門から、彼の人形を陳列する画廊の、絵ガラスの意匠を頼まれていたのである。行つてみると、その人形は、残らず全裸の女の屍体をモデルにした石の彫刻で、無人の暗い屋内に鳥獸怪像とともに仰向けに寝ているのだつた。

雅彦は異様なショックを受けた。そして変態的な興味に、ますます輪をかけてのだった。

やがて、雅彦はこの五太衛門の家に入入りする赤星二郎という元ダンス教師と知りあつて、度々家に呼ぶようになった。赤星の素性はわからなかつたが、噂によるとフランス人との混血児で、しかもその母は街娼であるといふ。ところが、この赤星が家に来るようになってからは、空聞に虚しく女盛りを憔悴させてゆく美彌子の心は、常になに刺戟をうけるのだつた。それを察した雅彦は、桃の節句も近い或る夜、赤星を妻との寢室に泊め、好虐的な彼に、わざと妻を虐める機会をつくつてやつて、自分は妻の肉体が焰を吹き上げるその瞬間をみようとしたのである。やがて、赤星の荒々しい息づきは、美彌子の体に迫つた。

宿していた。

額が蠟のようにすき透つて、美しい鼻すじの両がわに蒼い艶が走り、彫刻的にキュツと締つてくぼんだ暗い眼元に、乾いた小皺がたまつて、疲労と憎痒がよどんでいた。それでいて唇は、薄皮の中にただれたように、紅く血色を燃やし、今しがた接吻をし終えたばかりのようにやわらかく大きく腫れて、爛熟した女の情熱がウズいているのをものがたつていた。

髪の中に埋れている華奢な頸すじにも、雅彦の首から引き剝がされたまま陶器のように、白く冷えている裸の腕にも、静脈が蒼く透

いて、どこかでピクンピクンとゆるく静かに脈うち、その辺のわびしい皮膚の乾きは、昨夜一と晩、淫蕩の限りを尽した暴逆な肉体酷使の疲労をあさましく描いていた。

雅彦の心に、今、歪んだ憎悪の感情が、頭をもたげて、その存在を主張しかけるのを、彼は意識した。

貞淑を失った妻に対する夫の気持が、そこにあつた。

昨夜、この寢床の中で美彌子が、本能的なあらゆる羞恥、貞淑な妻が貞淑を失う瞬間のあらゆる心の混乱と困惑、あらゆる煩悶、あらゆる恐怖、あらゆる哀願をこめて全身で抵抗するのを、雅彦は寢台の頭の方へ廻つて、そつちから、彼女の両手を腕力で理不尽に抑えつけ、彼女のからだに加えられる暴逆な悪魔の蹂躪に力を貸しながら、それにもかかわらず、いつの間にか彼女のからだに、貞淑な妻である彼女の意志を裏切つて、一個の奇怪な生きものとして肉体的な反応を示し、生れてはじめて経験する恐ろしい快美な蕩酔の中へ、われを失つておち込んでゆく、——それを、冷酷無慚な眼で見据え、悪魔の嘲笑をそれにそそいでいる時に、鋭くどこかを切り刻むような心の痛みを、彼は意識したのだつたが、——今、それが正体を現して来たという感じだつた。

とにかく、美彌子夫人は今、妻であつて妻でなかつた。

素肌にとつた紅模様のなまめかしい西洋寝間着を通して、彼女のからだから蒸れ立つ体臭には、いつものあの身だしなみのいい化粧料の水仙の匂いのほかに、不貞を行つたあとの、異質の蛋白を吸収した怪しい生理の臭いが、汗ばんだ不潔な臭いといつしよになつて立ちこめて、その中に彼女の体温が包まれていた。

それがまた憎悪のタネだつた。

「魔女め！」

吐で雅彦は舌打ちするのだつた。

「虫も殺さない顔をして、貞淑の仮面をかぶつた魔女め！ 今にその仮面を引つ剝がして、淫蕩な血がウズいている魔女の正体を曝露してやるから、見ているがいい。……」

しどけなく西洋寝間着の前のはだけた間から手を入れて、彼女のわき腹の汗つぼくあたたかいゴムのような皮膚を、指先に憎悪の力をこめてギュウと抓つたら、彼女は襲われたようにピクリと胸をくねらせて、ちよつと骨盤を仰向けると、ふつツと眼をさました。

長い美しい睫毛の蔭に、黒く大きくすぎ透つた童女のような瞳が、夜があけたように覗いたが、そのまままた恍惚と夢見るような表情になつたかと思うと、わき腹のところに動いている雅彦の指のくすぐつたい触感で、もう一度ハツと意識をさました。

すぐ眼の前に、真近くジツと自分を見据えている雅彦の意地わるい眼の表情の顔を認めると、不意に、あらゆる嬌羞と、媚態をこめた艶めかしい笑いといつしよに、全身の力で雅彦にシガみつき彼のはだけた胸に顔を埋めて、鼻すじの軟骨のコリコリするのが感じられるほど、激しく顔をこすりつけて、噛むように鋭く痛くそこへ唇を吸いつけた。

「イヤよ、イヤよ、あなたの意地わる！」

彼女のいおうとしていることは、すぐに雅彦の心に来た。

雅彦はしかし、冷淡に相手の腕にからだを揺すぶられながら、それに応えるかわりに、彼の感情をグイと冷酷に噛み殺して、憎悪を抑えて、彼女の耳に口を寄せてささやいた。

「イヤじやないだろう。なかなかよかつたじやないか。……どう

だ、赤星は気に入ったかい？」

いいながらグイともう一度、お腹の辺の湿っぽい柔らかい肉を、爪形がつくほど激しく指で抓ると、彼女はアツといつて喘いで、火へくべた毛虫のように全身をくねらせて、——いきなり、齒形を立て、雅彦の胸元の堅い肉の隆起へ噛みついた。

雅彦が千鳥左右吉と男色に耽溺して、妻に対する陰萎的傾向が強くなつて来るにつれて、もはや久しく無味索漠としていた夫婦の間で美彌子夫人が夫にこんな嬌態を示すなどというのはまったく珍らしいことだつた。

確かに彼女の心にともつた一点の火が、妖しい焰を立てて燃えはじめている証拠だつた。

美女をつくる魔術

藤棚の下へ張り出した鉄平石の涼台の上へ、籐のテーブルや肘付椅子を出して、そこで多治見雅彦と赤星二郎は、美彌子夫人のお給仕で、朝ひる兼帯の食事をしていた。

藤棚といつても、冬に荒れた名残りがそのままになつて見える影もないたたずまいで、乾いて皺寄つた樹皮が白くささくれて、春の陽ざしを明るくすべらせている。——満目枯れ色の芝生から、わずかに一二寸かげろうが燃えているのが、せいぜい春の風情だつた。

「こないだ千鳥君に案内されて、五太衛門

老人の人形工房を見せて貰つたんだけれど

ネ」

食事なかばにタバコに火をつけて、雅

彦がいつた。

「アレを見て私はふッと、ずうつと昔見た『肉の蠟人形』という猟奇映画を思い出したネ。あの何とかいう奇怪な蠟人形師がやるぐらいのことは、五太衛門老人もやりかねないという気がしたけれどネ。」

「『肉の蠟人形』というのは、この頃も、天然色の立体映画で来ていましたヨ。」

赤星二郎がいつた。

「ごく俗悪で、つじつまの合わない非科学的な映画ですけれどネ……じや、多治見さんは五太衛門さんの、あの屍体人形陳列の画廊を御覧になつたんですか。」

赤星二郎は真紅に近い明るい臘脂色のスエーターに、鮮緑のネクタイを覗かせ、わずかに灰色がかつた同じグリーンズのズボンをはいていた。裸になると、ボクシングの選手のように隆々とした筋肉なのに、ちよつと見ると優さ男型にスラッとしているのは、胴が短かく細く強靱に締つて、脚が長く、軽々としたお尻の線が女のソレのようになだらかに流れているからだつた。

きつかりと櫛目立てて分けた薄色の髪の下で細おもての刻みの深い美しい顔が、燻製の肉のように黒くいぶしがかかっている。たしかに日仏混血の母親から血をひいているという通り

純粹なこちらの顔じやない。ただそれが全

体として、妙に冷たい陰惨な蔭をひいて

爬虫類が持つ妖しい感觸のような

ものを、雰囲気として身につけ

ているのは、たぶん彼が自分



でも精神病だといっている異状な
変態性の、いわば精神的な皮膚
の感触なのだろう。

その異常な変態性を、雅彦は
昨夜、確かにこの眼で見たの
だ！

「屍体人形を陳列した画廊？」

雅彦は、精神病院の陰惨なコ
ンクリートの窓でも見たら、
ゾッとするにちがいない赤星二郎
の顔をチラと見て、それと美彌子
夫人のいかにも貞淑な家庭婦人らし
いおつとりと優雅な姿を心で見くら
べて、この二人の間に結ばれた最早と

りかえしのつかない関係に、悔恨と不安

とそれにまた叛逆する残忍な嗜虐的な好奇
心を燃やしながら、けれど、そういう気持は
押しかくして、さりげなく反問するのだった。

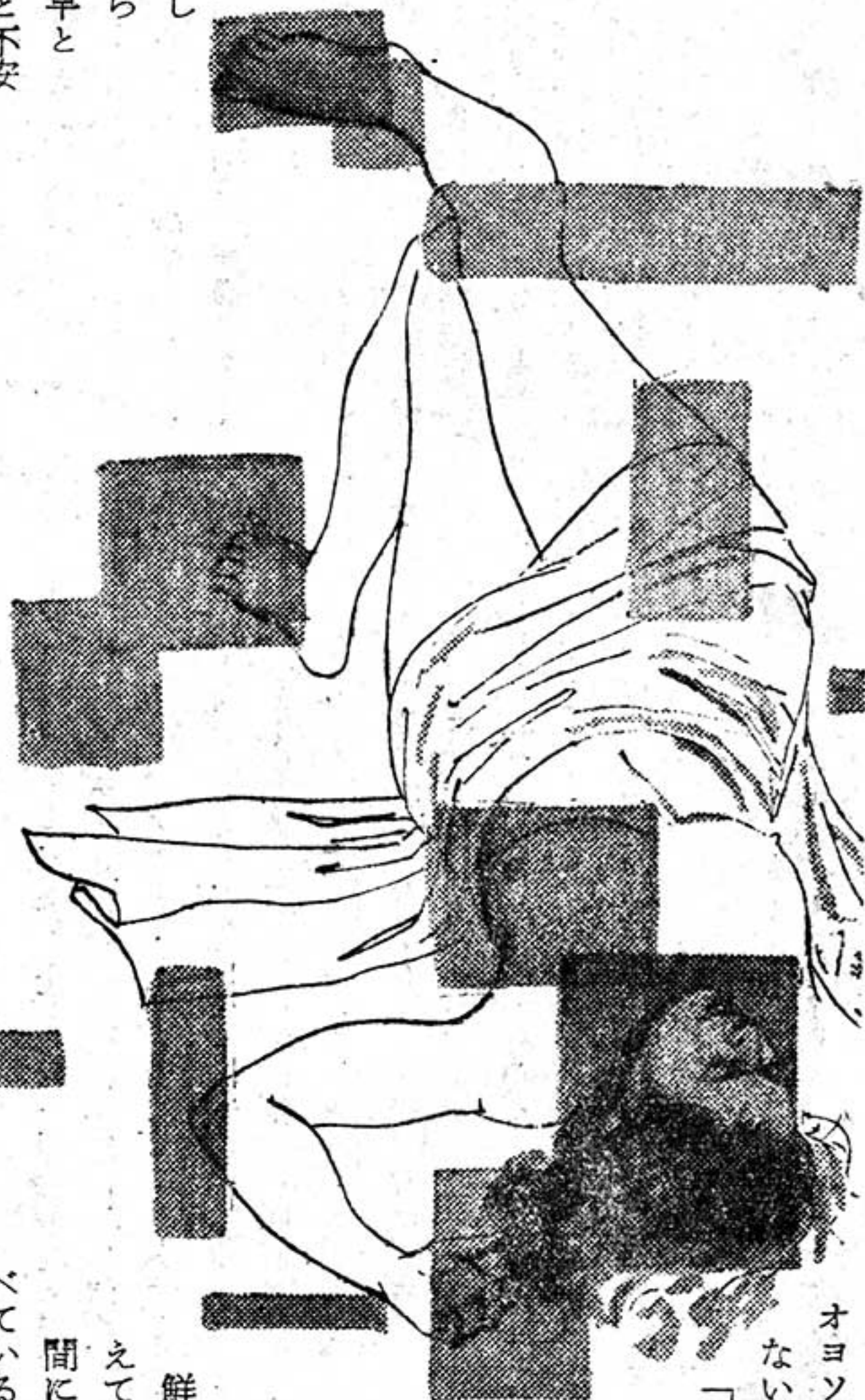
「もの凄く美しい女の子の、屍体の人形は見せてもらつ

たけれど、……その、屍体人形を陳列した画廊というのは、やは
り、上大崎のあの五太衛門老人の邸の中にあるのかね。」

「そうです。」

蛇のような執拗な眼で、ジッと美彌子夫人のからだを見ながら、
赤星二郎はほとんどうわの空のような口振りであった。

「ああ、それア一つ、是非多治見さん一度御覧になるといいです



オヨソこの世に、まず類の
ないみものですから。」

「という、……どん

なんだネ？」

「どんなのッて、何
といいますかネ」

赤星二郎は、霜

降りの白い脂肪の
層を淡い燻し色の
肉の間にちりばめ
た燻肉のきれに、

鮮緑なパセリの葉を添

えて、それを白いパンの

間に挟んでつましく喰

べている美彌子夫人の『白魚

のような』という形容が一番び

つたりしている繊いしなやかな指

と、その先に薄く桜色にナイロンのよ

うに光っている爪を、貪婪な食慾に似た眼つき

で見つめながら、いった。

「こういう話を僕はきいたんですけど、……昔、何でも強力犯の
刑事を長らく勤めた人がいたんだそうですヨ。その刑事が長年の間
関係して手掛けた犯罪事件の中ですネ、オヨソこれ以上ないとい
う惨忍な事件だけを選んで撮した現場写真をですネ、まア、蒐集し
たんですネ。こういう事件に長らく関係していると、精神状態も、

自然と、普通ではなくなるんですネ、職業がもたらす一種の犠牲、とでもいいますかネ。僕は自分が精神病で、ひと一倍それに苦悩した経験を過去にもつているもんですから、そういう職業の犠牲というか、そういうった精神の異常に、痛切に同情するんですけど、……とにかくその刑事は、仕事を終えて夕方家へ帰つて、細君のお酌でいっぱいやるのにも、精神の刺激が足りないんですネ、だもんだから、まず一杯やる前に必ず、その蒐集したものの凄惨な、……普通の神経の人なら、その一葉を見ただけでも、当分睡れなくなるよなムゴたらしい殺人現場の写真をですネ、こうアグラをかいいた前にはひろげて、二三枚見て、そして何となく自分の気持の中に落ちついたような気分になつて、貧しいいっぱいの酒を楽しんで蕩然となる、……そういう心境に落ち込んでいたというんですネ。」

「ウン、面白い話ネ。」

タバコの煙の中で眼を細めて、雅彦がいつた。

「ちよつとわかるナ、その心境が。……」

「それでどうしましたの？」

美彌子夫人が、ちよつと眩しい美しい瞳をして、赤星二郎を見てきくと、赤星二郎は、紅い血管のはびこつた眼でグイと彼女の顔を見据えていつた。

「その刑事が職をやめてしばらくたつてから、死ぬ前に、その肌身離さず持つていた蒐集の写真を、病気の治療代にするために、手放したんですネ。……ソレを、人形師のあの五太衛門老人が持つていているというんです。」

「なるほどネ。」

「ソコで、その屍体人形陳列の画廊のことですけど、……千鳥左

右吉さんが、その画廊の絵硝子の意匠を引受けられたそうですから画廊のことはおききでしょう。」

「きいた。……」

雅彦は美彌子夫人の顔をチラと見てから、

「女の性器の解剖図を図案にしろというヤツだネ。」

「そうです。」

赤星二郎はうなずいて、

「画廊は、建築の外廊しかまだ出来ていませんけれど、陳列品はもう置いてあるんです。その陳列品の屍体人形が、……何と今の、亡つた強力犯の刑事が蒐集したという、れいのもの凄惨な現場写真から、題材をとつたりそれをモデルにしたりのばかりで、とにかく、どれ一つとして普通の神経の人が、まともに見られるようなものはないんです。ケサがけに、首から胸へかけてザツクリ斬られた老婆が、髪振り乱して、虚空をつかんで、血みどろにノメつているのがあるかと思うと、裸で樹にくぐられて強姦された女が、首をしめられて、顔を紫色に腫らしたままノケぞつている。……まず、類のないものですヨ。」

「私が見たのは、しかし」

と、雅彦がいつた。

「これはまた、……犯罪なんかとは縁がない、まるで生きているそのままの、オヨソ世にも美しい、可憐な、可愛い女の子の裸像だつたけれどネ。すると、あれだけが特別だつたのかナ。」

「そうじゃないんです。」

赤星二郎は、舌ナメずりするような口振でいつた。

「はじめ、そういうちゃんとした、……五体揃つて無傷な人形を

つくるらしいんです。そしてそれが出来ると、それを加工して、惨殺屍体にするんだというんですけれどネ。まア、これは噂ですから、そのまま信用も出来ませんけれど。……そういう噂をする人の説によると、五太衛門老人は、生きた人間にソレをやれば、当然犯罪になる行為を、自分のつくった人形に対して行つて、それで変態的な嗜虐趣味を満足させているんだというんです。」

「話としては面白いけれど……どうかネ、それは。あの彫刻の仕事は技術的に考えてみて、ちよつと受取れないナ。」

「しかし、最初は粘土ですからネ。」

「そうだな。」

「それよりも、ですネ。」

と、赤星二郎がいった。

「僕にいわせると、ここところがヘンなんです。……多治見さんは、五太衛門老人が今つくつて『晩子像』という、あの女の子の像を御覧になつたと思うんですけれど、……あの『晩子像』のモデルの女の子というのを、御存知ですか。」

「イヤ、それはしらん。……モデルがいるということだけは、五太衛門からきいたけれどネ。」

「そのモデルの女の子というのが、多治見さん大変なんですヨ。」

「……？」

「この話も僕は、ひとからきいたんですけれど、」

赤星二郎はどこか急に熱をもつた顔で、ヘンな風に籐椅子の上で、モジモジ腰を動かしながらいった。

「こういう話は、多治見さんも御存知かと思ひますがけれど、……何でも、昔からシナでは、ある特別な技術で、美女をつくりあげる

方法があるというんですネ。ソレは、太原かどこか、ああいう奥地で、昔から人身売買がよく行われた土地で、非常なヤカマしい条件で、美貌の少女を買い集めて来るんだというんです。両親の遺伝とか、きょうだいとか、そういう点からもよく調べて、一点非の打ちどころのないツブ選りの美貌の少女……というより、幼女でしよるネ、六つとか七つとかいった小さな女の子を、買い集めて来るんだというんです。それを、陽のささない、薄暗い小さな部屋の寝台に寝かしてですね、まず、全身に、足の爪先から腿から腹から胸から胸、両手から指先、首、顔に至るまで、白木綿の繻帯を隙間なしにまいて、全身の皮膚を、空気に触れさせないように保護するんだそうです。こうしておいて、寝床へ寝かせて、めつたに運動もさせず、その上、喰べものといつたら、菜つ葉だとか、薄いスープだとか、いたつて栄養のない、ひどい粗食をさせて、纖々と栄養不良に育てるんだというんです。……今のその繻帯は、からだが育つにつれて、少しずつ捲きかえて緩めて行つてですネ、それで、首とか手足とか胴とか腰とかの、形の調節をとるワケでしょうネ。ほんとうに、衣にもたえないというような、ナヨナヨと華奢な、……骨の纖い、柳のようにしなやかな、からだも手脚も自由自在にクネクネと柔らかく折り曲げられるようなくあい育てあげるといふんです。皮膚がまた、小さい時から繻帯に包まれて、光りも受けず風にもさらされなかつたので、まるで生れたての赤ん坊のように世にもこまやかなキメをして、弱々しく柔らかでなめらかで、ちよつとキッスをして血がにじみそうなほどだ。……まア、大体、こういう育てかたをするんですネ。」

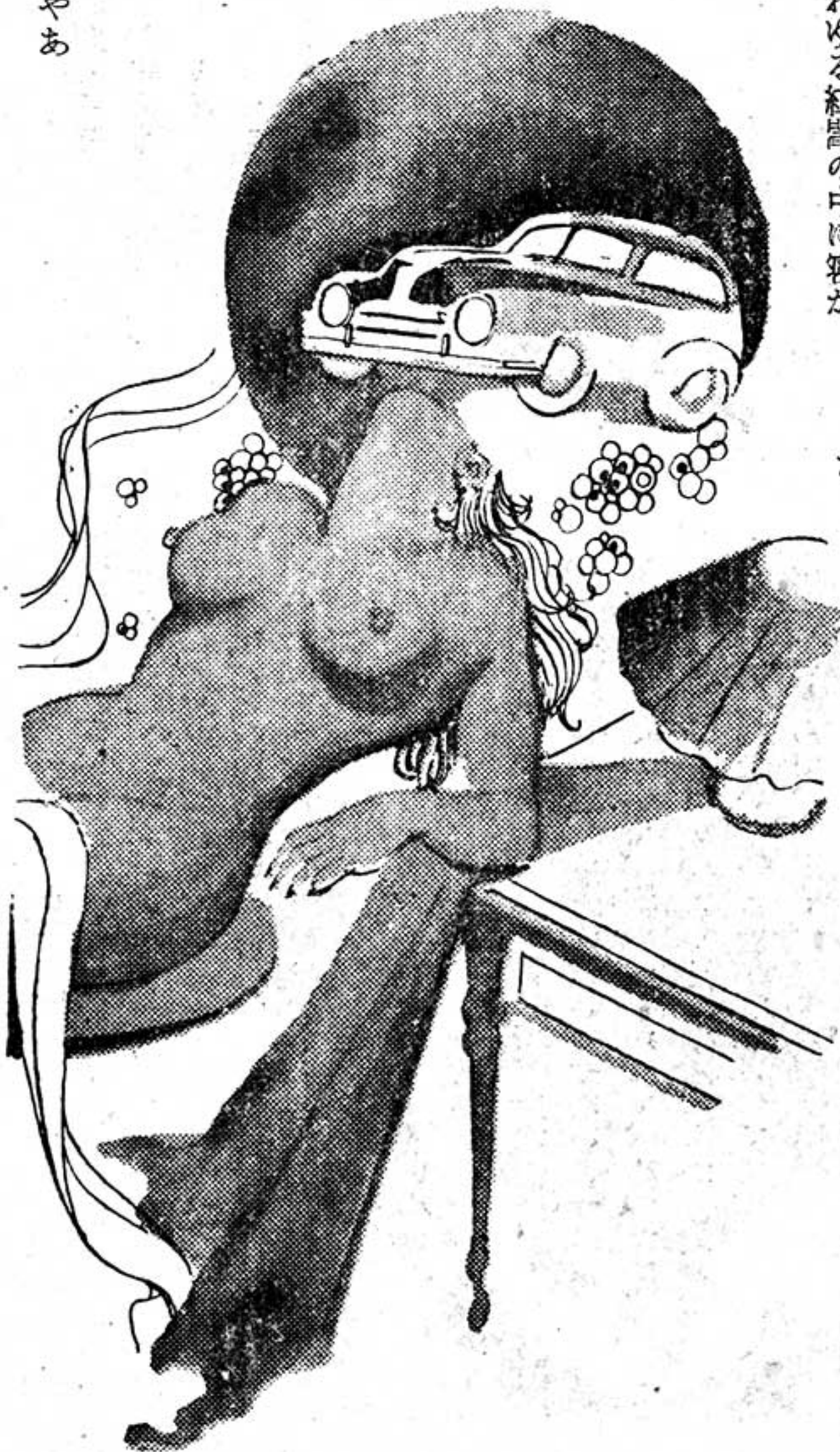
ふいに、疲れたようなタメ息をついて、美彌子夫人がいった。

「そんなにして、でも、病氣にならないのかしら。」
 「むろん、」
 ギロリとした眼をむいて美しい美彌子夫人を見て、赤星二郎はいった。

「十人のうち九人までは、年頃になるまでに死ぬんだそうですヨ。たいていは、栄養不良で痩せ細つて、今でいえば肺病でしょうネ。……そんなワケで、生き残つて育つのは、十人に一人というんですから、非常に珍重されるんですネ。とにかく、そうやつて育てて、十五六になつたところで、はじめて全身の肌を包んで捲いていた縷帯を解いて清潔にからだを洗つて入念なお化粧をほどこしてですネ、もの凄く美しい衣裳をつけさせて、いわゆる紅閨の中に寝かせて置く、……と、これが、今の美人製造法なんです。」

「五太衛門老人の、その『暁子像』とかいうあの美しい人形のモデルも、そうやつてつくつた女の子だというのかネ。」

「さア、それはどうかしりませんけれど、……とにかく、あの不思議なモデルの女の子は、ひとりでに生れてひとりで育つて出来た普通の女の子じゃありませんネ。何しろ、あの美しさも、ただごとじゃありませんけれど、……性格も、趣味も、教養も、ぜんぜんそこらにいるあたりまえの娘じゃあ



りませんヨ。いつてみれば、五太衛門老人がああ素晴らしい人形をつくるように、誰か天才的な芸術家が、独創的な、卓抜な着想で計画して、その計画通り、ぜんぜん人工的に、一人の美しい女の子をつくり上げた、……とでもいえばいいえ、不思議な娘です。」

「素性はいつたいどういうんだネ。」

「葛さんというのを御存知ですか。」

「葛、……葛という、もとの子爵の葛さんかネ。」

「そうです。」

「あ、そうか。」

ふいに、何か思いあたつたことがあるように、多治見雅彦はいつた。

「そういえば、昔、人形師五太衛門が彫刻家三宅雪峰だった時分、彼の有力な保護者で、有名な大美術蒐集家だったナ、薦は。戦争前にすでにすつかり零落して、礼遇停止をくつて、夫人は、宇治かどこかのお寺へ、尼さんになつてはいつたというような噂をきいた覚えがあるけれど、……」

「その薦さんです。」

赤星二郎はいった。

「今では、反対に、五太衛門老人の保護を受けて、薦の一家は生活しているらしいんですけれど、『暁子像』のモデルのその女の子は、尼さんになつた薦夫人の娘ですよ。」

「なるほどネ。本人を君はしつてゐるの？」

「しつてゐる、といえるかどうか、見たことも、話したこともありませんけれどネ。」

「そんなに變つてゐるのかネ。」

「もつとも、」

と、不意に話をかえるようにして、赤星二郎はいった。

「五太衛門老人が變つてゐるんですから、その保護を受けているあの女の子がいくら變つていても、別に不思議はありませんけれどネ。とにかく、もの凄く可愛いがつてゐるんです。」

「ふむ。」

「例えば、……五太衛門老人は、その女の子に、絶対に便所でおしっこをさせないんです。」

「……？」



「五

太衛門老

人がみんな、

自分で口をつけて飲んでしまふんだそうです。……」

「まア、……」

何とない羞じらいで顔を美しく緞くしてつぶやく美彌子夫人を、れの蛇のような眼でジイッと見つめてから、赤星二郎は雅彦にいった。

「どうです。マゾヒスト好みじゃないでしょう。だから、自分の

つくつた人形を相手にしてマゾヒズムを楽しむなんていう噂を、ちよつと僕は信用しないんです。……とにかく、しかし一度、あの屍体人形陳列の画廊は御覧になる価値がありますネ。」

「イヤ、実は今日、千鳥に誘われて、午後についてしよに五太衛門老人を訪ねることになつてゐるんだけどネ。容易に、しかしわれわれに、見せてくれるかネ。」

魔道

食後、しばらくして、美彌子夫人が風呂にはいるのだといつて、席をはずした時、多治見雅彦は赤星二郎を誘つて、スリッパのまま少し風の出た明るい芝生へ出て、向うの隅の、やはり鉄平石をたたんで囲つた睡蓮の池の縁に、寄り添つて腰掛けて、こんな話をしあつてゐた。

「さつきもちよつと話したけれど、……今日これから、千鳥君を誘つていつしよに五太衛門老人を訪ねる約束なので、私は家を留守にするけれどネ。」

と、雅彦はいつた。

「君は一つその間に、彼女に練習(リッスン)のダンスのことをつけてやつてくれたまえ。寝室でも応接間でもいいけれど、寝室の方だと鍵がかかるからネ。あすこは、テーブルだの椅子だの色んなものを寝台の横へ片付けると、結構広く床(フロア)はとれる。」

「そうですネ。」

赤星二郎はちよつと呼吸を荒らぐした感じで、熱心にいつた。

「寝室がいいですネ。」

「それから、」

と、一段と声をおとして雅彦がいつた。

「昨夜の君の行為は、心理的にも肉体的にも、彼女に相当の効果奏しているからネ、君は自信をもつて、断固やつていいネ。……とにかく、卒直にいつて、君はまア一個の悪魔だけれど、悪魔というものは、元来人生を魔界にすることが、一つの目的である筈だからネ。君の悪魔を容赦なく、彼女の体内にそそいで、彼女の胎内に悪魔を妊娠(みこも)らせることだ。そして、彼女をどこまで君の魔道へ引き入れられるか、腕だめしをしてみることだネ。彼女はまア、今までのところ、妻としては貞淑で、子供は産まなかつたけれど、一種の典型的ないわゆる母性型だけれどネ、しかし、あのままで一生終ることが、果たして人生の真の幸福であるかどうかは、はなはだ疑問でネ。」

「それア。僕もそう思いますけれど、……」

「そうだろう。……しかし、私にいわせると、君もどつちつかずのフラフラで、一体、人生で君がすることの何が、君にとつてほんものなのか、その点が徹底してないと思うネ。通俗的な道德、根柢のないありふれた社会禁忌、世間への見得や外聞、無責任な周囲の人々から、いい子だいい子だと褒められたい実質のない虚栄心、そんなものに制約されて、本来持つてゐる性質、その性質がやりたがつてゐることをだネ、それをやらずにこらえて、人生をムナしく過ごして、最後に死ぬ時に、オレは人生で一体何をしたんだ？ と後悔するぐらい愚劣なことはいないんだけどネ。」

「ええ、僕もそう思うんです。」

「変態も結構だ。色情狂も大いに結構だ。むしろ私にいわせれば、ヘンな抑圧こそ、百害あつて一利なした。精神病院が抑圧療法

で君の変態と色情狂を治療出来なかつたとすれば、今度は徹底的なソレの解放で、新規なやりかたを試みてみるさ。これが、街へ飛び出して、誰彼と相手選ばずに抑圧解放をやられたんでは問題を起こすけれど、ちやんとした家庭の中で、公然と許された相手があるんだからネ。公然と、はマズいか。暗黙にだナ。……」

「ええ。……」

「これは、まア私の『性』に対する哲学だけれどネ、女というのは、生理的に、実に泥沼のような底なしの淫蕩をからだに秘めているものなんだネ。ただ、どこまで深くそれを掘りさげて、その淫蕩の底の底を見きわめるかは、それを掘り出すがわの腕なんだネ。この頃、私は変態的なある『性』^{セックス}の指導書を読んだことがあるんだけど、女を本当に淫蕩に教育するのには、刺戟に対する慣性の原理というのを応用するというんだネ。刺戟の慣性というのは、性感とというのは非常に魅力ある快美な感覚だから、これを出来るだけ持続的に、……のべつ幕なし、しよつちゆうその部分に与えていると、からだのその部分が独立して、その快美な感覚の魅力をすつかり覚えてしまつてだネ。ちやうど、麻薬患者が麻薬なしにはいられないように、アルコール中毒者が、アルコールなしにはいられないように、その快美な性感の刺戟なしには一刻もいられない一種の慢性中毒症を起こすというんだネ。そこへ来てはじめて、本当の淫蕩な人間が出来あがるので、一応、この淫蕩な人間に仕上げて置いてから、さて、徹底的な技術の訓練をするなり、肉体を性的に誇張^{アンダー}するために、ある程度異常なまで器官や筋肉の発達を促す処置をとるんだネ。そこではじめて、人間に附属した『性』ではなくて、『性』に附属した人間という、新しい範疇の人間が出現する、という

ワケだ。君も、どうせ持つて生れた異常性慾を、人生の生き甲斐と結びつけて生きてゆこうというのだつたら、そのくらいのころみはしてみるさ。」

いいながら多治見雅彦は、ジツと耳を傾けてそれをきいている赤星二郎が、だんだんと息ざしけわしく、病的に高まつて来る異様な昂奮の中で、あきらかに精神病らしい一種凄惨な、——ゾツとするような不敵な眸差しになつてゆくのを見て、何かしら心でハッとした。

と、例の蛇のように執拗な、何かを思い詰めた鈍い陰惨な表情の眼で、ジツと雅彦を見て、低いしわがれた声で赤星二郎がいつた。

「夫人の承諾はいらないんですネ。」

「私が承諾していればいいだろう。」

「僕は、自分で自分が怖いので、」

といいかけて、コクリと乾いた唾を呑みこんで、赤星二郎は昂奮した息苦しい声でいつた。

「いつも自分を抑制することに、あらゆる努力を払つて来たんですけれど、今度はそれを解放するのはいいけれど、……ただ、そのあとで責任を負えるかどうか、……」

「色情狂の精神病者が、責任のことをいうなんてオカしい。」

グイと、自分の心に最後のとどめを刺すような気持で、雅彦はいつた。

「君は一個の悪魔であつて、それですべていいのさ。」

(以下次号)

特選犯罪實話

名刑事捕物帳

月島の運転手殺し

浜田四郎

神崎 勲画

☆ 釣好きの男

昭和五年九月、この「月島の運転手殺し事件」といわれているコロシは、殺人事件そのものとしては極めて単純なものだった。今日でこそ、自動車の運転手殺しは珍しくもないけれど、ひとつには自家用車にしろ、タクシーにしろ、今から二十四、五年と、二昔以上も以前のこと故、まだまだ、それほど都大路に氾濫していなかった時代のことだったから、自動車というよりも、自動車事件としての物珍しさと、その惨虐な犯行とで、当時の社会に非常なセンセーションを与えたものである。

九月の末といえば、もう、そろそろ、その都大路の街路樹にも秋風の吹き初めた季節だった……。

月島沖を通りかかった一艘の伝馬船。
「おいッ！」



と、その水の上を指さして、

「あそこに浮いているのは仏様らしいぜ」

これは別に珍しいことでもない。すぐ、小舟を漕ぎ寄せて、死骸を引揚げたが、一見して、コロシということも肯け、そのむごたらしさにぞうッとした。

うしろから一撃を喰らって、即死したものらしく、後頭部が割れて、脳みそが覗いているのだ。オモシでもくくりつけて水に投げ込

まれたものらしい。死骸が、針金で縛りつけてあった。その体は勿論、顔も、肥えた豚のように、水ぶくれがしているのは、死体が水中でその体内にガスを発生し、自然と、浮きあがってくる途中、死体に針金でくくりつけたオモシがはずれ落ちたものに違いなかった。直ちに、水上署に届けられて、警視庁捜査一課の活躍となったのだ。

死後三日経過と推定された。

「三日前といえば、九月二十三日で、あの日は夜になつて暴風雨になつたが……」

「コロシにしても、死体処分にしても、うまい日を選んだものだなあ」

「まず、被害者の身元だ」

が、その身元は捜査するまでもなく、各署に紹介してみると、二十三日の夕刻から、商売に出たっきりで、その商売用の自動車と諸共、行方不明になつている運転手の捜査願が神田署に出ていたので、死体の首実験をさせてみると、これが……その運転手であることがわかった。

神田蠟燭町、渋谷タクシーの運転手、村松勝雄。二十三歳。

「釣好きの男でしたが……」



と、ガレッジの話。

一方、浅草の象潟署に、奇妙な盗難届が出ていた。吾妻橋脇の舟宿。その貸舟屋から、これも二十三日の夕刻、二人連れの男が、夜釣りの舟を借りて行つて、それつきり帰つて来ない。

その舟宿の親父の云うには、

「もつとも、あの日は夜になつてから、暴風雨になつたぐらいで、朝からどんよりと雲が低く、曇つていましたから、今夜は、ひと荒れやつて来るかも知れないとお客さんに注意しましたのですが、そのひと荒れやつて来る前がサカナのクイがいいからな」と云つて……」

勿論、被害者の、生前の写真を見せたが、親父は首を横に振つて、

「いいえ、こんな若い男ではありません。二人とも三十歳恰好の男でした。急に、夜釣りを思ひつたとか云つて、釣道具も餌も、私のところから買つて行きました。なあに、オヤジさん、ひと荒れやつて来る前には戻つて来るといつて出かけたのですが……やつぱり、あの暴風雨で、ここまで戻れなかつたとみえて……どこかの河岸へ舟

はつないでいると思ひますが……」

その舟は、吾妻橋の向う岸につないであるのが見つかったが、細密な検査にも拘らず、あの暴風雨にすつかり洗われたものらしく、それらしい痕跡は何一つ見出せなかつた。

☆ 舗道の一言

捜査本部が、失業運転手と不良運転手のリストに眼をつけたのは、当然のことながら、そこへ一つ、奇妙な報告があつたのだ。

「群馬県の高崎で、シボレーの箱型が一台、取引きがあつたようですが……」

「聞き込みかい？」

「それが実は、奇妙な聞き込みなので……署の、交通巡査が、舗道に立つて交替時間をつていると、そのうしろを通りかかつた二人連れの男が、そんな話をしながら行つたのが、ふと、耳に這入つたのだというのです」

「その二人連れはどんな男だつたか？」

「いや。それが……うしろを振り向いても見なかつたそう。ただ、そのひと言を、ちらっと、小耳にしただけなのです。勿論、その場で忘れてしまいましたが、夜になつて、勤務を終つて帰宅し、町の銭湯へ出かけて、何

気なく夕刊を見ていると、例の、月島の運転手殺しの記事が出ています。箱型シボレーの行方は依然として不明。迷宮入りか。そんな短い記事。それで、ふと、昼間のことを思い出して、銭湯を飛び出したその足で、こんな報告をしてまいりました。こんな他愛のないような聞き込みでも、何かの参考になりはしないかと思ひましたものですから……」

当時、警視庁捜査一課の係長、恒岡恒警部は、「鬼警部」という異名をとり、「名探偵」としてつとに、定評のあつた人物。この道のベテランだつた。

恒岡係長が、直ちに、部下二名の刑事を、高崎に急行せしめたことはいふまでもない。

その日に、この自動車は見つかつたが、この買主が云うには、

「自動車のプロカーから買いました。箱型シボレー。一九二九年型。そういう註文を出しますと、心当りがあるからというので、手付金を渡しました。こちらも急いでいたものですから。ところが、すぐにも届けて来る約束の自動車を、なかなか、持つ

て参りませぬ。矢のような催促。電報も何本か打ちましたが、その返電にある引渡しの日が、また、三日四日と、延び延びになるので、腹を立てて、私が東京に参りますと、二十四日には間違いないというので……」

それがあの兇行のあつたと推定された日の翌日。

「こんどは、間違いなく、その日に自動車を届けて参りましたのです。本人が、自分で運転して……持つて来ました」

「一人で、か？」

「助手だという男を助手台に乗せて参りました」

「その助手の名前は？」

「何ンとも云わなかつたようでした」

が、勿論、その自動車ブローカーの住所と名前はわかつた。当時、まだ市外といった尾久町。朝比奈稀市。

渋谷タクシーにも打電して、その自動車の「首実験」をさせてみると、これこそ、あの被害者を乗せたまま行方不明になつたクルマだとわかつたものだから、俄然、捜査本部は色めき立つた。

「どんな小さな聞き込みでも、犯罪捜査の上に、いかに重要なものであるかは……これでもわかるだろう」

と、恒岡係長が云つた。

勿論、その買主も、高崎から東京の捜査本部に連行されて来ていたが、

「被害者の死体があがつたことも新聞へ出たし、自動車を売つた金も受取つてのことだから、このホシは、多分もうズラかつているだろう」

然らば全国手配という順序。

「いいえ。金は、まだ、全部支払つてありません」

「ほう！」これは耳寄りな話。

直ちに、犯人朝比奈の尾久町の自宅を内偵せしめると、どうやら、まだ、ズラかりもしていない様子。更に、いろいろと内偵してみると、十月四日の朝、九時から十一時の間に或る男と、上野松坂屋の屋上で会う約束になつてゐることがわかつた。この四日というのがその翌日のことだつた。

尾久町（下尾久三三一番地）の犯人の自宅から、上野松坂屋の屋上まで、恒岡係長が自から指揮して、その要所々に、三十余名

の刑事を手配したというから、これはなかなかの大捕物陣だつたのだ。

☆ 恒岡名探偵

恒岡係長をはじめ、その三十余名の刑事を、それぞれ、思い思いに変装させたのであるが、後日、この名探偵が、甚だ興味深い変装苦心譚を語つてゐるのを聞けば、

「世間では、刑事の変装といえば、芝居の役者が舞台でいろいろなものに扮装するようなものだと思つてゐるかも知れないが決して左様なものではない。刑事の変装は、その時期と場所によつては、常態でいても、それがちやんと変装になつてゐることがある。たとえば、停車場に張り込みをするような場合。印絆纏を着たり、腹掛を締めたたりして、とにかく、自分の常態と違つた服装をしたのでは、これはあまり上手な変装とはいえない。なぜかといえば、印絆纏を着て変装して、来た電車を、次から次へやり過して仕舞うと、二つか三つ目には、早くも、あれは何者だろうと、まず、駅員が眼をつける筈だ。それ故、朝早く五時なら五時に、その駅を、犯人が通るのを

待つていようというのなら、今の季節に一番簡単でいい変装は、浴衣がけか何かで、粗末な下駄を履き、釣竿一本持つて、麦藁帽子でもかぶつて立つておればよいのである。これなら誰の眼にも、釣りに行く人が友人を待合しているとしか見えないから、何度、電車をやり過しても少しも疑われない。また、よしんば、印絆纏を着てみたところで、その着方がまずかつたりすると、却つて逆効果のようなもので……」

と、この名探偵は、それでいちど失敗した経験談を、笑いながら語った。

そのときは、腹掛、股引、印絆纏という変装だったのだ。自分でも、相当、念入りに変装したつもりだった。結局、狙った犯人を捕えたことは捕えたのだが、その男があとで、「旦那の変装はなかなか上手だが、ひとつへんなところがありましたよ」

「どこが変だ？」
「腹掛です。その腹掛の下からシャツの襟



がちよつと覗いていた。これがまちがいです。腹掛を着ける人は、冬でも決してシャツの襟は出さない、もし、襟を出すとすれば、鈕の一つ見える別のシャツがあります。ですから、旦那のあのときの変装は、腹掛を着け

たことのない人間か、そうでなければ、俄かルンペンということが私どもにはすぐわかります」

なる程、その後、気をつけて労働者を見ていると、シャツの襟を出している者がな

かつた。

さて……この大捕物陣の朝。早朝五時に上野公園の広場に集合したが、恒岡係長は、ちやうどその時、「東モス」の大争議があつたので、それから思いついて、「東モス」の職工長に変装したのだつた。

探偵小説の本を、二・三冊、新聞紙に包んで、弁当箱のようにして、それをきたない風呂敷に包み、争議に関する新聞を、一枚、ポケットに入れて、四時半頃、上野公園へ出かけて行つた。

そのうち、刑事達が一人、二人と集まつて来て、五時には全部が集合した。

主任は谷口警部。

一同を集めて、その日の要点を授けていく。

その場所から、約二十間ばかり離れたところに、ベンチが一つあつたので、その風呂敷の包みを枕にして、恒岡係長が寝転んでいると、三々伍々、やがて、刑事達は、命ぜられた持ち場のほうへ去つて行く。

と、そのベンチのそばを通りかかつた水上署の刑事と、捜査課の刑事と、二人組んだのが、寝転んでいる恒岡係長のうしろか

ら、

「この野郎！ おかしな奴だなあ。今頃、こんなところへ寝ていやがる。一つ、バンかけてみようか」

と、刑事の一人が云つた。「バンかける」というのは、いわゆる、不審質問のことである。

「よせ、よせッ。くたびれて寝ているんだろ。こつちの時間でも遅れたらたいへんだからなあ」

「だけど……怪しげな奴だぜ。案外、こんな時に拾いものがあるものだよ」

「いや、行こう、行こう……」

と、被服を引っぱつていけるらしい。

そんな押し問答の揚句、どうしても心残りだつたか、その一人の刑事が、手に持つていたステッキで、恒岡係長の頭をコツコツとつづいた。

が、係長はおかしいのを我慢して、まだ寝たふりをしていた。

「おい、おい……」

とうとう、係長を起しにかかつた。

「何んだ！ うるさいぞ！」

と、こちらの顔を隠すようにすると、

「何んだ！ この野郎ッ！……」

こんどは、前のほうへ廻つてきた。

「起きろッ！」

「……」

「起きろッ！ 起きればわかるよ」

と、襟を押えられて、

「今頃、こんなところで、何をしているんだ」

「眠いのおこしやあがつて……」

と、ふてぶてしく、係長が起きあがると黒い眼鏡をかけていたが、勿論、二人とも部下の刑事だつたから、係長ということもすぐにわかつて、

「あッ、係長ですか！」

三人で笑つてしまった。

☆ 一本の煙草

そのうち、だんだん、時間が進んでいくのだ……

こんどは、あの西郷さんの銅像前のベンチに腰をおろした恒岡係長。まず、一服と煙草を取り出した。わざわざ、その日は、この変装にふさわしく、バットを買つて持つて来たのである。

この名探偵が云うには、

「その煙草の一服がまた大失敗。私の癖で三分の二ぐらい喫つて棄てます。どうかすると、半分ぐらい喫つて棄てることもあります。このときも、私は、ちよつと喫つて、いつもの癖で、それをぽいッと棄ててしまつたのです。すると、すぐ、私の前にいた一人のリンベンが、すうッと歩いて来て、それを拾つたじやありませんか。そして、スパスパと、うまそうに喫いはじめました。これには私も、はッと、自分で反省したのです。労働者は決してそんなもつたないことをしませんからね。喫い残した煙草は、もみ消して、耳に挟んでおくものです。すぐ、私はそれに気がついたのですが、さ、そうになると、自分では随分うまく変装しているつもりだつたが、これが即ち千慮の一失。急に、私は不安になつてきました。皆なが、誰も彼も、私というものを買い被つてゐるように思われてきたからです。そう思うと、すつかり、私はドギマギして、落着かない気持ちになりました。あたふたと、そこを退却して、無我夢中、松坂屋の前の喫茶店に飛び込みました。ところ

が、これがまた失敗！」

「こんな朝ッばらから喫茶店に行つたりする者はない。その喫茶店へ、飛び込んでから、それと気がついたというから、よッぽど、狼狽していたものと見える。が、ひとつには、どこかへ、早く、この顔を隠してしまいたかつたからであつた。

「たいへん、お早いですね、どちらへいらつしやるんですか」

と、喫茶店のマダムが訊く。

「忙しいもんだからね」さつそく新聞をテーブルの上にひろげてみた。勿論、あのストライキの記事。でかでかと、それが大きな活字で出ている。

「あなたは東モスの方ですか。随分、騒いでいるようですわね。お忙しいことでしょ、ね」

「忙しいな」

と、二言三言。手早くお茶を飲んだ。それからやつと、松坂屋の屋上へあがつて行つたが、万事、部下の刑事達が手配どおりにうまく動いてくれたので、難なく、この兇悪なる殺人犯人を逮捕することが出来たのである。

朝比奈稀市、三十一歳。

これが主犯で、共犯の、浅草区田原町、野原達男、三十二歳。これもすぐに逮捕されたのだつた。

兇行から僅か十三日目。

☆ 台風の前

自動車ブローカーの朝比奈は、一九二九年箱型シボレー一台の注文をとつたが、女と賭博に、金の必要を迫られていたところから、その心当りのクルマがすぐにもあるようなことを云つて、前金を受取つたものの、この金も忽ち使い果してしまい、そこへ注文主からは矢のような催促。

とうとう、日限をきつた最後のどたん場になつても、そのクルマが見つからない。「もう、こうなつたら、盗むより外にはないや」

と、嘆息してみせると、いつも、悪事の片棒を担ぐ野原が、

「手伝つてやろう……」

冗談から駒が出たような殺人だつたのだ。

二人が、そんな相談をして、須田町停留場のところ、夕暮れの舗道に立つてゐると



ちようど、そこを流して来たのが被害者のタクシー。

「おい……」

と、朝比奈が野原の肩を叩いた。そこは商売柄、一見して、そのクルマが一九二九年箱型シボレーとわかる。

二人はこれへ乗り込んだ。

「こんな曇った日の夜釣りは食いつきがいんだがなあ」

と、朝比奈がそんな話をはじめだした。

「近頃のように、こう、忙しくちや、お互いに好きな釣りどころでもないや」

野原がうまく話を合わせている。

被害者の運転手、村松勝男が、この客の話を背中に聞きながら、これがまた、三度の飯よりも釣好きだったのが……運のツキ。

バック・ミラーから、うしろを覗き込むようにして、同好の士と見た人懐かしそうな微笑で、

「あッしも釣りはだい好きなンです」

「ほう！ そりや、奇遇みたいなものだなあ……」

「だけど……貧乏ひまなしです」

「しかし、たまにはいいじゃないか。釣好きな男が三人、同じクルマに乗ったというのも、何かの縁だぜ。勿論、僕のほうから誘うからには、貸舟も、道具も、餌も、費用は全部僕が持つよ。二三時間、夜釣りとしやれてみようじゃないか」

と、言葉巧みに誘ったのだ。

殺す手筈の、運転手の顔を舟宿のオヤジに見覚えられてはならぬとの懸念から、吾妻橋の橋の袂で、クルマの中に、この運転手だけを残しておいて、二人でいつさいの用意をしたのだった。

月島沖を差して、三人で、かわるがわる漕ぎ出した……。

「ここらあたりで、一つ、イカリをおろしてみるか」

と、さつそく、釣りの支度。

曇り日の空がとつぷりと暮れていた。自分のほうから、釣好きと名乗っただけあつて、釣糸をたぐる手さばきも、この運転手はなかなかうまくつた。そして、釣糸をおろすと、あとは無心無我の境。その背後を、殺気が狙っているなどとは、夢にも想

像していないそのうしろ姿。一撃のもとに、鉄棒で、その後頭部を割られたのだ。舷に、ぐんにやりと、つつ伏した。それっきりだった。

「まったく他愛のないもんだなあ……」

と、朝比奈が呟く。

何かと、そのあとしまつを、相棒の野原に手伝わせていると、ボツ、ボツ、と雨が落ちだしたのだった。風もすこし出てきたようだった。

(終)

愛

読

者

通

信

初めて、貴誌の愛読者通信に投稿させて頂くものです。

私は今年二十一歳になる青年です。私は子供のころから、ずっと京都に育ち、学校も京都ですから、それ以外の土地は殆んど知りません。

私が、いま、こうした一文を書かずにはいられない気持になつたのは、多分、私の家庭の事が大きく原因していると思うのです。

私には、父や兄がないたため、女ばかりの世

界で生活し、大きく育つて来ました。だから、女に対する感情——というか、愛情は、何だか人並みに外れているように思えるのです。友人たちは、若い美しい女のひとを見ると、よく「きれいだなあ」とか、何とか嘆息まじりに眺めているのですが、私にはどうしても、そんな感動が湧いて来ないのです。女の「よさ」——魅力というものに、不感症になつていのではないかと疑つて見るのです。

その代り、男の愛情というものを全然知らずに育つたものだから、「父」とか「兄」と呼べる人がしきりに欲しいと思います。私の肉体、私の心の総てをかけて愛し、愛される男の人はいないものか、と日夜理想の男の出現を憧れております。

私は五尺三寸、十三貫、近代的センスと青年らしい純情さをもっています。マスクはまだ童顔の面影が残っているので、いつも二つ三つ若く見られます。

ああ、誰か私の愛を満たして呉れる人はいないでしょうか。

(京都・黒水仙)

そとみあ通信



藤井晃

★

まず自己紹介から始めますと、私は年令四十五歳の気の弱いインテリサラリーマンで、経済的には中流位の生活をしています。結婚をして子供もありますが、勿論後悔しています。そんなわけでおたがい不幸なのですが、いまさらどうすることもできず、満たされぬままに日を

送っています。

身長は五尺三寸、体重は十三貫五百で中肉の方、容貌は中以上と思つています。趣味はスポーツを好みますが、そのわりに気の弱い方。ホモの傾向は能動的でしょう。

理想の対象としては、二十歳前後から二十五、六歳位までの小麦色に日焼けした、歯の白い可愛らしい顔の健康的な青

年です。街などでこんな青年を見ると、語りあいたい交際したいと思い、興奮します。しかしこれは理想であつて、とてもこんなタイプの青年と易々とめぐりあうことはむずかしいと思いますので、このごろでは広い範囲の方と交際しながらその中、共鳴できる人との邂逅をひたすら祈つております。

次に小生の男色歴ですが、いまから考えると十四、五位の時分からそれが芽生えていたようです。会社へ入つて寄宿舎生活をするようになってからは、好奇心もあつて同僚と同食する機会も多く、相互的な交歓を交していましたが、其の他の変つた愛撫方法は全然知らず、フェラチオなど知つたのは、戦後種々の性雑誌が出てからでした。

結婚の話が出たときは、こうした性向は結婚すれば次第に治ると簡単に考えて結婚しました。最初のうちは事務的に夫婦生活をしていましたが、次第にその事に興味がなくなり、ついには嫌悪さえ感ずるようになりまして、自分は同性愛の宿命をもつて生れたのだとはつきり解りました。そして結婚を後悔するとともに

同性に対する恋情が一層強くなつてゆきました。

戦後或る青年と親しくなり、彼も同性愛的な傾向がありましたので、交際を結び、私は彼が日増しに可愛くなり小遣銭を与えたり、色々の品を惜しげもなく買つてやつたりなどしましたが、彼はだんだん異性の方へ心が動きはじめ、その中他県へ行くようになつたりして、いつしか離れてしまいました。

其の後はただ一回、昨二十八年五月映画館の中で知り合つた二十二、三歳の私の好みに合う青年と、一夜の交歓をしただけの経験しかありません。

今は貴誌を通じて同志との交遊を待つよりほか道がありません。そののみを頼りにしております。(高知 R生)

答 あなたの水モ性向は、相当に根強いように推察されます。どちらかというとベテ向でありながら、あなたのように強烈な水一本槍の人は少ないようです。

しかも、相当年配であり、妻子もあるため若い青年たちのように、無謀—な相手探しもできぬため、性的な苦悩は一入と思われれます。

無思慮な結婚をされたため、不幸な人間を二人作つたことは遺憾ですが、この上は妻女とよく談合され、賢明に善処されることを望みます。

ほんとうは、あなたのような人は、自分の好みのタイプの同性と二人で家庭をもち、協力的に生活をされるのが、最も理想だと思います。私の知っているソドミアも、結婚をせずに、意気投合した一人の同性と家庭をもち相当の事業を営んで成功しているものがあります。



私は現在飲食業を営む満二十八歳の妻帯者です。早くから結婚したので、今では小学一年になる女兒もいます。

結婚までは格別同性に興味をもつというところありませんでした。小学校の頃より男の子と遊ぶのはきらいで、女の子ばかりを友達とし、人形ごっこ、でまりつき、おはじきなどの遊戯を好み、母親から男の子が女の子のようだと云われていました。

兵隊には一年もいませんでした。軍隊では別に男色というほどの事はしたことが

はなく、ただ同年兵と五、六回相互交歓を行つたことはあります。

結婚は家事の都合で、終戦直後二十二歳でしました。三年ほどは普通の夫婦生活と同じでした。しかし近所の二十前後の美少年などを見ると可愛いくて、いつか妻が里に帰つた留守中に、親類の青年に勉強を教えてやるからとて私の家に泊め、彼の寝入つたのを待つて、同衾をしました。

この時から無性に同性が恋しくなり、特にスポーツマンらしい二十五歳位までの青年を見ると、身体中が燃えるような魅力を感じます。上原謙のようなタイプは嫌いで、菅原謙二や鶴田、三国のような型の青年が大好きです。

そして又、そのころより妻と一緒に寝るのが厭で厭で堪まらず、まして交情なんて考えてもゾツとするほどになりました。しかしそれでは家庭不和の因になると思い、努めて——ほんとうに努めて、妻とは週一回位、情を交えることにしました。

毎日々々、同性の相手を見付けろのに苦心しました。よく雑誌などで映画館内

で手を握られたとかというような事を読んで、私も思い切つてそれをしてみようかと思いましたが、それは容易にできませんでした。

或るとき、市内の某三流映画館の便所に入りましたところ、そこに「男子同性愛者は××市××町×××へお便り下さい」という落書を発見したのです。どうせ誰かのいたずらだと思い、別に気にもとめずにいましたところ、其の後或る公園の公衆便所にも、同一人の同一の落書を見付け、急に其の人に会いたくなりすぐに局止めで手紙を出しました。

十日ほどたつて返事が来ていました。「×日×時A橋にて会いたし」とあるので、当夜指定の場所に行き、彼と会いました。声をかけられた時は、全身から火が出るほどでした。暗闇でよく分りませんでした。自分の好みとは余りにかけはなれた人なので、落膽しました。が、彼に抱きつかれ、結局完全に魅惑されてしまったのです。



そのとき彼から広島市内のN劇場が同性愛者の集会所だと教えられ、そこでかなり多くのソドミアと知り、半年位は誰彼なく遊びました。しかし自分の理想



遊ぶ気には全然なれません。人間なんて慾の深いものです。

僕の好きなタイプの人は、二十五歳位までのあつさりした会社員風、足の美しい人は特に好きです。澄ましている人は嫌い。そんな人と永久でなくとも、二、三年愛し愛されてみたいのです。僕は身長五尺二寸、体重十四貫、容貌は普通と思います。性格はおとなしい方でしよう。趣味は映画、バレーボール等。同志の人のお便りを待つ。
(広島市 NK生)

答 あなたも云われているように、広島市在住のソドミアのために、相手を得るための一法の紹介として、約全文を掲載しました。

公衆便所における「求同志」の落書によつて初会した人が、自分の好みとは相反するタイプであつたにもかかわらず、その魅力に惹かれて愛情を交す件など、たいへん面白く—といつては失礼かも知れないが—読みました。ホモのフアルス・ナイドがよく現われております。

又N劇場に集まるソドミアたちの交際が、

の人に一度もゆきあたりません。この人たちの交際は本当に一度か二度で、後はグッドバイです。
僕も今四人ほどの友達をもっていますけれども、もう知りつくしてしまつて、

互い一、二回の交情だけで離れ去るというこ
とはホモの多情性を語る好例だと思えます。

ホモの多情性については、本誌十二月月号所
載の「ソドミア座談会」において、出席者の
山本氏も言っているように、その由因の一は
いつでも相手を得られるという気易さからで
もあります。普通、ソドミアは相手を得るこ
との難しさを嘆いておりますが、一方には、
実に容易に次から次と相手をかえている一群
の同性愛者がいるのは事実なのです。

それらの人たちは、実に明かるく愉しく、
自己のホモを享樂している。すこしも悩むと
ころがない。ホモの戦後派ともいうべきでし
ょうか。広島市のN劇場に集まるソドミアは
おそらくそうした型の人たちなのでしょう。



小生は数え年二十八歳、中肉中背、あ
る程度の美男、体格は十七歳の時病気を
したため立派とは申せません。職業は食
品の製造販売、未婚（終生未婚で終りた
いと思っております）

十代の初めから同性の魅力に惹かれ、
現在まで二十人位の男性と、浅かつたり
深かつたりの関係を結んで来ました。相

手は大半が、小生より年下の青年などで
す。そして小生の相手は、一言でいいま
すると、金で買ったものが多かったのだ
す。金で買ったといつても、職業的な男
娼ではなく、たとえば二十二歳頃から昨
年までの五年間関係をつづけていた六歳
年下の青年とは、交情のたびに、なにが
しかの小遣いを与えておりました。その
青年としては、小遣い欲しさのための交
際であつたのかも知れません。ちかごろ
の二十歳前後の青年の中には、金が手に
入るならどんなことでも平気でやるとい
う考えのものが、非常に多いように小生
には思われます。ですから、私にとつて
も、金さえいくら出せば、厭々か或は
歓んでは、とにかく相手になる同性が見
付かるわけなのです。

そして、金で買った男色も、別に不快
であつたわけではありません。が、後で
或る瞬間には、いささか味けない気が起
ることがありました。

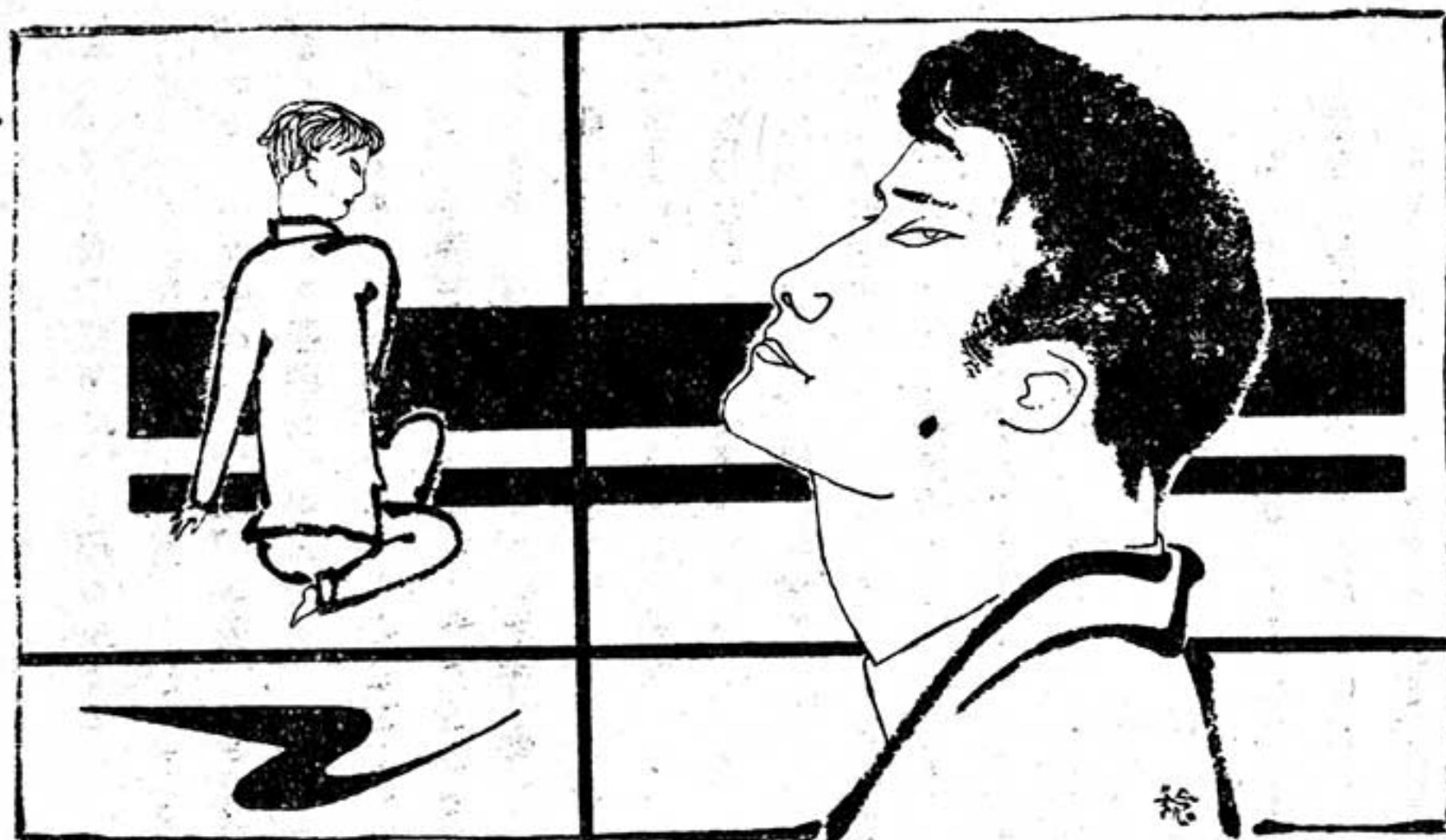
愛情方法は、普通行われていろいろ
な方法などを行いましたが、小生は勿
論、相手の同性にしても男が男の味を知
ると、異性には興味を感じなくなるよう

に思われます。

これはつまり、男同志の情意が投合し
た場合、異性を相手にする時よりも、色
々の感情や肉体の生理的なことなどが、
より一層ピッタリと相手にうつたえてく
るものがあるからのように考えます。も
つと的確な言い表わし方をしますと、肉
体関係がすべての行動において強烈なの
だと考えます。

素人の青年を自分の愛人にする方法は
他の人はどういう風にされるのかは知り
ませんが、小生の場合は、相手にいい写
真を見せてやるからという風に誘つて、
二人きりになつてから、自分が昔手に入
れておいたオブシーン・ピクチュアを見
せ、相手の興奮の時を計つて、能動的に
働きかけてみるのです。

そうした場合、大抵自分の思いどおり
になつて参りましたが、それらの相手に
は、自分との交渉をそれきりで絶つてし
まう者、二、三回の後に止めてしまいう者
いつまでも金さえくれれば（くれなくて
もいいという者もありますが）交渉を続
ける者の三つに分れて来ます。その原因
は男色に興味をもつ者とそうでない者



又、慾求の強弱のせいだと思えます。
現在の小生は二十歳の美青年を愛人にもつているほか、同じく二十歳前後の三人ほどのペットをもつていますが、それ

でもまだ、こうして貴誌の「ソドミア通信」によつて相手をもとめているのは、現在の愛人やペットたちに満足しないものを感じているからに外なりません。

小生が先生にお願いしたいことは、先生の指導の下に、岡山県は岡山県だけのソドミアのクラブ組織を作つて頂けたら如何なものでしょうかということです。デンマークでは、同性愛党が生れて約二十万の人が参加したとか聞いておりますが、約百万のソドミアがいるという日本では、それ以上の大きな結成ができるのではないのでしょうか。そんな風に考えております。

(岡山 KK)

答 あなたもホモを楽しんで行っているタイプのように思われます。そして、あなたがいままでこの欄に通信を寄せて来た多くの人と違うところは、ホモの相手を金で買ったと堂々と告白していることです。

そのように、ホモ行為を合理的に割切り、些の遅疑逡巡も暗い面もない点が、従来のソドミアとは違う。いわば戦後派の新しいタイプと言えるでしょう。

男性同志の種々交渉の分析なども、なかなか

か的確です。又、あなたが「金で買った」というホモの相手は若い男性が多く、そしてあなたは、「ちかごろの二十前位の青年は、金のためならどんなことでも平気でやるものが多い」と云っていますが、そうした傾向は洋の東西をとわず、キンゼー報告においても、ハイスクール階級における同性愛の性的行為は一〇・八%で、小学校階級(六・九%)や大学階級(二・四%)の首位に立っていることを示しています。

そしてキンゼー博士は、同性愛はハイスクール階級に、他の二階級以上に非難されているにも拘わらず、事実上最高であることの理由として、「好奇心」と「金銭的報酬」の二点を挙げていますが、その点も、あなたの場合と同一です。

又、博士は、ハイスクール階級の少年間には、「もし頼んで同性愛の相手になつてもらった者を、同性愛の行為につづいて残忍に殴打するならば、同性愛によつてオルガスムに達することは倫理的である」という道徳が支持されていると報告しています。日本では、どのような同性愛観が行われているのだろうか？

次に、ソドミアのクラブ組織云々は、たい

へんいいことだとは思いますが、それがソドミア同志の単なる享楽機関であつては、あまりに幅がありません。結成するからには、その結社が横に何らかの社会性につながるものでなくてはならぬと思います。一つの課題として研究しておきましょう。

★

私は本年二十四歳、身長五尺五寸、体重十五貫、容貌は普通よりもよいと人は云います。どちらかというところ、可愛い部の方でしょう。

いままでに三、四人の同性と親交いたしました。が、なかなか理想の人はもとめられず、その人たちとも別れ、現在相手のない苦しさ、日夜孤独に悩んでいます。夢の中に現れる野性的な逞しい人——ああ、そのような人に現実の世界ではいつめぐりあえるか、消極的な性質ゆえにひとり悶々として淋しく人生を歩まねばならぬかと、夢さめて後枕を濡らす夜も度々です。

「色の黒い野性的な感じの三十歳前後の人、そして五尺五寸以上の人が好ましい」と思います。そのような人の逞しく発達

した骨格や、ズボンを盛り上げるような筋肉を見ると、脊筋を電流が走るような快感を覚えます。

積極的には全然駄目な私は、この「そとみあ通信」にお願いするほかありません。どうぞ一日も早く、私に幸いをお送り下さいませよう。(岡山K生)

先生に小生の悩みを救つて頂きたくベシをとりました。現在相手を得ることができず、毎日

を味気なく暮らしている二十四歳の青年です。

体格の立派な男性を見ると、やたらに激情して来るのです。二、三の友人たちと一緒にダンスもやりましたが、ダンスそのものは好きなのですが、女というも



のに対しての感じが、たまらなく嫌で、それに反し、ガッシリした体付きの青年を見ると、ステップも調子が合わなくなつて来る始末です。

三島由紀夫の「仮面の告白」「禁色」「秘楽」等を読んで、ますます気持が混乱して来ます。

狭い田舎のこと故、おいそれと相手の得られるものはありません。これが都会であれば、ソドミアの集まるという喫茶店などに行けば解決はつきます。しかし田舎にはそうした場所はおろか、ホモの話をするものすらありません。話といえはすべて女女女の話ばかりです。小生がいつも暗い顔をしていると、友人から云われるのも、皆ほんとうの小生の心を知らないからなのです。たとえ。ふかい交際はなくとも、精神的につきあつて、何でも打明けられる友人がほしいと思つております。同志の人よ、

何卒お便り下さい。(英城Y・T生)

小生当年三十七歳、長い間自己のホモ性向のため悩んで来た者です。

現在結婚して、子供が三人あります。妻には肉体的には満足を与えておりますし、小生自身も妻には満足しておりますが、妻以外の女性には性的な感情は少しも起きません。

いままで色々の男性にも会いましたが小生は愛情が起きなければ、肉体的にも慾望が起きぬので、二、三回の散歩程度で別れてしまいます。小生は精神的な愛情が欲しく、長年それをもとめて苦しんで来ましたが、いまだ満足は得られません。

妻も私のこうした性向は大体知っておりますが、そのため家庭の平和が破れたということもあります。しかし私自身一日として精神的に満たされたことがなく、一生自分の心を満足でき得ないのかと思うと、人生に失望を感じます。

私と同年以上六十歳位までの男性で、肥満型でないガッシリした体の人と、愛情から出発して終生交際願えることがで

き得ればと希っております。

(東京Z H生)

美しい同性にあこがれを抱きながら、相手がいないため、毎日を淋しく送っている十九歳の少年です。身長五尺三寸六分、体重十三貫五百、顔立は至つて良い方だとの自信があります。趣味は音楽・読書・ダンス・旅行等。

僕の家は戦争中までは、下関で相当大きな遊廊を営んでいましたので、小さい時から女性のきたならしい、いやらしいところをさんざん見て来て、女性に対しては嫌悪感をもちこすれ、恋しいというような感情など全然起りません。

僕の理想の同性は、二十四歳から三十歳前後の、映画俳優でたとえれば佐田啓二、根上淳というようなタイプの人で、野性的な人は好みません。

僕と交際してくれる人を待つております。文通だけでもいいのです。

(下関G K生)

答 最後に、相手を得られぬため、「悩んでいる」人の通信を二、三編めて掲載しまし

た。

前記K K氏のごときを戦後派的と称ぶならば、これは戦前派ともいうべきこの種の人の通信が、山積しているのですが、紙面の都合でそのすべてを載せきれず、又多忙のため一々返事も差上げられないのを心苦しく思っております。

それらの大半はウールニング傾向の人のように、それだけに一層相手を求めることが難しいのだと思われます。中でも岡山のK氏などは、終戦直後私が或る雑誌に書いたソドミア考を読んで、さつそく書信を寄せて来た人で、その時も同じような文面であつたのを記憶しております。

このような人の心理を忌憚なく分析すれば一人でも多くの相手を知らたいとの、ホモ特有の多情性に由因することは解りますが、肉体的なものをもとめながらも、その底には精神的なものをもとめていることは窺われます。

近く、こうした人たちのために、相手を求めるための愛の告白のテクニクなどを、心理解剖の形式で具体的に一篇にしたいと思っております。

の 有 る 犯 罪 現 場

《姿無き殺人》

初夏のからりと晴れた紺碧の空に、羽根をひろげた白鷺が、動かずに飛び上つていようようにみえるところ……。有名な、姫路白鷺城。

そこから西方、二里程

の所に、石倉村がある。村の中程に国道にめんして間口の広い店舗を構えているのは、雑貨販売を業とした石橋夫婦の家だ。妻のやすは、小肥りの脂肪がくりくりと肌に乗った三十二、三歳の女盛り。夫の秀次は四十近い瘦せ型の、生真面目だが無口者である。夫婦の仲には、十一歳になる健三という子供がただ一人生きていた。

大正九年六月二十日、この日昼過ぎ、村の

駐在所の老巡査が自転車に打ち乗り、店先をとおりかかった。

主人の秀次のむっつりした姿は見えず、愛想のいいちよつと肉感的な女房のやすが、花模様の大柄な浴衣のえり肌を指先でくねりと押しあけて汗ばんだように、

「暑い、暑い……」

と、片ッ方の袂をつまみあげながら団扇がわりに風をいれていた。

荻野老巡査は、ハンドルを手にかけたまま何気なく店先をのぞきこんで、ペダルを踏みしめた。村の青年、藤太郎とやすは何かひそひそと話し込んでいた。

石橋の店は雑貨のほか、煙草も売っている。若い男と年増のやすは、陳列ケースの陰になつていて、おまけに外のかつと照りつけて来た日光に眼球が刺戟されて、家なかは一層暗くて歴然とはわからぬが、「男は藤太郎だな」と思った。

「おやすさん、精が出るな」と笑いながら荻野老巡査は、自転車



樹 画
夏 浩
山 田
青 月

特選犯罪実話 名刑事捕物帳

体 液



だ警察ズボンをはき直し、垢染みたシャツのまま慌てて土間へおりてきた。

「おや、吉村君か。どうしたのじゃな？」

「旦那々大変なんだ。従兄さんが斬られたんだ。まだ息があるが、部屋ちゆう凄惨い血の海なんだよ。早く来てくらッせ」という。かつて人無い平和な村に突然の一波瀾の渦を巻き起させるような、血生臭い訴えが、むんむんする夜気に蒸せてどつと流れ込んで来た。荻野老巡査はうち驚いたが、職掌柄いきなり傍らの電話器をまわし、直ちに本署の龍野警察署へ至急電話で報告し、自販車で現場へ飛んでいった。龍野署からはまもなく署長じきじき、司法主任、刑事、警察医らを数人引率して夜陰ながら、警察自動車のエンジン音を立てて現場に直行して来た。また、龍野署から連絡をうけた姫路検事局からはつづいて、検事が出張して、同時に被害現場の検証を行つたのである。

を走らせた。所が、その日の夜一時過ぎだつた。

「旦那ッ、旦那……大変だ！」

厳密にいうと、六月二十一日の午前一時を廻り二十二分程過ぎた頃合いである。石橋夫婦の付近に住む秀次の従弟吉村又吉が、韋駄天走りに夜路を駈けてきて、

駐在所の硝子張りの入口戸を、がらつがらつと破裂するほど叩き起している騒々しさであつた。

巡廻日誌をつけ終り、奥の八畳間に老婦と寝込んだ時なので、荻野老巡査は俄かに脱い

現場に残された「謎の分泌液」——痴情か怨恨か？初夏の夜の奇怪な殺人事件！

被害者の雑貨業兼タバコ店は、店の間のすぐ奥に、六畳と八畳敷のうすぐらい二室があった。

被害者の石橋秀次は、この夜奥の八畳に、女房のやすと寝ていた。やすの隣りに子供の健三が添寝していて、村のことだから寝室はすでに青い涼しげな蚊帳を吊っている。夫婦子供三人が仲よく川の字に寝込んでいた様子であつたが、右端の夫秀次のみが重傷をうけていた。

しかも検視の結果、夫の秀次が仰向けに熟睡中を何者かに襲われたものと見えて、咽喉部を一突きにグサリと深く突き刺され、目下虫の息であつた。随行の警察医の鑑定によると、兇器は小型の鋭利な刃物であると断定され、秀次の生命は覚つかないという瀕死の重傷の診断である。

被害者の秀次は、出血多量のため意識不明。今なお昏睡状態にあるので、状況聴聞が不可能だつたから、とりあえず姫路の赤十字病院へ病院自動車を呼びよせて運ばせた。

すでに近所の人達が、驚いて起き出し、被害現場を取巻いて詰めかけていた。

隣家の百姓家夫婦は、やすの子供が現場にとり残されて恐怖の情におびえているので、

健三をあずかつていた。

龍野警察署長は、寺井という司法主任と共に現場を検証していると、兵庫県刑事課から捜査応援のため、刑事課の敏腕刑事の称がある新屋刑事部長が出張してきて、刑事部長特有の現場検分をやりだした。そのとき、今迄どこに行つていたのだろうか。浴衣の寝巻姿をしどけなく乱した女房のやすが、ふらふらと戻つてきたのに気がついた。

《妖しい女体分泌液》

新屋刑事部長は、投げしのかげ釘から切れて、ベサリと落ちた夜具上の青くすけた蚊帳をつかんでいた。

入室してくる妻女やすをジロリと睨みつけながら、蚊帳のふちをズルズルと腕のなかにくりながら、

「おや？」と思つた。

その蚊帳の上部丁度秀次が寝ていた頭部辺りとおぼしい部分にカギ型に約三寸。なにか刃物で斬りおろした切り跡を発見したのだ。

さらに下方にかけて、多量の血がついた切り口も発見され、吊り手の一カ所の紐が、なにかの重味からかブツリと切断されていた。犯人は鋭利な兇器で蚊帳を切り、夫婦の寝床

へ入つたようすであつた。

しかし、女房のやすが傍らに添寝しているのに、夫の秀次のみが一突きに咽喉の肉をやられていた現場状況が可笑しかった。

新屋刑事部長は、ぼんやり彼を見ているやうに、

「あんたは被害者の奥さんかね？」

「はい」

八畳の部屋一帯、血の海のなかの隅に突つ立つたやすは、少し蒼ざめてうつむき勝ちながら眼は据わつていた。龍野署の署長、寺井司法主任、および刑事達は、兵庫県刑事課から派遣の新屋刑事部長の妻女訊問ぶりをうち眺めながら、参考上傍らで聞き耳を立てていた……

「兇行の起きたのは、何時頃かね？」

「午前一時だと思ひます」

「状況では、傍らに寝ていて電気を点けていた様だが……知らなかつたのかね」

すると、やすは驚いたように顔をあげた。

「知りませんわ。……夫が一時頃、急に異様な呻き声を発しました。なんだろうと妾はびつくりして……眼を醒しました。すると、右端に寝ている夫の首筋から顔にかけて、血が吹き出ているので、驚いて起き上つたので

す」

「それから……どうしたのだ」

「……大変だと思つて、傍らの子供を起しておいて、この寝巻のまま義理の従弟（又吉）の家へ知らせに駆け出しました。……従弟がやつて来て、一目見るなり従兄さんが殺された、と叫び飛び出しました。後で考えると、駐在所へ報らせに行つたのだと思ひました」

「それで目を醒した時、家族のほかは誰もいなかったのかね」

新屋刑事部長は落ちついた口調だが、その訊問は無駄なく鋭かつた。やすは、そのたびに、ギクリと胸の乳房あたりに手をあてながら、うつむいた。

「——どうしたんだね」

「又吉の家へ報らせに行こうと、裏口から飛び出そうとした時……なんだか、黒い影が、裏口から走つて出たような気がしました」

「黒い人間の影を本当に見たのかね。……見たとしたなら、犯人だと疑う気持は起らなかったのかね」

「見た様な気がしますわ。夢中になつていたから、犯人だと考える心の余裕なんかありませんわ」

「男か女か？ どんな衣類を着けていたか、

見なかつたのか」

「男か女かも判りません。……ただ黒い影が走つたような……」

「ふむ！」と新屋刑事部長は重く唸つた。それから更に、やすが今迄どこにいつていたかを訊き出すと、又吉の家へ走つて報告し、さらに走つて戻ろうとすると両足が俄かにブルブルと震えが来て、怖ろしさに囚われ、思ふ様に走れなかつた。眼についた横手の畑、そのあぜ道にぼんやり坐り込んでいたのだと答えるのだつた。

新屋刑事部長は聴きながら、その時ふと、手につかんだ蚊帳の網の目がニチャリと触感して、異様なものをおぼえた。思わず鼻先に持つていつて嗅ぐと、吐き気しそうな体臭のこもつた分泌液だなど考えた。コリコリと乾いているが、女の分泌液のように思われた。

刑事部長の眼は、ニヤリとやすの裾の乱れに動いていた。桃色の腰紐一本で、くりくりしたよくふくらんだ腰肉を締めたやすの下半身は、寝乱れたまま飛び出して行つたせいかつつんだ腰巻の紅のような朱さが、妙に乱れてのぞいている。中味の熱した辺りは、ほかに何物をもつても、くるんでいない様に思われた。

「妙なことを訊くが、あんたはこの匂いはいくら当らないか」

新屋刑事部長は、ズボンのポケットから小刀を取出し、蚊帳のその網目を切りぬくと、平然とやすの面前へ差出していた。やすは何気なく嗅いで、そして嗅いでいるうちに顔を紅葉が散りばめたように赤らめた。しかし押黙つていて、答えなかつた。

《捜査会議》

数時間後、——現場検分の一行は、龍野警察署に引揚げた。そして、直ちに龍野署に捜査本部を置いて、種々と捜査方針を協議しあつていた。

捜査本部に集まつたのは同署の寺井司法主任、兵庫県刑事課応援の新屋刑事部長。龍野署の腕つこき古参刑事二名に、司法係以外の巡査数名、さらに特別に警部補派出所勤務のF警部補などがまじつて、会議がさかんに開かれていた。

長方形の古びた刑事机をかこんで、現場から調べあげられた色々な各自の意見、発表が、腹藏なく開陳された。しかし、中央にばかりと腰を下した新屋刑事部長は、腕を組んでだまり込んでいた。

「新屋さんは、どのような意見ですか」

隣りの椅子に腰をおろした寺井主任はきいた。新屋刑事部長は組んだ両腕をばらりとほごして、ジロリと一座を見廻した。

「私の観察では、本件は何物も盗られていない。物色された形跡も認め難い。物盗りの犯行とは、全然考えられないから、この殺人事件は被害者、石橋秀次への怨恨か。……妻やその痴情による事件としか考えられない。そこでこの痴情、怨恨の二つを徹底的に洗つてみれば事件は簡単に解決する……」

刑事部長の脳裡には、すでに現場検分と三人家族の状況からわりだして、女房のやすに嫌疑をかけていた。

やすが殺したのだらうと思われたのである。誰か情夫があるに違いない。特に、さいごに発見した蚊帳の網目の一部に、——やすのものと思われる分泌液のようなものを、現場から拾ってきた。早速、現場検視の警察医に託して、県衛生課へ早急に調べるよう持参させた。

しかし新屋刑事部長は、早急にやすと断定して捜査方針をただちに一本にまとめる危険性を考えていた。なによりも、犯人とすべき傍証を固めるべきだと、慎重に考慮していた

のだ。「怨恨か、痴情か」という齒がゆいような、抽象論で一応、捜査方針をうち立てるよう会議をもつていつたのも、その深慮からだった。

そこで捜査本部では、前科者の調査をやらせるかたわら、石橋夫婦、従弟の又吉、やすの情夫の有無等の身辺聞き込みを、刑事を八方にとばして行わせた。

《女房やす逮捕》

翌る日のうちに、刑事達は聞き込みをかかえて戻ってきた。その総合判断によると、被害者の秀次は、無口だが村の評判はあまり悪くなかった。又、他人に怨まれる様なことは、やつていないというのだ。しかし女房のやすは多情者であつたらしい。情夫の一人として、駐在所の荻野巡査がその日、やすと話し込んでいた村の青年、藤太郎を見たという報告があり、又、従弟又吉には若い妻があるが、夫婦仲は至つて冷淡で、やすといふ仲だという聞き込みも捜査線上にうかんできた。

刑事の一人は、

「あのおやすは、情夫に唆かされての犯行ではないでしようか」

と私見を述べ出した。又、他の刑事は、

「司法主任、おやすは兇行当時、夫の傍らに寝ていなかったという話です」

と小声で伝えて来た。司法主任の傍らに腰をおろしていた新屋刑事部長は、例の「分泌液」の証固を握つていたから、

「おい、おやすは慥かに寝ていた。もしかすると、情夫がそばにおやすと愉しんでいたかもしれないよ」

「だけど、おやすは、夫が瀕死の重傷になつていたに拘らず、案外落ちつき払つていたという評判ですよ」

聞き込みの報告は、さらに同様なものが捜査本部に集まつてきた。三日すぎ、五日とすぎたが、しかし犯人の確定的なスジがつかめなかつた。

県衛生課に渡して、試験の結果検出された蚊帳の一部附着物物の報告がもたらされた。それは女が漏出した少量の分泌液に相違ないことがわかつた。しかし、精液の混入が認められないので、一応直前に被害者とも、情夫とも関係がなかつたことになる。この「分泌液の謎」は、どう解いていいか判らなかつた。

むろん、四囲の状況から、女の分泌液は被害者の妻やすの物と判断される。やすを逮捕して肉体を調べないかぎり、果して男性の分

分泌物が付着しているかどうかとも判明しがた
い。すでに時日は経過しているから、死の直
前の情交の有無も、今では歴然と判明しがた
いとも思われた。

又、更にふかく犯罪医学的に考察すると、
兇行当夜、夫のそばにいて殺されるのを見た
くなかつた。やすは現場に寝
ていたトリックを使うため
に、兇行発見当時分泌液をな
すりつけておいた、という現
場詐術の場合がある。特に、
やすのような多情な女の場合、
考えられないこともな
い。

詐術や詐病をやる者は、捕
えられてもなかなか白状しな
い多情な男女が多い。疑えば
疑うほど、やすが怪しかつ
た。やすが夫を殺したのか、
又情夫に殺させたのか、その
点の聞き込みをさらにやらせ
ているうちに、

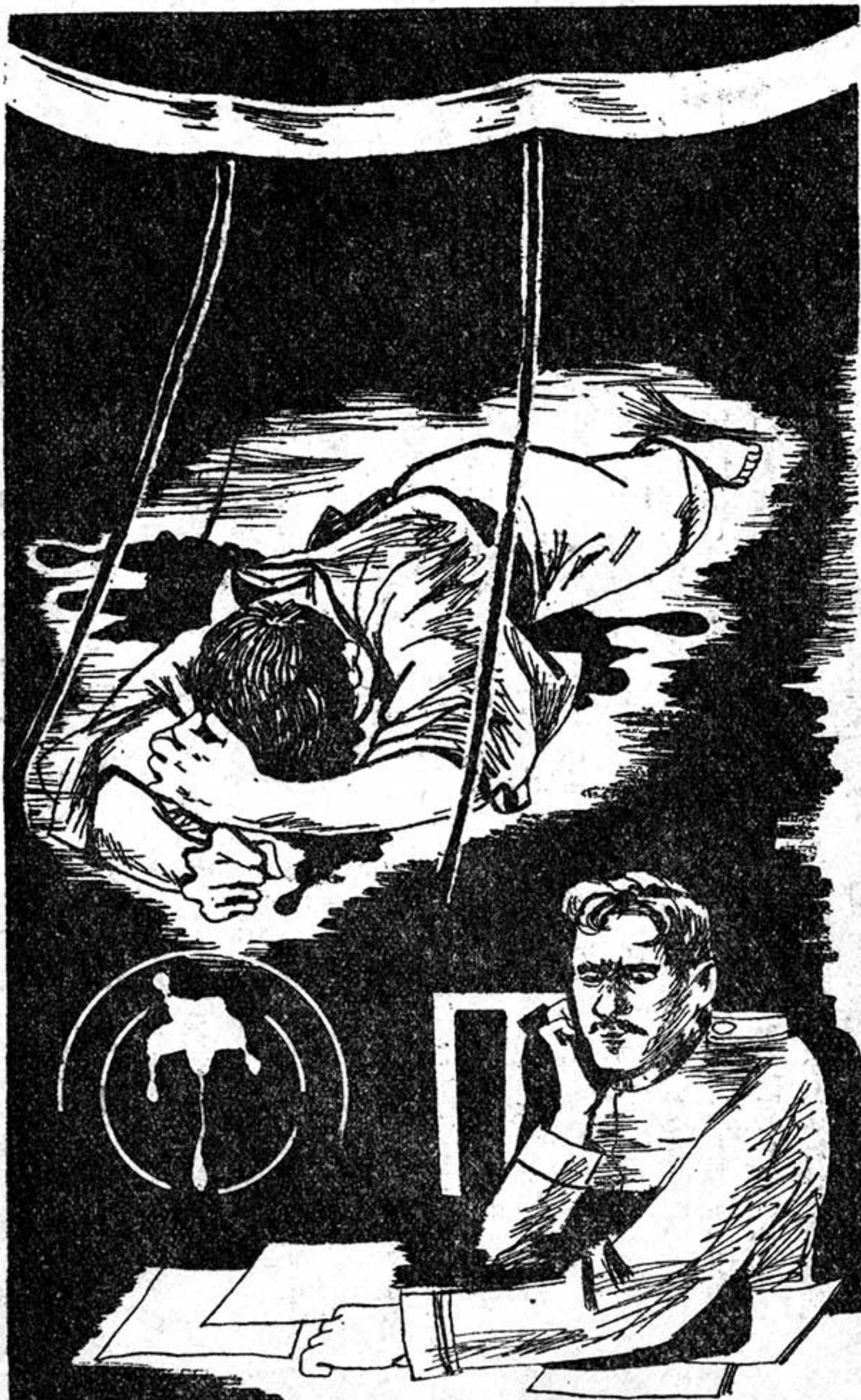
「なんだ、まだ捕らないの
か。警察は何しとるんだろ？」
村人の警察不信の声がだん

だんに募つてきた。この声が、捜査本部にも
伝わり、ようやく寺井司法主任や県応援の新
屋刑事部長は、焦慮の色を心にふかく描き出
してきた。

村の青年、藤太郎を洗つてきた刑事の一人
は、

「おやすと仲がいいらしい。藤太郎はおやす
のツバメだと言われ、夫の目を盗んで姫路へ
遊びに行つたこともあるらしい」

という聞き込みをしてくる。が「らしい」
というだけで、二人の濃情の事実はずかめな
かつた。極め手になる兇行当夜の藤太郎の足



どりは一応判明し、アリバイは認められた。従弟の又吉の家へ、やすが報告に走ったといわれるが、戻ってくる時間が遅かった。

又言が、血み泥の現場に駆けつけて、駐在所へ報らせたといわれるが、やすは示し合せて現場には寝ておらず、又吉一人が自分で兇行後、時刻を計らって駐在所へ行つたとも考えられないことがない。

十一歳の子供の健三は、又吉が来たといっているが、寝呆け眼の上に父親が重傷をうけた直後の精神惑乱、恐怖心理状態では、目をさました時そこに又吉がいても、兇行後来たかと錯乱して思つたかもしれない。

流石の敏腕で鳴る新屋刑事部長も、極め手がつかめずに色々と焦慮の末、考え悩んだ。彼は自身、又吉の当夜の足どりを入念に調べあげた。その結果、又吉も一応アリバイは成り立つようだった。

現場には、犯人の遺留物はなく、唯一の証固とすべき兇器は出て来ない。その頃、寺井司法主任が、

「女房のおやすが、どうも怪しいぞ」といい出した。

「僕も初めから、犯人はあの女だと睨んでゐるんだ。ただ証拠が無いのでねえ！」

新屋刑事部長もそう言つた。捜査主脳初めおも立つた二人が、言い合したように彼女を黒と睨んだし、部下の刑事たちのこれ迄の聞き込みも、凡てやすが犯人と出ているから、刑事達も間違いないと断定し出した。

結局、捜査会議での結論をまとめた結果、やすを容疑者として姫路検事局に出むいた。検事にやす説の捜査状況を報告し、帰署してさらに会議した。やすには不運だったが、この時も、やす説が支配的になり、動かし難い容疑者として、遂に彼女を龍野署に拘引した。

《名刑事登場》

やすはこの時、姫路の赤十字病院の一室で、重傷の夫の看護をしていた。

姫路から拘引されてきたやすは、流石に驚いたようだった。

「夫の命は、明日にも迫っているような危険な時に、なぜ、夫の看病をさせてくれないんですか？」

腹立ちと口惜しさで悲壮な顔つきになり、寺井司法主任や新屋刑事部長に喰つてかかった。しかし、二人は、人情としては忍び難いが、部下の刑事にやすを徹底的に取調べさせ

る方針をまげなかつた。

その夜、赤十字病院から龍野署署長直接に電話がかかり「石橋は危篤状態に陥つた。本人は妻のやすに会いたいとうわごとをいいつづけている」との急報だった。

署長は、危篤の石橋の訴えを無視できなかった。警察の非情、冷酷性が取り沙汰されてはならない。民衆保護の建まえからいつて、戦前といえどもゆるがせにできない立場を考へた。早速、司法主任を署長室によびだし、やすを至急石橋に会わせるよう厳命した。司法主任と新屋刑事部長は不服だったが、二人が付そい、警察自動車を駆つて赤十字病院に急行していった。

だが、病院についたときは、夫の秀次はついに、こと切れていた。

やすは夫の屍骸にとりすがり、泣きわめいて離れようとしなかつたが、そのまま再び警察自動車に送られて留置場入りをした。今さら泣いて、愁歎場をみせても始まらない、という法のまえには冷たい壁をへだてる考えが、この二人の脳髓に、吹雪のように立てこめていたのである。むりもない。それは、「お前が殺つて、何を今さら泣くんのだ！」と、やすに対して、夫殺しという嫌疑に燃

えていたからであつた。一方、刑事を走らせて、証固蒐集にあたらせた。やすは連日の峻烈な訊問に遭つても、強情に夫殺しの自由をしないのであつた。それどころか、

「妾が犯人だと？ アハハ……。あんた達の眼は盲目ですか。女だと思つて、あまりに無謀だよ！」

と、ついには狂氣の様に、調べ室で泣き出すのであつた。

証固の兇器の出所は出てこない、不利な証言はあつても極め手となる証固はそろわないから、やすの血をしぼるような警察横暴の聲は、だんだん警察側に不利になつて、この夫殺し事件は迷宮入りの噂が署内でも深くなり、不運な憂色にとざされていった。

兵庫縣刑事課では、事件発生後十日目の六月三十日。大地や建物が灼けて、真夏の陽気に、狂氣するようなやすの龍野署無謀の声をきいて、放置してはおられなかつた。

温厚な平田刑事課長は、或る重要事件で、大阪方面へ出張してもどつたばかりの目上刑事部長を、課長室に呼んだ。

「目上君、龍野管内の殺人事件は見込み違いらしい。戻つてそうそう、甚だご苦労じやが、誰か部下をつれて応援にいつてくれない

か。新屋君も疲れていて、ダメらしい」

目上刑事部長は、県刑事課いやいや関西きつての人情味のある、犯罪捜査の第一人者だつた。席のあたたまることのない程、多忙な男だが性快活。これまで凡ゆる難事件を快刀のように解決してきた人物でもあつた。

他の刑事、特に先輩の新屋刑事部長がかきまわした難事件を、ひき受けるのはやりにくいことだつたが、課長の命令であるから引受けないわけにはゆかない。同課の刑事を一人つれて、その日のうちにぶらりと龍野署へやつてきた。

署につくと、名刑事目上の名がすでにしれ

渡つていたので、署長がよろこんで迎えに出

てきた。ともかく、今日までの捜査経過を、捜査本部の人たちからきくことにした。席上、寺井司法主任や、県刑事課の新屋刑事部長もいて、女房やす説を飽くまでも主張していた。

彼は何も一言もいわず、その足でつれてきた部下刑事と龍野署の刑事一名、都合二人をつれて現場へむかつた。

彼はタッチしたどの様な殺人事件でも、今迄の開き込みや捜査方針を無視する男だつた。犯罪捜査は、被害現場の検分を第一とするのである。現場検分は、捜査の出発点であ

同性愛技法に就いての一考察

鹿火屋一彦著 袖珍判美装本
ソドミア性愛秘典
て未発表のものを堂々発表の
秘典！
定価 二百円 送料二十円

凄艶の姿を描く喜多玲子の傑作豪華秘帖八枚一組三〇〇円千共
玲子悦虐姿態素描集 (2)

被虐の家

価三二〇円三二円

キドロド・シュトック著 B6判二二六頁

東京都千代田区篠栗町1の3
株式会社 日本特集出版社
代理部



る。そこに犯
罪を証明し、犯
人を識別しえる無言
の犯した声がながれてい
るはずだった。だから、何物に
も囚われない白紙の状態で、その無
言の犯し、犯された血の声をきくことで

あつた。

彼は入念に現場を調べた。まず犯人の
侵入口はどこだろうかと考えて、侵入した個
所と思われる表入口の様子に、ふと目をひか
らせた。

入口の敷居に、店戸のところに、なにか刃
物のサキでコジあけたような形跡が残ってい
る。

「君、この店戸をこじあけた形跡があるが、
さきに検分された刑事達や検事は、何と言っ
たのかねえ」

と光らせた眼を笑いながら、目上刑事部長
はきいていた。

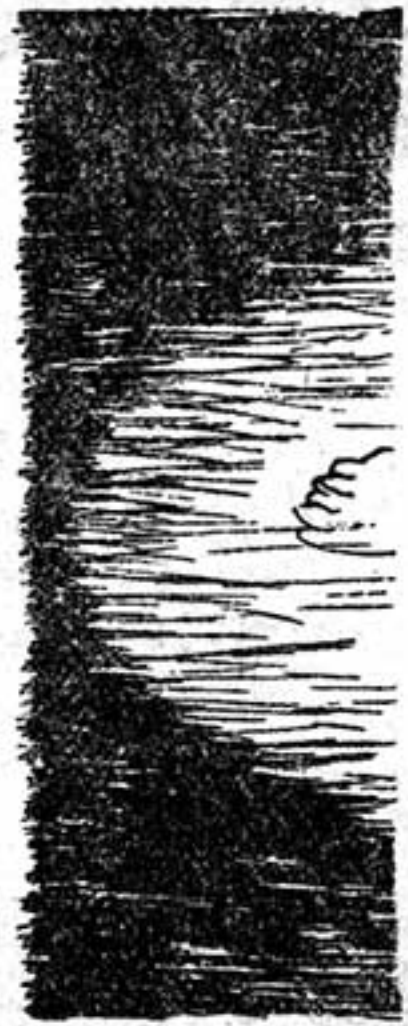
「え？ 誰も気がつきませんでした」

龍野署の刑事は驚いて、しまったというよ
うな、ドキリとした表情をみせた。

「これが肝心な犯罪捜査だよ。まさか、やす
という人妻が、こんなトリックの手口を使っ
たのでもないだろう。ははは……」

「とすると、目上部長。……犯人は、外から
侵入したというのですか。内部のおやすが、
殺したんじゃないと仰言るんですか」

「それなんだ。……やすは夫の秀次が、喉を
突き刺された時、夫の悲鳴で飛びおきたとい
う話じゃないかね」



龍野署の刑事は、これ迄の捜査方針をみじめにへこませるような、目上刑事部長の公明正大な声に、「はあ、左様です……」としどろもどろに答えた。

「彼女の陳述が、事実かどうかは君、聞き込み専門で当る手なんかないよ。彼女は夫のそばに寝ていたというんだから、彼女の寝巻を見ればわかるじゃないか。……本当に寝ておれば、寝巻の肩あたりに、夫の吹き出た血がついているよ。——それを調べたかねえ！それにこの蚊帳だ。熟睡中の夫を殺すのに、もしも傍らに寝ておれば、わざわざ刺しにくい蚊帳の上から刺すかね……」

「どうも、そんな状況を誰も調べなかつたのです」

と、とうとう龍野署の刑事は頭をかきかき本音を吐いた。

てしずかに、被害当時の状況や、彼女の行動について緻密で情けぶかい聴聞をした。それから、当時の着衣である寝巻をとりよせさせてみると、彼が想つたとおり、浴衣の肩に血痕が黒ずんでいた。

彼は即時、やすを釈放させた。犯人は、戸をこじあけた男だ。

こじあける程の手なれた男なら、他にこの様な手口で侵入をした被害現場はあるに違いないのだ。

彼は翌日から、国道沿線にそうて自転車にのりながら、姫路、石倉と犯行現場をさがしにペダルを踏みつづけた。

すると、姫路署の管内の或る駐在所まで走らせてくると、面識の一巡査が立番していた。

「よう高山君。君の管内に、最近盗難事件はないか」

「はあ、あります」

と答えて、高山巡査と一しよに被害現場を調べ歩いた。

すると三軒の被害家屋の表戸に、やはり刃物のサキでこじあけた痕跡がのこつていた。

そこで姫路管内にこの様な手口をやる前科者を高山巡査に調べさせた。ついに「要視察名簿」に載つていた村川秀夫という、十九歳の

変態不良を引っぱつてきた。

この村川が、龍野署に拘引されて泥を吐いた告白は次の様であつた。

村川は物盗りに入ろうと、店の間から奥の八畳に忍び込んでいった。小型の出刃で、蚊帳のなかに家族が寝込んでいるその蚊帳をL型に切り込み、切り穴からふとのぞき込んだ。すると、妻女のやすが浴衣の裾を乱して寝込んでいた。

十九歳の不良で、変質者の村川は金取ることを忘れ、むらむらと変な気持が起つた。そしてかがみ込んで、蚊帳の穴から手をさし込んだ。

やすは何か言つた様だが、目をさまさなかつた。ふと気がつくと、主人の方が「うむ！」と言つて、目を醒した。

顔を見られてはまずい、と突嗟に出刃で突き刺し、その拍子に右手を、蚊帳の網目で拭いてしまつたというのであつた。

目上刑事部長の現場検分の眼力が勝利をえた捕物実話である。

×

×

×

(おわり)

★女だけのたのしいサロン★

レスボス通信



……髪の毛いと、香水とが混じつたような甘ずっぱい匂い、それが私をいきなり包んだのです。……女だけの愉しく悩ましい招待

園村 恵子

△—▽

「恵子さんは、ナルシスつて喫茶店知らなくつて？」

或る日、私の家に遊びにいらした春江さんが例のいたづらつぽそうな眼を煙草の煙で細めながら、突然、そんな事をおききになりました。春江さんは新宿のある洋裁店のマダムで、私より十も年上の方です。

「知りませんわ。……私、あんまり外へ出ませんもの。どんな喫茶店ですの。キレイなの？」

「フムム」

と、春江さんは、意味ありげに、ふくみ笑いなさつて、

「別に、とり立ててきれいという訳じゃないけど、とにかく、一度行ったら忘れられない所よ。……連れて行つてあげましょ

うか？」

「ええ。……忘れられない位、いい所なら連れて行つて頂戴」

何の気なしに、恵子は答えてしまつたのですけど、それが、あんな喫茶店だと知つたら、きつと、もつとよく考えてからにしたと思ひますわ。春江さんて、本当に何を考えていらつしやるのか分らないような方。

それから、二三日して、春江さんからお電話がかかつてきました。(もつとも、恵子の家には電話ありませんの。表の薬屋さんに頼んでおくのです)

「ナルシス連れて行つたげるから、すぐ支度して、店へいらつしやい」

「あ、この間の喫茶店ネ。……ハイ、すぐ参ります」

「すぐによ。——それから、服は、あの焦茶のジャージね。あれ、着てらつしやい。一番似合うから」

私は、お見合いじやあるまいし、たかが喫茶店へ行くのに、服まで、気をつかうなんて、おかしいように思ひましたけど、それでも、ちゃんと云われた通りにおしゃれして、春江さんのお店へ参りましたら、ガ

チャンとレヂからお金を出して、

「じゃ、行きましょう」

そのナルシスというお店は、——あれは三丁目つて云うんですの？ あ、の辺にありました、

階下が美容院で、そのはじに、せまい階段がついてます。

看板も何もないので、二階も美容院のように見えましたが、上ると、ちゃんとした喫茶店になつていました。

窓にはレースのカーテンがかかつて、床の間風にしつられた壁には、真赤なカーネーションがたわつに活けてあり、……何だか、入るなり、甘い、夢のような雰囲気があったよつていました。

そこには一種の感じがありました。いえずいと云つた方が正確かも知れません。あの女だけがもつ、女が集まるところにかならずただよう髪の良い匂いと、香水とが混じつたような甘ずっぱい匂い、それが、私をいきなり包んだのです。

私はまだ、この店が、どんな所か知らなかつたのですけど、それでも、入るなり、この匂いに酔つたようになりました。
「マダム、ごぶさた」

「あら、お珍らしい、お天気がかわるわよ」

そう云つて、黒スーツの美しい人が、カウスターから出てきて、春江さんの両手を握りしめました。

「こないだの子、どうだつた？」

「あ、そう、そう、あれから大変。泣いてさわいでたわ。……どうして親切にして上げなかつたの？」

「だつて、……あんまり興味がなかつたんだもの」

「薄情ネ。」

「仕様がないわ。——」

「仕様がないつて、そう出来るから、あなたは大したものよ。」

なアんで、私には分らない会話をしてくら、

「あ、そうそう。このひと、恵子さん」

「あら！ この方？ いらつしやい。私

マダムのマユミ。御尊はかねがね」

と、まるで、自分の家へ招待したみたいになれなれしく、握手を求めてくるのですもの。ちよつとびつくりしました。

そのときになつて、私はじめて気がついたんですけど、このお店、いやに女が多い

のです。いいえ。よく見ると、女ばかり男はひとりもないではありませんか。

ヘンに、深いボツクスが、三つ四つ……五つほど、思い思いの方向にならべてあつて、そこに、お客（らしい人）が、三四人居るんですけど、みんな、それが女。……給仕のひとたちも、勿論女の子なんです。

一人、リーゼントみたいに髪をびつたりなぜつけて、びつちりと細いストラックスをはいている子が、ボーイさんのように見えましたが、それもすぐ女の子だつて分りました。だつて、歩くとき、ストラックスに包まれたお腰の動きかたを見たら、ちゃんと女でしたもの。

「春江さん、何なさる。」

とマダムが私たちを席へみちびきながらききました。

「そうね。ウイスキーでももらおうかしら——なアんで。ジンフリーズ。恵子さん、あなたもそれでいいでしょ。」

「ええ」

と私は、すつかり気を吞まれてしまいました。それで、席へつくなり、

「春江さん、ここ、あの女の方ばかりの喫茶店？」

と耳へ口を寄せてききましたら、

「あら御存知なかつたの？」

とマダムの方がびつくりした様子なので
思わず顔が赤くなつてしまいました。

△二△

やがて、ジンプリーズが運ばれてきまし
たけど、変つてゐるのは、それを運んでき
た女の子が、そのまんま、私たちのボツク
スへ、

「ごめんなさい」

つて云いながら、掛けてしまつたことで
す。

その子は、そう、十七、八位かしら。

まだ高校か、或は短大位通つてゐる感じ
で、髪は、「リリー」のレスリー・キヤロ
ンみたいに短かくして、上は黒のセータ
ー。下はねずみのストラックスでした。

そう云えば、ここの女の子は、それが制
服らしく、みんなピツチリしたストラックス
なんです。ヒップやウエストが、軀によく
似合つてゐるので、下に穿いてゐるものの
線までくつきり出て、そのあたりのしわや
曲線が、何だか、とても、悩ましいので
す。

お化粧は全然してません。だから、赤い
石のイヤリングが、とても目立ちます。

春江さんとマダムが、私の向うで、し
きりに、何か、こみ入つた内緒話してゐる
ので、その女の子は私のわきへすわると、

「おのみになりません？」

と、すすめてくれました。その調子は、
何て云つたらいいかしら、まるでバアの女
給さんがお客にお酒をすすめるときのような、
職業的な媚びがあるのです。（と云つ
ても、恵子、女給さんて知らないんですけ
ど。）

恵子の方が、まるで男の前へ出た初心な
娘のように氣づまりになつてしまつて、

「今日は、割と、あつたかネ」

なんて、詰らないことを云つちやう仕
末。

でも、恵子が上氣してたのは、そのせい
ばかりではありません。

私の所から、良くみえないんですけど、
窓のそばのボツクスで、さつきから、しき
りに女の人が、顔をふせて泣いてゐるんで
す。（若い子ですけど、ここの給仕さんで
はなさそう。）

それを、和服をきた、若奥様風のひとが

肩へ手をかけてしきりになくさめていたと

思つたら、……いきなり、泣いてゐる子の
方が奥さんに抱きついて、すごい、情熱的
なキツスを、はじめたではありませんか。

奥さんの方も、袖がまくれるのもかまわ
ずに、その子を、腕一杯に抱きしめると、
それは、みている方で、顔が赤くなるよう
なキツス。

恵子のいるここまで、その、荒い息づか
いがきこえてくる位で、その合間には、

「愛してね、ネ、愛してネ」

とか、

「いいのよ。本当はあなたのこと好きな
の」

なんて、合の手が入るンでしよう？

恵子、それでなくても、ドキドキしてた
所ですから、たまつたもんじやありませ
ん。やけみたいに、ジンプリーズをのみま
す。

春江さん達も、さすがに氣がついて、

「なアに、あれ？」

「ここんとこ、大変なのよ。こつちの子
は、ホラ、一時、フアツションモデルして
たつていうケイちゃん。」

「あら、もう、相手がかわつてゐるの。だ

れ？」

と、あごでしやくると、

「いずれ、どこかの会社重役か何かの奥様なんでしょう？ いつも車でくるのよ。かくれ遊びでしょう。一日おき位に、時間を打ち合わせてきて、あんな風にやつてんのよ」

マダムの方は、まるで、他人事みたいで

そのファツションモデルと云う子は二十一二位。奥様風のひとは、それより四つか五つ上ようです。豊満な軀が、着物の下でうごいているようで、家へかえれば、さぞ、いい奥様でしょうに、どうして、こんな所へきて、しかも、女の子などを相手に遊んでいらつしやるのでしょうか。

旦那様を守っているだけでは不満。と云つて、よその殿方を相手に、うわきをなさるのは、危険だし、第一、旦那様にすまないという気持の奥様かも知れません。

女の子相手の浮気なら、どつちにしても、大したことはない、そんなことを考へて、こうして、ひとときのささやかな放蕩をたのしんでいるのかも知れません。

何か、ひそひそ声で、熱つぽく囁き合つ

ているようなのですが、それは、きこえてきません。

「ここは、だれでも、きていいの？」

私は、だまつているのが怖いみたいな気持になつて、わきの女の子に話しかけました。

「いいえ会員の方だけですわ。」

ああ、そう。じゃ、……私なんか、いけなかつたのネ

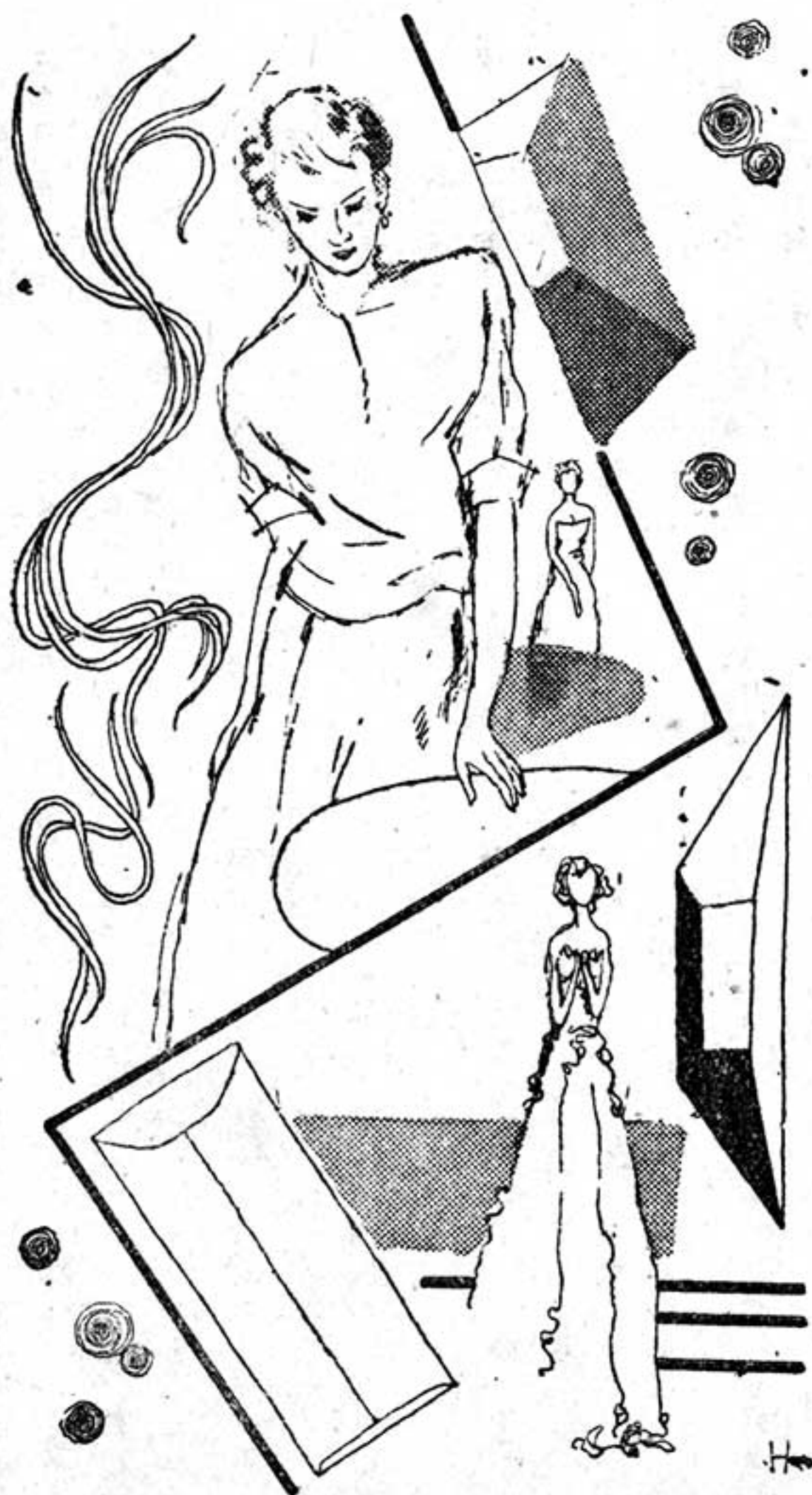
「でも、会員のかたと一緒にいらつしやれば……」

「ああ、春江さんが会員なのね」
女の子はうなずくと、立つてレコードをかけ、

「踊つて頂けません？」
と、優しく私に申込みました。

△三△

私が女のステップで、その子がリードするんですけど、そんな事になれているらしく、とてもそのリードがうまいのです。軀全体をびつたりと、押しつけるように



くつつけて、急所急所で、足さばきもたくみに柔らかく、リードするンです。

だから女同士おどつていいるという感じよ、とても上手な男のかたに抱かれています。感じて、それでいて、押しせまてくる軀は柔いんですから、三四曲続けていいるうちに、恵子がポツとしてしまったのも無理ないでしょ？

自然に、軀が、もたれるようになつてきてステツプも乱れがちになります。するとその子の方でも、益々上手に、粘るような足さばきになり、一とこで、くるくるまわるターンなど、多くしてくるのですもの。

恵子が、リードされながら、どんな気持ちになつたか、皆様の御想像にまかせますわ。

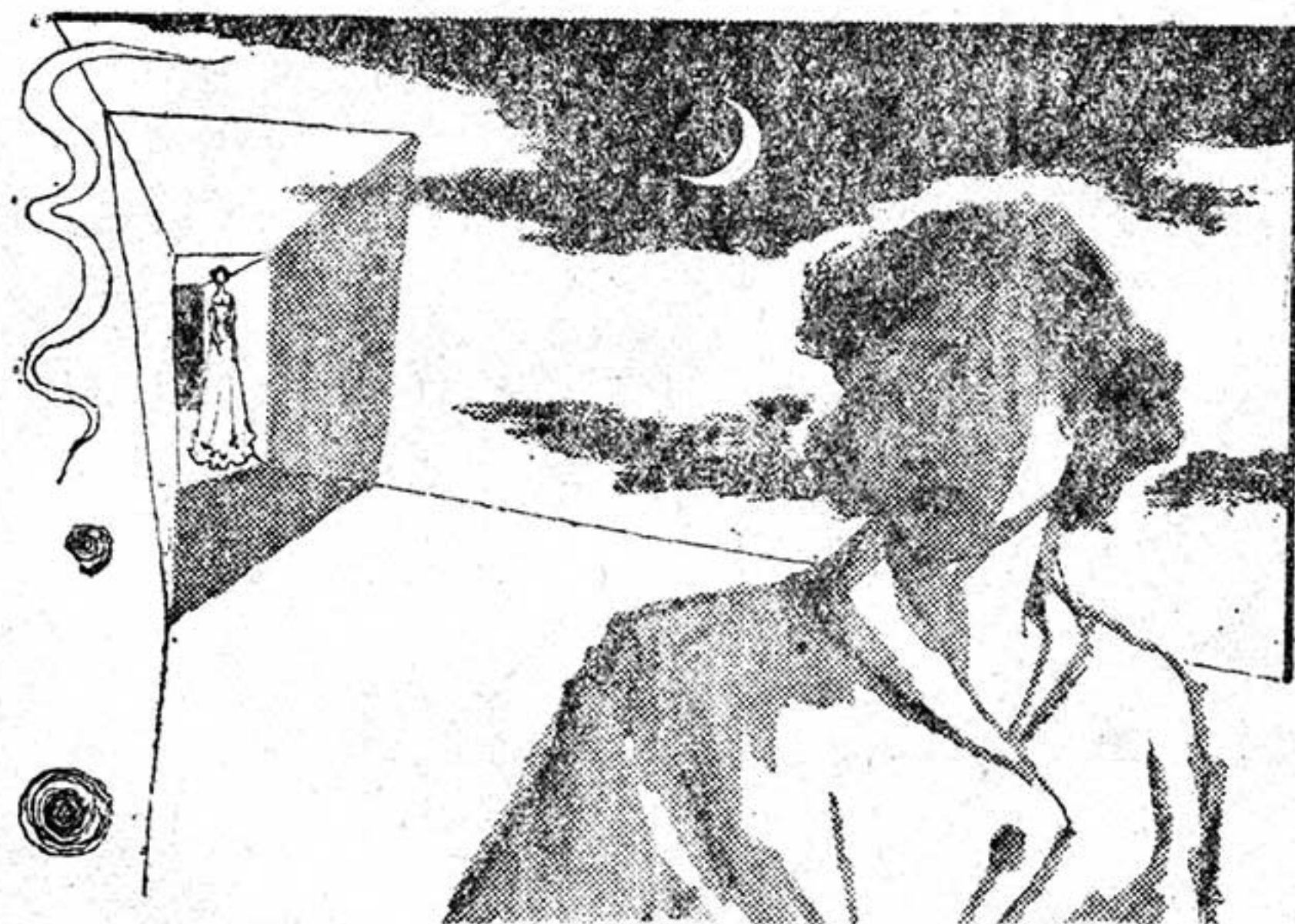
考えてみると、おかしいわ。

だつて、この子、いくつか知れないけど、恵子の方が、ずっと年が上でしょう？

恵子もレスボスの経験、豊富なモサですけど、いつも年下の子に対してはリードする方であつて年下の子にリードされた事ありません。それが、今日

は、こんな風にあしらはれて、結構ポツとしていいるんですから。

ぐるぐる廻されていいるうちに酔いも出てきたので、私は、目をつぶりました。



その子の鼻息が、えり元にくすぐつたく、私のお乳が、その子のそれと、ぶつかつて、押しつけられるたびに、切ないような気持ちになりました。

いつか、その子の、柔らかいしめつた唇を頬に感じ、「あ」と思つていいるうちに、それが、ずれてきて、私の唇のはじめに、押しつけられました。

私は、思わず、軀をかたくしましたわ。会つてから一時間もしないうちに、名前も知らない子と、——と一瞬、厭悪感みたいなものが、つきあげてきましたけど、……甘い、そるような音楽の流れと、女の感覚にたくみに乗つてくるようなリードのうまさに、それも、自然に消えて。……

それでも、その一瞬、

「ダメ」

つて云つたつもりでしたが。——

どうせ遊びなんだし、接吻位、そんなに深く考えないでも、と、半分は、放埒な気持ちになつて、許してしまいました。

△四V

男のかたが、カフェやバーで、味う気分がちよつと分りました。店全体が、そんな

雰囲気をもつていると、そのなかで一人だけ、チャントしているつて事、とてもむずかしい事なのね。

一組は、若いお客様と、ここの女の子。これは、手をとつてお話をしていました。

もう一組は、ちょうど、私がみたとき、きやつきやつと、ふざけながら、口うつしに、何か吞ませようとしてました。

春江さんとマダムまで、うつとりと、恋人みたいに抱き合つて、音楽をきいているんです。

席へもどると、春江さんが、

「恵子さん、四月になつたら旅行に行かない？」

と話かけてきました。

「あら、どこへ行らつしやるの」

「いま、相談してただけだよ。熱川か湯が野あたりがいいんじゃないかと思つて」

「熱川つて行つた事がありますわ。お風呂が海に向つていて、朝日が、まっすぐに、お風呂場へ入る、とつてもいい所よ」

「素的じゃない！ そんなお風呂にみんな、キヤツキヤツと騒ぎながら入つたら壮観よ。きつと。」

「皆んなつて、そんな大勢でいらつしやるの？」

「ウン。ここのクラブの人たち、女ばかり集まるのよ。いいでしょ」

「まア！ なんだかすごいみたいね。：私も行きたいけど」

「向うで、色んな遊びやるのよ。ネ」と春江さんはマダムと目をみ合わせて、

秘密っぽくうなづき合い、

「恵子さんもういらつしやいよ。」

「本当にいらつしやいませな、恵子さんみたいなおきれいな方が行つく下さるんだつたら、みんなハリ切つちやうわ」とマダムまで御上手をいいました。

△五△

帰途、

「どうだつた。あの喫茶店」

と、ニヤニヤ笑いながら春江さん。

「ひどい方ね。いきなり、あんなところへつれてつて、私びつくりしてしまつたわ。前もつてそ云つて下されば良かったのに」と私。

「でも、満更じやなかつたようじやないの？」

「知らないわ。——あそこの会員になるには、どうすればいいの？」

「フム。興味もつたらしいわネ」

「別にそういう訳じやないけど」

「会員つたつて、会費さえはらえばいいのよ。維持費みたいなモノをね」

「いくら位かしら」

「月千円だつたかな。何でもその位よ」そんな話をかわしながら、かえつてきました。ささやかな、真昼の大気のなかの快いけたるさを四肢に感じながら。

△六△

皆様御元気でいらつしやいますか。

今日は、この間、春江さんにつれられて行つた新宿の喫茶店の事を書いてみました。

これをよんで会員になりたいなんて、お思いになる方がいらつしやるかも知れませんがね。

(この回終り)

☆懸賞原稿入選作品・第三席☆

三 木 武 神 崎 勲 画



灼熱のインドシナ、捕虜収容所を
脱走した一人の男がふとまき込
まれた異常な世界！ 女の肌を
傷つけて陶醉する富豪の寢室で
——購われた彼が経験する狂
った夜々！

異常な脱走

1

吉田仙一は、なんとかして収容所から逃げだしてやろうと心を決めた。

昭和二十一年の二月ごろである。二月といつても、吉田が抑留されていたサイゴン郊外のチイホア地区は、内地の真夏以上の暑さだった。もう何カ月も、雨なんか、一滴も降らない。乾季の絶頂、ものみな、からからに乾き切っていた。夜が明ける。カボックの木がまるでターザン映画の背景のように五、六本、はるか彼方に立っているあたりに、美しい朝日が顔を出す。ぱアと、いつべんに、そこらあたりが明かるくなり、いきなり、ぎらぎらッと照りつける。あッと思うひまもなく、もう真昼の暑さだ。

広場の階に、たつた一本だけ、しかし、傲然と、根強く立っている、高さ十メートルもありそうなフランボイアン（火焰木）が、葉なんか一枚もない裸木のくせに、無数の、大きな、毒々しいまでに赤い花を枝いっぱいにつけ、それに、朝ッぱらから燃えるような太陽がぶつかつて、まるで、悪魔が、そこに降り立つてきたように見える。

吉田仙一は、いらいらした頭の髪を掻きむ

しりながら、さも憎々しげに火焰木をにらみつけ、それから窓越しにベツと唾を吐いた。なんとかして、この呪われた場所から脱出しよう。

みんな、広場の向うの二千坪もある荒地を開墾して、最小二坪以上の菜園を作っていた。吉田も、石ころだらけの最小面積に、皮が真赤な、蕪に似た大根を作っていた。

「お早うございます」

やはり、水を撒きに来た、隣の畑の責任者である読売新聞の報道班員だつた男に声をかけた。

「お早う」

「ばかばかしいですね、いつ日本へ帰れるかもわからなくて、まい日大の男が、こんなことをしてるなア」

「そのうち帰れるよ」

その小柄の新聞記者は、ぶっきら棒に答えた。

「ほんとに帰すでしょうか？」

「帰すにきまつとるさ、荷厄介なもの」

「引揚船が来る話はありませんか？」

「ないね。いま、朝鮮や満州を帰えしとる。次は台湾やヒリッピン、それから太平洋の島々、その次あたりだね、インドシナは」

「じゃ、まだ半年くらい先になりますね？」

「半年？　じようだんぢやない。まア三年くらい先さ」

仙一は、だまつてしまった。よオし、どうしても逃げだす。三年も、こんなことをしてられるかい。今日、もし、テエンが来たらぎりぎりの彼女の本心を訊いてみよう。

十一時半、まッ白い安南服の裾をひらひらさせてテエンが収容所

の入口に現われた。いつもなら、彼女が、面会所に入つてから、当番の者が通知にきてから出かけるのだが、今日は、彼女の姿を見た。とたんに、すぐ靴を穿く仙一だつた。

面会所は広場の中央にある。細長い七坪ばかりの小屋で、屋根は板葺き、周囲の中央をぐるりと葦簾で囲つてある。ベンチが幾つか置いてあり、外から見ると、中にいる者の足だけ見える。

まい日、午前中、支那人や安南人たちが面会にやつてきた。たいていは、日本人はなかなかし頃に使つていた女中やボーイで、落目になつた旧主人に菓子や果物を持つてきてくれるのである。恋人も来た。うつくしい、若い女は、たいてい抑留されている日本人の恋人だつたか、それとも女中兼女房の地位にあつた者だ。

そういうのが、差入れや面会に来た、テエンも、もとは仙一が使つていた女中だつたが、いつの間にか女房のようになつてしまつた。仕方がないので、彼は、別に年増の広東女を雇い入れねばならなかつた。

「どうだね？町は静かになつたようじやないか？ここ二、三日、鉄砲の音を聞かないよ」

「んん、彼女は首をふつた。「シヨロンの

町たいへん。まいにち誰か殺されてる」

昨年八月、終戦までは比較的平穩だつたインドシナは、戦争が終つた日から戦争がはじまつた。つまり、民族の独立と解放を實際行動に起したヴェトナム（越南）とヴェトナム（越盟）、あくまで植民地を保持しようとするフランス、日本軍の武装解除にやつてきた英印軍、これらが、ごつた返すサイゴン、および隣の町シヨロンを、たちまち市街戦、テロの町に化してしまつた。ことに、ホーチミン系のヴェトナムは、なかなかもつて活潑な動きをみせ、ついこの頃まで、吉田仙一がいる収容所にも、日夜、銃声が聞えてきた。

「や、日本人の一人や二人、そこらに隠れていたつて解りやしないだろう？」

「あら、知らないの」、テエンは仏さまのような丸くて福々した顔をあでやかにほころばした。「日本人なんて沢山いるわよ。共産軍のほうにも沢山いるんですつて。それや、大ぴらには歩いていないけれど、みんな、安南人や中国人になつて、けつこう楽しんでるわよ」

「女がある連中だろう、みんな？」

「そう言えばね」

「兵隊に聞いたんだが、モクハイ——共産軍

義勇隊のこと、市中行進をするとき、一ツ二ツ一ツ二ツ（モツト、ハイハイ）と歩調をとつたことから日本人は彼らをこう呼ぶようになった——に入ると、すぐに将校にしてくれて女を一人あてがつてくれるそうだが」

「女は、ここに、もうちゃんというる」

「ぼくはね」、と仙一はあたりを見まわした。「ぼくはあの——」

テエンは、じつと、うるんだ眼で男を見つめた。仙一のほかに、面会者は二組だけそれも、年とつた広東人の女で、ずうと向うの隅に離れていて、とても、こちらの安南語の会話なぞ聞えやしない。

「ぼく、お金をもつてるんだ」

彼は、小声だつたが、ずばりと言つてのけた。

「え？」

「五万ピアストル。べつにアメリカドルが七百ドルばかり」

日本人は、誰一人もお金は持つていないハズだつた。英印軍が、日本軍を武装解除し、ついで一般在留民も諸所に収容したとき、所持金は、みんな提出させ、それを収容費に当てたのであつた。

吉田仙一は、ある機器会社の仏印駐在員だった。右の所持金提出のとき、自分の金だけ出して会社の金は隠して持っていた。さいわい、イギリス軍は、個人の所有品を一々検査するようなことをしなかつたので、今日まで、何事もなく過ぎてきた。

彼が、収容所を脱出しようとした原因の一つは、この金であつた。第二の原因は、いま目の前にいる、かわいい、好色な安南女であつた。

「来る？」

女は、ぴたっと身体を寄り添つて彼を見つめた。太ももの感触と腰の線が、うずくように彼の脳髓を刺戟し、彼の感覚に浮んだ。

「行く。きつと、近いうち。お前のところへ」

「いつ？」

「何時とは言えない。チャンスあり次第だ。お前は、シヨロンにいると言うが、くわしく場所を教えてください」

彼は、何気なく面会所を出て、いつたん部屋に戻り、紙と鉛筆をポケットに忍ばせて女のところに引返した。

テエンが、まっ白い裾をひるがえしながら収容所の入口へ来ると、フランス軍から警備

を命じられている日本兵が、バカ丁寧に頭を下げて彼女を出した。

仙一は、鉄条網のあいだから、まっ白に灼けた、まぶしい埃道を、お尻をふりふり白一点になつて去つて行く女の後姿を放心したように眺めていた。

2

昭和二十一年二月二十一日。この日、ホー軍のゲリラ隊は、夜八時を期して一斉に行動を開始した。カチナ通りのフランス映画館の観客席に手榴弾が投げられ、サイゴン港の砲艦が三角州から砲撃され、シヨロンの兵營が襲撃され、シヨロン—サイゴン街道にある燃料貯蔵所が燃え上がった。

たちまち、収容所の周囲に銃声がり、ひっきりなしに機銃が鳴りはじめた。柵のすぐ向うに、ぱちぱちと物凄いい音がしたかと思うと、ぱちと大きな火焔が空一面に上ぼり、だんだん大きく、真ッ赤にひろがった。じつさいは、収容所から一キロも離れた燃料タンクだつたが、すぐ目の前のように見えた。

今だ、と吉田仙一は思つた。約三百人の日本人の男女子供たちは、一人

残らず広場に出て火事の空を見上げていた。火事場と収容所との間は、起伏した原野なので、誰も、火がこちらに移る心配はしていなかつた。どうせ、安南とフランスの喧嘩、対岸の火災見物といった気持があつた。

だーん。大きく、一つ、爆発して、どつと火焔が天に沖した。

仙一は、そうと、独りで部屋に引返し、トランクの底に何時でも持ち出せるように長い布にくるんだ札束を引張りだすと、腹の上に縛りつけ、サンダルを脱いで普通の靴に穿きかえ、トランクなどをベッドにのせ、更に毛布をかけ、頭を埋めて寝ているように装つた。こうしておけば、明日の朝まで大丈夫だ。

暗い、月のない夜だつた。彼は、ぶらりと、きわめて落着いた態度で広場へ出るとかねて見当をつけておいた菜園の向うへ闇にまぎれて歩いて行つた。

誰にも見られなかつた。みんな火事に夢中になつていた。

びゅん、と小銃の弾が収容所に流れこんだ。続いて、だん、だん、だん、と三発、すぐ近くの民家のあたりで撃つた。わつと

ばかりに、みんなが各自の部屋に逃げこみはじめたのが窺われた。が、ちょうど、そのとき、仙一は、人間が出入できるくらい掘られた鉄条網の穴から外へ潜り出ていた。だいたい、この穴は、夜になると、そこらの安南人の娘やオカミさんが、日本人の時計や洋服と交換に菜園の隅、灌木や実のならないバナナの木立の蔭に寝に来るために出来たものだった。

今日、仙一は、運河まで材木かつぎに行つた。総勢三十人。今日は独身男ばかりで、野暮な生真面目さを売りものにする女房持ちの班長でなくて、休憩のとき、何気なく民家に入つて逃げ出せないこともなかったが、看視しているフランス兵が、見るからに残忍そうなコルシカ兵二人で、逃げた、あそこだ、だ、ん、背中に一発、平気でくらわしそうな面構えだった。

吉田が、そんなことを考えて、カルメンに出てくる山賊然としたコルシカ兵を盗み見ているヒマに、器用な連中は、針金を曲げて海老を釣つた。内地の伊勢海老の倍くらいもある化物みたいのが十四も二十匹も釣れた。そこらに亀が何十四といて、さかんに土手に這い上がってきた。

だいたい、抑留日本人には労働をさせなかつた。材木運びといつても、収容所の燃料にするための物である。それでも、みんなは、ひどい目に遭つてゐる気がしていた。途中、市場のところでも逃げる機会があつた。しかし、仙一は、今日は止めようと吐ききめていた。

が、とうとうやつた。いま、彼は、収容所から二百メートルばかりのところ、まっ暗な原っぱを急いで西に歩いている。右手に、闇空に黒く、大きくチイホアの監獄の影が見える。昼間は、外人部隊の兵營のような黄色い、高い壁だが、今は、ただ一団の黒い塊。門のあたりの強い電燈が、はるかこちらまで照らしているような気がする。走つてはいけない。もし、見つかると、どこから、誰に射たれるかも知れない。左手の火事は、ますますはげしくなつた。

彼は、ゆつくりと原っぱを横切つた。遠い。遠いが、その原が終つたところにシヨロシへ通ずる間道の一つがあることを知つていた。正面の民家の群に激しい銃声が上がつた。しかし、彼は、その銃声に近づいて行つた。やつと原を突切つて道に上つた。人の気配はない。後をふり返つてみると、ただ黒一色

収容所も監獄も見えなかつた。ただ、あい変わらず燃えつづける火事が、天の一角を大きく赤く焦がしていた。

鉄兜の一团のフランス兵を満載したトラックが、サイゴン方面からシヨロンへ向けて全速力で走つて来た。仙一は、がばと道の横の凹みに伏せた。

その夜、彼は、べつに誰にも咎められずに、市街戦の中華人町を通つてシヨロン水兵街の大南旅舎にたどりついた。

テエンは、約束の部屋にいた。ただし、髪にこてこてポマードをつけた瘦せた安南人の若造がいた。仙一が部屋に入つて行くと、彼女は、口早に何か青年に言つて、入れちがい外へ出してしまった。

「誰だ？ あいつ？」

「大丈夫、心配いらぬ人。友だちよ」

ここまで来るのは大変だったぞ、と今迄の労苦を語り、さぞ相手が感激して慰めてくれるだろうと、言葉が咽喉まで出かけ、身ぶりが手の先に始まろうとしたが、どうしたわけか、ふいと妙な気まずさが立ちのたかり、映画などの中の人物のような身ぶりも言葉も出せなかつた。だいいち、彼女が、感激しなかつた。いきなり抱きついて



も来なかった。

「お金は？」

ドアに鍵をかけると、彼女は、しずかに訊いた。

「これだ」

彼は、それでも昂奮がおさまらずに、荒々しくシャツを引っぱり上げ、腹に巻いた布包みを取り出した。

「あたしが持っていたほうが安全ね」

「うん」

簡単に、女に渡してしまった。

「ここは危いから、明日、あたしの伯母さんの家へ行きましょう」

「うん」

こうして、吉田仙一は、昭和二十一年二月二十二日から、シヨロンの場末の安南人町の一角で生きる身の上になった。

シヨロンは、名実ともに華僑の町である。南部インドシナの商工業の中心だ。それは、朝から朝まで不眠の町であり、米やゴムの大集散地、貿易の中枢、歓楽と犯罪の巢である。昨夜、あんな物凄い市街戦があつたのに、一夜あけると、昨日と同じ賑かさ。そろそろと何処からともなく人間が通りを埋め、『発財請進』の字もあざやか

に、各種のバクチ場が公然と店を開き、シクロが、馬車が、自動車が出た返し、ダンスホールでは、フランスの水兵と眼の吊り上がった潮州美人が大はしやぎをはじめた。

吉田仙一は、一カ月ばかりは外出しなかった。しかし、まい日、汚い裏町の、黄色い二階の一部屋で、汗と暑さにうだりながら、石版刷りの絵本ばかり見ていたのでは、とてもやりきれなかった。はじめの一週間ばかりは久しぶりにテエンの肉体に生き甲斐を再発見して時間を忘れたが、すぐに、それほど興味も湧かず、感激もしなくなつた。だいいち、彼女が、むかし彼の杜宅にいたときのように全身をわななかせて女の喜びにひたりきるということを示さなかった。ひどく事務的になり、ときには嫌な顔さえした。

まい日の食事もひどい物だつた。当座こそやや気のきいた広東料理など持つて上がつてきたが、すぐに、見たこともないような安南人独特のぞつとする食物ばかりになつた。

「お金はあるはずだ。もつと何とかしろ」

彼は、皿を叩きつけて血相を変えたが、二言目には脱走日本人という冷たい声にすくんでしまった。密告されたら、すぐにフランスの憲兵に捕まつて、あのチイホアの監獄どこ

ろか、鳥も通わぬプロコンドル島送りになるかも知れない。フランス兵の残虐性や植民地監獄の地獄性は、かねてよく聞かされてきた。

吉田仙一は後悔しだした。収容所が狭くなりはじめた。バカだつた、俺は。彼は、むしむしする狭い部屋にただ独り、ごろんと仰向けになつて、天井を窺うヤモリの一挙一動を観察した。バカだつた。

「お金を返せ」彼は上ずつた声で怒鳴つた。

「ぼくは収容所へ帰る。もう、やりきれん」

「帰つたら監獄行よ」

「お金を返せ」

「なんの金？」

「ぼくが渡した五万ピアストルだ」

「ああ、あの金」、テエンは動じなかつた。

「あれは、あんたの食費や親戚お友だちの口止料に無くなつてしまつたわ」

「嘘をつけ。そんなに早くあれだけの金が」

「ほんと、じつは、こないだから、あんたのために、あたし、働いてるのよ。人の氣も知らないで」

仙一は、今にも女につかみかろうとした。しかし、もし彼女が、ちよつと大声を出しさえすれば、すぐ街角に立つてゐる警官が

くる。続いて憲兵がくる。

「ちくしょう！」

彼は歯噛みをした。テエンは、艶然とほえんで言つた。

「ね、あんたも、こうして閉ぢこもつてばかりいて、ほんとに堪らないでしょ。わかるわ、その氣持。でも、お金、ほんとに無くなつちやつたのよ。だから、あんたも、ひとつ、働いてみたらどう？ 一週百ピアストルくれる広東人があるわ」

「何をするんだ？」

「何でも老人で、身のまわりの世話をするボーイよ。ほかに女中や下男もいるから仕事はラクよ。あんた、安南人だといつて住みこめばいいわ。じつは、あたし、その家へ通いの女中に行きはじめてたの」

一週に百ピアストルとは豪氣なものだ。百ピアストルあれば、男一人が一カ月は生活できる。すると一カ月に約四百ピアストル。だいたい、戦前の機器会社の駐在員のときと同じくらいの収入になる。とにかくここにじつとしてゐては身体が腐つていくようだ。働こう。

吉田仙一は、その夜、テエンに連れられてシクロ（三輪車）に乗せられ、どこをど

う走ったか、深い木立に囲まれた広荘な家に行った。

3

安南人チュン・ニョン・チャオ、実は日本人吉田仙一は、王元という広東人の老人に会った。雲つくような大男で、年の頃は六十歳くらい、中肉の、白髪が七分の、見るからに精悍そうな主人であつた。

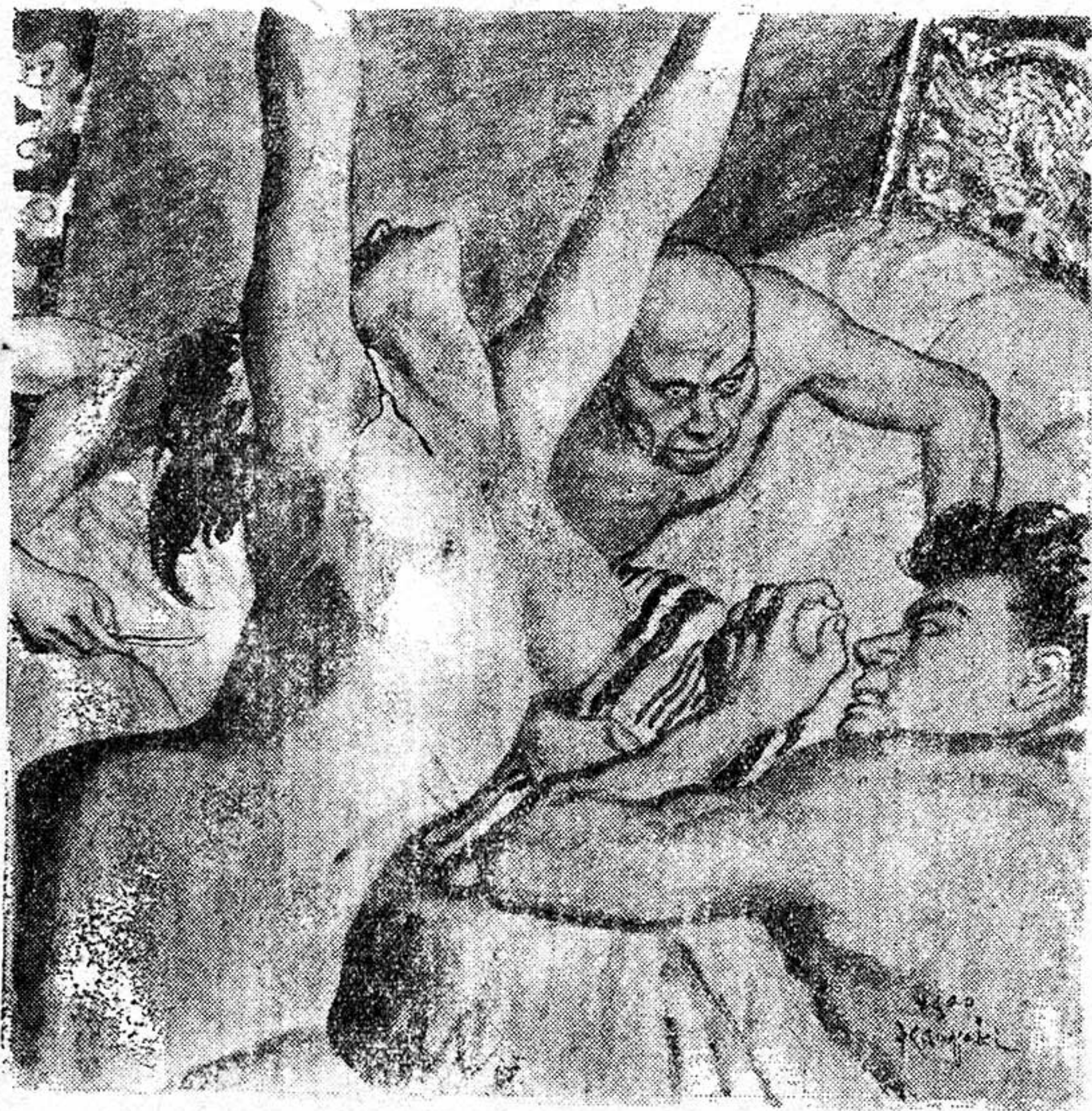
「一週間に一ど、わしの相手をしたらい。あとは自由に遊んでいてよい。ただし、女と戯れることは厳に禁ずる」

老人は、こう言つたきりだつた。仙一は、テエンに案内されて母屋とは別棟の召使部屋に連れて行かれた。小さな部屋だつたが、今迄いたところとは雲泥の違いだつた。ベッドも上等だし、調度も立派だつた。テエンが運んできた食事も御馳走だつた。

「町へ出たつて、庭を散歩したつていいのよ。ね、夜になつたら忍んでくるわ」

が、その夜、彼女は、とうとう来なかつた。朝になつて御飯を運んできたのは見知らぬ広東女だつた。

彼は、さすがに町へは出なかつたが、二日目になつて、その邸の庭に出てみた。広い、



御殿みたいな広大な庭と建物だった。町の騒音などは全く聞えず、しーんとして田舎の大別荘にいる心地がした。きつと有名な富豪にちがいない、あの王元という爺い。これだけの邸は、シヨロンでも五つとあるまい。いったい何者かしら？

あくる日、テエンが来た。主人が呼んでいるという。仙一は、すぐに頭をなでつけてテエンの後に従った。

こないだ面接した部屋を通り抜けて奥の部屋に入った。フランス風の低いベッドが二つ左右の壁際に置いてあり、突きあたりに安楽椅子やその他の家具があり、中央の床には厚い敷物が暑苦しく敷いてある。天井には大きな扇風器が、ゆつくりと廻っていた。

ベッドの一つにフランス人の女が腰かけていた。ほとんど裸といつてよいくらいの半裸体。もう一つのベッドに、サロン様の腰巻をつけた王元老人が腰かけていた。

吉田仙一は、ぎくつとした。いきなりフランス女の裸にびっくりしたのである。彼は、どぎまぎして視線をそらした。テエンが、がちやつとドアの錠をおろした。

「はッはッはッは」、老人は大きく笑った。「驚かんでもいい。これからお前の仕事だ。」

一週間に一度だけだから心配せんでもいい。まアお掛け」

彼は、老人が示す突き当りの椅子に、きよとんとして腰を降した。すると、テエンと半裸のフランス女がやつてきて、彼の上衣を脱がし、シヨートパンツを取りにかかった。

「あ、それは——」

仙一は、かすかに逆つたが、みんなの気配に圧されて結局ハダカにされてしまった。よく観察すると、フランス女だと思つたのは、年のころ二十四、五歳の仏支混血女であることがわかった。均整のとれた、胸の美しい、すばらしい美人だった。

いつの間にか、テエンも、そのだぶだぶした安南服を脱いでいた。どうなることかと、仙一が、はらはらして、前に両手を置いたまま辣んでいると、テエンは、さつさとズボンを脱ぎ、あッ、とうとう真ッ裸になつてしまった。

老人が立上がった。そして、仙一など無視して、テエンと協力して、その美しいメチス（混血女）の両手を高く上げて、蚊帳を吊るベッドの柱の一本にくくりつけた。それから老人は、無難作に彼女の最後の覆いを剥ぎとつた。

吉田仙一は、すっかり気が顛倒して、何がだかわからなくなつた。ただ、虚ろの眼で、眼前の、うつくしい混血女のからだを見るだけだった。

「いいか」

王元は、一言つぶやくと、いつの間に手にしたか、メスとも針ともつかない、きりと光る物で、混血女の腕の静脈を少し切つた。ぷつと赤黒い血が噴きだし、すうと二の腕に糸を引いて流れた。

「はッはッはッ」、老人は吉田をふり返つて笑つた。「おどろくことはない。この女は、わしの妻だ」

彼は、じつと、喰い入るように、しかし恍惚として一条の流れる血に眺め入つた。それは、二の腕の裏から腋の下横側をまわり、乳房を匍つて、まっすぐ腹に沿うて落ちてきた。そのとき、腋の下横のところにから新たに支流が出来て、細く脇腹にも糸を引きはじめた。

「はッはッはッ」

老人の、気味の悪い笑い声が部屋ぢゆうに響いた。彼は、ふるえる手で、しっかりと仙一の肩をつかみ、もう一方の手でテエンを引き寄せた。といつても、彼は、とう

歪んだ情事



★「こんな私は変態なのかしら?」「ど
★うも俺は変質者らしい」などと意外
★に多くの人が自分を疑っている。コ
★ントの大家が周辺のそんな男女から
★拾った、これは粹でエロテイクな風
★流挿話集!

武野藤介

§ 第1話 §

読売新聞の例の「人生案内」の身上相談に
美川きよ女史の担当で、「人の前でも関係を
迫る酒ぐせの悪い夫」というのがあった。そ
の全文に曰く。

「結婚後三年になる二十七歳の人妻。夫は酒
ぐせが悪く、酒を飲んだ後には必ず肉体を要
求します。それも祭日などに人様が来ている
前でも平気で振舞うのです。現在は子供もあ

りませんので少しはよいのですが、将来子供
でもできてから、こんなことをされたらと悩
んでいます。夫は昨年の四月にも近所の若い
女性と関係したことがあります。これまでは
酒の上故と許して来ましたが、この間も人様
の前でこんなことをされ、それ以来、近所の
方に顔を合わせるのも恥ずかしく、毎日暗い
日を送っています。取るべき方法をお教え下
さい」(原文のまま)

美川女史が、これに回答を与えた結論は、

この夫は、「暴露性」と残忍性の所有者で常人
ではない。かかる変質者と同居していると妻
まで同じような変質者になつていく実例があ
る。根本は、夫を医学的に診断して貰い、変
質者ならその遺伝を子に残さぬ手段を講じる
とか、離婚も覚悟する厳しい妻の威厳を示す
べきである」と云っている。

ここに「暴露性」とあるのは露出症の意味
で、「残忍性」とあるのは加虐症の意味でも
あるのか、もとより、この夫は「修身の教科
書」に出てくるような人物ではない。が、質
問者にも回答者にも誇張がありはしないかと
思うのである。

第一、酒の上で「女」が欲しくなるのは、
誰しもありがちなことで、また、その酔余、
人前で妻に挑んでくる夫といつても、古川柳
に、「女房のすねたは足を纏にない」とある
とおりで、「強姦」のできるわけでもなく、
ただ、「ふざける」だけのことだとすれば、
あながち、変質者ともいえないのではない
か。むしろ、夫の、妻に対する愛情で、その
愛情を人前で誇示してみたいからかも知れな
いのだ。愛すべき狂気とさえいいたい。

チェよりの手記に、客好きの夫婦の話があ
るが、この夫婦は、誰か第三者がそこにいな

いと、夫婦喧嘩ばかりするからだというのだ。

僕の知人のH夫婦。子供は無い。夫婦とも麻雀好きで、自然、夜も遅くなれば、客を泊めるのであるが、外に部屋もあるのに、夫婦の同衾している同じ部屋に客の寢床を敷くのである。勿論、暗闇の中だが、客の寢息をうかがいながら、そのスリルの快味が、夫婦には習慣的になつていゝらしい。そして、子供の無い家庭的な淋しさにかこつけては、客を泊らせたがるのであるが、親しい麻雀友達のそれ等の客が「狸寝」していることを、いまだに、この夫婦は知らないのだ。知人間には有名な話。

が、これなども変質者とは断定いたし兼ねるのである。

§ 第2話 §

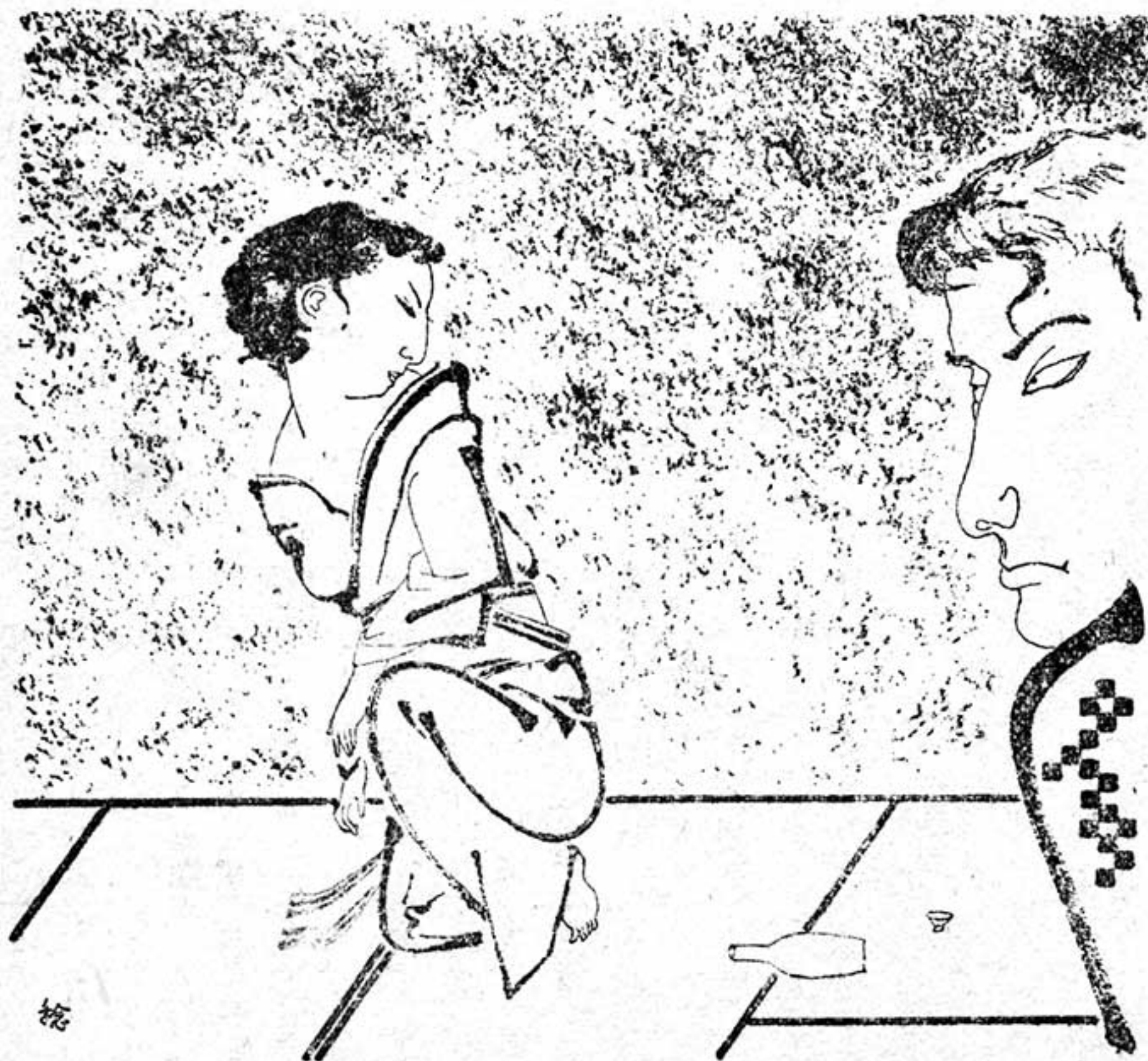
知人のK氏は僕と同年輩。一人娘に養子をした。孫もひとり産れた。この養子を離縁したときの打明け話を僕に聞かせて、

「私の自慢の婿でした。陸軍主計少佐。あの戦争中、私の家内が子宮痛で寝込みましたときも、それが死んで、葬式万端、まったくこの婿のお蔭で、物資不足も私どもは、さほど

痛痒を感じなかつたらしいです。戦災で、家が焼かれたときも、この町内では、バラック建築ながら、イの一番に、家を建てましたの

は、軍服を着て、軍部というものをバツクにしていたからこそ、立派な男にも見えたので、その本音は、まことにつまらぬ人物、そ

も、この婿のお蔭だつたのです。何でも、兵隊に運ばせましたからね。そのとき若夫婦の住いを別棟にいたしました。ところがあの終戦。婿は軍服を脱いだ。背広に着換えた。まず、私はそのみすばらしさに一驚した。民間会社に勤め口があつて、暫くそこへ通つていたが軍人時代のいばり癖が抜けず、同僚達との折合いも悪く、程なく自分から退社して、今度は自分であれやこれやとやつてみたようですが、これもつぎからつぎと失敗したとき、私がつくづく思つたこと



れと気がついて愛想をつかしていた折から、満州から引揚げて来たと言つて、男の子を一人連れて、訪ねてきた女がありました。新東京へは屢々、軍命令で出張しておりましたが、れど、あちらでそんな隠し事をしていたようとは、私も、娘も、寝耳に水の譬で、これには二の句がつけないほど吃驚してしまいました」

その男の子の顔を、ひと眼見て、この養子と親子ということもわかり、年齢を繰つてみれば、養子に来る前の子供で、いわば、二重結婚も同然だったから、その日から夫婦は国交断絶。

娘さんは、自分の子連れて、父親のK氏のほうの家へ来て寝泊りした。

勿論媒酌人も顔を出して、迂余曲折はあつたが結局、この夫婦は法律的にも離婚したのだが、戦災都市の住宅難のことでもあり、半年という期限をつけて、同じ屋敷の、菜園畑を隔てて、その別棟のほうでも、暫く親子三人が水入らずの暮しをしたというが、朝晩もなるべく、どちらからも顔を合わせないように気をつかつたというから、随分、へんてこなものだつたろう。

この娘さんは、まだ、二十五やそこらだったから、その別棟が空家になつてから、さつそく、再婚の縁談があつたが、その「聞き合せ」という調査に僕を訪ねて来た人が、

「御近所の噂では、あの娘さんはすこし変質らしいということなのです
が、先生は古いお知りあいなそ
うで……」

「変質者。いや、私も初耳ですな。一体どんなことなんですか」
「夜中に、御近所の、雨戸のそとから、立聞きをするそうで。い

や、それも、若夫婦のうちに限つていふようですが。まるで、女の出歯亀みたいですね」
「まさか！」

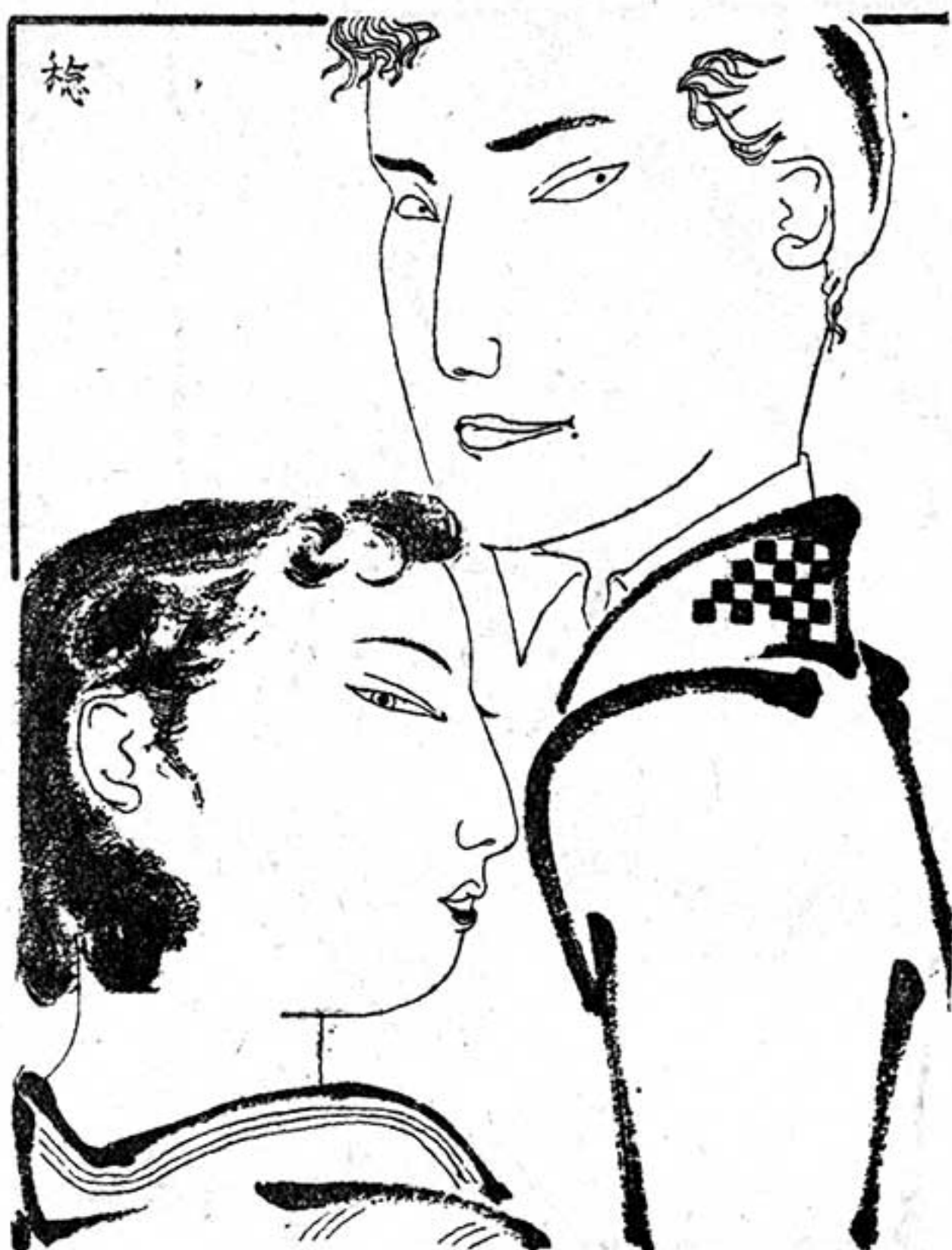
と、僕は、その場で否定した。が、この客が辞去したあと、もし、このような噂が事実とすれば、ありそうなことに思われたのである。あの養子が出て行くまでの半歳。夜な夜な、こつそり夜中に起き出して、あの別棟の、雨戸のそとから立聞きしたとすれば、最初は嫉妬というものでもあつたろうが、その「盗み聞き」が、しまいいは習慣的に面白くなつたからではなからうか。しかし、これとても変質者という程のことではなく、これは誰でも面白いことに違いないのだ。

要するに、この離婚は、父親のK氏の意志で、娘さんのほうはその養子と別れたくなかつたのが本音ではなかつたろうかとも思つてみた。

§ 第3話 §

郊外電車の、駅の前あたりに、どこでも見かけるスタンド・バー。屋合にすこし毛の生えたようなものだが、聊か嬉笑しながらも、マダムのNさんの色ツぼさが、界隈の人気で僕もその御常連の一人だった。





その夜は、まだ、宵のうちで、スタンドには僕がひとりだけの客で、Nさんのお酌でちびりちびりとやつてしていると、

「マダム、ちよつと……」

と、というような表情で、暖簾から顔を出したジャンパーの青年。ときどき、僕はこの青年をここで見かけるのである。いつも、暖簾から、こんなふうに首だけ出すのだ。勿論、口をきいたことはない。

マダムのNさんも、僕に、

「ちよつと失礼……」
と、そう云つて、お銚子を袴ごと僕のほうへ押しやるようにしながら、裏口へ出て行くのだ。いつもそうだった。裏は畑。暗い。が、それもホンの三分ぐらいのもので、ながくても五分とはかからなかった。

とがあるわ」
「そのつど百円札一枚か」
「そうよ……」
「ウム」
と、僕は唸るように肯いた。
「ちよつとだけならなんでもないからね」
「そうよ……」
が、これを変質者というなら、この僕も、百円札一枚、ちよつとそれをやつてみたいと思つたぐらいである。
「洋装で、穿いていると、あの青年が、とても機嫌が悪いもんだから、私、近頃は、なるべく、着物を着るようにしているのよ」
と、Nさんはそんなことも云つた。

§ 第4話 §

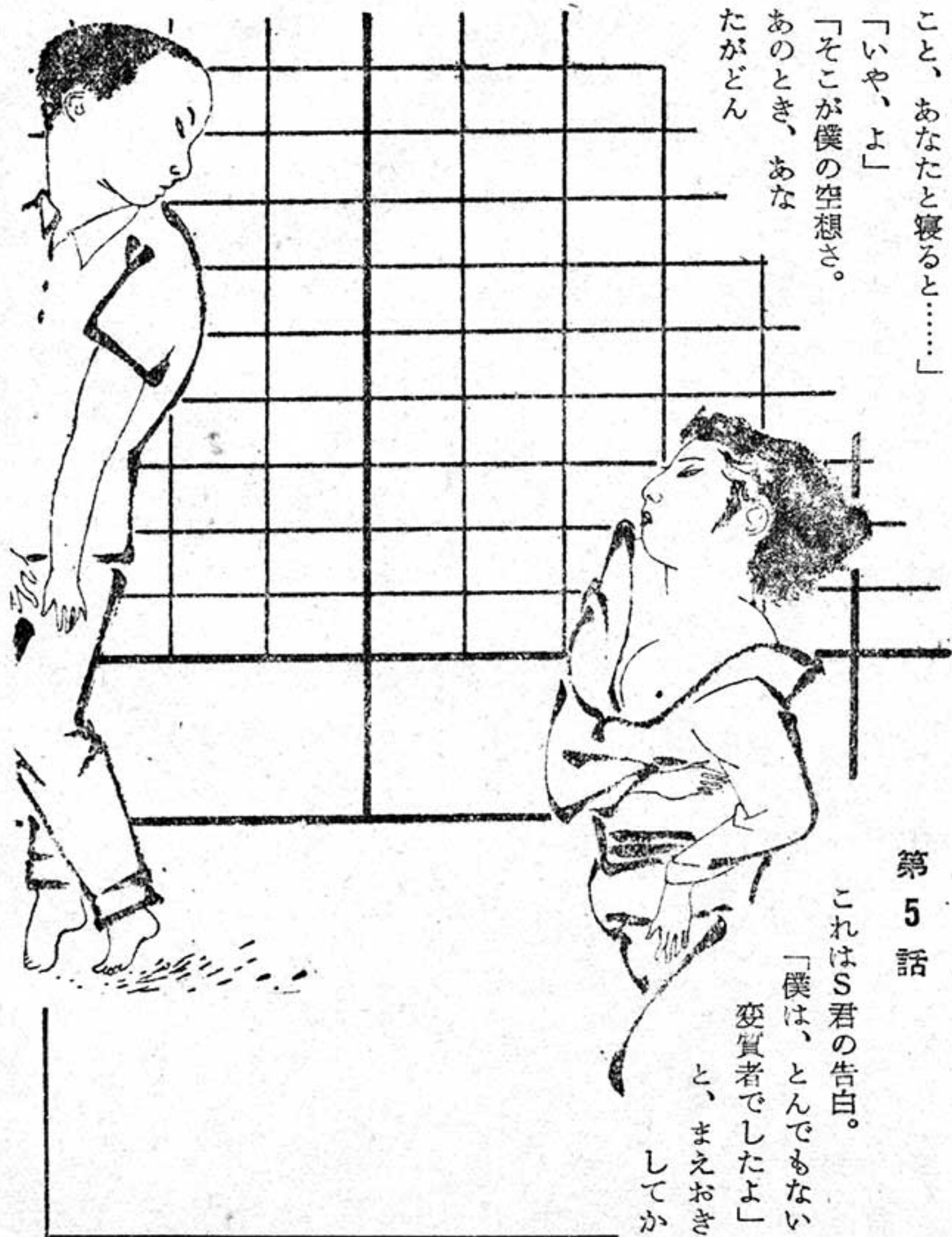
婦人記者R女史。三十五歳。未亡人。

古い知り合いの彼女が、僕のとこへ談話筆記に来て、その用件をすませたあとの雑談に、それでもちよつと顔を赧くして、

「昨夜、先生面白いことがありましたのよ。校正で居残りをしたものですから。帰りが遅くなつちまつて。駅へ降りたのは、かれこれ十一時に近かつた。コーヒーでも飲みません

かといつて誘われたのよ。いいえ。全然、私の知らない男。先生をすこし若くしたぐらいの、もう、いい年配の紳士よ。酒もすこし入っているらしかったわ。つい、私、ふらふらとついて行つたのよ。そして、コーヒーを飲みながら、ふと、気がつく、その紳士が私をパンパンと間違えていることがわかつたのよ。ホテルへ行こうと云うのよ。そのとき、私、亡くなつた夫のことを思い出したらしいのね。この紳士、あのととき、どんな顔をしてどんなことを云うのだろうかと思つたら、好奇心というか興味というか、そのことばかり空想して、わが身の危険を考えなかつたのかしら？ と、私、馬鹿ね。すこし変質者かも知れないわ。またふらふらと、ホテルまでついて行つたのよ。でも、そのホテルの、赤い三本毛の温泉マークのネオンライトが、アーチ型についている石門を、一歩くぐつた瞬間、はッとして、うしろも振り向かず駆けだしたわ。アパートへ帰つて来て、机の前に坐つてからも、まだ、痛いほど胸に動悸がうつていましたわ」

「それが、どうして変質者なんですか」と、僕が微笑しながら訊いてみると、案外R女史は真面目な表情で、



「だつて……好奇心にしろ、興味にしろ、女と寝たときの、その男の、あのとときの表情や台詞を空想してみるなんて」
「それじゃ、僕も変質者かな？」
「先生が？ どうして？」
「僕も、現に今、こんな話が出たから尙更のこと、あなたと寝ると……」
「いや、よ」
「そこが僕の空想さ。」
あのととき、あなたがどん

な顔をして、どんなことを云うだろうか……と、想像してみますね。この想像はなかなか愉しいものだ。しかし僕は、そんな自分をちつとも変質者とは思いませんね」
「いいえ。そんなのはきつと変質者よ。先生も。私も」

第5話

これはS君の告白。

「僕は、とんでもない変質者でしたよ」と、まえおきしてか

ら、
「あとにもさきにも、たつた一遍きりのことでしたが、僕は、中学二年生の時、童貞で、母親に破廉恥なことをしたことがあります。母親といつても生みの親ではない。僕には、姉といつてもいい歳の、若いまま母でしたが……」

これがまま子いじめをするのだ。男の子が生れてからは、一層それがひどかった。父親は社用で出張旅行のことが多く、いじめられるのはその留守中で、裕福な中産階級の家でもあつたから、食物のことなどでは意地悪をしなかつたが、子供なら誰でもするような、ちよつとした悪戯も容赦なく、馬乗りになつて撲たれる折檻。

或日のこと。またしてもいつもの折檻。首根ツこをおさえられるや、やにわに跳ねかえつて、いきなり、こちらから母親にしがみついていた。学校で覚えた柔道の手で、足をかけた。小柄な母親は、わけなく、尻餅をついた。夏のことだつたが、母親は浴衣一枚に、水色の腰巻。

S君はパンツ一枚の裸だつた。尻餅をついた母親の上に跳りかかつていつ

たS君が、羽交締に抱きしめると、これはS君の見せたはじめての、思いがけないレジスタンスでもあつたから、若いまま母も、すっかり、戸惑ひした気持だつたろうけれど、抱きしめた。それと眼でも見て、S君の意図を感じとると、

「こらッ、何をする！」

さッと、母親の顔が蒼白めていた。

いい気味だ！ さまを見ろッ！ S君の闘志は炎えたつた。

「え？ 何をしようというの？ パパにいいつけるわよ」

「いいつけられるものならいいつけてみろッい」

「だつて……」

と、何か云つて、抵抗しようとしていた母親の力が、急速に、弱まつていくのをS君は感じた。

しかし、そのあツ気ないような結末。S君は、半分逃げ腰で、立ちあがろうとするのを、両手を泳がせながらとり縋ろうとした母親の、その手を、邪慳に払いのけて、裸のままS君は戸外へ駆け出していつたのだつた。

「別に、父親にいいつけた様子もない。が、

それからというものの、もう、僕をいじめなくなつた。といつて、別に、やさしいまま母になつたわけでもないが、これは僕自身にも、全然予想しなかつたことだけれど、何んだか僕、急に、つまらなくなつてしまった。わざと、母親に叱られるようなこともしてみた。が、口では叱つても折檻はしなくなつた。僕は少年の頃そうした変質者だつたんですよ」

「私も、君と同じような少年だつたな」

「先生も？」と、S君は眼を躍るようにして、「お母さんにそんなことを？……」

「いや。私は、まま母ではなかつたからね。

がやはり、相当な悪戯小僧で、よく折檻されたものだ。今日から考えると随分野蛮な折檻さ。尻にお灸をすえられた。尻を、ひんむいで、母親が逆さに馬乗りになつて押えつけられるのだが、その母親の肌の、やわらかい感触を、私はこの歳になつてもいまだに覚えてるからね。そして、ときには、わざと折檻されるような悪戯をしたものだ。君と同じことだよ。が別に私は、それを変質者だつたとも思わないね」

ともあれ、この五つの話はいずれも実話で、僕のつくり話ではない。

(終)

特選犯罪実話
名刑事捕物帳



悪魔の暴風

村松 呂久良

陣野 重晴画

* 十九娘の他殺屍体 *

「あッ、死んでるよ!」

「まア、フミちゃんじやないかえ。逃げおくれで溺れ死んだんだよ」
「可哀そうに、まア……」

まだ土間は水につかつたままの入口から覗きこんだ、近所の男や女たちが、一と眼みるなり叫んだ。

「捨さんはどうしたんだろ。フミ子だけ、うッちゃッという逃げたんじやなからうな。まさか」

煮しめたようなゆかたを尻ッからげの男が、土足のままで濡れた畳へあがつた。土間からすぐつけの六畳に、一糸まとわぬ娘が、あおむけの大的字に転がっている。蠟色をした全身には、昨夜の浸水で流れて来た泥や、あくた、草の葉などがくっついている。

「おッ、つめてえ!」

その屍体へ手をふれた男が叫ぶなり、すぐに奥の四畳半をのぞきに行つた。

「捨さんは逃げたんだよ。それにしても、この娘をほつたらかしというて」

「フミちゃんは工場から帰るのが遅くなつたのかもしれないよ。そのまに捨吉ッあんは逃げ



どれもこれも、背中にはまだ大風呂敷や、行李を背負つて、手には鍋やバケツを持ち、尻からげのハダシだった。昨夜の避難場所、東小学校から引揚げて来たばかりのところだった。

「とにかく、みんな家へ荷物を入れといて、それから……そうだ、交番へ誰か」

隣家の女房だった。

「と」と、それは
だよ、きつ
てたん

「この家の主人、細野捨吉は、まもなくハッとしたように、全裸のフミ子の屍体へかじりついた。

「フミ子……フミ子……お前はまア……」

とつぜん、気が狂つたように泣き叫びはじめた。両手でフミ子の中からだを撫でまわして、いつまでも喚き泣く。

近所の人は同情と、目もあてられぬ思いで遠巻きにして眺めてい

「よッしや、俺が行つて来てやらア」
若い者がフミ子の裸体を遠くから見ても、さも口惜しそうに見ていたのが、そう云うと、表の水ッ溜りへピシャツと音を立てて駆け出して行つた。

このとき、単衣をダラリとからげもせず、まるで気が抜けたように表口へ立つた中老人がいた。

「あッ、捨さん。フミちゃんが死んでるよ。フミちゃんだよ、あれ？」

中老人を押しこむようにして叫んだ女があった。

「フミ子が……」

と、果然と家の中へはいつて来た中老人

「あッ死んでるよ！」暴風雨の翌朝、水浸しの畳の上に、素裸で打ち倒れていた十九娘のフミ子！それは明らかに暴行、絞殺されたものだ。犯人は恋人の不良青年か？ 刑事は八方に飛んだ！

るよりはかなかつた。……

それから間もなくだつた。水害あとの視察と警備に廻つていた小松川警察署の警官たちが、「変死人」の報告でドヤドヤとやつて来た。

「はいッちやいかん」

と、制服にゲートル巻きの警官が戸口に立つて、四人の制、私服の警官で調べがはじまつた。からだに喰ッついてゐる汚物をぬぐい、首のあたりをふいた私服刑事が、

「こりや他殺だな」

と、云つたところから、俄然色めき立つて来た。

派出所の戸口調査によれば、本籍は深川区森下町二ノ三……戸主、郵便局長、細野捨吉（五十六歳）長女、フミ子（十九歳）の二人家族になつてゐる。

そんなことは別として、ただちに事件は、警視庁へ報告される。――

昭和十年七月二十八日のことだつた。例年でない暑さのところへ、これも例年になく早めに襲つて来た台風によつて、この東京都江戸川区西小松川町二丁目一帯の低地は、前夜の暴風雨で付近の荒川放水路の濁水があふれて水浸りになつた。そして、付近住民の避難

があつた。

――その翌朝のことだつた。

* 不良吉山青年 *

捜査本部は小松川警察署内へおかれた。警視庁捜査第一課（強力犯係）の橋場主任警部、鑑識課員以下四人の刑事、巡査、地方検事局の係官などによつて調べられたところによると、

死後五時間ないし七時間経過――頸部索溝と皮下出血によつて絞殺と判定。――大腿部の附近には裂傷があつて、男性のスベルマが残つてゐる。それがまだ活動してゐるところから、死亡前二日以内に肉體交渉があつたと見られるが、状況により暴行の上絞殺されたものと断案。――

なお、犯行される以前に、すでにフミ子は処女ではなかつた。

細野捨吉によつて調べあげたところによると、かねてからフミ子には恋人があつた。それが不良性を帯びてゐるので、捨吉は結婚を絶対反対してゐた。前日夕刻――暴風の前の驟雨が降つてゐるとき若者が尋ねて来た。娘はまだ戻つてゐなかつた。

「フミちゃんに、俺と世帯を持つ金を出して

やつてくれるか、それともフミ子を勝手につれ出してしまおうか。どつちにしよう」

と、若者の吉山という男は強談に及んだ。

捨吉は一カ月前に、二十何年勤めていた深川の郵便局を退職して、その退職金二千三百円をもつてゐた。かねてフミ子からも、それを云われていたが、独り娘を手放す気になれず叱つて押し止めておいたのだつた。捨吉にとつて、一生一度の二十三万円金は、永年の配達夫から監督になり、ヤッと言つたが、不景氣な昨今、今後の勤め先があるかないか。この金が父子二人にとつての唯一の頼りだつた。セルロイド工場につとめてゐる娘の給金など、あてにできるものではない。――それでも捨吉は決心した。

「どうだろうね。金をあげるから、娘と手を切ッちやアくれまいか」

「いくらくれるんだ？」

「五、五、五百円……」

身を切られるような金だつた。吉山はセセラ笑つた。

「千両をどタ一文欠けてもいやだ。フミちゃんをもらつて行くぜ。あいつア俺に首ッたけだ」

「ま、まつてくれ。千円……やるよ。これき

りフミ子に手を出してくるなよ」

捨吉は身を震わせて千円の出しを待った。

吉山はそれをとると、雨の中へ出て行つた——まもなく娘がもどってくる。

六時頃から本格的な台風になつた。小さな家の中に、父子で身をちぢめている。電燈は消えた。うつすような雨と、吹き飛ばされるような風だつた。

突如——九時すぎになると、

「荒川の土手が切れるぞう！ 東の学校へ避難しろーッ」

と、外を叫んで走る声に、父娘はがくぜんとして家から外へ出かかたとき、吉山がやつて来た。戸外から、

「フミちゃん、逃げるんだッ、早く！」

「あッ、吉山さん、待つて！」

と、叫ぶやいなや、吉山の足の遠さかつて行つた方がくへ向つて、フミ子は走つて行つた。「待つて、フミ子や……」と、追つかける捨吉を捨てておいて——戸外はまっ暗で雨と風のみだつた。……

と、以上のことを捨吉は語るのだつた。

「それで、お前さんはそれから、どうしたんだい？」

「はい……金はとられるし、フミ子は連れ去られてしまつては、もう生きるせいがありま

せんので、いッそ土手が切れるのを待つて、水に押し流されて死んでしまふつもりで、一と晩中、土手の下へシャガンでいました」

泥と砂に汚れて、まだ乾かぬ単衣に震えながら、捨吉は調べ室の椅子にかけていた。両手で顔を押えて泣いている。

「土手が幸い切れなかつたんで、死ななかつたというんだね」

主任警部は同情に耐えぬように云つた。

——捨吉が逃げたあとで、吉山はフミ子をつれて家へはいり、そこで暴行の上、絞殺……しかし、何のために吉山はフミ子を殺したのだらう？——吉山しか、今のところ容疑をさしはさむ相手はなかつた。

とにかく全都に手配して吉山を探すことになつた。

だが、吉山一郎は苦もなくその夕方に捕まつた。浅草山谷の木賃宿に下宿していた。フミ子と同じ工場の職工で、不良性は帯びていたが、前科はなかつた。

小松川警察署の地下室で叩かれると、何でもなく捨吉の云つた通りのことを白状した。しかし、フミ子殺しは自供しない。

「……あの時、心配でフミ子を呼びに行つた

が、表で呼んでいると、ゴッソと水の音がしたので、フミ子を待てずに逃げ出しました。

フミ子のことか心配で昨夜は眠られず、下宿へ帰つたのが十一時すぎで、それから朝まで起きていて——朝になつてから、さっきまで寝ていたんです」

と、ケロリとして云う。

吉山の血液と、フミ子の体に残つていた精液との血液型を調べると、果してそれは相違していた。しかし、フミ子と関係した男と、絞殺した男と別の場合も考えられるし、吉山一郎には、まだ脅喝という嫌疑もあるので釈放されなかつた。いや、やはりフミ子殺しの嫌疑は、吉山一郎に濃かつたのだ。

* 再製戸籍と聞込み *

警視庁刑事の香椎良作は、細野フミ子殺し事件について、吉山一郎以外の犯人探しのために歩いていた。だがフミ子には、ほかに関係のあるらしい男はみつからなかつた。

四日目だつた。——細野捨吉の家の付近で聞きこみを行つたあと、捨吉の家へ寄つた。

昨日、解剖された屍体を引きとつてすぐに火葬にして、ささやかな野辺の送りをすまし

たあと、茫然としてたつた一人で捨吉は家の中に坐つていた。まだ湿つた畳さえ気がつかぬように、木箱に紙を貼つた仏壇の前へすわつてゐる。

新しい白木の位牌と、古ぼけた塗りの位牌の前には、線香が小さな煙りを立てている。

「災難だつたな。まア力を落さずに、あとの仕事を探すんだな。吉山からは千円の金を返すようにしてやるからな」

と、香椎刑事は慰め顔に云つた。

「はい、旦那。ありがとう存じます」

捨吉はポロポロと涙をこぼす。

「かみさんは、よほど以前に亡くなつたんだな」

と、アルパカの上着のポケットから、香椎はキセルとタバコ入れをとり出す。

「はい、もう十三年前です。大震災で女房がなくなつて以来、この娘だけがたよりで育てて来ましたものを……」と、また泣く。

「お前の実子だつたのかい。フミ子は？」

なにげなく——いや、刑事という職業は、疑いをもてぬ所へも一応疑いをもつてみるクセが常についていた。こんな言葉が出るのだ。この時捨吉は、ハッとしたようだったが、すぐに、

「は、はい。実子でございます。娘で……たつた一人の娘です。戸籍にもちやんと……」その態度が、普通でないものを、香椎は見とつた。戸籍のことまで云うことはない……と。しかし何げなく、

「そうかい。なおのこと気の毒だ」

と、云つて、まもなく出て行つた。

その足で深川区役所へ行つた。戸籍簿を閲覧した。再製戸籍で、現存しているのは捨吉とフミ子だ。妻のトキは（大正十二年九月一日、推定本所区東駒形二丁目ニ於テ死亡）——つまり関東大震災で被服廠跡で死亡したもののらしい。

そして、戸籍簿は区役所が焼失したので原簿はなく、みなその後の本人の届出で再製したものだつた。しかし、戸籍簿の副本は、裁判所へ行けば残つてゐるはずだ。

香椎刑事は、すぐにその足で、日比谷の裁判所へとんだ。カビ臭い地下室の、うず高く積まれた倉庫から引ッぱり出した戸籍をくつてゐる香椎の指先はふるえる。——あつた！……やッぱり！

妻、トキ（明治二十五年七月三日生）は、栃木県人山形力に嫁して大正七年三月に離婚し、同十年細野捨吉へ再嫁している。その時に、前夫山形力との間に生れたフミ子を、捨吉の養子にしている。つまり、トキが連れ子して来たものだつた。

「しめた！」

と、思わず叫んだ。

捜査本部へ歸つて行くと、

「父親の捨吉が怪しいです。あれは真実の親娘じゃありません。捨吉を引致してみて下さい」



すぐに細野捨吉を迎えに、他の刑事が走つた。

地下室の調べ室へ、うなだれてはいつて来た捨吉をみるとすぐ、香椎は呟鳴りつけた。

「ウソつきめッ。女房の連兒を、実子だなどと勝手に戸籍をつけやがつて！」

その一言で、捨吉はフラフラと土間へ坐つてしまった。

「娘をやつたあとで、発覚を怖れて殺したことが、ちやんとわかつとるぞ」

「そ、そ、そんなこと……そんな怖ろしい！」と、捨吉は、ふるえている。

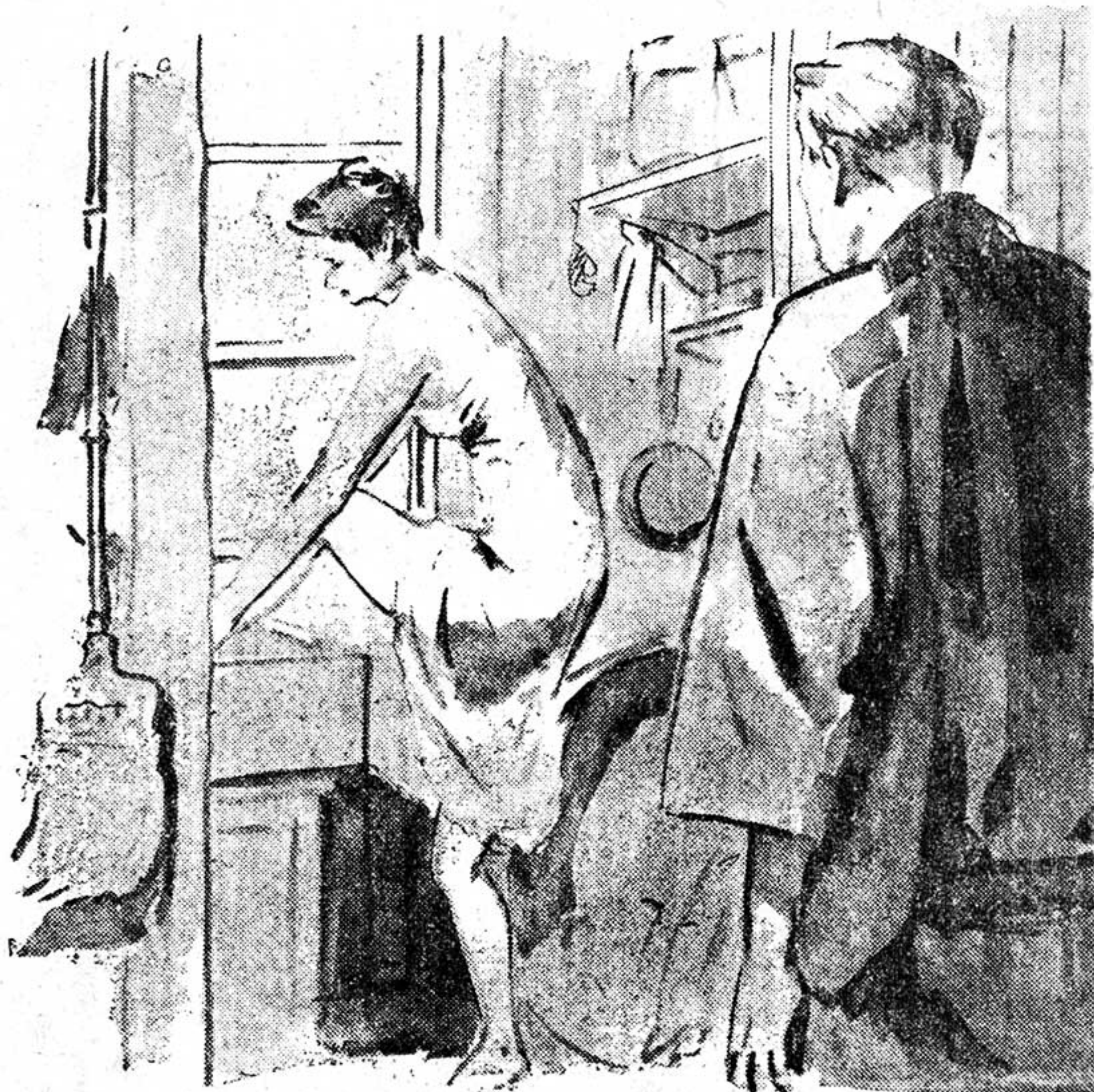
「ばかめッ。見ていたやつがあるんだぞ、貴様が不良だという吉山一郎が、貴様が殺してやつつけるところを、ちやんと見ていたんだぞ！」

少し高飛車だったが、香椎はヤマをかけた。その一言で、捨吉はクタクタと土間へ頭をくっつけてしまった——そして、しばらくたつてから、観念したように語り出した。

* 亡妻の肉体 *

——台風の前晩のことだった。親娘で夕食の膳に向つてゐるとき、フミ子が、

「あたい父ちゃん、吉山さんと結婚するわ。」



うちへ養子にはいつでもいいし、一時別居してもいいっていうのよ。ね、いいでしょ」

捨吉はドキリとした。かねて、工場の若い者だという吉山が、夜業でおそくなると送つて来たり、休日には一緒に向島あたりへ遊びに行くらしかったが、結婚するということとは思っていなかったのだ。

「なにをバカな——あんな職工なんかと一緒にたつて、どうするんだ。局の事務員にも、お前の婿になりたいと云っているものがあるよ。同じ結婚するんなら……」

「いや。そんな知らない人なんかと……それに、今ちようどいいでしょ。父ちゃんも退職金をもらつたし、そのお金であたしの支度もしてよ。別居するなら、部屋代くらい出してよ、ね、いいでしょ」

「ばかめ。わしの退職金を、お前は……ならぬ！ 親の望まぬ結婚など、絶対ならぬ！」

捨吉の手はふるえた。何十年かかつて得たこの金に眼をつけている娘におどろくのと一緒に、男は金をめあてにフミ子をだましていとも取れた。茶碗からポロポロと飯粒をこぼしながら叫んでいた。

フミ子はビックリした。これまでは、自分の云うことは何一つ、きいてくれない父では

なかったのに……と。シュミーズ一つで、丸い膝小僧をならべているフミ子は、これも動かしていた口をとめて父をみたが、まもなく我儘ッ児の本性が現れて、

「いいわ。父ちゃんも、いけないっていうなら、あたし勝手に結婚するから！ お金なんかいらぬわ。吉山さんの下宿へ行けば、どうにかなるわよ」

「そんなことをさせるものか、親の権利で警察さまへお願いしても、お前を嫁になんかやるもんか！」

「でも、あたしもう約束したんだもの。吉山さんは三男だし、婿になつて来るって云つてるのに……」

強く云つたものの、娘はやっぱり心細かつたとみえて、その夜二人で床をならべてやすんでからも、しばらくは床の中でモゾモゾしていた。

それよりも、捨吉の方が、なお眠れなかった。

——娘は知らない。誰も知らない筈だつた。だが、あの娘は俺の実子じゃないんだ……それだけに俺のこと、娘への執着がますますわかれ逃げてしまふかもしれない……

白い顔を、布団から半分出して寝ている娘

をみていると、それがやがて、十三年前に死んだ女房のトキの顔になつてくる。大きくなるにつれて、ソックリの顔立ちになるフミ子だつた。

夜が更けるにつれて、台風前のムシ暑さで、フミ子は布団を足でハネのけた。いつもならば、ソッと掛けてやる捨吉が、その夜はじつとそれをみていた。

シュミーズから抜け出た白い柔肌、丸い胸にポッチリと紅らんだふくらみ。すっかりおとなになつて肉付いて来た首のまわり。張り切つた胸から腰へかけての線……生きている頃の女房のトキのからだを思い出した。……

十五年間、親の感情で育てて来たものが、成熟して来ると、男と女の感情にもどつてくるものとは、これまで思つてもみなかつた。しかしそれには、新たに吉山一郎という若者の出現によつて、彼の身内に湧き上つた嫉妬が形を変えたものとは、捨吉には気がつかなくかつた。

……トキは、好きな女だつた……と、思い出した。性来、あまりソノ方には達者でなかつた捨吉は、トキの豊満なからだに、常に圧倒されていた。火のように燃えてノシかかつて来た、あの頃のトキを、今眼の前にみるフ

ミ子に思い出していたのだった……ますます捨吉は眠れなくなつて行つた。しまいには、無理にも眼をつむつて、クルリと向うむきになつてしまつた。

* 白 い 女 *

その翌日の夕方、吉山一郎が工場を早退して来たものらしく、捨吉の家をたずねた。

むろんフミ子と打合せたものだろう。

そのイキサツは前述の通りで、千円の金をもつて吉山は去つて行つた。――

雨風は、はげしくなつて来た。

トタン屋根にぶつつけてくる雨音、硝子戸一枚の戸がガタガタとなつてゐる。このあたりは、東京都に編入されてまもなくのこと、荒川堤の下になつてゐる。三年に一度は堤から水があふれて、土間へまで流れこんで来るのだつた。

捨吉は、日暮れのように暗くなつたあたりを見まわしては――あいつ、どうしたんだろ。早くもどつてくればいいのに……

ガタガタと表の戸へ、なにかがブツかつたかと思つと、

「父ちゃん、あけてッ」とフミ子の声。捨吉が、ころがるように土間へおり戸をあける。

「はッはッはッ、ひどい風。ガードを曲つた時、あたひ一間くらいも吹ッとはされちゃったわ」

顔へくつついた、ぬれ髪をなでながら、若い娘は何でもおかしいらしかつた。

「よかつた、よかつた。早く脱げ」

ハダシで手にブラさげている靴をとつて、

「はッはッはッ、脱げないじゃアないか。ボタンを、も一つとらなけりや」

捨吉も、ホッとする嬉しさで笑いながら娘のグッショリのブラウスをぬいでやる。

二つの乳房の形のままに、肌へベタリと喰ツついたシュミーズに手をかけると、

「いやン、くすぐりたい！ とるとる、あたひが……」

フミ子は土間へ立つたままで、スカートからシュミーズまでもぬいでしまう。眩しいものをみるように、捨吉は眼をショボショボさせた。

「父ちゃん、ズロース出してよ」

「おいおい」と云いながら、押入れを探して来たとき、フミ子は素ッ裸になつて、台所の土間へ低くつくつてある流しに片脚をつっこんでいた。

片脚は土間に、上半身を前へたおして、そ

の開いた脚の後へ立つて、捨吉はドキンとした。昨夜の自分を思い出していた。

顔をみているとフミ子だが、後からみると

女しか感じない……軽い胸震いと一緒に、雨

の音も、風の音も、捨吉の耳からは消えてしまつていた。……

「いやン、父ちゃんたらッ」

みつめている捨吉を、ふり返つて、フミ子は甘えた声を出した。ハッとわれに返つた捨吉は、ズロースをポイとほおつて、呆然とした気持で座敷へ引返して来た。

* ケ ダ モ ノ *

とっくに電燈も消えた。まっ暗な、風と雨の底知れぬ無気味な叫喚の中で、父と娘は相抱いて布団にくるまつていた。

だが、捨吉は、その恐怖でガタガタ震えているフミ子を抱きしめながら、ある満足感にひたつていた。いや、満足しきれない焦慮もあつたし、不安もまだ残つていた。

日暮れに千円の金をもつて行つた吉山が、このあつたかい、弾力のある、何物にも替えがたいフミ子を、更に奪ひに来るのではなからうか……と、それだつた。

「怖いわ、父ちゃん……」



フミ子は、ふるえながら云う。毎年の台風よりも、はるかに強い風と雨だった。

「大丈夫だ！ 父ちゃんと二人でいれば」

屋根や雨戸のすきまから、シブいてくる水飛沫が、二人にかかる。胸震いしながら、捨吉は胸と腹と膝に、若い生命のこもった、弾力のある肌の体温を感じる。自分はしびれるように、ジッとしてた。

そのとき、

「東の学校へ避難しろーッ、土手が切れるぞーッ」と、いう避難警報の声をきいたのだった。

「父ちゃん、逃げようッ」

フミ子は、捨吉のからだをハネのけて立った。夢からさめたように、捨吉も立ちあがる。

「あッ、こんな所へまで水が来て！」

土間へもう五寸も水が上がっている。

その時、さらに、

「おい、あけろッ……」と声がかかったのは、忘れられぬ夕方の、吉山一郎の声だ。

「あッ、吉山さん……」

と、フミ子が叫んで土間へおりようとする背中から、ガッと捨吉は抱きついていった。

「フミちゃん、早く逃げるんだよッ……」

と、その声と、ドロドロと地響きするよう

な、暴風と雨の音が一層はげしくなつて、声は消された。吉山はそのまま、走り去つたものようだった。

「吉山さん……吉山さん……」

と、フミ子は、もがき、捨吉をつきのけて表へ飛び出そうとした。水の中へフミ子はころんだ。飛びおりて捨吉は、またフミ子を抱きとめた。

「放して！ 吉山さん、まつてッ」

風にさからつて叫ぶ、その男を慕つての声には、もう父親の存在などなかった。

愕然と、そして新たに心中へ捲き起つた突風に、捨吉はまきこまれてしまつていた。

嫉妬と、自棄の織りまざつた、火のような感情だった。

「フミ子、逃げるんじゃない！……ここで、



こう
して待つ
てると、水は引

く！」

捨吉はもう、水も風も怖く
なかつた。フミ子のからだを、ぬ
れて、そして冷たい中に火のように火照
つてゐる若い肉体を、手離したくない感情で
一ぱいだつた。

「早く退避しろッ……逃げろーッ」

と、叫びながら戸外を走る人の声を、もう
聞いてはいなかつた。

「お前はな……俺の子じゃねえ！……お前のお
ふくろが、連児して来た児だ！」

「えッ……それでどうして？……ね、逃げ
よう」

「だから……だからお前……」

「あッ、父ちゃんッ、なにをするのッ……そんな
こと！……」

愕然として、フミ子は身を起そうとする。

「いや、いや、いやッ……よしてッ」

叫ぶフミ子の声は、暴風雨で消されてしま
う。布地の裂ける音。床の叩きつけられる音
がまじつて。

すさまじい風と雨と、そして土手を越えて
流れこんでくるドウッという水の音が、地獄
の底のうめきのように聞こえているばかりだ
つた……

「かんべんしてくれ……」

と、一とこと云つて、捨吉は起上がった。

風は半分おさまつて、雨も少なくなつてい
た。暁の光りがさしている。捨吉は浮上がつ
ている戸をあけて、外へ出た。水の中を、土
手へ向つて歩いた。ヨロヨロと……いくどか
水の中へころげた。

土手へあがつたが、黄色い流れの渦巻いて
いる中へ飛びこむ気には、どうしてもなれな
かつた。根の流し出された草の上へ坐つた。
あの畳の上へ、一人で裸のままころがされ
ているフミ子の姿が心に押しあがつてくる。

せめて着物でもかけておいてやればよかつ
た……フラフラとまた、土手をおりて来た。

自分の家の前までくると、学校から引揚げ
て来た近所の者たちが、寄つて騒いでいると
ころだった――

昭和十一年二月、東京地方裁判所で細野捨
吉は十年の刑を云い渡されて下獄した。抗訴
はしなかつた。

（終り）

犯罪 | 解剖

志賀高原殺人事件

星 秀 雄

佐 野 博 画



これは、直接この事件の取材に当ったA記者が私(B)に語った記録を判り易く対話の形式にまとめた、一つの犯罪解剖である。

何不自由なく育った良家の子女が、恋愛結婚までしながら何故、このような不幸な末路を辿らねばならなかったのてあるうか？ 夫婦の性格の相違、趣味の不一致が招いた破鏡にしては、余りにも悲痛な終幕である――。

真夏とは云え、志賀高原の朝は、しつとりと露がおり、爽やかな風が頬をなぶって吹き過ぎる。この朝の静寂を破つて、麓の木村内科医院の電話室のベルが、けたたましく鳴り響いた。

「もしもし、院長先生はいらっしゃいますか、私……R・Aに泊っている福田というものです……夫が、急病で倒れたんです。至急来診して頂けないでしょうか！」上つた若い女の声が、看護婦の鼓膜にピンピンと響いて来た。

R・Aというのは、通称『白亜のホテル』



といつて、この事件が起きる僅か数ヶ月前に、今をときめく新進ピアニスト桂秀人が悲恋の死を遂げたことから、一躍有名になったヒュッテで、高原の中腹に、小じんまりと建っている。

桂秀人の死も、この事件に間接的に関連のあることだが、これは又の機会に譲るとして、扱って、電話の女——福田貞子は、数日前から夫の三郎と共に、このヒュッテに投宿していたが、昨夜突然、夫が苦しみ出し、電話をする間に亡くなつてしまった、と、駆けつけた木村院長に語るところからこの事件は始まる。

B『それで木村医師は現場に来て怪しいと睨んだわけですか？』

A『そうです。木村医師は、馳せつけたとき、三郎が既に息をひきとつてから、相当時間が経っていたことを直感的に見逃すはずはなかつたのです。というのは、仰向けになつている三郎の背部には、もう相当

に濃く死斑などが出ていたのです』

B『直感的とはいいいながら、よく分るものですね』

A『そうです。私は、よ

く殺人容疑事件の現場にいきますので、検屍する医師の態度も見ておりますが、流石に塵一本も見逃すようなそこつさはありません。医者が患者を診察するとき、打診や聴診をする前に、視診といつて患者の態度を直感的に観察するのだそうですが、決して、主観的ではなく、客観的な根拠をもっているものです。それで木村医師が入念に患者に対する診察から、死体に対する検視の良識的な態度に移つていくのを見ていて、貞子は次第に動揺したらしく、顔面蒼白になつて、かすかに慄えながら、性急に夫の死亡診断書を医師に求めたのですが、医師はこれを拒否したのです。』

B『なるほど……』

A『そこで、「実は……」と切りだして、その部屋の壁付けの大きな洋服簾筒を指さして、この中で首をくくつていたのです、と申し立てたのです。

たまたまこの地区警察署の囑託をも兼ねて

いた木村医師は、この旨を早速警察に連絡し、時を移さず他殺容疑事件としての幕は切つて落されたわけです。そして地区署、裁判所などの関係者が集つて、現場検視となつたのです。

そのとき貞子は、悲痛な面持ちで、眼に涙を光らせながら、「夫は強いヒステリックで、手がつけれませんでした。この静養のために、私共はこちらに来たのです。一昨夜も発作を起し、昨夜も不機嫌で外へとび出し真夜中に帰つて来て寝たのです。今朝十一時頃この洋服簾筒を開けて見て初めて、いつの間にか戻つて、首をつつていたので驚いたのです。」と白をきりつづけたのです。

しかし木村医師の慧眼は、その裏に隠された狂言を鋭く見抜いていたのです。』

B『といいますと、検死の結果、彼女の言い分に矛盾があることが分つたというわけですね？』

A『その通りです。聊か専門的になりますが、医師が語る疑問の点が五つ六つあるわけです。

つまりですね。縊死していたという洋服簾筒は、大きさの点では、等身大でもあり

体が少しずれる余地さえあれば、首つりは出来るのだそうです。この場合も、随分無理ではあるが、必ずしも出来ないという矛盾はないでしょう。

しかし縊死は窒息ですから、死に陥る直前に、断末魔の全身痙攣が必ず起るのだそうです。ですから体の近くに、何か堅いものがありますと、例えば窮屈なこの簞笥の中では、けいれんの際、体のどこか、手とか足とかの外側が、必ず周囲にぶつかってそのぶつかった手や足に、それに相当して皮膚の下の小さい血管が破れて皮下出血を起すはずなのです。

それなのに、この三郎の手や足には、何の変化もなかったのです。』

B『そうしますと、縊死した場所はその簞笥ではなかった、というよりは、その周囲には堅い物がなかった場所だというように考えられますね。』

A『そうなのです。後で申し上げますがふとんの中ですから、皮

下出血はできもしないでしょう。』

B『なるほど！』

A『それに、首つりの場合には、使用した紐のあとかた——これを索溝（さくこう）といいますが——この索溝は、首のまわりを前下方から、左右とも同じように、後斜め上方に向つて、薄く消えていくような感じがするのが一般の状態であるのに、この屍の首の所見は、まるで首絞めのときのように、首のまわりを一樣の深さで、ほぼ水平に、とり巻いていたのです。』

B『他殺容疑の、第一の嫌疑というわけですか』

A『このような首つりの仕方では、両足が地上を少しでも離れ、そのため体重の殆どが



首に圧迫を加えることになる。これを定型的縊死といっているようですが、そのために左右の首の血管が強く押さえつけられ、従つて左右の両眼は溢血点（小さい出血）が殆ど起らないのが普通だが、この屍の両眼はまるで、蚤が刺した跡のように、それが集つて斑状にさえたつていて、他人が首を絞めたときのような状態にしか考えられなかつたというのです。』

B『その溢血点について、もう少し詳しく説明して頂けませんか。』

A『首絞めの場合には、首つりとは違つてどれほど力の強い人が、他人の首をしめても、首の左右にある血管を完全に圧迫することは、むづかしく、血流は上方へゆき、或る動機によつて、左右の眼には著しく多くの溢血点や、溢血斑ができるのが、絞頸の一般の症状の一つだというんですね。』

ところで、この三郎の屍の場合にも、丁度このように著明だったのです。』

B『なるほど』

A『このように、定型的縊死の場合には従つて、顔面も蒼白く、はればつたくなひのが一般であるのに、まるで絞頸のときのように、この屍では、うつ血で、はればつ

たくなつていたのだそうです。』

B『すると、先ほどおつしやつた血流の關係からですね』

A『そこです。誰でも死んでから、数時間経つと、今まで体中を巡り動いていた血は停止して、重いものが下に降るように、血も下方へ降つていくので、体の下部の方の皮膚の色は、暗紫赤色の感じの斑点、これを死斑といつていますが、この孔斑が、まるで地図のようにできてくるのです。

ですから、首つりのようにほぼ垂直のような姿勢をとる場合には、体の下部に相当する部分、つまり手や足の先きつぽの方の色は、孔斑のために暗紫赤色になつてはいるはずなのに、この場合は手足にはなくて、首絞めのときに背面又は腹面に生ずるように、背中に出来ていたのです。』

B『でも、もし首つりをして、それを直ぐおろして、下に仰向けにねかしたら、ど



ういうことになりますか？』

A『ごもつともです。私もこのことを質問したことがあります。

そのような場合は、まだ手足に充分に死斑が出る時間ありませんので、背中に出るのです。而も容疑者は、夫が縊死してから発見までに相当の時間が経っていることを認めて

いるのですから、もし、それが事実なら当然手足に死斑が出てはいるはずですが。

たとえ、すぐおろしたと嘘をついても、先にお話した手足の皮下出血、首の索溝、眼の溢血点、顔面のうつ血などの状態から見ても、とうてい隠しおおせるものではないのです。』

B『全く悪いことは出来ないものですね』

A『それから、これは比較的問題ではありませんが、窒息死の場合には、多くは尿や大便などが出るのが一般だそうですが、その流れの方向は、上部から下部に向うのが普通です。ところが首絞めの場合には、腰の周りについているだけで、首つりのときは、多くは腰から下方に、場合によつては足にまでついているのですが、この屍は単に腰の周りにだけついていたので。』

B『お話を総合して考えますと、結局、この事件は首つりと考えるよりは、首しめと考えられる公算が大きいことになりますね』

A『おつしやる通り、検屍の結果はいう迄もなく、解剖の結果も、その死因は、絞頸による窒息だったのです。』

B 『首絞めといつても、他人がするとかかりは限らず、自分でも出来るわけですがこの場合はどうなのですか』

A 『この場合は、その色々の所見が顯著であつて、自分で自分の首を絞める場合の所見と異なる点から、どうしても、他人によつてなされたものとしか考えられないのです。自分で自分の首を絞める場合は、そんなに強力を用いなくても、直ぐ人事不省に陥つてしまうからです。』

B 『すると、結局容疑者として、貞子が当然挙げられることになりますね。』

A 『貞子を取敢えず同日夕方、地区署に引致し、本格的な取調べを開始したのですところが、貞子は頑張り通して、八時間の後に遂に一切を吐いたのです。「夫を殺したのは私です。そして私も一緒に死ぬつもりでしたが、死ぬ機会を失い、夫が自分で首つりをしたようにみせかけてその場をごまかすつもりでした。」と。』

B 『ではなぜ、夫を殺さねばならなかったのでしょうか？そしてそのいきさつはどうなのでしょう？』

A 『貞子が福田と知り合つたのは三年前の秋、福田が丸の内ビル内にあつた東邦経

済時報社に勤務していた頃、事務員として入社してきたのが、杉村貞子だったのです。その後貞子は福田と恋に陥り、一昨年社が解散してから、二人は交際をつづけてきました。が、昨年同月に結婚をしたのです。

その後、福田は生命保険会社の外勤となつたが、歩合で働く身には、すべてが不如意となつて、現在の家も昨年十二月以来は家賃も滞納しているありさまで、生活は非常に苦しかつたのです。それに貞子は従来相当な家庭に育ち、高等教育を鼻にかけ、虚栄心が強く経済上の問題から、夫婦喧嘩の絶間もなかつたと聞いています。

その前日も晩酌のとき、酔つたとはいひながら、膳をひっくり返し、貞子の顔に器を投げつけ、その後、平気で高いびきで寝てしまつたのです。風邪を引かないようにと、ふとんをかけて顔を見た瞬間に、恋愛時代の三郎と音楽会に行つたことが追憶され、一種のノスタルジアに耽つていたのです。

突然夫の三郎は、とび起き、その部屋のなげしに妻の腰紐をつるして、首をくくろうとしたのです。勿論貞子は、あわてて、これを阻止しました。

「なぜ、そのようなことをなさるのです。」

だが三郎は、「是非死なせてくれ」といつて迫るのです。この言葉は一度や二度の言葉ではなく最近しばしば用いていたのを承知している貞子は、

「あなたが死ぬのなら私も死にます。」

と、その腰紐で夫を締めつけたのです。勿論酔つてもいましたし、何の抵抗もなく容易にできたらしいのです。』

B 『絞殺はわりに簡単にできるそうですね。ですから、昔から自動車運転手殺しが多いようですが、多くは首絞めのようなですね』

A 『そうですね。困つたものです。それは兎も角も、貞子も後を追つて死ぬつもりだつたのでしょうか、そのとき、廊下に人の足音がしたので、ひとまず、屍を押し入れの中に隠しておいたのです。もとより寝れもせず、今は夫の後をと思ひながら、死におくれた貞子は女の弱さから、情死の決行をしぶり、いつそ夫が自分で首つりをしたように装つたわけです』

B 『しかし、なぜ、三郎は、酔つていたとはいひながら、死にたい氣持になつていたのでしょうか？』

A 『それは決して感傷からなどではあり

ません。福田は秘密の過去をもっていたのです。それは、かなり昔のことになります。福田は少年の頃から、ヴォアイヨールだったそうです。』

B『ヴォアイヨールというのは、たしか伝説で、のぞき見る人の意でしたね。』

A『そうです。裸や猥雑な姿を、盗み見たがる性癖です。誰でも多少はそのような傾向はあるでしょう。好奇心ですね。裸体像に馴れている欧米人でも、本当の裸女などには好奇心が動きますが裸体像に余り馴れない日本人には一層この傾向が大きいと思うのです。これが昂じると変態的になっていくのです。』

B『福田は、のぞき見の性癖を持っていたのですか？』

A『この性癖から、フェチシズムになつていったのです。』

B『フェチシズムといいますが、異性のものを集める性癖ですね』

A『ええ、福田は女性の靴下を蒐集していたのです。それも古い破れたのをです。そのため福田は窃盗を度々重ねたのです。そして遂に刑を受けたのです。ところが、彼がこれを秘して結婚し、今日まで彼の前科を妻に内緒にしていたのです。彼は妻を愛すれば愛

するほど、この嘘偽が苦痛になつていたのです。』

B『では福田が、予て死を望んでいたのは、妻に対する、このような良心的な苛責からなのですか』

A『そう考えるのが一番妥当のように思



われるのです。』

B『結婚後は、福田の性癖は治つていたのでしょうか?』

A『妻の言葉によると、そういった彼の性癖は少しも感じなかつたと言つております。』

B『では貞子の立場から考えますと?』

A『貞子は福島県桑折町の酒屋の一人娘として明朗に育ち、桑折の高校を卒えて上京し、M音楽院のピアノ科の桂秀人教授に師事したのです。当時杉並の永福町の親戚に寄寓していたのですが、内心自活を希望していた貞子は、さきにお話しました東邦経済時報社に入社したのです。そして福田と結婚したのです。恋愛結婚とはいつてもどちらかといえば、向学的な気持に燃えている貞子は、いわば、その日その日が只無事に去つてゆけばよいといったサラリーマン生活に、飽き足らなかつたのは、無理ないところだつたでしょう』

B『すると、生活上に物的、心的な相違があつたことは、この二人の場合、否定することは出来ないですね。』

A『そうです。あくせくと馬車馬的に金銭の奴れいと迄ゆかなくとも、そのために

勢一杯であり、内面的な生活を顧みようともしない、ひからびた人生には耐えられなかつたのです。』

B『昔の人がいつた、詩を作るより田を作れ式の生活はいやです。たとえ乏しくとも、潤いは持てるはずですね』

A『そうなのです。もし福田が、少しでもそのような生活に努力を惜しまなかつたならこうした悲劇も起りはしなかつたかもしれないのと考えるのです。』

B『全くですね』

A『ウェバーものや、ショパンものを愛好していた貞子にしてみると、ロンド・ブリランテにしろ、ノクターンにしろ、夫の心には一体どう響いているのだろうと苦々しく考えたのに違いありません。』

B『ショパンのプレリュードも濁江の水の音位に思われてはたまりませんが、しかし趣味として異つた面をお互に持ち合せるということは、面白い事でもあり、お互に尊重し合い、啓発し合い、そして協調してゆくように努力するなら、却つてよいかもしれないと思うのですが……』

A『全くその通りですね。ところが、三郎は余りにも無関心であり過ぎたのです。』

B『なるほど……』

A『それは兎も角として、最後に未解決の問題が一つ残されています。』

B『といいますと?』

A『なぜ、彼女はヒュッテR・Aを選んだのでしょうか?』

B『ああそうですか、恩師の死を悼む気持からではないのですか?』

A『ええ、それには違ひないのですけれど、単に形式的な問題だけではなかつたのです。彼女にもまた、夫が秘めていた以上の精神的なトラブル——恩師桂秀人教授への一方的な恋慕があつたのです。』

B『なるほどね……』

A『いや、これは恐らくは誰も知らないといつた方がよいのかもしれませんが。ただ私流に解釈すれば——福田貞子が嘱託殺人として刑の執行を受けるとき、たつた一つの最後の希いを申出たのです。——それはショパンの葬送曲を弾きたいというのです。これは福田夫妻がこのヒュッテR・Aに投宿した夜、独り貞子がピアノに向つて、この曲を弾きながら桂教授への恋慕の情を惜しんでいたということが後から分つたのです』

(完)

特選犯罪実話名刑事捕物帳

ダンサーの怪死

関根 純

月田 浩画



昭和二十一年二月三日午前四時。厩の上では、すでに春とはなっているが、冷たい風は、ガランとした深夜のT警察署内の隙間を通して遠慮なく吹き込んでいる。

山川巡査は、いま起番を交代して、ひと通り引継ぎ事項に眼を通し、火鉢を掻き廻して、被いかぶさるようにして寝起きの体に暖をとりながら、煙草の輪を吹かしていた。

天井にゆらゆらと昇る煙りをなんとなくみつめてみると、卓上の公衆電話がけたたましく鳴り出した。

夜の明け切らぬ早朝の電鈴は、山田巡査を

銀座の真ツ只中、エレベーターの箱の上、妙齡のダンサー怪死事件！犯人は何者か？俄然捜査陣は色めき立った！！

ピリッときせるものがあつた。

「ハア、モシモシ、T警察署です。えーッ、井藤屋さん、何ッ、ダンサーが殺されているつて——うむ、それで——」

山田巡査は、机の上にある電話受信用紙を取つて、心持ち指先の慄えるのを感じながらペンを走らせた。

臨時にして森閑としていた早朝の署内は、急に色めき立つた。宿直の署員は、全員起床し、事件の発生に対処して、それぞれの部処に待機、山田巡査は、宿直主任の池之上警部補に連絡するとともに、同じ時間の起番であつた西多刑事と協力して、事件発生に就いて管内の各派出所へその第一報を手配した。

また一方、池之上警部補によつて、刑事部長、警務部長、監察官、署長にと報告し、管下一斉手配による緊急警戒は発令された。そしてその捜査指揮を東京地方検事局に求めた。

手抜かりのない報告連絡と警戒陣が凍てつく深夜の街々に張りめぐらされた。そこで池之上警部補は、西多刑事を同行し、折りからの寒風を衝いて現場へと急行する。

外套の襟を立てて、黙々と行く二人の脳裡には、妙齡なダンサーの死を繞つて、当然起

るべき痴情関係、怨恨関係、窃盗または、強盗未遂によつて発生する殺人等々、次から次へと事件の内容を追つていくこと、その歩き振りで、はつきりと読みとる事が出来た。

現場と云うのは、T警察署から西へ約五丁位の所にあたる、銀座三丁目一番地、井藤屋の地階に止められてあるエレベーターの箱の上で、もつと詳しく言えば、——

『ここ銀座の心臓部にあつて、文房具のデパートの老舗としてその名を謳われた店で、終戦後逸早く、八階と六階とをダンスホールとし、七階を客の持ち物などの預り所とした他に、ホール関係者の休憩所、寢室、その他各階ごとに文房具、装飾品、食堂等々で、戦災によつて焼けたビルを復興し、経営されていたものである。』

その井藤屋の表口、つまり銀座の電車通りに面した方から入つて、直ぐ右手に階段があり、それが地階の食堂の入口になつていく。

屍体のあるエレベーターは、その地階に停められてあるエレベーターの箱の上であるから、地階へ降りたのでは見られないことになる。そこで真直ぐ十七、八歩行くと、正面に他店より稍々小型なエレベーターが二つあるが、その右側にあるのがそれなのである。

池之上警部補と西多刑事が、この井藤屋に着いたのは、やがて夜明けに間もない五時頃であつた。

しばらく内部の様子を窺うようにしていたが、やがてその鑑戸を叩いた。

「今晚は、今晚は、T警察署の者ですが——お願いします——」

内部からの返事は聞きとれなかつたが、小さく仕切つた鑑戸の片隅の出入口が直ぐに開けられた。

「お寒いところを御苦労さまです、さあどうぞ——」

と、待ちくたびれたように、二人を現場へと案内した。

池之上警部補と西多刑事は、エレベーターの箱の上にある屍体をジイッと覗き込んでいたが、ここに有力な手掛りを得るため検視に先き立つて、屍体発見者からの聞き込み捜査を開始した。

二

この屍体の発見者である長谷警備員の語るところを簡単に書き綴ると、次のようなものであつた。

『その日は、平常よりお客が多く、早出のダ

ンサーまでが、終電近くまで踊つていて、支配人さんから注意されて、大慌てに慌てて帰つて行きました。――

『また、遅番の組が、交代で七階にある寝室に泊ることになつていて、この日の泊りに当つた被害者はか五人のダンサーが、ひとしきりお客の批評やら、チケットの稼ぎ高を自慢したりして、お喋りが済んで寝んだあとを、掃除婆さんが、掃除を終えて、私と茶話にひと時を過したのです。それから私は、各階の戸締り、火の気を見て廻り、私の部屋へ戻つて一服つけました。――』

『私も寝すもうと思ひまして、時計を見ると三時三十分でした。その時は、みなさんが寝んでから、およそ四十分は過ぎたかと思つてます。――』

『私の部屋は、六階でありまして、ホールの下になつています。私は寝間着になつて便所へ行き、用を達して出てから気が付いたので、すが、昼間、エレベーターに故障があつて、それを修繕するために、エレベーターの扉が、開け放しになつていたのです。そこで、見るともなく覗き込むと、機械に取り付けてでもあるのか、鈍い灯の下に白いものを見ました。――』

『一度は眼を疑ぐつてみましたが、確かに、エレベーターの箱の上に、白いものが、乗つていることを見届けたので、急ぎ三階まで降りて行つて、もう一度覗いて見ました。すると何か白い布で包まれたものらしいのですが、はつきり判りませんので、部屋へ懐中電燈を取りに戻り、こんどは、真ッ直ぐ一階まで降りて行きました。そこで懐中電燈を照らして見ますと、ダンサーの一人が仰向けになつて、倒れているのが見られました。――』

『更に、私はエレベーターの故障修繕のときに使つて、そのままになつてゐる梯子を利用して、エレベーターの箱の上へ降りてゆき、その体に触つて、声を掛けてみたのですが、返事はありませんでした。――』

『その時は、いくらか温か味があつたように思ひましたが、死んでゐると直感すると、私は、すっかり狼狽してしまつたので、誰であるか、顔の見分けも出来ませんでした。――』

『これは、大変な事だと思ひまして、直ぐにみなさんを起して、その事を知らせました。私の相棒の大井君に、警察へ電話するように頼むと、私は交番へ駆け付けました。――』

『交番からは、二人のお巡りさんが、私と一緒に来て呉れました。一人の方は、ひと通り

その様子を見ますと、他の一人の方に何か云いおいて交番へ駆け戻りました。その頃になつて、宿直の人や、ダンサーのみなさんが起きて、全部顔が揃いました。すると、ダンサーのなかに明美さんの顔が見られないので、初めて殺されているのは、明美さんではないかと云うことが判つたのです。その他の事についてはなんにも判つておりません。殊に、こちらへ残つたお巡りさんが、本署から主任や刑事が来るまでは、誰も屍体を動かして、も、触つてもいけないと、何度も、何度も云われるので、確かに明美さんであると云うことも云い切れないような訳です』

と、いくらか落ち着きを取り戻した口調で怨みがましく、その状況をひと息に語り終つた。

その事は、交番から駆けつけて現場保存に当つた岩波巡査に語つたこととは、怨みがましい終りのところが少し違ふだけであつた。

そこで西多刑事は、殺されたと云われる明美の隣りに寝たダンサーが、誰であつたかと云うことを聞いて、そのダンサーから明美の寝に就く前後の様子を聞いた。

明美の隣りに寝たダンサーと云うのは、春代と云つた。

長谷警備員の語つたと同じような前置きで、寝所に入つてからのことを次のように語つた。

『寝室に入つてからは、みんな疲れていたの
で、直ぐに床の中に潜り込んでしまいまし
た。――』

『明美さんだけは、蒲団の上に坐り込むと、
ハンドバックからウイスキーの入つた小さな
瓶を取り出して、私にも飲まないかと言いな
がら、それを飲んでいたようでした。けれど
私は、疲れていたもので、返事もしないで寝て
しまいました。――』

『明美さんが、いつもウイスキーを入れた小
さな瓶を持っていることは、このホールでは
有名になつていますので、このようにはつき
りと云えるのです。ですが、呑ん平と云う訳

ではありません。――』

『寝る前にそれを飲んだと云うことは、こん
な事があつて起こされた時に、明美さんの枕
元に空瓶が転ろがつていたのを見て解りまし
た。そして明美さんが寝ていないので、もし
やと思い、急いで仕度をして階下へ降りて行
き、エレベーターを覗いて見ました。――』

『ドレスの色合いや型から考えて、明美さん
であることに間違いないと解つた時に、想わ
ず明美さんヨ、――明美さんが殺ろされてい
るワ、と、大声で叫んだつもりでしたが、初
めの声は、ノドに詰つて声となりました。し
た。どうしてこんなことになつたかは、全然
見当が付きません』

と、云う訳で、死んでいるのは、ダンサー
の明美であることに、九分通り間違いない



事実となつた。然し、捜査の手掛りとして
は、ただ、小さな瓶に入っている液体が、確
かにウイスキーであるか、どうかと云うこと
が、残された問題だつた。

三

一方、東京地方検事局では、事件を重要視
してか、小松原検事が熊井署長と同車で駆け
付けて来た。

その頃には、以上のことを語り終つて、東
の空が薄明かるくなつて来ていた。

池之上警部補と西多刑事が、こもこもいま
聴き込んだことを、小松原検事と熊井署長に
説明するのだつた。

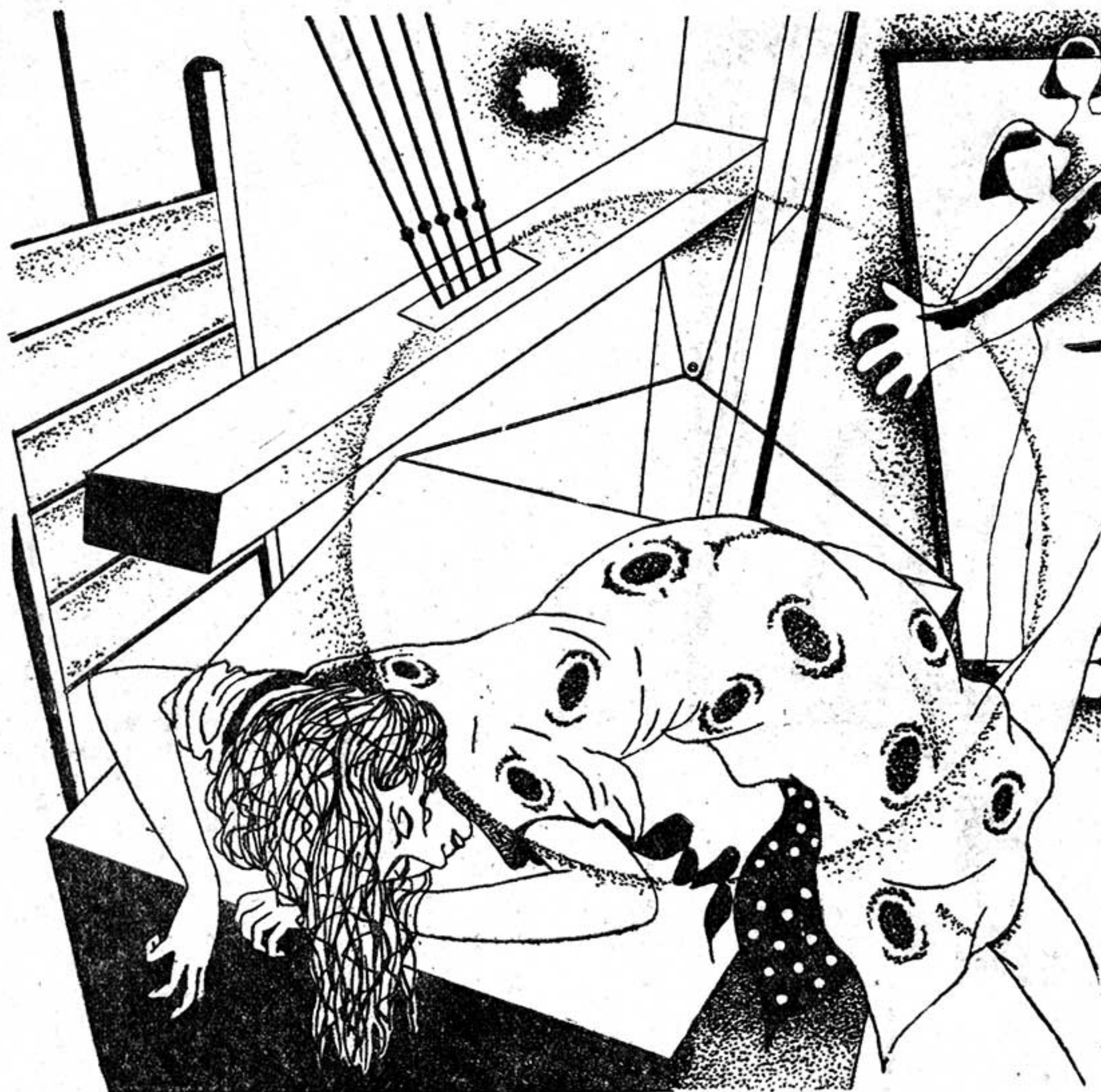
その説明に対して検事は、黙々としてその
ひと言ひと言に解答を加えるように聞き入つ
ていた。

以上の事を聞き終ると、検事は口を切つて
「春代さんと言つたネ、明美さんの空瓶を見
たと云うのは、――」

「ええ……」

「空瓶は、そのままになつて、いるでしやう
ネ？」

「ええ、――誰かが殺されていると云うので、
あわてて寝所から出て来たままですから、寝



所にあると思います——」

「うむ——、では現場を視しましょう」

検事は物静かな口調で云いながら、先に立つて梯子を降りて行つた。

署長も、池之上警部補も、そして西多刑事も無言でそれに続いた。

小さなエレベーターの箱の上は、ダンサーの屍体を囲んだ四人で一杯だった。

四人の瞳は、一様に屍体の位置をはつきりと掴みとつた。

やがて検事は、一礼すると屍体に近づいて、半開の瞼をひっくり返えした。それから口中を懐中電燈で照明して十分に観察した。次に下に下つて頸部を調べた。更に指先で頭の下部から、舌骨、喉頭と触つてみた。そこで検事は、首をちよつと傾けた。こんどは、頭部を撫でるようにして調べた。そして、その後頭部に死因となるべき骨折を認めた。それから、念のために、身体他の部分も調べてみたが、二三カ所の擦過傷の外、別に異状は発見されなかつた。これで屍体から学ぶべきものは、ひと通り調べあげてしまつたわけだった。

検事は、自分のハンケチを屍体に懸けてやると、再び黙礼をした。

「さア、それでは一応署へ引き上げましょう。屍体は、あとで署へ運んで下さい、それから西多刑事さんと云いましたネ、例の空瓶をお願いします」

そう云つて一同を顧みた小松原検事の眼光は、水のように澄んでいた。何の屈托も、何の逡巡も見られなかつた。

署には、警視庁の捜査第一課から、他の事件に出掛けていた堀村課長に先行して浦山警部以下の腕利きの刑事連と、非常召集によるT警察署の大野捜査主任以下の各刑事が顔を揃えて集まつていた。

四

寒風の中もものは、劇しく展開された捜査第一日、さて何の手掛りを得たことか？

捜査本部の設けられたT警察署捜査室に初の捜査会議の開かれたのは、その日もとつくに暮れて、もう八時に近かつた。

寒さに顔を真っ赤にして帰つて来た捜査陣により、その結果が逐一報告され、その得た資料により、犯人必縛の確固たる捜査方針は速かに樹てられた。

先ず被害者についてであるが——
被害者

本籍 神戸市葺合区宮本通り五丁目八十

一番屋敷の九

戸主 豊蔵の妹

元日本商船株式会社タイピスト

ダンサー 斎藤美代子(本名)

当二十四年

1 但し戸主豊蔵は、最近復員して本籍地に立ち廻つた様子はあるが、その後の消息は全くないと、被害者が生前に語つていたもので、被害者は現在ひとり暮らしで、下谷区豊住町一番地甲斐丈太郎方の二階に同居していること。

2 神戸との関係は、被害者の三、四歳の頃に、日本運送株式会社に勤務していた父の都合で、横浜に移り住んだため直接には事件との関係は認められないこと。

3 両親は、被害者が横浜高女を卒業すると間もなく亡くなつていて、兄は出征、家は戦災により焼失し、一時、日本商船の寮に居たこともあつたが、寮の出入り商人だつた前記の甲斐方に同居したこと。

4 元の勤務先における勤務振りは、不遇な生活環境にあつたにもかかわらず、極めて真面目であつて、会社側としては、その退社を惜しんだ位であり、男との交際は、殆んど

無いと云つてもよいようなこと。

5 退社理由としては、収入の点が挙げられ、ダンサーになることを、当時の上役に話したこと。

6 現在の勤め、すなわちダンサーになつてからは、まだ三カ月位ではあつたが、お客との交際は、どこまでもお客様対ダンサーであつて、少しの悪評もないこと。

などが、その表面に現われたことで、疑問として残された例の空瓶については、警視庁の鑑識課で分析鑑定の結果、ウイスキーではなかつたが、薬用アルコールであつて、自殺説に対する一反証ともなつた。

では、他殺とするならば、

1 犯行は計画的に行われたこと。

2 犯人の目的は、強盗か、窃盗の未遂で、それを発見されたため美代子を突き落したこと。

3 1・2の結果から痴情、怨恨関係による犯行でないこと。

4 犯人はかんがあること。

(カンと云うのは、土地鑑、敷鑑と云つてその土地なり、建物なりの実情に通じていることである。)

5 犯行の手口から推して、所謂洗練され

た前科者か、反対に全然初めての者かであること。

などが挙げられた。

五

翌朝都下の新聞は揃って『井藤屋ダンサー殺人事件』と、トップ四段にこれを掲げて事件を大きく報じ、捜査本部には早朝より各新聞社粒よりの腕利き社会部記者が処せましと詰めかけ、署の前には、その社旗を翻翻とひるがえした自動車が、事件の成り行きを追って待機していた。

犯人は何者か？——かくて事件は公衆の前にクローズ・アップされたのであつた。

捜査陣の、西に東に駆け廻つての活動が続けられたが、前記以外に事新らしい何物をも獲ることが出来ず、漸く焦慮の色がただよつた。

殊に、事件発生当夜の責任を感じての西多刑事の捜査は、被害者のズロースを握つて、その出所から何かを求めようと、下谷、本郷、小石川と足を延ばして努力したが、その方面からも何も得られず徒勞に終りクタクタになつて帰つて来た。

かくするうちに屍体は、T警察署から本郷の東大法医学部の解剖室へと移され、この事件が発生してから二日後、即ち五日午前十時から執刀された。

そこに立会つたのは、捜査担当側の小松原検事をはじめ、浦山警部、大野捜査主任、西多刑事、警視庁鑑識課法医学担当の山岡技師、学校側からは、執刀に当る岸博士と解剖に必要な助手だけの小人数で行われ、自殺か他殺かの極め手や如何にと固唾をのんで見守つた。

解剖の結果は、生前飲んだアルコールの外は、その胃袋から抽出されないばかりか、当時の流行言葉にまでなつた栄養失調であることも判明した。

では自殺だつたのか——いや、これは自殺でも他殺でもなく、意外にも全捜査陣の期待を裏切つて単なる過失死と推定されたのであつた。

ではその推定と云うのは……

——被害者は前にも記したように、その日は遅番に當つていたので、映画にでも行つたか、用事でもあつたか、ともかく夕食は喰べ

てない事は、家を出た時間と、解剖と、ホールへ出た時間とで想像出来るし、ホールへ出ると、平常よりも客足が多いので装いも簡単にお客の相手になつたので、深更に及んでから疲労が激しく、したがつて寢所に入つてから飲んだアルコールの効めが倍加された訳である。

そのためであらうか、咽喉の乾くのを覚えために水を飲み、寢所を出たが、栄養失調と、アルコールの効き目と疲労とが重つて眼先が、かすんではつきりせず、足元はふらついていたために、エレベーターと入口を隣り合せている水飲み場へ足を入れたつもりが、こんな大事件発生となつた訳である。そのことも水飲み場の入口寄りの片隅に、被害者の履いていたフェルト製の薄桃色スリッパの片方が無難作に置かれてあることで知ることが出来たのであつた。

附記 本件の場所、日時、人物など何れも実在するので、当て字、仮名を使用してありますから御了承願います。

(完)

×

×

×

×

特選犯罪実話・名刑事捕物帳

東京の青髯

昭和二十一年早春二月、東京澁谷円山町花街の焼跡から発掘された美人死体！ 不眠不休の捜査の果て遂にとらえた犯人は、女房殺しの恐るべき常習魔だつた…

萩原秀夫

瀧川 共画



夕日を浴びた死体

昭和二十一年と云えば、ヤッど戦争の終つた翌年——私達刑事にとっては、それは目の廻るほど忙しい、斬つた、張つたの事件が、毎日のようにありましてね、どれもこれも、

十ッ束ひとからげで、たいして記憶にも残つて居りませんが、ただ一ツ、いまでも、頭ン中に沁みこんでいる犯罪がありますよ。

いま本棚から出してきた、この小さな手帳は、私達刑事は勿論、日本中の警察官なら、誰でも持つてゐる警察手帳の中味ですがね——そうです。中味だけです。これは、一冊が百枚ありましてね、全部書き終ると、署長の検閲を受けたのち、表紙皮から取りはずして、めいめい自分で保管しておき、一年経つたら廃棄してもよいことになつてゐるんですよ。ほら、まだ本箱の中に、ぎっしりつまつてあるでしょう。どれもみな、保管期間のきれたヤツばかりですがね。捨てる気になれンでしてね。あれには、私の二十年余りになる刑事生活が、刻明に記録してあるというわけで、手放すには惜しいンで、ああやつて、埃りだらけになつても、保存してあるンですよ。

ここへ持つてきた手帳も、その千分の一か、万分の一の記録綴。昔で云えば、まあ目明し捕物帳というところでしょうね。

こんなちっぽけな手帳の中に、世の中を震撼させた大事件や、女を焼殺したという

鬼のような犯人の記録が、ずらりと並べたてられてゐるンですから、びつくりするでしょう。

話が十分横道へ外れましたが、これからお話ししようとする『東京の青髻』と当時私達が呼んだ、この事件も、この手帳の五、六頁目からはじまつてゐるわけで、一寸ご覧になつて下さい。

——死体の推定年令二十五、六歳。

性別 女性

発見者 現場と同一町内に住む、ブリキ

職五十嵐某。

死体の状況 土中約一米一〇に埋没され発見者五十嵐某が、戦災地たる現場の地均しのため付近を発掘中、先ず死体の脚部を発見、訴え出たるもの。

これは、現場近くの、道玄坂交番からの報告で、追取刀で現場へ飛んだときの、司法主任の指示を、メモしたもんですがね。これからはじまつて、この一冊の手帳の大半は、この犯罪の記録で埋まつてゐるというほど、事件としては大物でしたね。

しかし、はじめに申上げた、いまでも、頭の中に沁みついてゐる思い出というのは、事件が大物だから、というわけじゃないンで、

す。大物の事件なら、これよりもつと大物もありましたからね。『東京の青髻』の訴出があつたのは、午をずんと廻つた午後四時頃。

えらく風のある日で、冷たい空ッ風が、びゅんびゅんと唸つて居りましてね、現場は高い丘の上——ちようど、道玄坂の上がりきりすこし前を右へ曲つて、現在、テアトル渋谷とか、テアトル・ハイツとか、洒落れた名前の活動小屋が二ツ三ツ建つて、それに、その周りが賑かな飲み屋街となり、夜遅くまで人足が絶えませんが、当時は何と云つてもアメさんの飛行機で、ひと舐めに爆撃されたあとのことで、見事な焼け野原。

ここへ、遠慮なしに、びゅんびゅん空ッ風が吹きさらすンですから、身体じゆうが凍りそうでしたよ。

私達が駆けつけたときは、交番の巡査の機転で、死体を中心に、四方に縄が張りめぐらされ、彌次馬を遠ざけていたので、現場へ着くなり、すぐ検証が出来たわけです。

俄か地均らし人夫の五十嵐という男は、シヤベルを持つたまま、まっ蒼な顔で、そこに立つて居りましたよ。

まつたく、よくも掘つたもので、ちようど一坪ほどのところを、四尺も掘つたンです

ね。その穴を覗くと——ハッと、息を吞みましたね。仰向けになつた、白い体が——素ッ裸なンですね——横たわっているんです。折りから、まッ赤な夕陽が、死体を斜めに射しこんで、白い肌が、まるでキレイな花のように、パッと浮き立つように見えましてね……ああ、と、殺しの現場には手馴れている刑事が、みんな、呻きとも、溜息ともつかぬ、吐息を洩らしたもンですよ。

まったく、あんな美しい状景の死体ははじめてでしたね。いまでも、こうして、眼をつむつていると——ありありと、そのときのキレイな死体が、頭の中に蘇つてきますよ。

死体にうごめく蛆

交番の若い巡査が、死体発見のイキサツを司法主任の宮内警部補に報告する。

「五十嵐さんは、この土地の所有者から依頼をうけ、焼跡の地均らしをやつていたそうです。朝からはじめて、午後三時頃にはご覧のように雑草や瓦礫もキレイに取除き、この取除いた瓦礫を、地中に埋めようと思ひ、ちやうど敷地の隅にあたる、この

あたりを掘りはじめると、まえに防空壕でもあつたらしく、土も軟かく、意外に短時間で、三尺ほど掘り下げることが出来たのですが、そのとき、ニョキッと、黒いものが、赤土の中から出てきたそうで……そのときはベツに気にも止めず、さらにシャベルを入れると、またもう一ツ、ニョキッと、出て来たので、はじめて、おや？ と怪しんだと云うのです。

これが、よく見ると、どうも、人間の足らしく見えるので、半ばおつかなびっくり、そのまわりの土をそつと払いのけると、あッ！と尻餅をついたと云うのです。

やはり、人間の死体だつたというわけで、大声で叫んだそうです。その叫声を聞いて近所のバラックから人が駆けつけ、そのうちの一人が交番へ飛んできたわけです。

私も半信半疑で、現場を踏んだわけですが、来てみて驚ろきました。ガヤガヤ騒ぎだてる野次馬を追払い、非常線を張り、現場保存のため、野次馬の一人を交番に走らせ、同僚を呼ぶとともに、本署に報告したわけですよ。若い、なかなかどうして、見上げた処置である。殺しの現場に馴れぬ交番の巡査は、こうしたときに、とかく気が顛倒して、その

処置を誤るものである。

（江り出しは上乘だぞ！）

何か幸先のいい予感がしましたね。

検証は周到を極めたものでした。穴の中へ降りるにも、掘りたての軟かい土が、さらさらと崩れて、死体に覆いかぶさるのを防ぐため、同僚の手をかりて、ふんわりと、ハンモックの中へ降りるような入念さ。

司法主任。つづいて金子警察医。

そのあとから、宿直の私がつづきました。

死体は頭部と胸の一部、それから両手と、はじめに発見された二本の足を残して、その他の部分には、どす黒くなつた、腐れかかりの蕚が巻いてある。

その、半ば崩れた蕚の隙間から、こんもりした二ツの乳房が覗いているのも、一入痛々しい思いでした。

「死後、どのくらい経ちますか」

宮内司法主任が金子警察医に訊く。

「そうね、半歳ぐらい経過していただけますかな。着物を着たままで、これだけ深く埋められていると、完全とまで云わなくとも、殆んどミイラ化しているんですが、ミイラにもなつて居らんところを見ると、裸のまま、埋められたンですな。それも、ひどいですね。蕚で贅

巻きにしたンですね」

半歳前と云うと、まだ戦争中ということになります。現場付近が空襲にやられたのは、五月二十四日——このあたり一帯は、僅か十数分のうちに、焼夷弾攻撃でひと祇めにされてしまったのです。

或は、このときの焼死体が、そのまま土中に埋もれていたというのでしょうか。

「儼も、はじめはそう思つたンですがね。

この死体は違いますね。ご覧下さい。死体の上半身、腋の下や、脇腹に肉が落ちて白い骨が見えていますね。この骨に、黒いものが、ブヨブヨ付いているでしょう。これも肉片ですがね。色が黒いので焼けた痕かと思うでしょうが、これは死後の死体変色と、腐敗の状態です。よく見て下さい。そこに、何かモソモソしていますね。そうです、蛆です。焼死体なら、蛆はわきませんね」

宮内司法主任と私が、検証を終えてふたび地上に戻つたときには、非常参集で駆けつけた同僚の顔も揃い、円陣を作つて、主任の指示を待つて居りました。

「死体の頸部から二巻きにした紐が発見された。湿気で地色もわからぬほど、すでに

腐りかけてはいるが、こいつで絞めたことに間違いない。他殺死体だ。死後六カ月以上経過しているの、生前の人相、特徴は掴めないが、金子先生の話では、水商売の女、それも、かなり美しかつたろうという推定。そこで、捜査の第一は、常套ながら、死体の身許を洗うことだが、それには、水商売の女、と云う見透しを足がかりに、この辺一帯の女をシラミ潰しに潰していこう」

流れる光茫

水商売の女と、どうしてわかるかと云えば、これは、刑事を三年もすれば、どんな死体からでも、眼をつけるぐらい、朝飯前というもの。ましてや、その道の専門家である警察医が太鼓判を押したのだから、これはもう鬼に金棒。

こりや、案外犯罪を割るには苦勞はないぜと思つたのは、豈、私だけではなく、八名の刑事が、誰もが感じたらしいです。

死体の顔、そして襟あしは、ゾツとするほど、蒼白く、すべすべした感じの肌でしたが、ひと目でわかる白粉やけの跡と、細ッそりした指や、長い黒髪は、労働にははるかに縁の遠い世界に棲む女です。

現場から、ものの一丁と離れぬ一画は、通称「ヤマ」と云われる渋谷円山の三業地です。三業地を背に、埋没された若い美人死体が、水商売の女と云えば、刑事でなくても、その三業地に関係のある女と想像するでしょう。私達も、てっきりそう睨んだのです。

芸妓置屋、待合、料理店、付近の飲食店と、刑事の執拗な聞き込みが開始されたことは云うまでもありません。

——過去六カ月乃至一カ年に、行方不明、若しくは家出した、同年配の女は居ないか？ 現在でしたら、配給制度も大半なくなりましたから、そうでもありませんが、当時は、まだ戦争中と大差のない、きびしい配給制度の頃とて、人間一人が移住するには、チャンと規則通りの届けをしなければ、簡単に他の地へ移るわけにはいかなかったのです。

ですから、水商売の女とて、浮草のように、東から西へと、渡り歩くわけにはいきません。家出するにも、移動届だけは、ちゃんとやつていたというわけで、警察で、行方不明人や、家出人を調べるのも、大して苦勞することとはなかつたわけです。

ところで、三業地をシラミ潰しにあたつたものの、どここの家からも、死体に該当する人

物を見出すことが出来なかつたのです。

「戦争が終つて、世の中に明かるい見透しのできた上に、どこの店も繁昌してますし、この千載一遇のチャンスに、何もこの町から逃げ出すバカはありませんよ」

三業組合の組合長は、私に向つて、捜査の止めを刺すような、皮肉さえ浴びせかけました。

なるほど、そう云われれば、真理である。家出や、行方不明があれば、とにかく、金のかかつている玉だ。青くなつて、警察へ搜索願に駈けつけている筈だし、働いている女自身、金の降る町から逃げ出すバカもない筈だ。

ここらあたりから、漸く捜査は難点を示してきたわけですね。

「もう一度現場を踏んでみよう。どうだ、一緒に行かんか」

その夜——かなり遅くなつてから、聞き込みの連中が本署に引上げたのを帰宅させた宮内司法主任が、刑事部屋で股火鉢で考へこんでいた

私の肩を

叩きま

した。



「こんなに遅くですか？」

煤けた柱時計は、もう十一時を指しているのです。

「君らしくないね。犯人が拳がるまでは、昼も夜もないと、いつも気炎をあげているのは、誰だつたけね」

私は頭を掻きましたね。私の十八番を、主任の口から聞こうとは思いませんでしたからね。

署を出ると、昼間の空ッ風は静かにおさまつていましたが、すぐ三月というのに、身体じゆうが凍りつくような、冷たい夜でした。

昼間は闇市でどつた返えしている渋谷駅前の広場も、アメリカ兵と腕を組んだパンちゃん姿がチラホラするだけで、泥ンこの広場に、新聞紙や紙屑が穢らしく散らかつていました。

無人の道玄坂を登り、現場に到着しました。

主任は腕を組んで、じつと、考えこんで居ります。死体はとうに土中から掘り上げられ、解剖のため病院へ運ばれていたのですが、気のせいか、まだあたりに死臭が漂っているようで、まこと、鬼気迫るといった

感じの現場です。

しかも、あたりは一面の焼け野

原、付近のブラックも灯を消し、現場を再検証するなど云うことは、到底不可能です。

「ナニ、べつに、もう一度、このへんをあたろうと云うのじやないのさ」

私の不審顔を、早くも察して主任が呟くように云うのです。その眼は、あたりの漆黒のなかに、無気味なほど、ピカッと、光るほどでしたよ。

「こうやつて現場を踏んでいると、殺された人の憤り、哀しみ、憎しみが、胸にひびいてくるような気がするんだ。そうすると、負けちやいけない！ という闘志が、もりもり湧き上ってくるんだ！ たとえ犯人が、どんな術策を弄し、どこに逃げよう、必ずひつ掴えて、被害者の怨みを果してやる——とね。

三業地の聞き込みは白と終つた。どこかで、犯人は儂達の失敗を嘲っているだろう。だが儂達は負けてはいないんだ！ これからだ、これからだ！ 儂はこの現場から、どこかに隠れて、せせら笑っている犯人に叫んでやるのさ」

偉い主任だと思いましたね。まるで、その声が、血の叫びに聞えましたよ。私は頭の下がる思いで、私は私なりに、犯人の姿を、暗中に模索しはじめたのです。



く光芒となつて流れていきました。

(あッ！)

と私は、そのときある考えが頭にひらめいたのです。放射線の

要の地点である現場で

す。(ひよ

つとする

と、被害

者は土地

の者でな

く、犯人

は他の場

所で絞殺

した死体

を、戦災地

の現場まで

運んできたの

でなかろうか？)

主任に話すと、う

む、そういう手もあるな、と大きく頷いてくれ

ました。

深夜の輪だち

翌日から捜査の方針は百八十度に変換しました。水商売の女——被害者の身許はしばらくおいて、正攻法に、犯人と取組んだわけです。とにかく、現場まで死体を運んだと仮定して、薙でス巻きにした、全裸死体である以上、人目につく昼間に運んだとは思えませう。運ぶからには人の寝しずまつた夜でしょう。死体の埋没箇所が、もと防空壕だつたとなれば、そこへ入れて、上から土をかけるだけの工作で、死体は完全に土中に没するわけです。この工作に、それほどの時間もかからぬでしょうし、付近のブラックの人達の耳に、その物音も気づかれずにすむわけです。

運んで、この工事をやる以上、殺害現場と、埋没場所とはあまり遠くない距離という推定が浮びます。

そこで、先ず、管内の小運送や、荷車の所有者達に対し、過去六カ月前後の、荷車を貸出した有無の調査がはじめられたわけです。

これは簡単のようで、なかなか大変な調査でした。小運送業者だけならとにかく、一般人のなかでも、戦争中、疎開や何かで、荷車

現場
は小高
い道玄坂
の地つづき——
遙か眼下に、
渋谷駅の信号燈が、
赤く、青く明滅し、足
下を、青山、原宿、駒場、
玉川方面と、放射状に延びた白い
舗道を疾る、自動車のライトが、きらめ

を持つてゐる者も、かなりあつて、調査をはじめて、これは大変な仕事だと、青くなりましたよ。

すでにその頃は、警視庁捜査一課も応援に乗出して、捜査本部が開設されて居りましたから、刑事の人員も倍近く増え、この連中が、毎日荷車の調査にあたつたというわけです。

三日目でしたか——大向通りの或る酒屋で、裏庭に輪ッパを外して、垣根の隅に置いてある荷車を見かけ、たいした期待もなく、酒屋の親爺に訊きました。

その頃は、殆んど、荷車所有者をあたりつくし、荷車調査が不成功に終りかけていたときだつたのです。

「ああ、あの車ですか。戦時中、配給品を取りに行くとき使つたものですが、此の頃は自動車が出廻ってますから、もう無用の長物というわけですよ」

親爺は面倒臭さそうに云います。

「何処かで、見かけたことのある車だな。円山だつたかな？」

こつちは、ハッパをかけるように、大きなヤマをかけたわけですが、向うは、この誘い水に、うまうまと乗つてきたのです。

「へえ、流石に刑事さんは、眼がいいね。円山を引きずつたのは、もう半歳前ですよ」
(しめた！)と思つたが、うつかり、顔色にも出せません。相手に警戒されたら、すべては水の泡です。

「はほう。やつぱりね。そうすると、あのとき、車を曳いていたのが、親爺さんかね？」
「冗談云わんで下さいよ。この歳で、まさか引越しの車も曳けませんよ」

えッ？ と私は半分、ガックリときた。死体を運んだのではなく、引越し荷物だつたという。

「そうそう。引越しと云えば、あの家の跡から、凄え美人の死体が出たと云うじやありませんか」

と急に、親爺の顔が、異様に緊張するのを私は見逃さなかつた。

「へえ、あそこには、誰か住んでいたのかね？ だだっびろい焼跡だと思つたら」

「旦那方は知らなかつたのですか。あそこはもと『天川』と云う飲み屋がありましたね。私どものイイお得意さんでしたよ。五月の空襲でやられ、それから、小ッぽけなバラックを建てて、夫婦二人きりで住んでいたんですが、奥さんが身体が悪いので、いつまでも

バラック住まいではいけないと、本建築をすゐるために、バラックを壊し、芝の親戚へひと先ず越して、これから、本建築という矢先に、こんどの死美人事件というわけで、植村さんも、腐つてゐるでしょうよ」

「植村さんというのが、天川のご主人かね」
「五十を一寸過ぎたばかり。円山ではもう古い顔ですよ。若い、キレイな奥さんを持つてますがね。お氣の毒に病身で、まだお悪いんじゃないですかね？」

(若い、キレイな奥さん！)

私はその言葉が、妙に胸に突き刺つた。荷車の調査はその的を完全に外らしてしまつたが、私は、この親爺から、素晴らしい聞き込みを擲んだ思いで、雀躍りして署へ引上げたのです。

妻想いの青髻

「うむ！」

私の報告を聞き終つた宮内司法主任の眉がぴくつと動いたが、表情は変えず、相変らずのムツツリした顔で、

「植村の引越したのが八月末だと云うと——そのあとへ、死体を運びこんだわけになるな。死後の経過日数も、びつたり一致する」

と指を折りながら、呟く。

だが、私の推理は、もつと飛躍していたのです。

「主任、植村の妻君ですが、亭主より三十も歳若かで、それに凄くキレイだったというんですが——ひよつとすると……」

「ひよつとすると——か。しかし、そんな若い、美しい女房を、ひよつと、なんていう気が起きるかな！」

主任は、じつと、私の眼をみつめます。

「場合によつては——」

私は躊躇なく答えました。べ

つに、証拠らしいものは、何一つないんです。ずいぶん、無暴だと思

お思いになるでしょうが——三十年近くの刑事生活から得た——犯罪に

対する勘が、強いて云うなら、私に云わしめたのであろうと、いまでも思

っています。

「あたつてみよう！ 植村に関する情報を集めるんだ！」

主任がそう云つたとき——私は、つーんと、両眼が熱くなり、思わず、主任の手を握つてしまいました。

「実は——僕もあそこに住んでいた人間に、焦点をあてていたのだ。探偵小説ならとにかく、実際の犯罪に、あれだけの死体を、あそこまで運ぶという筋書には、あまりにも無理がある。幸い、土地で古い顔の植村なら、彼がどんな男か、洗いざらしにするのも、た

はあるまい」

捜査は三転して、天川の主人、植村貞助(54)の身辺捜査に向けられたわけです。

刑事は手分けして、彼が終戦まで住ん

でいた現場付近と、現在転

居先の芝の姪の



家、さらに本籍地へと飛びました。

やがて、またたく間に、植村貞助に関する捜査報告書が、本部に蒐められました。その主なものを拾うと、

一、本人は現在戸籍面に記載された妻みよ子(26)が、五人目の妻であり、四人目の妻はみよ子の姉であり、「失踪」の理由で、戸籍面から抹消され、さらに、その前二名は、夫々、変死、病死の理由により、同様戸籍面から抹消されている。

二、現在の妻みよ子は、芝区内の現住所の町会には、貞助と同棲し居る如く記載されて居るが、同棲の事実なく、幽霊人口の疑いがある。貞助は近所の者に対しては、妻は病気で、故郷金沢に療養して居ると云つておるが、昨年八月、貞助が芝へ転居して来た当時から、近隣の人は、みよ子の姿を見た者がないと云う。

三、これは近隣の風評であるが、現在貞助は姪の家へ同居しているが、この姪と称する女と普通でない関係にあるのではないかという。

四、金沢へ出張した刑事は、みよ子が療養しているという事実を確認することが出来なかつた。つまり、みよ子はその生存

の事実さえ危まれてきたわけだ。

この資料を基盤に、先ず、不正申告(幽霊人口で主食の配給を受けていた)容疑で貞助を渋谷警察署に連行すると、すべてを観念した貞助は、主任の訊問を待たず、自ら、みよ子殺しの犯行を自供し、私達を啞然とさせたものですよ。

「驚ろいた青髻ですね。きつと、前の変死やら病死、それに、失踪の女房連中を、つぎからつぎへ殺したんじゃないですかね」

その頃、刑事部屋へ出入りしていた新聞記者が、そんな推理を下したものですよ。

その夜は、青髻の貞助は、みよ子を殺して以来、はじめてぐつすり睡れましたよと、あくる朝、私にしみじみ申しましたよ。

悪い男じゃないらしかつたですね。だから、新聞記者の云う、「東京の青髻」という言葉はあたらないかも知れませんね。殺人の動機も、長く胸を患っていたみよ子が、いよいよ芝へ転居ときまつて、自分のはかない人生を覚悟して、この住み馴れた地から離れ度くない、と泣いてせがみ、どうせ死ぬ身だから、あなたの手で安らかにしてくれと頼むので——病いにやつれた妻がひとしお不憫にな

り、ついに心を鬼にして絞めたというのです。

愛するが故に殺す——そういう場合も、けつしてなくはないんですね。

貞助はその後、どうしたかつて? もう刑期を終えて帰つてきてますよ。情状を酌量され、軽らくすんだのですね。二、三年前、道玄坂で逢いましたよ。話しはしませんでしたが淋しそうな顔でしたよ。けつして、「東京の青髻」なんて、ひどい男の顔じゃありませんでしたね。

愛

読

者

通

信

前略貴社の「風草」の大的読者の私は、特にソドミアに関する記事を反復読みふけります。

何卒孤独なる私に同志者を御紹介下さる様お願い申し上げます。

当方、独身、二十八才、五尺七寸強、容貌十人並。

希望するパートナーは非才な私を啓蒙下さる様な智的な同年輩、又は年上の近郊にお住みの方以上、一刻も早く御配慮あらん事を。御多忙中とは思いますが重ね重ね切にお願い申し上げます。

有愁生

真夏の惨劇

— 淫獣殺人事件 —

梁川龍之

小田明男画

両手に花の男

養蚕の手伝いを兼ねて、暫く滞在するつもりで来ないか。と言う手紙を、鹿児島島の姉から貰った本間よしゑ(18歳)は、久し振りで姉に逢える喜びに若い胸をふくらませた。

よしゑは熊本駅から少し離れた、大通りの裏にある父の家に住んでいた。家族は父の六造(65歳)と兄の春吉(26歳)の三人暮らしで、兄の馬車挽によつて細々と煙りを上げていたので、楽な生活ではなかった。

姉弟は三人で、一番上が姉のきよの(28歳)、二番目が春吉、三番目がよしゑであった。母にはとうに亡くなられていたもので、家計の都合もあつて、姉のきよのは、四年ばかり

特選犯罪実話



り前に、熊本の遊廊に勤めに出ていたが、運よく馴染みの客にひかされて、よい日を送っている、時々便りがあつた。

その姉からの嬉しい手紙に旅費迄添えて貰うと、よしゑは自分にも何か幸福が舞い込んできたような気持ちになつて、熊本を出て鹿児島に向つた。

馴れない汽車の旅を終つて、駅に降り立つと、義兄の村木豊吉(35歳)と、姉のきよのとが仲睦まじく、よしゑを待つていた。

村木豊吉は軍人上りで、日露戦争に勲功をたて、金鵄勲章を貰つてゐる男であつた。

駅を離れて、いろいろと話あいながら行く中に、よしゑは、村木夫妻が山の中へ家を建て、桑畑を買い込んで養蚕を手広くはじめたことを聞かされた。

「何しろ、夫婦二人きりでしよう、淋しくて仕方がないのよ。それでよしゑちゃんに来てもらうことにしたの……」

きよのは、妹の顔を見ると、嬉しそうに、肩を抱いたりして言つた。遊廊に女郎勤めをしていた影などは少しも見えず、すっかり農家の主婦らしくなつてゐる姉を見て、よしゑはその幸福そうな姿に安心した。

道々話をしてゐる中に、三人は何時しか村に来ていた。町の中で育つたよしゑには、次第に山深くなる四辺の景色が珍らしかつた。

「まだ大分あるの？」

よしゑは流石に馴れぬ道に疲れて、こう言つた。

「これから、もう一とふんばりよ」

姉夫婦はよしゑを見て笑つた。事実家は遠かつた。村を通り過ぎ、山の中の細道を二十町ばかりも歩いて、やつと家についた。

家に着いてみると、大変な山の中ではあつたが、新築したての気分の良い家であつた。木の香もまだ新しく、縁側は南向きになつて、さぞかし住み心持がよいであろうと思わされた。

例え山の中ではあつても、こんないい家に夫婦二人だけで暮らしている姉が、よしゑには羨ましく思われた。

これが、世にも怖ろしい殺人事件の発端になろうとは、神ならぬ身の三人には、知る由もなかつた。時は明治四十三年の春の事である。

「手伝つてもらつて言つても、何もそう夢中になつて働く必要はないんだよ」

村木は、よしゑをいたわつた。そしていたわられるままに、よしゑは幸福な日々を送つていた。

或る日のことである。村木は不図思い立つたように町まで買い物に行くと言ひ出した。「どうだきよの、よしゑちゃんもたまには町の空気を吸いたいだろうから、連れて行こうか……」

村木はそう言つてきよのの顔を見た。自分にとつては、たつた一人の可愛い妹である。きよのは、村木に何か魂膽があるとも知らず、喜んで連れて行つてくれるように頼んだ。

「よしゑちゃん、姉さんのお許しが出たから、これから町へ行こう。帰りは遅くなつたら、向うに泊ることにする」

村木は喜んでゐるよしゑを連れ、町に出かけて行つた。

その夜、よしゑは村木の為に、町の旅館の一室で処女を奪われたのである。翌日村木は何気ない風をして帰つたが、よしゑは昨日に変わる自分の身体と、姉に対する滔々なさの為に、すっかり沈んでいた。

そして、その日以来、村木はきよのの姿が

見えないのを見計らつては、よしゑの身体を要求した。

「義兄さん、私姉さんに済まない」

逞ましい村木の腕に抱かれながら、よしゑは後悔の念にかられていた。だが一度知つた禁断の木の実の味は、そう簡単には捨てられなかつた。

だがこれが何時迄もきよのに知れないでいる訳はなかつた。自分の身体の切り売りをして生きてきたきよのには、夫の姿、態度や、身体の様子で、何時かその秘密を知るようになった。

「浅間しいにも程がある。私と言うものがあるながら、その妹の身体迄自分のものにするなんて……」

両手に花のようなつもりになっている、夫の様子を見ると、きよのは腹の中が煮えくりかえるような思いだつた。

真夏の惨劇

春蚕が済み、夏蚕のはきたてがはじまると、急にお蚕仕事は忙がしくなる。その八月の初めに、きよのには弟、よしゑには兄にあたる春吉が、突然熊本から訪ねてきた。

「やア、よくこんな山の中へやつてきてくれた。別にお構いすることも出来ないが、ゆつくり遊んでいつてくれ」

村木は何故かギクッと胸にくるものがあつた。が、まさか春吉が、きよのの知らせによつてやつてきたものとは、思つてもみなかつた。

春吉は村木の愛想のよい言葉にも耳をかそうとはせず、来るとすぐにきよのと二人で、何かこそそと耳打ちをはじめた。

村木も、よしゑもあまりよい気持ではなかつた。一体何の用で、春吉が突然こんな山の中へやつてきたのであろうか。それが氣になつて仕方がなかつた。その為は何となく四人の間には、うちとけないものが出来上り、暗い流れが、四辺を包んでしまつていようであつた。

春吉が来て、丁度三日目の昼過ぎのことであつた。四人は何れも暗いうちとけない氣持で昼食を済ますと、村木は隣り座敷に一人で移り、新聞を拡げていたが、その中に微かないびきをかいて眠りはじめた。よしゑは、それを見ると、自分も傍に置いてあつた雑誌を取りあげて、縁側の日陰になつたところに

て、それを読みながら、うつとりとしていた。

そのときである。二人を交る交る見ながら春吉ときよのが、又何か囁きあつていたが、

突然春吉が立ち上ると、部屋の隅に置いてあつた桑切り庖丁を手にとり、寝ている村木の枕元に駆けよるが早く、いきなり頭めがけて叩きつけた。

ガツン！ 激しい音と共に、

「ギャーッ!!」

獣の吠えるような村木の声がした。春吉は村木の頭蓋骨が切り割られ、そこからおびただしい血が流れるのを見ると、狂つたように尙も桑切り庖丁を叩きつけつづけた。

よしゑは、その物音に吃驚すると、慌てて庭に駆け下り、夢中で養蚕小屋の中に駆け込んだ。

「何と言うことをしてくれた。こんなことをしてくれと言つて、お前を熊本から呼んだんじやない。こんな酷いことをして、どうしてくれる」

きよのは、一瞬にして変り果てた夫の姿をみると、声を上げて泣きくるつた。夏の昼下がりに、山の中からは、その惨劇のあつたことも知らずに、蟬のなく声が、静かに響いてき

ていた。

しばらくの間、春吉は呆然としていたが、やがて我にかえると、養蚕小屋の方に向つて「よしゑ、どうもしやしないから出てきてくれ。俺はどうも大変なことをしてしまった。これから腹を切つて死ぬから、見届けてくれ」と言つた。

よしゑは、その声を聞くと、ふるえながら養蚕小屋から出てきた。そして、その場の光景を見ると立ち竦んでしまった。

村木の身体は、座敷の真ん中に頭蓋骨を切り割られて血まみれになつてゐる。四辺一面にその血が飛んで、血の海とはこのことかと思ふばかりである。その傍には、血だらけの桑切り庖丁を持つた春吉が、呆然として突ッ

立つてゐる。きよのは弟をうらみながら、血まみれの村木の死体にとりすがつて泣いてゐる。

「義兄さん、許して下さい……」

よしゑは、それを見ると、自分と村木との関係が如何に怖ろしい結果になつたかを知り、大声をあげて泣きながら、死体にとりすがつた。

約半ときばかり、姉妹は村木の死体にとりすがつて、只泣くばかりであつた。やがて、春吉がすつと立ち上つた。

「姉さんも、よしゑも許してくれ。俺が浅墓だつたのだ。例えどうあろうと、こうなつてしまつた以上は、自分も生きてはいられない。今ここで死んでお詫びをするから、あとはよろしく頼むよ」

そう言ふと、桑切り庖丁を取り上げて、自殺をしようとした。

「莫迦、何をするんだ」

すると、それを見て

いたきよのが、慌てて立ち上つて、春吉にすがりついた。

「今お前が死んだら、熊本に居るお父さんはどうするんだい。それよりも……」

きよのは、今迄あまり村人と交際をしていないのを幸いと、村木の死体を埋めて、ここを逃げ出そうとすすめるのであつた。

三人は力を合わせると、村木の屍体を庭に持ち出し、春吉が裏の柿の木の根方を深く掘つた中へ、その屍体と血に染まつた庖丁を棄てて埋めた。

家の中の畳や板敷の血を洗い清めると、出来る限りの証拠の湮滅を図り、翌朝夜の明けぬ中に、各自目ぼしい衣類や家財道具を取纏めて、誰にも逢わぬように裏道から隣村へ出て、汽車で熊本に帰つたのであつた。

テク島刑事

町にはすつかり灯が入つてゐた。寺島刑事は今日も一日過ぎたかと、警察を出ると、家路に向つた。外はすつかり暗くなつてゐる。大正四年の五月下旬のある日のことであつた。

寺島刑事は年の頃五十歳前後、でっぷりと



特選犯罪実話



肥った逞ましい姿は、年よりも幾分若く見えた。寺島刑事は、暑を出ると家路に向つて歩いていったが、しばらく来たところで、不図用を思い出した。

早く家に帰ろうか、それとも用を足して行くのか、一寸迷つたが、どうせ少しまわり道

をすれば用が足せるときまると、中寺町の方に足を向けた。

町を出外れて、この辺にかかると、四辺は急に静かになつた。それもその筈、この辺りは寺ばかりが並んでいるところで、夕方ともなると、何となく物淋しくなってくる。附近

には幾つものお寺が、高い堂や塔の尖端を、夜空に高くそびえさせている。

道を行くに従つて、両側の塀や垣根の破れ目から墓場の中が見え、石碑や卒塔婆が、闇の中に薄気味悪く見えている。

寺島刑事は、馴れているとは言うものの、あまりいい気持ではなかつた。

「ううッ！」

思わずえり元が寒くなるのも、梅雨前の陽気の寒さばかりではない。寺島刑事は歩を早めると長元寺の横まで来た。すると微かに女の泣き叫ぶ声が耳についた。

「許して下さい、私が悪かつたんです。どうぞ許して下さい」

訴えるような、喚くような、途切れ途切れの女の声を聞くと、寺島刑事は綽名のテク島刑事になつて、これは穩かではないぞと思つた。

寺島刑事がテク島刑事と呼ばれるのには、わけがあつた。それは、彼の捜査の方法についてであつた。どんな急な事件でも、彼は乗物を用いようとはせずに、徒歩でジックリとやつていく。要するにテクシーでテクテクとやつていくところから、同僚達は彼のことを

テク島さんなどと呼んでいるのであつた。その為には早飲み込みの同僚達よりも、却つて面白い材料を嗅ぎ出して、あつと言わせることもあつた。

テク島刑事は、途切れ途切れながらも、女の声に耳にすると、立ち止まつて、耳を澄ました。

声は、そればかりではない。女の声と共に盛んにお題目を唱えているのも聞こえてくるのである。

「坊主、何かやつてゐるな……」

テク島刑事は、これは捨ててもおけんと、女の声とお題目を共々聞きながら、そつと垣根の破れ目を入ると、寺の境内に入つていつた。夜と言つても、まだ陽は暮れたばかり。何と言う大膽不敵な……

境内に入ると、テク島刑事は足音を忍ばせて、中から灯の洩れている本堂に向つていつた。本堂の戸は開け放され、中は一眼で見えた。この長元寺は日蓮宗の祈禱所のあるところ、よくいろいろの人が祈禱を上げにくるとは聞いていたが、こんなところによつつかつたのは、はじめてであつた。

テク島刑事は、戸の開けられている本堂の

中を、そつとのぞいた。

赤々と燈の点いた本堂の中では、住職が一生懸命にお題目をあげており、その前に女が打つ伏して、叫んでいた。そしてその傍には顔見知りの亀田と言う五十女の周旋人が面倒を見ていた。

「何だ、奴が玉を連れてきているのか……」

坊主めけしからん。と意気込んでいただけに、テク刑事はがっかりすると、何時までもこんな淋しいところにも居られず、又元の道に戻つて道を急いだ。

家へ帰ると、大急ぎで飯をかき込み、早々と寝ることにした。ところが寝つこうとする、急に長元寺のところで聞いた、お題目伴奏つきの、女の悲鳴が耳についてきた。

「許して下さい、私が悪かつたのです。許して下さい……」

あの慾張りの亀田の婆さんが、金のかかる

祈禱を上げさせているのだから、何れ何処からか素性のあやしい女でも引っぱつてきたものだろうが、一体何だろうか。耳につく声を打ち消し、打ち消し、している中に、テク島

刑事は何時か夢路を辿つていつた。それから一週間ばかりしてからのものである。テク島刑事は聞き込みの帰りに、不図この付近に亀田婆さんの家のあることを思い出した。

すると、長元寺での不思議な女の泣き声が耳の奥に新しく聞こえた。「そうだ、何だつたか、一寸聞いてやろう」

テク島刑事は、亀田婆さんが、何であの女の介抱をしていたかに興味を持つと、一寸様子を見てやろうと言う気になつて、亀田婆さんの家の戸を叩いた。

引つかかつた鴨



「誰だい」

戸を開けて、外を見ると、亀田婆さんは、
「ああ、こりや旦那ですか」

と急に愛嬌のいい顔になった。女の周旋をして、悪い金を稼いでいることは知っているが、テク島刑事は寛大に取り扱ってやっていた。何彼とわかりのある女だけに、蛇の道は蛇で、何かあると情報を提供させるのに便利であるからだ。

「お珍らしいじやございせんか、何か御用でもあつて……」

婆さんは上り框に座布団を出すと、二三回頭を下げながら言つた。玄關の上り口が二畳の小部屋、その次が六畳に四畳半と言う、簡単な造りの家である。

テク島刑事は、お世辞笑いをする婆さんを軽くあしらうと、奥をうかがつた。先刻戸を開けるときの様子で、奥に病人が寝ていることを見てとつていた。

この間、長元寺に連れていつて、祈禱をしていた女だな。テク島刑事は直感すると、出してくれたお茶を一口飲み、おもむろに煙草に火をつけた。

「座敷の女な、相変らず祈禱に連れていつて

特選犯罪実話



いるのかい」

何気ない様子で、釣込をかけた。別にこれが材料になるとは思わなかつたが、興味はあった。

「えッ、へへへ旦那どうも、実は早くお

耳に入れときやアよかつたのですが……」
婆さんは、てつきりテク島刑事が女のことを調べに来たものと思い、まずい顔をした。

「どうしたんだい」

「旦那、ありやア山下町の千鳥屋さんからの貰いものなんですよ」

「貰いもの？」

「そうなんです。何でも熊本の生れなんだそうですがね。千鳥屋の旦那が抱えたときにはもう孕んでいたそうで。孕んでいる女を知らずに抱えこんじやつたんですね」

「それで……」

山下町と言うのは、淫売窟のあるところで、千鳥屋はその中の一軒であつた。

「それでね、七八カ月にもなつてたんでしうか。仕方がないからお産をさせてと思つて二三カ月置いたら、うまい具合に死産だつたそうで」

「うんそれから」

「そのあとがいけなかつたんですね。産後の肥立ちは悪いし、身体中浮いたり痛んだり、おまけに真ッ蒼な顔をしてふさいでいますから、客に出すことも出来ません。それで無理に押しつけられて一カ月にもなるんです。寝てばかりいるんで、祈禱をさせてみたんですが効き目がありません。まつたく金ばかりかかつて私も手を焼いていますよ」

亀田婆さんの如何にも困つたような顔を見

ながら、テク島刑事は第二の釣込をかけた。「それにあれだそうじやないか、祈禱の最中に妙なことを言うそうじやないか」

「へえ、そうなんです。兄さん許して下さい、私が悪かつたんです。なんて大声で言つて、わアわア泣いたりするんです。ところが祈禱のときはそうなんです、終るとケロリとそのことは忘れてしまい、又蒼くなつてふさいでいるんです。どうしてよいか困りますよ」

「ふむ、それで、その兄と言うのは何処に居るんだい」

「それが全然わからないですよ。どう聞いても身元のことを言わないんです」

何かあやしいものがある。テク島刑事は、

亀田婆さんの話を聞いている中に、心の中に何かモヤモヤしたものを感じはじめていた。「おい、一度内緒で、その娘が長元寺に祈禱に行つているとき、俺に現場を見せてくれなにか」

「よろしゅうございます。では今日の夕方に参りますから」

「だがな、病人には俺が立会うことを知らせるなよ」

テク島刑事は、亀田婆さんに念を押すと、何かあると心の中に思いながら、テクテクと署に戻つた。

夕方早目に仕事を切り上げると、少し早い方がよいと、長元寺に向つた。二人が来ているといけなないので、庫裡から入つて行くと、住職に一切を打ち明けて、本堂の次の部屋から襖越しに祈禱を見ることになつた。

やがて亀田婆さんに連れられて、蒼ざめた娘が、本堂に入つてくると、早速祈禱がはじまつた。

高らかに住職の祈禱する声が響く。するとしばらくして、娘が急に、

「兄さん許して下さい、私が悪かつたんです。でも手を下したのは私ではありません……」

と訴えるが如く、むせぶが如く言つて、何か物を抱きかかえるような恰好をしはじめたのであつた。

テク島刑事は、その様子を陰で見っていたがその場に入ると、そつと住職の耳に何かささやいた。住職は黙つてうなずいて、うやうやしく珠数を爪ぐりながら、

「兄さんと言うのは誰だね」

と聞いた。最初の中はなかなか通じないような様子だったが、その中に住職が声を大きくして言うと、急に泣き出しながら、
「私の兄さんです。義理の兄さんです」と言つた。

夢枕に立つ義兄

住職は、其処で、又うやうやしく珠数をつまぐつた。サラサラと言う珠数をもむ音が、本堂の中に響く。

「義理の兄さんだけでは判らない。どこの何と言う人だね」

「姉の夫です。私の姉の夫です」

「名は何と言う」

「……」

「何処に居る」

其処までくると、娘はピタッと口をとぎしてしまつた。そして名前と何処に居るかを言わない中に、又元に還つてしまつた。

何か言うに言われぬ大きな秘密がある。テク島刑事は、其処迄を聞いたのちに、長元寺を出て、一足先に亀田婆さんの家に向つた。

女の名前はよしゑと言つた。

二人が帰つてくると、テク島刑事はよしゑ

だけを奥の部屋に呼んだ。そして自分が刑事であることを打ち明けた。

「もう、お前が祈禱中に何も彼も言つてしまつたので、様子は判つてゐる。それにお前の秘密も判つてしまつた」

テク島刑事は、よしゑの顔を、ジッと見ながら鎌をかけた。よしゑは、しばらく声もなく泣いていたが、やがて涙に濡れた顔をあげると、「旦那済みません」

と言つて、声をあげて泣きはじめた。

「そうか。いいよ。こうなつたら一刻も早く改めてさらけ出すんだね。そしてさつぱりした方がお前の為にもなる」

テク島刑事は、そう言いながらも、まさかこれ程の殺人事件が、この娘の口の中にひそんでいようとは思つていなかった。

よしゑは、泣くだけ泣くと、やがて、

「永い事かくして申訳ありません。何れ兄は自首すると思つていたものですから、かくしていたのですが、もうすっかり旦那に見破られました以上は、何も彼も申上げてしまします」

と言つて、鹿兒島の山の中に於ける、義兄の村木豊吉の殺害のことを、詳しく語り出し

たのであつた。

よしゑの話すことを聞いて、テク島刑事は事の重大さに吃驚した。

「それで、熊本に帰つてからの五年以上をどうしていたんだね」

五年もの間、殺人事件が世に知られずに居た重大さに驚き、テク島刑事は言つた。

「はい、その後、姉は知り合いの料理屋を転々と奉公していましたが、その中に朝鮮か満州に渡つたとかで行方不明です。私は父親が老病になり、薬代が嵩むので、三年前に前借して料理屋に出ましたが、それからあちらこちらと流れ歩き、その中に赤ン坊がおなかに出来たりしたものですから、働くことも自由にならず、それに赤ン坊を生んでからと言うものは義兄のことが急に思い出されて、時には夢枕にも立つたりするものですから、一日として安らかな日はありませんでした」

「春吉は何処に居る」

「はい自首をしていなければ、まだ熊本で、馬車挽きをしていると思います」

五年前の殺人事件は、こうしてテク島刑事の不断努力によつて、遂に陽の眼を見るこゝとが出来たのであつた。

強姦屍体の検屍

……無惨な娘の死体を見て刑事は泣いた。「ひてえことをしやがる。お嬢さん安心しな。オレたち刑事が生命にかけても、きつと犯人を検挙してみせる」

三谷 祥介
絹川 祐三 画

女は男子と比較して力が弱いもののように考えられているが、婦人科の坂本正雄医博の説明によると、女の内股の力量は遠く男子の及ぶところではないという話である。いわゆる大切な生殖器を外敵から侵されないように、女が両方の内股をぴったり閉じたときの力は、婦人によつてもちろん相違するけれど、腕力の強い男子でも一人の力ではどうすることも出来ないと言ふことである。

かつて坂本医博が経営している病院へ、十三歳になる少女が母親につれられてやつ



てきた。
初潮らしいが
異状があるように
思うので診察していた
だきたいと言ふのである。

そこで坂本先生は、母親と看護婦を立会わせて診察することにな

つたが、この少女は恥しがつて、なんといいきかせても内股を開かない。やむを得ず看護婦が腕力で股を開かせようとしたが、五人の看護婦が額に

汗を流してもなおその目的をはたすことが出来なかつたと語るのであつた。

ではいつたい、女が必死になつて外敵から身を守るダンになると、どれほどの力が内股に加わるものか？ 恐らく男には、かり知ることができないし、われわれの想像外だと思われる。こう言う事実を突きつけられると、じつさい問題として、婦人が本気になつて抵抗した場合、強姦ということに成り立たないのではないか——もつとも法律的には、強迫その他の方法で、女の意志に反して、性交をとげた場合は、強姦罪が成立することになつてゐるが……。

芝山内の女中殺しや九段坂上の裸体女の絞殺事件など、すべてその屍体のありようが、検視に立会つた私ら刑事の眼には、あきらかに強姦されてから殺されたものと判断された。陸内に精液のあつたことは勿論だが、それよりも女の屍体の脚のカタチである『く』の字に彎曲した両脚は、死後どんな方法を用いても、これだけは容易にもとの位置には直らない。ちいッと見つめて

いると『刑事さんあたしは強姦されました』と、その死体が話しかけてくるような気がした。医学の知識がなくとも、コロシの現場を踏んで得た経験のたまものである。私ら刑事と言えども人間の感情は持ち合わせているので、いたいたしい死体の姿を見ると臆（おそ）がこみあげてくる。

頑（こ）固（こ）な子供を殺したり女を強姦して絞め殺したような犯人が、いまだかつて迷宮入りになつたことがないという理由は、刑事が『コロシ』の現場へ立会つたとき、心の底から犯人を憎み、「必ず検挙して、あなたのカタキはとつて見せます」とオノレの心に固く誓うからである。どだい初めから捜査にあたる精神の持ちようがちがつてゐるのだ。

それにしても万力のように力を持った女の内股を、この賊たちは、どんな工合にして開かせるものだろうか？ 一刻も早く犯人を検挙してその事実を訊問してみたい——私ら刑事には普通一般の人にはちよッと思像も出来ないようなタノシミがある。また一面には、これも普通の人にはとうてい想像することもできないような犯人に対する憎しみが沸きあがり、言語に絶する残酷この上もないサヂズ

ム的心境に支配されるものである。終戦後は新憲法が出来て人権が尊重されるようになったので、どんな犯人に対しても拷問はゆるされないが、戦前はこのような賊に対する刑事部屋の拷問は地獄絵にも見るのでできない凄（こ）いものだつた。

「刑務所はおッかなくないが、刑事部屋は怖い」と言う印象を、私ら刑事は犯人の脳裡へはッきり焼きつけたのであつた。こうした拷問が、いいことか悪いことか批判することは別として、賊を働くほどの人間はつかまつたときの刑事部屋のリンチを計算に入れないで、悪事に手を出すことはできなかつたものである。

私の印象にいまもまざまざとこのこつてゐるのは、月島と横浜を往復してダルマ船を舁（こ）につないで曳舟をしている黒崎耕作という汽帆船の船長が、入江とも子（19）を強姦して絞殺し、死体の始末に困つて有り合せたロープで石を結えつけると、河岸通り十三番地先の大川へ沈めにかけた事件だ。とも子の死体がこのまま沈んでおつてくれ

れば問題にならなかつたが、人間の死体はすこし腐敗しはじめると、体内にガスがたまつて、十貫や二十貫くらいの石なら、やすやす持ちあげて浮きあがる。そこへ通りかかつたのが水上警察署の見廻り船だつたので、ただちに刑事部へ報告があつた。私ら刑事は時をうつさず現場へ駆けつけたが、六号地へ引きあげた死体は、さすがに二タ目とは見られない有様だつた。何倍にも張れあがつてまるでお化そっくり。ところが検視の医者が死体にちよつとメスを入れると、風船玉がしぼむように奇妙な音がして、人間の姿になつた。この女の死体が強姦されていることを物語つたのは、前に説明したように両方の脚が彎曲していることだつた。

「ひでえことをしやがる。これじゃ仏も、かばれまい。お嬢さん安心しな。オレたち刑事が生命にかけても、キッと犯人を検挙してみせる」

検死に立会つた刑事の中には、ちようど年頃の女の子を持つてゐるものもあり、みな一同が親身にな



つて涙を流した。

かくして犯人の捜査は、六号地を中心にくりひろげられたワケだ。私ら刑事の捜査苦心談は（紙数に制限があるので）省略しなければならぬが、石を結えて死体を沈めにかけた船具用のロープと、その石の結目が、船乗りを稼業とするものの特徴あるヒキホドキであるという点がキメ手になり『第三共栄丸』の船長が有力な容疑者であるということになつた。がしかしこれは意外だ！ 私ら刑事は腰をぬかささんばかりに驚いた。

黒崎耕作は二十八の若さで船長をつとめてゐる男だが、どちらかと言えば内気な性格で航海学の本から眼をはなさず、学問に余念のない青年だつた。彼は現在汽帆船に乗つて曳舟をやつてゐるが、給料を貯めて大学へ入学し、航海学を修めて（おぼ）歐洲航路の大汽船へ乗り込むという遠大な希望を持つていたし、一面まことに親切なところもあつて、水上生活をする困窮者の面倒もよく見ていた。水上警察署から表彰されたことも二三度ある

くらいで、前途を（しんくもく）属目された有為の青年船長だつたのであつた。

私ら刑事は黒崎のアリバイをすつかり洗つて取調べをはじめたが、彼は頑として自白しない。只今の言葉で申上げるなら黙秘権を使つたわけである。私ら刑事たちはまざまざと残酷きわまる『コロシ』の現場を検視しているだけに、黒崎に対する腹りも一倍加わつて、

「キサマが黙秘するならひどい目に遭わせてやる。覚悟しろッ！」と呶鳴りちらし、地獄絵そのままの拷問をはじめた。

擲る蹴るぶつ、という騒ぎだから、たちまち黒崎は全身が張れあがつて、皮膚には血がにじみ、とうとう刑事部屋へ血反吐を流した。

「ざま見ろ」

私ら刑事たちは一片の情がなく、留置場から引き出してはこれを繰りかえした。さすがに黒崎はまいつて、（からだ）がしだいに衰えてくると、良心の呵責（かじやく）を堰き止める力がなくなつた。弱身につけ込む風の神（かみ）ということがあるが、黒崎は入江とも子の亡霊に悩まされて苦しむようになった。

「刑事さん白状いたします。どうか留置場から出してくださーい」

こう言つてよたよたと刑事部屋へ現われた黒崎は、薄陽のもれる高窓のガラス戸を見あげて身ぶるいした。彼はその高窓に絞殺したとも子の幻を見たのかも知れない。それから気持もぐっ、と落ちついて、彼は次のような供述をした。

黒崎が入江とも子を殺したのは、四月の五日で、その日はちようど日曜日であつた。第三共栄丸の乗組員は、一日の慰安会をゆるされたので、咲き初めた桜の下で酒を飲むことになり、昼すぎになると一同が手をたずさえて上野の山へ花見に出かけた。しかし船を空っぽにすることは出来ないので、船長の黒崎がひとり居残ることになつたが、彼は酒を飲んでふざけ散らすより、好きな読書がしていたかつたのだ。長い春の陽もやがて夕べが近づいて、花曇りの空には、灰色の雲が被いかぶさつて



だつたが、界限でも評判で匂うばかりの美

しさだ。この日はかねて恋仲であ

る帝大生(現在は東大)

の鴨下欣一

とアベックで

海の見える丘で語

り合い、いまのさき

別れて自宅へ帰るとこ

ろだつた。

黒崎はなんと言ふこともなく、ひよいっと葦の繁茂している河岸へ立ちあがつた。彼は別に理由もなく、まるでモノに憑かれてもしたかのように、

「おーい」と山彦を呼ぶような気味の悪い声を出した。

とも子は思わず振りかえつたが、黒崎は夕べの薄闇に、絵から抜け出たようなあでやかな女の姿を見ると、ニタニタと笑つた。意味があつて笑つたワケではない。

「僕と、すこし話しませんか……?」

こう言つて黒崎が一步葦の中からふみ出すと、

「あッ!」と女は叫んだ。

いた。黒崎は読書に疲れをおぼえたのへ渡したはい。そして葦のてぼんやり空を見つめてみると、花をもとめる胡蝶のさまよい出たのがとも子であつた。彼女は月島の佃新田で石炭商を営む入江勇三の一人娘

「誰かきてッ！ 助けてくださいッ！」

とも子の悲壮な叫び声があまにも大きかったのだ、黒崎は驚いて気持が顛倒した。彼はしまったッ！ と思った。咄嗟に駆けつけて女の口を両方の掌でしつかり塞いだ。

彼はあたりを見まわしたのである。

誰ひとり見ているものはなかった。

いくらか気持が落ちついたので手をゆるめると、女の体が重心を失ってぐったりした。

これが強姦行為に取りかかるまでの黒崎の供述である。

だが、船乗り稼業で鍛えた腕力だからと言つて、とも子が叫んだ瞬間に、黒崎の掌が女の鼻口を塞いだだけでそのまま呼吸が止まったとは考えられないことだ。もしこの供述が事実とすれば、とも子はあまりの驚きに想像外の衝動をうけたものだろう。

「お前は女と面識があつたか」という私の訊問に対して、

「いいえございません」と黒崎は答えた。

気絶した女を抱えて途方にくれた彼は、と

も子を船中へ連れこんだが、彼の供述によると、そこで女が蘇生したというのである。黒崎は言葉たくみに強迫して情交をせまり、女がやつと納得したので、目的をはたすことが出来たと自供するのである。

「では殺す必要はないではないか」という私の訊問に対しては、

「なににもかも終つてから女は僕の膝に取りすがつて泣きました。どうか殺してくれと言うのでございます。もし殺してくれなければ自殺すると言うのでした。花見に出かけた連中も帰ってくる時刻になつたし、ついに決心して、僕はズボンのバンドをはずしました。それから女の首へ巻きつけて……」

「絞めたのか？」

「はい。殺しました」と言つて黒崎は蒼白になつた。

しかし、こんな供述がそのまま受取れるものではない。とも子の死体の両脚は彎曲していたではないか——彼女は最後まで拒みつけ、まったく力つきて強姦されたという事実は、なによりもまず彼女の死体が物語つてい

これ以上の穿鑿は実際問題として必要がなかつた。なぜかと言へば、犯人の自由は俟つまでもなく、死体のありようが犯行を確実に裏づけ、しかも雄弁に説明しているのだつた。

そこで私は黒崎耕作の犯行に対しては、あくまでも死刑をのぞんだ。私は情状を酌量する点がすこしもないことを意見書に書添えた。

役立てて、もし男と言う男のすべてが、女を見て、心ひそかに強姦をたくらむことが、生涯に一度や二度はキツとあり得ることだと立証するものがあつても、黒崎の犯行に対しては私の気持の中にいささかの同情もなかつた。彼は幾度も法廷に立つたが、裁判の結期は無果の懲役を申渡されて下獄した。

私は彼がギロチンに立たないことが残念であつた。

強姦の罪をよく考えて見ると割り切れな

い。なぜかと言へば、どの男もその被害者になり得ないし、宿命的に女に限られてお

り、たとえ強姦されても、被害者が親告しなれば問題にされないという点はさておいて、強姦された女が法にすがつて『性の悪魔』を鉄窓につなぐことが出来ても、事実は反対に強姦された彼女が、社会的にはその価値が暴落し、より以上打撃を蒙るという事実である。

こんなに歩が悪くてナサケなく、悔しくて片手落ちなことは、あまりこの世の中に類例がない。

私の二十三年の刑事生活を振りかえつてみても、被害者が生きている場合は、強姦事件がモノになつたことは一度もない。刑事の仲間では強姦に強姦が付きものであるというのが常識である。

訴えのあつた被害者の邸宅へ乗りこんで、強姦の足下りや『入り』と『出』を調査してみると、必ずそこに時間のズレが出てくる。身の毛も慄立つ強姦の被害をうけながら、警察へ訴え出る時間が理由もなく隙取つた場合は家族のものが手に手をとつて歎き悲しみ、涙に濡れて強姦の被害につき、いかに処理すべきか？ 協議を重ねていたものと判断してだいたい間違がない。

強姦の罪は前にも言つたように、被害者の親告をもつて論ぜられるので、たいがい泣き寝入りとなるのが普通だから、私ら刑事は被害者が殺されないといふ扱えない事件である。ところが強姦にとつて強姦は景物であり、被害者の訴えを遅らせて躊躇逡巡させる手段でもある。私ら刑事は、強姦犯人の罪を憎んでその人を憎まずという気持にはとうていなれない。その罪を憎みその人を憎んで、刑事部屋で拷問をあえて敢行してきた私は、いままなお心中にいささかも悔ゆるところがないのである。

愛

読

者

通

信

拝啓 益々御発展の貴社に対し一愛読者と

して御同慶に堪えません。最近の性犯罪が、俗にいう風俗雑誌の影響によるものであると誤報されていることを誠に遺憾に思います。われわれマニヤの心理を理解せぬ愚言だと言えましよう。どうぞかかることに惑わされず断固本誌の発展に尽力して下さい。

さて前置きが長くなりました。小生は生れつきのサジストではあつたようですが、学生の頃のある日、学校からつれられてサーカス

見物に行つた際、小生の横に坐つていたM生が始終小生の太腿のあたりを、紫色にはれ上る程つねりまわしました。

その痛みは悲鳴をあげる程でしたが、羞かしさの余り、じつと目を閉じて我慢しておりますと、いつの間にかそれに快感を覚えるようになりました。

サーカス見学後は、その場で解散することになりました。

M生はその帰り無理やりに彼の家の天井裏に小生をつれ込み、そこでは本格的な責めが行なわれました。

彼はこの責めを前々から計画していたらしく、色々の責め器具が用意されておりました。

これが、小生がサジに目ざめる始めだつたようです。今は我れを責める相手も無く、又わが責めたき相手も得られず、時々自分の体に鞭打つては、ほのかな満足を満たしております。小生は今年二十一才になる美男子です。二十五才位の肢体の整つた男女で、サジマゾの方はぜひ御交際下さい。小生の望みの方がありましたら「風草」気付でお便り下さい。

(東京P X生)

妻人れた抉

山林の草むらから発見された美人屍体
それは全裸で、しかも抉りとられて
いた！ 血なまぐさい獵奇事件!!

恩 田 一 郎

小 田 明 男 画

全裸の美人屍体

インフレ、インフレのタケノコ生活で、モンペをはいているのが都会の娘、晴着を着たのが百姓の娘という変てこな現象を生んだ昭和二十三年の正月——東京からホンの少し離れただけの、ここ千葉県印旛郡遠山村は、無事に供米を送り出して報償物資の酒、タバコの溢れた豊かな正月だった。

あきた、あきたといいながら、それでも正月気分はまだぬけぬ六日の夕刻のことだった。この村の消防団員のKとSとが、小菅という

山の方からあわてて駆け下り

てきた。

「大へんだ、殺

されてい

る、

矢つ張り殺されていたんだ」

「何が殺されたんだ、しつかり口をきけ」

「あれだ、その、去年の暮の二十九日、買出しに来ていなくなつたという東京者の女がいたろう」

「うん、あの別嬪か、あの年増の美人がどうしたんだ」

「小菅の山の中に、殺されて埋められていたんだ」

「そりや大変だ、早く駐在所の旦那に知らせなけりや駄目だ」

百姓たちはクワを捨てると、あわてて駐在所に飛んで行つた。

ただちに成田地区署に連絡され、翌朝には鈴木検査課長、泉水鑑識課長らが現場にかけつけた。

小高い山林の中腹、雑木林の草むらの中に、髪の毛だけをわづかに露出して死体が埋められているらしい。捜査主任は村人に手伝わせて周囲に荒縄を張つて現場を荒されないようにしたが、すでに夜来にかけて好奇の目をそばだたせて幾人かが近寄つた

形跡が見えた。鑑識課員の手によつてクワが下された。静かに、少





しずつ泥が取り
除かれ、死体は
次第に、その姿を
さんさんたる陽光の
もとに露出しはじめ
た。

「おお、腕が、胸が腹
が、脚が……」

すべての泥土が取り除か
れたとき、そこには身に一
糸をも纏わぬ、完全な白ろ
うのような豊満な、しかも爛
熟した美人の死体が現われた。

豊かな両の乳房、なだらかな腹
部へかけての曲線、少しも損われ
ていなかった——だが、両股が現わ
れた瞬間、並み居る鑑識課員、刑事
連が声をそろえて、

「アッ！」

と驚愕の叫びを発した。その部分は完全
にきりとられて、空虚な洞がドス黒い穴を
ポツカリとあけているばかりだった。

誰が伝えたのか、この挟られた年増女の噂

はバツと村中に拡まつて、野次馬が現場付近に群がつてきた。

「かんじんのところを挟られちまつたちゆうでないか」

「えらいこつちや。これは逆定というんだそ
うな」

「逆定！」

「うん、お定さんのアベコベじやからな」

物識り顔の男が、得々と現場の模様を語つて聞かせたが、もちろん又聞きと想像を混えたものだつた。それを聞いたものが、また輪をかけ、益々誇大に興味をもられて伝えられて行つた。

痴情か物盗りか

県警察部では早くも成田地区署に捜査本部をもうけた。犯罪捜査の段階として、先ず被害者の身許の割出しを行わなければならぬ。この間、現場では着々と死体の解剖が進んでいた。

死因は細ヒモのようなものによる絞頸による窒息死。

絞殺後に暴行を加え、その後に局部を鋭利な刃物で切りとつた。

死体の両股に多少の精液を発見。

これらの事実が詳細にメモされてゆく。捜査陣は早くもこの村一帯に聞きこみを行つていた。

「ありやア東京者さ、暮の二十九日に買出しに行くといつて家を出たちゆうんじや、それでオヤジさまが、探がしに來たが目つからんでのう」

村人のいう女と死体が一致したところから、間もなく被害者は東京都城東区南砂町六の七二、会社員西野清太郎氏妻良子（四一）ということが判つた。

良子さんは、しばしばこの遠山村に買出しに來ており、馴染みの農家も少くなかつた。ここばかりではなく成田、船橋、千葉方面にも出かけていたので、夫の清太郎氏から、その方面にも捜査願が出されていたのだ。

暮の二十九日頃、

「モチ米の少しも探がして来ましようよ」と気軽に出かけたといいのだが、調べてみると、被害者は連日のように買出しに出かけていた。

四十一歳とはいえ、琴、生花の師匠をし評判の美人だつた良子さんは一見三十歳ぐらいにしかみえなかつた。この美貌が買出しにも役立つた。ことに巧まぬ愛想のよさが、百姓

にも或る魅力だつたらしく、彼女が行けばドンドン供出？して呉れた。

「買出しの面白さ」たしかに物の無いときに物を買うことは快味を覚える。こうして彼女は買出しをするうちに次第にそれを売つてもうけることさえ覚え、半ばセミプロ闊屋となりつつあつた。

これは捜査の重点であつた。なぜならば犯人は、

美貌をねらつたか？

持ち金をねらつたか？

痴情か、物盗りかの重要な分岐点だからである。捜査は現場の模様から変態男の痴情犯行説と物盗り説の対立となつた。

この村に被害者が現われたのは午後三時ごろ、米五升、サツマ芋二貫匁を分けて貰うつもりで來て村人と立話をしていたが、どこの農家も売つたものはないところから、買出し用の金を多少持つてゐることは確実である。この点からいえば物盗り説、しかし、局部を切りとつた点からみれば痴情説が成り立つ。

しからば犯罪は村人か、他所者か？同じような買出人やヤミ屋は多勢この村に入りこんでいる。

正月、とくに溢れる酒で豊かな生活をして

いる村人にその疑いは薄い。むしろ局外者の犯行？これは物盗り、痴情、両面からいえる。そうなると捜査は面倒になる。痴情なら酒の上の犯行ともみられるわけだ。

ところが、間もなくこの両説に決定的な判定が下された。死体を埋めるために掘った穴その穴掘り道具は鑑識の結果、たしかに山芋掘りの鋤という鑑定が下つたのだ。

犯人は土地の者で変態者の凶行
こう結論づけられて、捜査はこの線一本で強力に推進されることになった。

シラミつぶしの聞込み

二人一組となつた約十班の刑事の一組、KとT刑事は受持ちの区域の百姓家を一軒々々シラミつぶしに當つて行つた。

早くもお正月は十数日を経っていた。村人たちは村の北部の中農M方の日当りのよい縁側に腰を下ろし、接待の抹茶にノドをうるほしていた。

「実は妙なことがあるんですよ。しかし、何でもなかったことをしやべつたりして、あとで恨まれると困りますで……」

「そんな心配はいらんよ、われわれはどこか

ら聞いたなど、死んでもしやべらない、君たちも毎日、こうして入れかわり立替り来られて迷惑だろうが、これも村の不安を一日でも早く無くそうというわけなんだ」

条理を尽くした刑事の言葉に、貝の蓋を閉じたような百姓の固い口も、ようやくほぐされていった。

「あの芋掘りの『みそか』の奴なんですがね。あの男が『大へんな事件が出来たもん』だ、おれはあの日、よそへ行つていたので、ちつとも知らず、帰つて来て聞いたんだが、全く驚ろいた」としやべつて行つたんですが、

ね、あの男を、あの夜、見たという人がいるんですよ。夜のことで、ハッキリわからなかつたんだが、他の人なら声をかけるし、あの男に違いないというんだが……」

「フーム、みそかの奴がなあ、しかし、あの男には、たしかにアリバイがあるんだから、疑うわけにはいかないよ」

刑事はこういふと、話を世間話にそらしてしまつた。

「みそか」——それはアダ名で、同村越川栄助(四〇)という強盗傷害前科一犯の男、昭和六年の十二月三十日夕刻、同村遠山地先

県道で同所の菓子商富田巖さんを襲い、ナタで頭部を一撃、こん倒するのを見すまして当時の所持金一円五十銭を奪つて、間もなく検挙され、懲役七年の刑を受けて十三年出所、村へ戻つてからは、誰も相手にしてくれず、山芋掘りで暮しを立てていた。

この犯行が三十日であつたことから、村人は彼を『みそか』と呼んで白い目で見ていたのだつた。

刑事は彼のアリバイがあるといつた、しかしそれはウソだつた。その証拠に、この二刑事は次ぎの所に行つてこう訊ねている。

「向うの方のウチで、ミソカの奴がやつてきて、俺はあの日よそへ行つていたが……としやべつたそうだね……」

また、つぎの家へ行つても、同じように訊いている。

「みそかのやつが何かしやべつたというじやアないか」

こうして『みそか』が数カ所で同じセリフをしやべつていくことが確認された。

「彼は当日のアリバイを作ろうとしている」「何の為にアリバイを作らねばならぬか」

彼への疑いは次第に濃くなつていった。そ

のとき、別の一軒で彼は、
「あの日は家にいたが、あの買出女には気づ
かなかつた」

といったことが判つた。何という矛盾だろ
う。彼はその日、村にいなかったはずではな
いか。

一月十八日、彼への疑いは動かぬものとな
つて逮捕状が発せられ、自宅に寝ていた「み
そか」こと越川栄助は、捜査本部へ連行され
た。

家宅捜査の結果、被害者良子さんが家を出
るとき履いていた地下タビ、良子さんが船橋
のヤミ市から仕入れて売つたり、物交したり
していた反物生地、さらに穴掘りに使つたと
みられる鋤を発見、追及したところ、遂に包
みきれずに犯行を自白した。丁度事件発生以
来二十一日目、三七日の忌日というのも奇し
き巡り合わせだつた。

野獣の牙

「前科者、『みそか』といわれて、刑務所
を出てからのわたしは毎日々々辛い日を送ら
ねばなりませんでした。」

それにもまして辛かつたのは母や弟とも別
れ別れの生活で、ひとり淋しく正月を迎えな

ければならないことでした。村の家た
ちは、みんな供米酒で、どこへ行
つても酒の匂いがプンプ
ンしている。ああ、
俺も百姓をやリ
たいと思つ
ても、

誰一人雇つてくれるものもありませんでし
た」と「みそか」は、ポツリポツリと当時の
犯行を回想して次のように語つた。

丁度、五時ごろだつた。もう日も暮
れたので畑のものを盗もうと思つ
て、カマを持つて出かけたところ、山の端で、いつもよく

みる年増の別嬪の姿を

見かけた。決して前

からねらつていた

わけじゃあな

かつた。米

か何か少

し脊負

つて



いたが、少しばかり無心をしようと近寄ると、もう逃げ腰なんでムツと腹が立つた。後から、脊負っている荷物に手をかけてグツと引きとめ「金を出せ」と思わず脅迫の言葉が出てしまった。

「乱暴なことをしないで下さい、あたしも買出しの身なんですから」

となんだか哀れっぽい泣き声でいいながら、懷をゴソゴソやつて二百円ばかり出して呉れた。黙って引つたくつて、顔を見ると顔色がすつかり蒼くなつてガタガタと震えている。

俺は何もしようとは思わなかつたが、余り脅えている様子を見ると、あたりに人もいないし、何かもつといじめてやりたいという気持ちになりました。それは何かジレツタイ気持ちで、何ともいえないセツナイ気持ちじやつた。

「早く行つて」

とか何とか女がいつたようだった。

「もつと欲しいものがある」

といつて飛びかかったら、女は、

「どろ棒ッ！ 助けてえ」

と悲鳴を挙げた。人に来られては困ると思ひ、突進に後から手を回して口を抑えながら

引き

倒した。

女は脊中の荷

をかなぐり捨て

て身軽になつて逃げ

ようとしたのを追いつ

がつてとうとう組み伏せて

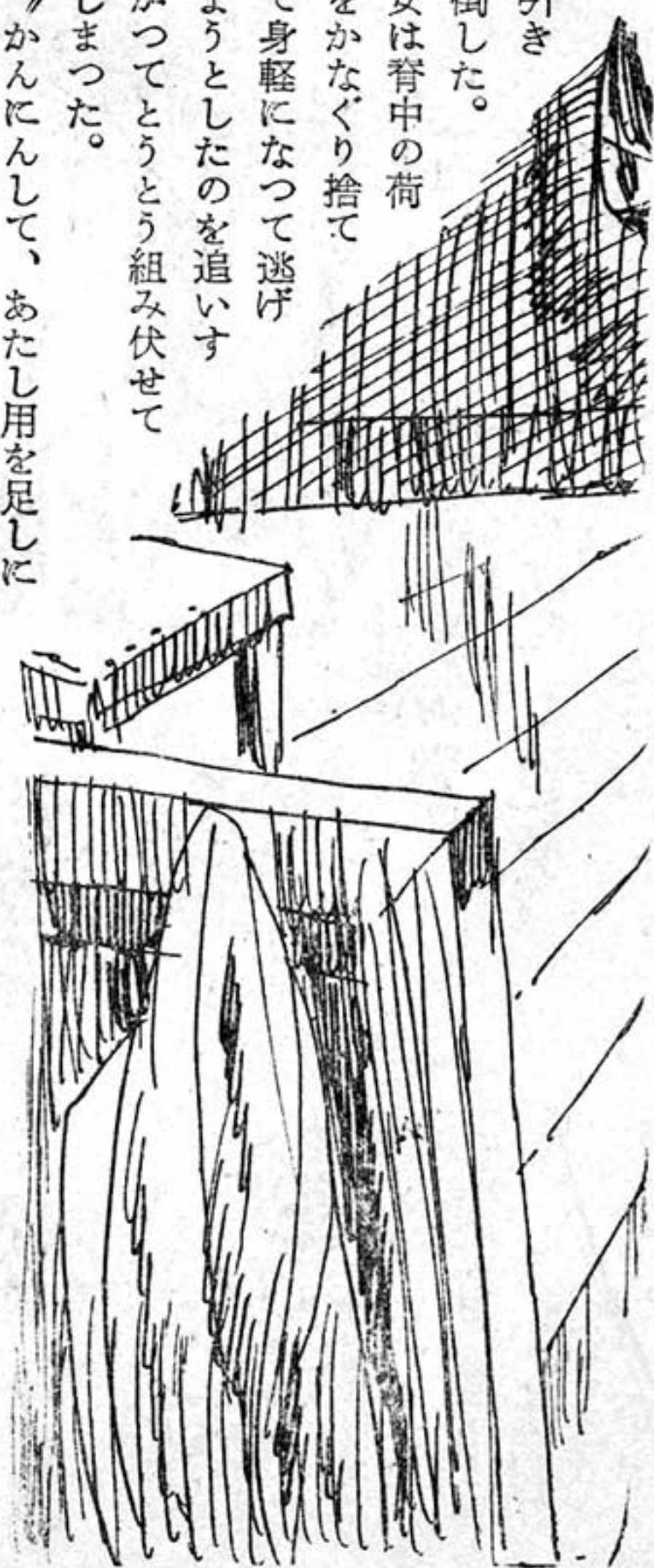
しまった。

「かんにんして、あたし用を足しに行つてきますから」

といったのを覚えてゐる。あとは覚えが全然ありません。えり巻きで後からグツとやつたまま……

こうして仮死状態になつた被害者を山中に引ずりこんだ「みそか」は、飽くなき野獣の牙をむき、そこで一夜中を明かし、夜明けの鶏鳴に驚いて、再び生き返らぬように細ヒモで更に締めた。

半裸となつて息絶えた女体から次ぎ次ぎと衣裳を剥ぎとつたが、現われた白ろうのような豊満な肉体、永年の間、堪えぬいた男やもめ暮しを歡喜の絶頂に追いあげた肉体を、そ



のままに置き去るには余りにも惜しかった。彼は夢中で、持つていた鎌を使つて駄を抉りとつた。そして死体を芋掘り用の鋤で掘つた穴に埋めた。

せつかく、抉りとつた宝物ではあつたが何か恐ろしくなり、これも落葉の下に埋めて喰わぬ顔で自宅へ戻つた。

毎日々々、悪夢に襲われた。犯罪が発覚すると、すべての人の目が自分を見つめているように感じられた。こうして彼は、村の何軒かを回りながら自分で自分の犯行をいわば語りに語つて歩いたのだつた。

(おわり)

★ 懸賞原稿入選作品・佳作 ★

長篇アブ・ストオリー

稽

古



1
私が俳優になつたのが今から二年前。三十
の年をきいてから俳優というものになつたの

ですから、駈出し役者というか、俄か仕込み
の中年俳優というか、とにかくあまり上手で
ない、いわば素人俳優に毛がはえた程度のも
のであることに間違いありません。それも真

栄画 川 砂 牧 迪 夫

面目に科白をおぼえて、稽古した段取りのま
まを忠実に演ずる新劇俳優とでもいうのでし
たらまだましなのですが、旅から旅へのいわ
ゆる下サ廻り劇団の俳優というのですから、
私にとつてはあの一変りの口立芝居を器用
にこなすことなど、まだまだ及びもつかない
芸当なのです。私も二年前までは、ある貿易
会社のサラリーマンでした。二万五千円ほど
の月給をいただき、夕方家へ帰れば、しとや
かでおとなしい妻の絹子が夕食の仕度をして
待つていてくれるという、つつましかなが
何不自由ない結構な身分だったのですが、
その妻を離縁し、会社をやめて、こんな下サ
廻りの旅役者におちぶれてしまったのも、ひ
つきよう私の愚かさには違いありませんが、
それというのもみんな現在の私の妻美紀子の
ためなのです。

美紀子と結婚するためには、私の地位も名
誉も、何一つ惜しくはありませんでした。あ
るグリの給仕女をしていた美紀子と、ふと
したことで言葉をかわすようになり、一しよ
に映画を見たりお茶をのんだりしているうち
に私は猛烈に美紀子を恋するようになりまし
た。とどのつまり、私は強引に絹子を離縁
し、美紀子が寄食していた伯父という人に十

万円の結納をおさめ、晴れて結婚式をあげた
のですが、私は美紀子を得た代償として会社
をやめるはめに立到つてしまいました。前の
妻の絹子が課長の姪であり、離縁について課
長と言い争いをしたあげく、私はあつさり会
社をおん出てしまったのです。

美紀子さえ得たらもう私には何もいらな
い。それがそのときの私の心境のすべてでし
た。もつともあれから二年たつた今でも私の
心境にかわりはないのですが、境遇の方は大
いに変りはてて、退職金や失業保険などで遊
び暮した半年後、美紀子の求めるまま、失業
の一時的対策のつもりでなつた役者稼業から
足が洗えず、美紀子とともに、というよりは
美紀子にひきずられて旅から旅へと廻りある
いて一年半を経過してしまつたのです。

2

映画におかれ、税金に追いかけれ、最近
のこうした旅廻り劇団の不景気はお話になら
ないのですが、ごたぶんにもれず私たちの所
属した劇団も、埼玉県の大宮で解散になり、
桜が咲いて人々はお花見で浮かれているとい
う爛漫の春にそつぽを向いて私たち夫婦はほ
んど無一文に近い状態で放り出されてしま

つたのです。

「とにかく浦和まで行つてみましょう。去
年の秋行つたとき、あそこの座元、あたしに
とつても親切にしてくれたのよ。あそこで頼
んでみたら、なんとかなると思うわ」

駅前のうどん屋の親子丼一杯で腹をこしら
えてから、美紀子の言葉にはげまされて私た
ちは国電で浦和へ急ぎました。

ところが浦和の町の繁華街を、うらぶれた
気持でとぼとぼ歩いていた私たちは目的の座
元の家へ行きつかぬうちに××通りの小さな
芝居小屋の前で「沢田時次郎大一座」という
看板をみつけたのです。

「おい、沢田一座がかかつているぢやないか」
私は、足をとめて美紀子に言いました。沢
田時次郎一座……別に知り合つてゐるわけ
はありませんが、いままでに熊谷とか高崎で
私たちの一座の前とか後によくぶつかつたこ
とがあるこれも私たちと同じような下サ廻り
の剣劇一座なのです。美紀子にとつても親切に
してくれたという座元の家をたずねて行くこ
とはあまり気のすすまなかつた私は、
「どうだい、ここへ駈込みしてみようか。座
長の沢田に会つて頼んでみて、入れてくれた
らそのまま入座したらいいんだし、断られた

ら断られたでそれから座元のところへ行つたつていいじゃないか」

と美紀子の氣をひいたのです。

「そうね、そうしてみましようか」

美紀子も案外すなおに承知して、私たち二人は樂屋に座長の沢田を訪れました。

沢田は私たち二人の話をきいたうえ「女優さんがもう一人欲しいと思つていたところなんだ。ぢやあきようから入つてもらいましようか」という具合で、いとも簡単に話がまとまり、その日から私たちは沢田時次郎一座の座員ということになったのです。

一座は座長ともて男優が七人、女優が二人という小劇団ですが、その女優が一人は四十何歳かでどつちかという老け役であり、一人はまだ十八歳とかで、娘役以外にはちよつと無理。二十五歳の、いわば女ざかりの美紀子の入座は大いに助かるらしく、翌日から早速美紀子は座長の相手役ということになりました。座長が清水の次郎長をやれば美紀子はその女房お蝶、座長が早瀬主税をやれば美紀子がお蔭といった具合で大へん重宝がられました、また美紀子も持ち前の大膽さで、一年半の年期とは思えないほど器用にやりこなしましたので、座長とのイキもびつたり合ひ、

二人の濡れ場など舞台の袖で覗き見している私も思わずうつとりとさせられるほどのこまやかさで、見物人からも「よう、御兩人ツ」とか「たまらねえぞ」とか掛け声もとびますので、座長も喜ぶし、私たちもこれで当分の座に落ちつけることと一安心いたしました。もつとも私の方はからしき駄目で、乾分の松吉とか、捕方とかいつたところが主な役であり、舞台で座長と美紀子が抱き合つているところをうしろから忍びよつて「野郎ツ」と斬つてかかる。座長がひらりと体をかわしてよろめく私の背中を飛刃一矢、サツと斬りおろすと私は「ダア」と虚空をつかむ。その弱腰を美紀子が赤い蹴出しを乱してポンと蹴る。私がひっくり返る上を片膝で押えつて「親分」と下から座長を見上げる。座長が刀を美紀子の前へすつと出して「お蝶」というのが析のかしら。美紀子がふところ紙で座長の刀をしごいて拭くのとともにチョン、チョンチョンと暮……といった具合で、私の存在はただ単に美紀子の夫であるというだけで、いわば居ても居なくてもどつちでもよいというのが本当のことだつたでしょう。

3

一日変りの口立て芝居は、小屋がかぶつたあと、樂屋であすの狂言の筋を狂言方なり座長なりが大たい説明し、お互いの段取り、せりふのやりとりなど打合せなのですが、もちろん誰も真面目に稽古なんかいたしません。みな心得たもので、役の性根と筋の進行だけ解つたらもうそれでサツサと戸外へ遊びに出してしまうとか、或は寝てしまふといったものですが、しかしさすがに座長だけは手をとる（喝采をうける）ところを考えねばなりませんから、多少はあししようか、こうしようか、あすのやりとり、しぐさを研究します。その相手になるのが大が美紀子で、これも相手役ですからぜひありませんが、美紀子も熱心で、他の者がみんな出ていつてしまった樂屋の中で座長と二人きりでいつまでも稽古をつづけているのです。

4

「ねえ、あんた。このごろ座長、変なのよ」
乗りこみ初日の駅前から町外れの小屋まで歩いて行く道すがら「ふふふふ」としのび笑いしながら美紀子が私に言うのです。

「稽古して、あたしを抱くのはいいけど、抱いたままなかなか離さないのよ。あたしの身

体をひきつけたまま、これからどうしようか、一たん離れて手をもう一ぺん引つばつて、もう一度こう抱いて……とか、真面目な顔して研究してるような恰好してて、ふふふ、おかしいわ、あの人……」

きき捨てならない妻の言葉ですが「え、なに？」と改まるには私の環境が許しませんでした。

「あはふふ、そのくらいはあるかも知れないな。君も娘ぢやなし、うまい具合にはぐらかしていたらいいんだよ」

さりげなく私は言い捨てましたが、妻の言葉の状況が私の脳裡一ぱいに大うつしになつて、座長は妻をどう抱くのだろうか、舞台上いつも抱いているあの程度か、それとももつと強く、もつとぴつたり抱くのだろうか、……いろいろな抱き方がオーバラップしてきて私は心中おだやかならぬものがありました。「こんどから稽古、あなたも一緒に居てよ。座長と二人きりぢやあたしイヤだわ」

「ばかばかしい。毎日舞台でいいかげん堪能しているのに、女房が他の男に抱かれる稽古を、そばでノホホンと見ていられるかい」

私は冗談にまぎらしましたが、美紀子は私の横顔をのぞきこんで、

「いいの？あんだ。あたしをほかの男の人と二人きりにしておいて……」

とダメを押すようにきめつけたその目はなんとなしキラツと光つていたのです。

美紀子の私に対する態度が、時とともに少しずつ変つて行きました。私はそれに充分気がついていながら、どうすることも出来ませんでした。美紀子は一座のいわばスターです、私は居ても居なくてもいい大部屋役者であり、ましてこうした浮草稼業の常で、座員同士の相当えげつない冗談や悪ふざけも日常茶飯事的に見過されがちなのですから、私にも目に角たてて妻をなじることも出来ませんでした。美紀子も私の妻としての良識は持つていようし、相手も東京へ帰れば家もあり妻もある男、まして座長という責任上からいつても、ある一点をふみ越すことは万々あるまいとは思いますが、しかし近ごろの座長の私に対するものやわからかさ、美紀子の私を軽んじる態度など思い合せて、そんなこと全然気にもとめないというような顔をしていながらも、私にとつてなんとなく不安な日がつづくようになりました。

それから一週間ほどすぎたある夜のことでした。芝居もはねて、夜食も終り、一同は寝場所になつてゐる表事務所の二階に引上げました。

「座長、お先へ失礼します」

私と美紀子も楽屋からひきあげようとしますと、

「あ、美紀ちゃん、ちよつと……」

座長は美紀子呼びとめました。

「あしたの打合せしたいと思うんだけど、三十分ほどつき合つてくれないか」

その声をきいて美紀子は黙つて座長のそばに坐りました。私は突立つたまま恰好がつきませんので、

「じゃ、お先へ失礼」

と言ひ残してサツサと楽屋を出て行きました。美紀子がなんとか声をかけるかと思つたのですが、美紀子は私の方をふり向きもせず黙つて坐つたなりでした。

事務所の二階へあがつて、薄い薄団の中に身体をつつみましたが、どうも眠れません。狂言は毎日変りなのだから打合せも毎日必要だといえはそれまでですが、昨夜も座長と美紀子はあとにのこつて稽古してましたし、一昨夜もそうでした。出し古しの狂言を繰返し

て行くのですから詳しい稽古は要るわけではなし、新入りの美紀子としては一応打合せはしなければならぬとしても、あしたの昼間したらそれで結構間にあいましょうし、なにも人が寝る段になつてからやりはじめなくてもいいではないか……。

私の眼がさえてなかなか寝つかれません。私の枕の横に美紀子の枕だけがポツンと主を待っているのみで、美紀子はいつまでたつても帰つてこないのです。

もう二、三十分たつて……私は我慢が出来なくなりました。そつと起きあがつて、音のせぬように階段をおり、ガラシとした客席を通り抜けて舞台裏の楽屋の前へ忍びよつたのです。別に忍びよる必要はないのですが、私は文字通り忍びよつて行つたのです。このこと妻を迎えに行くてれくささと、私の心中にひろがる疑心暗鬼が私の足を自然に抜き足さし足にしてしまつたのでしよう。

私は楽屋の襖の外に立ちました。なんの話し声もきこえません。居ないのかな。……いや居ます。「ふふふふふ」……突然美紀子の含むような忍び笑いがきこえました。私は足がすくんでしまいました。襖から先へ一歩も歩みよれないのです。

建てつけの悪い破れ楽屋のことですから、柱と襖の間も隙間だらけですし、襖そのものも破れて突通つてゐる小さな穴がそこかしこというしろものです。私はその襖の破れ穴に目をあてて、そつと覗いてみました。楽屋着の丹前を着た座長の沢田があぐらをかいて坐つています。そして美紀子は……その沢田のあぐらの膝の上に桃色のタオル地の楽屋着のまま、しつかり抱かれて乗つてゐるではありませんか。

私はカツと顔がほてつて、胸がドキドキと高鳴つてきました。早鐘を打つというのはこのことでしょう。

稽古か、これが……。稽古ならなんとかせりふのやりとりもしようし、もう少し動きまわりもしようのに。お互いに何も言わずに、じつと抱き合つたままでありませんか。

襖をガラツとあけて飛びこもうか……。それは出来ませんでした。「今はいけない」なぜいけないのか……。自分にもわかりません。

ただ厭もなく足をすくめたまま、私は猶立ちたまふ数分をそこで過してしまいました。

また忍び足でその場を離れた私は、急いで二階にとつてかえし、これはいけない。間違いが起らぬうちに私は美紀子をつれてこの座

から出なければいけない。しかし、金がない。退団するのはいいが、たちまち路頭に迷わなければならぬ。せめて二、三千円の金を持つてからだ。私は胸をさすつて薄団の中で美紀子の寝巻をじつと抱きしめました。

それから三十分もたつたでしょうか。静かに美紀子が二階へあがつて来ました。黙つて楽屋着を脱ぎはじめます。私は寝たまふこれ無言で美紀子に寝巻を差出しました。美紀子はするつと裸になつて私から寝巻を受取り、手を通して腰紐でキユツと結ぶと、そのまま冷やかに私の横へ入りました。私は半分目をつぶつたり、またあけたりして、起きてゐるような眠つてゐるような、どつちつかずの表情で身を固くしてゐました。美紀子は腹匍いになつて枕許に灰皿をひきよせ「光」をうまさうに吸つていましたが、半分ほどで火を灰皿でもみけし、軽いあくびをしてから、くるりと横になつて私に背を向けてしまいました。

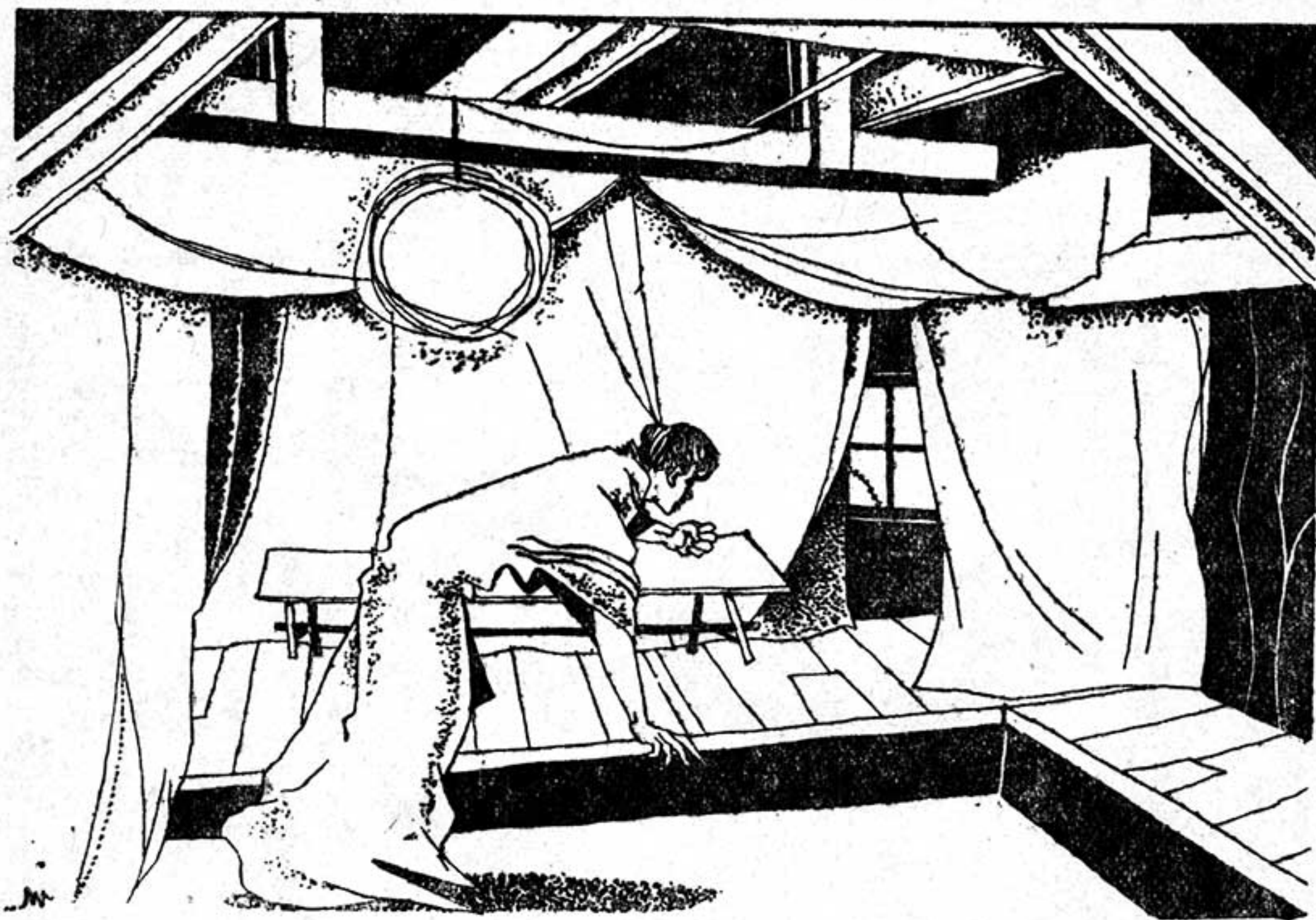
「美紀子……」私はうしろから美紀子の背中を抱いて小さな声で呼びました。

「眠いわ……」ひとこと言つたのみで、あとはなんの応待もなく、美紀子は私の方に身体を向けません。私はとりつくひまもありません。

んでした。

6

もう疑う余地はない——。それから更に十日ほどたつた深谷の町の興行です。まともな芝居ではどうも持ちませんので、そのころは中幕に美紀子を主役にしたストリップまがいの女剣劇を加えていたのですが、これがやはり一番大受けて、狂言は国定忠次でも笹川の繁蔵でもなんでも構いません、主人公を女の役に置きかえて、いいかげんに口立てでやるのですが、姐御姿の美紀子が三、四人の男を相手にして大立廻りを演じます。片肌ぬいでお乳を見せて、裾は乱れ放題です。赤い蹴出しも押しひろげてしまつて、美紀子の小麦色のたくましい足は、太腿から股の近くまで観客に見せつけます。右左の男を斬り倒し、舞台の真中で仰向けに倒れた私の身体の上にどんと腰をかけて思



いきり足をひろげて刀をふりあげ、座長の二枚目と娘役を下手へ見送つて「お二人さん、しつかり離れず添いとげて、いつまでも元気で暮すんだよ」と大見得をきるのが幕切れです。

私は幕がしまりきるまで美紀子のお尻の下でもがいているのですが、あの立廻りというのは相当重労働で、さすがの美紀子も幕切れにはぐつたり疲れてしまいます。どうかすると幕がしまつても、私の胸の上に腰をかけたままなかなか立つてくれません。

「おい、早く立てよ」

私は美紀子のお尻の下からうながすのですが「うるさいわねえ」といった具合で、夫婦だから遠慮はいらぬとはいふものの、私が恥かしい思いをすることがしばしばあるので

その遠慮のなさは私だけにしたらまだいいのですが、同時に沢田との間の交渉も目に見えて親しさが増してきて、舞台の袖で出を待つ間でも、笑いながら沢田をおんぶしてみたり、そばに私がいるのに沢田に化粧くずれを直してもらつたり、私をないがしろにする態度が露骨にあらわれて来ているのです。

この小屋の楽屋も狭くて、六畳ほどしかあ

りませんので、楽屋には私はか男優七人が寝ることにし、小屋の裏に座元が建てたバラック小屋があつて、これが階下六畳、二階四畳半という一間ずつの部屋しかないのですが、この階下の六畳に美紀子ほか二人の女優が寝、二階の四畳半に座長が一人で寝ることにしたのです。

その小屋の三日目の夜でした。町のある料理屋の主人が女優さんに御馳走してあげたいからと、いわゆる「お座敷」をかけてくれたのです。しがない旅役者か料理屋のお料理を食べられることなど、めつたにないことなので、他の女優二人は大喜びでした。

「あたし、今夜やめとくわ。アタマが痛い」
美紀子は妙にぐずぐずしていましたが、結局出かける段になつてから行くのをやめてしまいました。

「あら、行きましたようよ。せつかくお座敷がかつたのに。行かなきゃ損しちゃうわ。それに先方のお目当ては美紀ちゃんなのに、美紀ちゃんが行かないんなら私たちもやめようかしら……」

というようなやりとりがありました。結局女優二人は美紀子を残して行くことになりました。芝居がはねて、十時半ごろ、

「ぢやあ美紀ちゃん、行つてくるわ……。お楽しみ」

意味ありげな軽口でひやかしながら二人は出て行つたのです。

うす笑ひして二人を見送つた美紀子は、
「あたし、アタマが痛いから早く寝るわ」

と言ひ残してサツサと裏の部屋へひきあげてしまつたのです。

ひとしきり男優たちは馬鹿ばなしを交していましたが「さあ、俺も寝ようかな」と沢田が腰をあげ、裏の方へひきあげました。私たちは楽屋に四枚の蒲団を並べて敷いて、そこへ七人が横になりました。私は出入口近くの一番はしに寝ましたが、電燈を消してからも全然眠れません。眠れないのは当り前です。裏の部屋は今夜は沢田と美紀子の二人だけなのですから……。お座敷へ出て行つた他の女優はお酒が出て、お料理が出て、おしやべりして、御飯を食べて、帰ってくるのは早くて二時でしょう。もしかすると先方から「もう遅いから泊つて行け」と言われれば、喜んで泊つてしまふに違ひありません。よしんば帰つてくるにしても、まだ三時間は裕にありますが。その三時間を裏の部屋で沢田と美紀子は何をするか……。私は床の中でじつと天井を

睨んだまま三十分ほどの時を過しました。

もうどうにもこのまま寝ていることが出来なくなりました。よし、裏の部屋へ行つてやれ。何しに來たと言われたら、美紀子にちよつと話があつたから來たのだと言えればそれまでだ。アタマが痛いといつて寝た裏の容態を夫が見に行くのは当然のことではないか……。私はこの自分で自分に言いきかして、そつと床を抜け出しました。

裏口をあけて一歩外へ出、すぐ一間ほど間をおいて建つてある小屋の戸に手をかけて、音のしないように引きあげました。一尺ほどの土間があつて、障子の向うが美紀子の寝ている六畳です。障子の破れから中を覗いてみました。三つ床が並んで敷いてあります。右も左も、真中も、どの蒲団にもだれも居ません。私は土間に脱いである美紀子の草履をつかんだまま、足がぶるぶるふるえて來ました。

二階の沢田の部屋へ行つてゐる……。私は上へあがつて、階段口から二階を見上げました。ここでそつと忍んであがると私の名目があったたくなります。私は美紀子の容態をききに此処へ來たわけなのですから……。
「座長ツ」

私は階段下から声をかけました。建てつけの悪い二階の床板が急にミシミシと鳴りました。

「誰だ？」

「僕です。砂川です。美紀子はそちらに居るでしょうか？」

しばらく声がありませんでした。

「うん、……まあ上りたまえ」

ややあつて落ちつきをとり戻したような座長の声です。

「失礼します」

私は意を決して、トントんと二階へ上つて行きました。ガラスと襖をあけました。

牡丹の花模様の、桃色の長襦袢の寝巻を着た美紀子がそこに居るのです。酒をのんでいた。沢田と美紀子の間に一カン張りの机があつて、そこに二、三本の徳利と、つまみものの南京豆が小皿にバラバラとのおつていました。

私は注意深く部屋の中の様子を見まわしました。沢田は座布団を敷いていますが、美紀子は敷いていません。そしてもう一つの座布団が沢田の横にくしやくしやになつて居るのです。

「ちようどいい、まあ君も飲めよ」

沢田は私に盃をさしました。私は受けるような受けないような、そのままずると机の横にペタリと坐つてしまいました。

「アタマが痛いんで、いま一杯ごちそうになつたところなの。あつたまつて寝ようと思つて……」

膝をくずして横坐りになつた美紀子の乱れた長襦袢……

私は座長の手から盃を受けとつてしまいました。美紀子は徳利をとりあげて私の盃の中に酒をつぎました。ゴクリと飲んで私は沢田に返杯しました。それもペコリと頭をさげながら……

美紀子ものみました、あまりいけない私もつい五杯と盃を重ねました。「駈けつけ三杯よ」などと美紀子に言われて「いやどうも、僕はあかくなるんでね」とか「僕より美紀子の方がいける口なんですよ。以前グリルに居ましたんでね。洋酒なんか飲みつけてたんです」とか、ぎこちなかつたその場の雰囲気却つて私の方からほぐす役目をしているのですから世話はありません。

座長も美紀子も次第に気を許してきて、盃が重なるとともに再び私が第三者みたいにくしものになつて行くのです。二つしか盃があ

りませんでしたので、私が前に盃を一つおきますと、もう一つの盃は沢田と美紀子との兼用です。美紀子は自分の盃を持つて沢田の横へまわり、しどけなく肩に手をかけて「はい、おしやく」などとしなだれかかるのです。それをまたいい気なもので沢田は「うむ」とかなんとか応揚にかまえて盃を受けるのでした。いかに不甲斐ない私でも、これでは一向酔えません。妻に対するうづぼつたる不満が内心こみあげてきました。美紀子はしかし平気なものです。

「ああ、あつい。ホラ、ちよつとさわつてみてよ。こんなに熱いわ」

「うん、だいぶホテつてるな」

相手は私ではありません。沢田なのです。

「座長、きようあたし、舞台上でホラ、こうしたでしよう、これでいいかしら……」

「うん、ちよつとまずいな。あれは俺が上からこういくから、君は俺の左脇から手を入れて、もうちよつとくつついて」

「こう……？」

「うん、で俺がこういくんだ」

私をそつちのけにして沢田と美紀子とは、なんのことはない結局抱きついて居るので、最前から黙りがちになつていた私はいよ

いよ腹にすえかねてきました。なんのために私は此処へやつて来たのか。二人のいちやつきを側でお太鼓を叩くためにやつて来たのか。目の前で他の男と抱き合っている自分の妻を、それでも黙って見ていなければいけないのか。

「おい、よせよ、美紀子。……あんまりだよ」

ハツとしたように美紀子は私の方を見返りました。

「なにがあんまりなのさ」

「あんまりじゃないか。人の前でいかげんにしろ、悪ふざけは……」

「悪ふざけ……」

沢田も美紀子の腰からすうつと手を引きますし、美紀子も沢田の肩から手を離して私の方に向きなおりました。

「稽古してるの、なにが悪いのさ」

「度がすぎるつていうんだ。そんなの稽古か」

「稽古よ。稽古してるんじゃないの。なにさ能なし。あんたなんか、そこで黙って見てたらしいのよ」

「なにッ」

私は思わず盃で机の上を叩きました。



「おい、よけいなことを言うな。早く帰って寝たらどうだ」

ここで沢田が私をどなりつけました。私はハツとしました。ちぢみあがろうとする私の心と、なにオと反撥する心が胸の中で交錯しました。瞬間ハツとうなだれた私の決心がつかしました。もうこの一座もおしまいだ。私た

ちの居るところではない。

「よろしい、寝ますよ。帰って寝たらいいんでしよう」

私は立ちあがりました。

「おい、美紀子。おいで……」

美紀子の手をとって引っぱりました。しかし美紀子は立ちあがりません。

「なにヨ、まだ稽古があるんじゃないの」
「稽古なんかいいんだ、いいから来い」

私はありつたけの威厳を見せて美紀子の腕をつかみ、抱きあげようとしたのです。美紀子はその手をパツと払ったかと思うと、いきなり私の頬をピシヤとひっぱたきました。

「あたしはイヤよ。行かないわよ。……なにサ、えらそうに」

私は撲られた頬を両手でかさえて呆然としてしまいました。

「あははゝゝゝ」

いきなり沢田が笑い出しました。

「こいつはいい、こいつはよかつた。あははゝゝゝ」

私はもうひつこみがつきません。

「よし、力づくでも引っぱって帰ってやる」

美紀子は沢田の坐っている横へ駈けこんで、沢田の膝へすがりつきました。私はかまうことなく突きすすんで妻の肩に手をかけ、抱きあげようと思いました。

「なにをしやがるワ」

沢田はいきなり私の肩をどんと突きました。中腰になつていた私はうしろへステンとひっくり返つてしまいました。こうなつたらもう破れかぶれです。私は急いで起きあがつ

て、美紀子にむしやぶりついていきました。
「あらア、助けてエ」

美紀子は大仰に声をあげて沢田のうしろへ逃げこみましすそうになると防禦役は沢田です。美紀子をつかまえようとする私と、そうはさせまじとする沢田とつぐみ合いになつてしまいました。いかんせん、非力の私はたちまち沢田に組敷かれてしまいました。

「のいてくれ、うゝむ、離せツ」私は無我夢中で手足をバタバタさせます。

「しようがねえな」私を押えつけながら沢田は困つてしまつて美紀子を見上げました。

「どうしよう？」

壁ぎわに立つて二人の争いを見下していた美紀子は、はだけた前を合せながらニヤツと笑いました。

「縛つちやいなさいよ」

「え？」

瞬間、沢田もちよつと、とまどつた様子ですが、

「いいのかい？」

「いいわ」

沢田に少し余裕がついてきました。

「よし。奥さんがいいつて言うのなら、構わねえだろう。砂川君、悪く思うなよ。君が暴

れるから仕方がねえんだ。少し頭を冷してやるからな」

沢田は私を押えつけながら、キヨロキヨロあたりを見廻して、

「紐はねえか？」

「紐……？」

美紀子は自分の寝巻の腰紐をスルスルとはどいて、

「ふん、これ」

沢田はその紐を受取りましたが、もがく私を押えつけているのですから思うように縛れません。

「おい、君、俺がこうやつて押えつけているから、君、縛れよ」

美紀子は「ふふゝゝゝ」と笑いながら再び沢田から腰紐を受取つて、私の横に立膝で坐りました。

「ちよつと仰向けにさせてよ。それから両手を上へ伸ばして……」

私は沢田のために仰向けにさせられて、その胸の上へ馬乗りになつた沢田は、両手をつかんでうんと上へ引伸ばしました。私はバンザイをしているような恰好で身動きができません。美紀子は私の頭の方へ廻つて、私の両手を合せて腰紐でぐるぐる巻きに縛りつけて

しまいました。それから押えつけている沢田の手がちよつとゆるむたびに私が縛られた両腕を下へさげようとしたのを見て美紀子は壁の隅にかかつていた掃除用のハタキをとつて来て私の頭の方に廻り、上にさしあげられた両腕の手首のところをうんと踏みつけました。

「あんた、首をちよつと持上げてよ」

沢田は私の頭をかかえるようにして持上げました。と、美紀子はそのうしろ首と二の腕の間へハタキの棒をギュツと差込みました。私はハタキの棒で、自分のうしろ首を自分の手で押えつけている恰好になり、アゴを胸の上部にくつつけたまま、首も手も一直線のまま一センチも動かすことが出来なくなつてしまいました。

さらにまた美紀子は、こんどは沢田の丹前に手をかけて、彼の腰紐をほどこつて、私の足許にまわり、私の両足をこれまたひとくくりに縛りつけてしまったのです。私は両手を合せて機械体操の懸垂をしているように一本の丸太ん棒になつてしまいました。

「あはは、骨をおらせやがつた」
はだけた丹前のまま立上つた沢田は、自分の席にかえり、盃をとりあげました。と、こ

れも腰紐なしのはだけた長襦袢のままの美紀子が沢田の横へべたんと坐つて沢田におしやくしてやるのです。そして二人で私の醜悪きわまる姿をしばし見下してから、顔を見合わせ「あはは、ふふふ」と笑いこけるのでした。

「さ、座長、さつきの稽古のつづきしましうよ」

「む？どんな稽古……？」

「ホラ、座長が右側からあたしを抱くでしよ」
美紀子は沢田の膝のところにもたれかかります。沢田はニヤリと笑つて

「こうだつたかな」

「そうすると、ほらネ、あたしの右手の自由がきかないでしょう。どうにも恰好がとりにくいのよ」

「ぢやあ左側から抱くか……。どうかい……？」

沢田は自分の身体の向きを変えて、美紀子の左肩から背中と胸へ両手をあてがつて美紀子を抱く形をつけます。

「どうにも仕勝手がわるいわネ。あんたが中腰であたしを見下す、あたしが片膝をついて下から見あげる……ネ？これぢやありませんか？この見得になつちやつて平凡だわ。なんかうま

い工夫ないかしら？」

いささか酒に酔つてきた沢田は、もうそんな稽古の身ぶりをしているのがめんどろくさくなつたようです。

「ぢや、こうすればいいのさ。俺の前へまわれよ」

座布団の上へどかんとあぐらをかいて坐つた沢田は美紀子の手をとつて自分の正面へまわらせ、美紀子の腰に手をあてて、ぐつと前へ引きました。

「これならどつちの手も自由に動かせるし、なんでも出来るぜ」

「あらほんと、ほほ、これなら理想的だわ」

沢田は美紀子の脇の下から両手をまわして美紀子を抱くと、美紀子は沢田の肩から両手をまわして彼の首にかじりつきました。

ああ、これこそ水ももらさぬ姿です。

私は懸命にもがいて身体を横向きにし、足だけ前後に動かされるのを利用して、くの字なりに身体をまげ、それから勢いをつけてその足をピンとのばした。その足がわずかに机の片足にひつかかりました。

ガチャン——。机の上がガタガタとゆれて、徳利が一本ひっくりかえりました。

「あら、まだ暴れるの？」

沢田に抱かれたまま美紀子はふりかえつて私を見下しました。私はあらんかぎりの力で身体をくねらせて暴れました。

「ちよつと座長、ごめん」

舌うちをした美紀子は沢田の膝の上から立上つて、もがきながら上半身を起そうとしている私の前に立ちはだかつたかと思うと、いきなり足をあげて私の胸をどんと蹴りました。私はあつけなく仰向けにステンとひっくりかえつてしまいました。

再び起きあがろうとする私の胸の上へ美紀子は片足を乗せて、軽くちよつと押えつけました。片足一つで踏まれているだけなのですが、身の下自由な私はそれで忽ち身動きすることが出来なくなつてしまつたのです。

「そんなに解らないんだつたら、勝手におし。あんたあたしをひっぱつて帰る権利、どこにあるの？えらそうに、なにサ、主人風ふかして……。あんた、あたしの夫としての資格があると思つてんの、一体？……あたしを食べさしてくれているの？あたしに着物買つてくれたの？あたしの方がたべさせてやつてくくらいぢやないか。あんたのしんしょう（給料）どれたけあるのよ。あたしの方が三

倍も多いのよ、石喰うんでも、ちり紙買うんでも、みんなあたしが、出してるんぢやないの。夫として、あんたどんな義務を果してくれてんのさ？義務も果してないくせに、えらそうに権利だけふりまわそうつたつて、そうは問屋ぢやおろさないわ。あたしが何をしよう、あたしの自由ぢやないか。それがイヤだつていうんなら、別れましょうよ。あたし、いつでも別れてやるわ」

男にしばれ酒をのませて縛りあげて、足で踏みつけて鬼神のお松が「冥途のみやげにきかしてやるから、このお松さまの言うことを、念仏がわりによくおきき」と長科白をはくあの舞台のイキで、美紀子はセキを切つたようにまくしたてました。私は美紀子に踏みつけられながら、あつけにとられて美紀子の顔を見上げました。

多少酔つている美紀子は、踏みつけられたまま呆然としている私の醜怪な姿を見下しているうちに、勃然として「虐げる興味」がわき起つてきたのでしよう。

「縛られて、あたしに踏みつけられて、あんななんかこれが分相応よ。いつも舞台でやつているんだから……。さ、あたしの足をお嘗め。美紀子様のおみ足がどんな素晴らしい味

か。甘い、辛い、しょっぱい、辛い、甘い、辛いか、しょっぱいか、痒みながらよく味わい」

美紀子の足は私の胸の上から移動して、私の顔の上を踏みつけました。私は一生懸命、口を真一文字に固く結んで、僅かでも顔を動かして美紀子の足を避けようと思いました。「嘗めないのね。よし、嘗めないなら、いや、でも嘗めさせてやるから……」

紀美子は私の鼻と口の上へ足の裏をあてがい体重をその足の方にかけてぐつと強く押えつけました。私の鼻と口はへしまがつて、コンニャクのように押しつぶされてしまいました。とたんに私は呼吸が出来なくなり、首を左右にふつてもがこうとしました。美紀子に踏みつけられた片足一本のために微動だに出来ないのです。私はこらえにこらえましたが、もう堪りません。うゝといううめき声と共に遂に口をパツクリあけて、美紀子の足の裏をすかして大きく息を吸いこみました。美紀子はそれを見て、とたんに私のあけた口の上から騰写版のローリングをするように足の裏をゴシゴシ力一ぱいにこすりつけました。私の口はひんまがつて、私の舌の先にいやでも美紀子の汚れた足の裏がこすりつけられるのです。私はその塩からい味を味

わされているうちに、なんともいえない。身ぶるいするような感覚に襲われました。身を固くしていた緊張ももはやこらえきれず、ダラリとなつた私は彼女の足の裏を漉してくる空気をハアハアいいながら吸つたり吐いたりしつづけたのです。

人間を石にする魔法の女のように美紀子は抵抗力を失つた私を冷やかに見下していましたが、つと私の傍を離れて、机の上のつまみものの小皿から、一粒南京豆をとりあげました。そして再び私の前に立ち、足の指の間にその南京豆をはさみました。

「これをお食べ」

南京豆をはさんだ足の先を私の口の前に突き出しました。私はもう拒否する元気もありません。犬のようにダラリと舌を出して、ハアハア荒い息ずかいをしている私の口の中へ彼女の足の南京豆が押しこまれました。

美紀子は自分自身の行動にすっかり興味をかられて、調子にのつてますます大膽さを加えて行くのです。

「さあ、あたしは此処で何をするか。あたしはあたしで勝手なことをするから、あんな、そこで見ていいわい」といふ

彼女は私の前から離れたかと思うと、側で

ニヤニヤ笑いながら眺めていた沢田の胸許へかじりついて行きました。

そこで二人は何をしたか。二人はもう私の存在を完全に無視してしまいました。

私は深山の谿間に一人立たされて、自分の行く道がわからなくなつてしまつた時のような孤独感、圧迫感に似た、ぞくぞくする感情に絡始圧倒されて、もはや抵抗反撥の感情はどこか彼方へ遠く吹きとんでしまいました。あまりにも驚異的な風景に我を忘れて、ただただ目を見はつて二人の姿態を眺めていたのです。

美紀子は私の方をふり向きしました。

「どう？こんなところまで見物したら、もうザツツ・オールねあんなの心も変つたでしやう変つたら変つたで、どうでもあんなの思う通りにしていいのよ。あんな、この座から出て行くんでしやう？出ていらつしやいよ。もつとも、あたしはこの座に残るわよ。世間にあたし一人が女ぢやなし、もつといい人が沢山いるわ。新しい人さがしなさいよ」

「……」

私は容易ならぬ転換の予告に、私の明日の運命をはかりかねて、言葉が出ませんでした。美紀子と一緒に今でも出て行くつも

りでこの二階へやつて来たのですが、美紀子が残つて私一人が出て行く。とすると私は一たいどうなるのか。美紀子が居てこその他の劇団へ入団出来る見込みはあるが、私一人だつたらおそらく雇つてくれる劇団はありません。さし当りの生活……？がすぐピンと頭にひびきました。それが、それよりも何よりも私の言葉を封じた最大の原動力は、ここに到つてもなおかつ、いささかも減ずることのない美紀子への私の未練でした。減ずるといふよりも、なんとしたこととしよう、勝手気儘にふるまつたあとの美紀子の魅力は、私にとつて今までの二倍にも三倍にもはね上つた愛着となつていふことに気がついたのです。

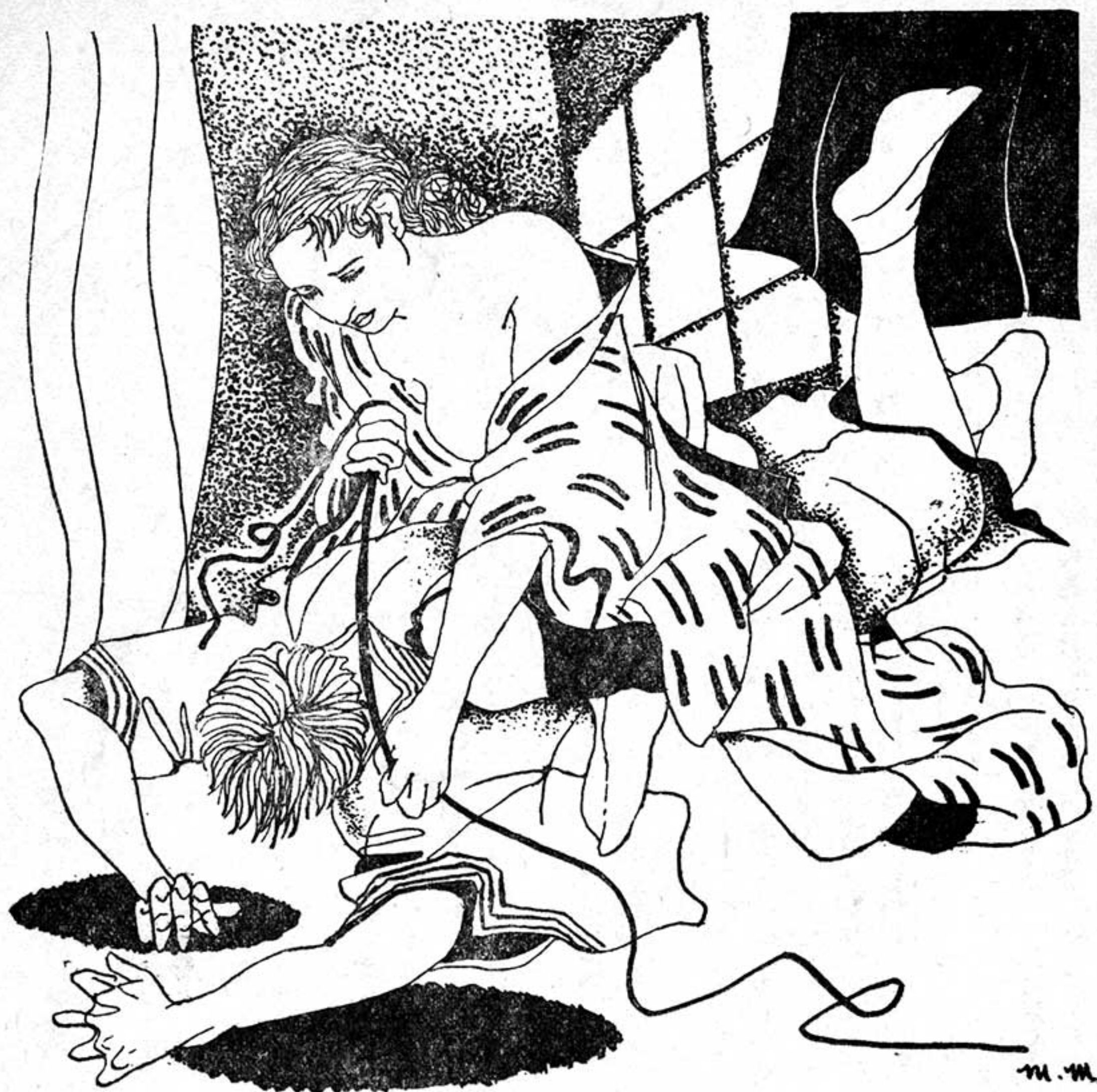
「どうしたのサ？返事をおしよ。汽車の唄ぢやないけれど、あんなは出て行く、あたしは残る。あんなとあたしとの縁も、きようかぎりでおしまひよ。あたしみたいな不貞な妻は、すべからず離縁することネ」

「……」私は返事が出来ません。

「ぢやあ、別れるのね？……別れるわよ」

「……」

不覚にも私には「別れる」という言葉がどうしても出て来ないのです。私は先刻の暴れた元氣もどこへやら。いゆんとしおれかえつ



てしまいました。

「じれつたいわネ。どうなのサ……それともあなた、あたしと一緒に居たいの？あたしにこんな目にあわされても、それでも一緒に居たいっていうの？……別れるのか、別れないのか、ハッキリ返事なさいよ」

美紀子はやおら立上りました。そして再び私の前に来たかと思うと、立っているのがしんどいのでしよう、私の胸の上へどしんと馬乗りになたがつてしまいました。

「さ、もう一ぺんきいてやる。これで返事しなかつたら、もうおしまいよ。あなたがあたしと別れるなら、ウンと首を縦におふり。それからあたしと別れたくないのなら、首を横にふつてイヤイヤするのよ。十かぞえるうちに返事をおし。いい？……一、二、三、四……」

美紀子は一つ一つ区切りをつけながら、ギユツ、ギユツとお尻に力を入れて調子をと「五、六、七、八……」と数えてゆきました。私は美紀子の両股の間から首を出した恰好で、美紀子のお尻と首の下の方のハタキの棒にはさまれて、一つ数えるごとに息のつまる苦しさを味わいながら、別れようか、別れまいか、電流のように両者の心が交錯してのたう

ちました。

「九……」

彼女のお尻がイヤというほど重くのしかかりました。とたんに私は動かしにくい苦しい痛さをおして首を左右にふつてイヤイヤをしたのです。

美紀子は呆れたようにそのままじつと私を見下していましたが

「まあ驚いた。あたしと一緒に居たいの？こんなになされても……」

と言ったかと思うと大きな口をあけて「あはは……」と笑いこけて私の上から身体をのけました。

「まぬけネ、あんたも……」

彼女は私と沢田の間にぺたんと坐つて

「ちや、許してやるわ。紐をほどこいてあげるから、そのかわりあんた、座長にあやまるのよ。もうこれから御無礼をはたらきません、どうぞ御勘弁下さい……」

私は観念してもう一ぺんウンとうなずきました。

7

その日以来、美紀子は完全に私を馬鹿にしきつて、私の存在などあつてもなきが如しに

なつてしまいました。自分の思うときに沢田の許に行きますしそんな場合、側に私がいる方が他の者たちへのカモフラージュになつていいとみえて、美紀子は必ず私にお供を命じるのです。

それをまた私は易々諾々とあとに従つて美紀子の命ずるこまごまとした御用を弁ずるというのですから、我ながら近ごろの自分の幫間的態度に呆れはてている次第です。

この劇団へ入団以来三ヶ月。すつかり暑くなつて、田舎の新開地の劇場といえは大てい裏は簾か田圃ですから、蚊の多いことといつたら大へんなものです。

例によつて一杯飲んだあとの座長は、美紀子と次の芝居の稽古です。二人でさしの稽古という濡れ場の稽古なのですから此方もやりきれません。

美紀子は座長の膝に抱かれながら「あんた、そこであおいでよ。蚊がひどいから……」と、私に団扇であおがせるのです。私は横から団扇でバタバタあおぎつつ、エヘラエヘラと笑いながら、おでこをポンポンと叩いているのです。

(完)

[会員] 風俗草紙文庫 第1集 6月末出来
頒布価 300円 丁 30円

月刊風俗草紙愛読者におくるアブ・マニア垂涎の文庫・傑作挿絵に乞御期待！
御申込は職業・年令明記の妻帯者・有夫者の良識ある紳士・淑女に限ります。
御送金は現金書留・為替・書留送付御希望の方は書留料加算御送付下さい。

天然色悦虐写真 1集2集 各集共 キヤビネ三枚一組
500円 丁 10円

申込所 東京都荒川区尾久町
五丁目一二八番地

日本特集出版社
野村佳秀宛